吉田絃二郎全集　第十二巻

目次

第三感想集

木に凭りて
心より心へ
わが詩わが旅

木に凭りて

草の花あり

東京を立つて十日。駿河灣の單調な波の音にも飽いた。人を避けて靜かに本を讀むつもりで旅に出たが、旅に出て見ると、いつでもさうであるが、落ちついて本を讀む氣にはなれぬ。何處にゐても人の心を奪ふものはある。靜寂を求めて自然に還ればそこにもまた自然の誘惑がある。

波の荒いせゐか、漁村といふものがあまりないためか、一哞の海に一隻の船すら見出されないことが多い。たまに汽船でも發見すれば、船の影が水平線の下に隱れてしまふまで海を見つめてゐる。海を掩ふ雲に變化あるごとに波の色が或ひは暗く、或ひは紺靑に、或ひは淡紫色に、或ひは玻璨の如く白く變つて行く。そのやうな雲の變り、海の色の移りかはりまでもが私の心を惹く。

或ひはならい或ひははへ或ひはなべし。半時と經たぬ間に風の方向が動く。波の音が移る、波の高さも變る。波の音が靜かになれば不岡裏の松山の四十雀の鳴く音が耳につく。濱ではもう百舌が啼きはじめた。芒の穗が白い。瑠璃鳥は海の微風を浴びながら背戶の靑い山で囀つてゐる。

寺の子供たちが濱の地曳に誘ふ。夜釣に誘ふ。人の善い住持が庫裡の方から德利を抱へて、夜遲くまで話し込みに來る。暗い海を渡る天の川を眺めつゝ語る。

旅は決して讀書をゆるさぬ。旅の自然、旅の微風、夜明けの空、朝の海、午睡、午後の海、小鳥の聲、夕燒、雲の色、波の音、星のさゝやき、すべてが私の魂をひたすらに惹きつけてしまふ。

旅は怠惰な私の心を一層怠け者にしてしまふ。私は旅の怠惰を愛する。

七日住んだばかりでも幾人かの顔馴染の人はできる。背戸の畑で草を刈つてゐた女、濱で夜釣をしてゐた男、濱の駄菓子屋の老媼。

乘合自動車から振りかへる村の蕎畑の石垣、寺の屋根、木槿の花。濱の松の並樹には四十雀が鳴いてゐた。そこの西から二本目の松の枝では、この冬一人の旅の若い男が首を縊つて死んでゐたといふ話を思ひ出した。

靜岡に着いて、午後の汽車まではまだ三時間近くの暇があつたので、淺間さまに出かけることにした。古城の濠には白い蓮が咲いてゐた。賤機山の巓まで登つて見たが雲が深くて富士は見えなかつた。木の下に若い一人の男が下駄を脱ぎ、木に凭りかゝつたまゝ立ちつくしてゐた。着物は破れ、手足はひどく垢づいてゐた。恐らく氣が狂つたのであらう。その眼は寂しかつた。笑ふでもなく、もの言ふでもなく、何見るでもなく、恐らく考ふることもしないであらう。

私の胸には二三年前駿河の海岸で逢つた一人の青年のことが思ひ泛かべられた。かれは熱心な哲學研究者であつた。かれの病身が反動的にかれの思想をさういふ方面に向けたのであつたか、かれは恐ろしく理智的であつた。冷たい理智の上にのみすべての問題を片付けようとしてゐた。大抵の病人は感情的になり易い筈であるが、かれは自分の冷たい運命を靜かに理智的に批判することを忘れなかつた。しかしどこまでもかれは病人であつた。かれは冷靜な理智によつて宿命を信ずるやうになつた。かれはよく宿命といふ言葉を使つてゐた。冷たい理智の上に築き上げられた宿命觀は十九世紀のロシヤのインテリゲンツイヤの哲學であつた。ツルゲネーフ然り、チエホフ然りであつた。

無智にして宿命の中に死ぬるものはむしろ幸福であるかも知れぬ。しかし一度考ふることを教へられた近代人にとつては、それは永劫にゆるされざる禁斷の地である。考ふることを教へられたる近代人は、考ふることなしには生きてをれぬ。しかも暗い鐵の鎖に縛められたる人間の宿命のみが、かれ等の思惟の對象となつて現はれて來る。考ふれど考ふれど、かれ等の思惟の世界に映つて來るものは人間の宿命のみである。刹那々々に斷たれゆく人間の生命であ

る。刹那々々に蝕まれゆく人間の手であり、足であり、心臟である。

考ふるといふことは自らその醜き手を斷ち、自らその腸を斷ち、自ら考ふるそれ自身の腦髓を抉り、掴み、捨てることである。

思惟する人間にとつては、たゞ思惟することのみが生活であつて、すべてはたゞ宿命に支配せられてゐる。人間は思惟することのみは自由である。そしてたゞそれだけの自由が與へられてゐる。いかに思惟しても一羽の雀をも地に落すことはゆるされてゐない。

思惟する以上は、自分が自分であることを意識する以上は、自分で自分の世界を作りたい。しかも人間には考ふることの他には何の力をも賦へられてはゐない。

俳人一茶にしてもこれほどの覺りを切り拓くまでには、四十餘年の苦しい生活の底をくゞつて來なければならなかつた。

「ともかくもあなたまかせの年の暮」

まつしぐらに考ふることのみに生きてゆく唯一つの興味を感じてゐる若い人々にとつて、なかなかあなたまかせといふ諦めの心は生まれて來ない。また生まれて來ないのがいゝ。若い人の生さとりほど見苦しいものはない。思惟の根氣のつゞくかぎりは思惟した方がいゝ。苦しむだけは苦しんだ方がいゝ。悟りといふもつまりは諦められぬ諦めではないか。

悟りとは最深所の寂寞感ではないか。禪の悟りといふも、悟り無き悟りの寂寞ではないか。柳は綠花は紅といふも、限りある人間の思惟の力の破產の刹那の諦められぬ諦めではないか。

思惟する人は諦められぬ諦めの世界に入るか、でなければ木に凭りかゝつてゐる狂人になるか、その何れかであら

う。

靜岡からは程遠からぬ用宗の濱邊に病を養ひつゝある青年の俤がともすれば、眼前の不幸な若者のそれと一緒になつて映つて來るのであつた。

安倍川の白い磧が青い田をめぐり、宇津の谷の嶺も川を隔てゝ見えた。

安倍川をわたつて宇津の谷峠へかゝるところに丸子の宿がある。西行、芭蕉が山を越えたころもやはり同じ山であり、同じ川が流れてゐたであらう。芭蕉はどの山を見つゝ川を越えたであらうか。西行はどの山を眺めつゝ峠を越したであらうか。

ものいはぬ男ありけり今朝の秋

×

靜岡を立つた汽車は大井川島田驛を通る。川の少し手前、昔の東海道の松並木の盡くるあたりに島田の町がある。そこに友人の八木氏がゐる。二日前に久能まで訪ねて來て生憎の不在に逢はず歸つて行つた八木氏のことを氣の毒に思ひながら、八木氏の家らしき見當を眺めてゐる刹那、焦くやうな眞晝の稻田の中に八木氏と奥さんや妹さんや赤ちやんが立ちつくして汽車を眺めて、私たちを探してゐるのを發見した。刹那に汽車は鐵橋を渡つてしまつた。

旅にをれば人の心ほどうれしいものはない。

人と人との美しい心が動いてゐる間は生きてゐたい。

名古屋にも私は一人の友人を持つてゐる。かれも心の美しい人間である。心の弱い人間である。今日名古屋のステーションを通つたことを後で知らせてやつたら、かれはどんなにか私を怨むであらう。かれと、かれの奥さんや小ひさな一人の子の上に幸福あれ。

去年かれと私の妻と三人で遊んだ犬山がかすかに青い稲田の涯に見えた。木曾川の水にはもう秋の色が動いてゐた。

關ヶ原、醒ヶ井あたりの夕暮れの汽車に乘つた人は誰も經驗することであらう。秋近い旅であれば、山に沿うた杉の並木の雨のやうな蜩の聲を。東では箱根、西では伊吹山の下を通るころ、いつも秋近くなれば蜩の時雨のやうな聲を聽く。

琵琶湖が見ゆるあたりから暮色が迫つて來た。義仲寺を見出さうとつとめたが、暮靄すでに湖沿ひの町をも、野良をも埋めてしまつて、何も見ることができなかつた。

芭蕉、丈草、木節、湖畔に住んでゐた俳人たちのことが思ひ出された。

轗軻不遇の俳人鬼貫が幻住庵を訪れてすご〳〵と歸つて行つたであらう湖沿ひの道には、母と子らしい二人の女が團扇を持つて、水のほとりに立つてゐた。

近江路は暮れたばかりぞ初嵐

×

岡山から宇野線の汽車に乘りかへたのは焦くやうな日盛りであつた。

どこも近年にない旱魃なので、このあたりではしきりに水車を踏んでゐる。稲が赤く燒けてしまつたところもある。地は裂けてゐるところもある。いかにも明るい感じを抱かせる中國特有な砂山がさらに耐へられぬほどの蒸し暑さを誘うて來る。遠い干潟がつゞく。

宇野高松間の瀨戸內海の航海は僅かに一時間半であるが、船に弱い私にも、もつと航海が長かつたらと思はれるほど愉快な航路である。四國の山と中國の山を舷の左右に眺めながら船は屋島の方向へ滑るがごとく走る。どこまでもどこまでも海藻が流るゝ。

屋島を左に高松城の白い樓を見出しえた刹那には、廣重の時代を思ひ出さずにはをれなかつた。

高松から四國の海に沿うて汽車は走る。到る處長汀曲浦の眺めである。鬱蒼たる山を背にし、幾つかの豐かな村をつゝんだ平野を展げて、白砂の濱が續く。濱には老いたる芒が微風を浴びてゐる。美しい、正しく劃られた白壁の家が青田の間を點綴してゐる。さすがに寺が多い。家の群を見出すところには必ずゆるやかな屋根の勾配を見せた寺がある。塔がある。稻田の辻、松山の嶺に、村の入口に或ひは白い木槿の咲く濱沿ひの道に、古びたる燈籠がある。さすがに遍路の國である。

稻田の中にはまだ農夫たちが桔槹で水を掬んでは稻に水をやつてゐる。恐らく一家總出であらう。十五六歳の男の子が一人で桔槹の柄を抱へては水を汲み出してゐる。桔槹の重しの石の方へはその父らしい男、母らしい女、弟妹たちが一本の綱に縋つて釣瓶の水を引き揚げてゐる。稻田のつゞくかぎり桔槹の水が汲まれてゐる。中には働き盛りの子を失つた人たちでもあらうか、老爺と老婆と二人で大儀さうに桔槹の水を掬んでゐるのもある。米を作つてゐる人たちの仕事を見れば頭が下る。

幾里も幾里も鹽田がつゞく。そこでも旅人は、汐汲む人々がいかに蒸すやうな日の中に働きつゝあるかを見せつけられる。黑い坦々たる鹽田に汐を汲んではばつと撒いてゐる人々の赤銅色の背を落日が照りつけてゐる。撒かれたる汐に小ひさな虹が走る。

ゆくりなくも私の心には自殺をした田中のことが泛かんで來た。田中の父が四國の或る郡の郡長を勤めてゐたのは、まだ田中が東京へ來て士官學校へもはいれずぶら〳〵してゐたころであつた。田中が急に學校の成績が惡くなつたのには原因があつた。田中ひとりが抱いてゐた悲しみのためであつた。田中は自分の悲しみのために父を喜ばせることもできないで東京を放浪してゐる間に父を失つたのであつた。田中は自殺をする日までその時の苦しい心の經驗を忘れ

なかつた。かれは電報を受け取ると共に東京を立つた。神戸で父が好きの葡萄を籠に入れて船に乘つた。船が四國の濱に着いた時かれは葡萄の籠を抱へて白い砂の上を走つた。父はすでに白玉樓中の人となつてゐた。かれは幾日か思ひつゝ惱みつゝ白い砂濱に佇立した。私は今その濱の名をすつかり忘れてしまつた。しかし恐らく私の汽車が走つてゐる伊豫の海岸であつたやうに思ふ。

かつて伊豫の美しい一つの濱は父を思ふかれにとつてやる瀨ない思ひ出の場所であつたであらう。伊豫の濱を走りながら私はかれを思ふ。雲雀が鳴き、瓜の花が咲いてゐた稻毛の海岸を私は一人で歩いたことがあつた。私はあの忘れがたい日を思ふ。

讃岐から伊豫に入つて、山はます〳〵高く、美しくなつて來る。雲を呼ぶ奇嶒長峽の懷につゝまれて豐かな町も村も日暮れてゆく。

一茶が四國に友を訪ねて來たがすでに友は十五年前に死んでゐたといふことや、さらに昔西行が四國を旅したことなどを思ふ。丸龜城の背景を爲して、平原の中にそゝり立つ讃岐富士は西行も見、一茶も眺めた山である。

四國の山には殊に美しい夕燒けの雲が湧く。

×

新居濱に下りたのは夜の九時ちかくであつた。こゝでも私は思ひがけない人に出迎へられた。十年前である。築地で語學などを敎へてゐたころに通つて來た少年が、今では伊豫の故鄕に歸つて來て小學校の先生をしてゐるのであつた。よく脚氣で苦しんでゐたので私は歸國をすゝめたことがあつたが、一里半の山の中からわざ〳〵夜中に逢ひに來てくれたのであつた。

濱では祭りの夜であつた。田の中の森につゝまれた一宮といふ、村にしては大き過ぎるほどの宮である。車から下

りて、人ごみのなかを抜けて宮の前にぬかづく。夏の禊であらう。徑八九尺もあらうと思はれるほどの新らしい藁の輪が宮の前にしつらへてある。人々は藁の輪をくゞつては拜殿の前にぬかづく。

驛からは三十町ばかり、暗い漁村の間を縫うて車を走らす。入江に望んで旗亭がある。何といふ島やら、陸やら、たゞ燈のみが闇の中に水を隔てゝさゝやく。

水に臨んでゐるせゐか、夕凪ぎも噂に聽いてゐたよりは涼しい。思つてゐたよりは風呂も美しい。水もいゝ。

入江には潮が滿ちて來た。提灯を點しつらねた船が川上から島の方へ漕ぎつれてゆく。三味線を彈き、鼓を打つ妓たちが、客と共に唄ふ。最初はかなり騒々しくもあり、不愉快でもある。

しかし夜が更け、星が輝き、波の音までも靜まるころ、水を隔てゝ遠い舷の歌を聽くのは何となく水郷の秋の夜の哀愁をそゝられる。

金で快樂を買ふ男たちはともかくとして、この寂しい島の濱までも流れて來て、男たちのために媚を賣らなければならぬ人たちのことを考へると、波を隔てゝ聽く唄に切々たる哀韻が籠る。

夜が明け切れぬうちに男たちは窓の直ぐ下にもやはれた小舟から沖の方へ歸つてゆく。男たちはたいてい内海通ひの汽船の船乗りである。

沖にはかれ等を待つ親船が島影に煙を吐いてゐる。

白い服の男、青い服の男たちは後朝の別れを惜しむほどの餘裕も持つてゐない。すべての目まぐるしい近代生活は大まかな海上生活者の魂までも冷灰化してしまつたのであらう。濱に立つて客を送る女の姿も見られぬ。

たゞ、さすがに初秋らしい風のみが退き潮の上を吹いて沖の島へ白い浪を送つてゐる。

夜釣りの舟が入江に歸つて、帆を卸せば風はばつたり凪いでしまふ。窓の下の入江の潮はひた／＼に退いてしまふ。

一疋の痩牛が尻をひつぱたかれながら川の岸に來る。後ろからは色の黒い男と一匹の大きな犬がついて來る。男は無理に牛を川の中へ引き入れようとする。牛は嫌つてなか〳〵川の中へ入らぬ。男と犬は舟に乘る。男は綱を曳き害竹を揮つて牛を向う岸に牽き上げようとする。犬は吠える。牛はそれでもなか〳〵川を渡らうとはしない。最後に牛は引き摺られながら川を泳ぐ。ゆるやかな勾配の砂原を歩いて黒い柵に取りかこまれた一構への屠牛場の中へ牽かれてゆく。ポプラの下を曳かれてゆく牛の姿が柵越しにしばらくは見える。牛はなほ鳴いてゐる。

一二時間の後には、白い手術服のやうなものを着た獸醫や、大きな罏を自轉車にくゝりつけた男たちが八人も九人も建物の中から笑ひさゞめきながら出て來る。

アーサー・シモンズの詩を思ひ出す。

「わが聽く時に
　死ぬばかり恐ろしく泣く牛の聲を。
　荒くれし男らは、むごき犬をつれつゝ
さながらに死の苛責の家へ牛を逐ふ時
　いかでわれ木の下に坐り
　うれしきよしなき本に讀み耽りえんや。」

こゝでも人々はいつも逞ましい犬を連れて渡場を渡つてゆく。

殺されにゆく牛を見るのはほんたうに不愉快である。トルストイでなくとも屠牛場に曳かれてゆく牛を見ると耐らない氣持ちになる。

しかし魚が魚を食ひ獸が獸を食ひ合つてゐる自然を見ると、互に殺し合ふことが生けるものゝ悲しい宿命であるやうに思はれる。殺すものも、殺されるものも共に悲しい宿命である。一人の人間が生きてゆくために幾人かの人間が殺されつゝある。不知不識の間に私たちは隣人を殺しつゝある。世に一人の義人あるなし。それが人間の宿命ではないか。

牛が屠舍へ曳かれて行つた渡場を渡つて屠舍の横を濱に出る。波にさらされた牛の骨が堆く積まれてゐるあたりに可憐な磯の花が咲いてゐる。四國第一の石槌山がかすかに見える。何といふ島であらう、鷲に似て黑く、譬は千鳥のやうにあはれである。波の上を磯づたひに飛んでは濱に餌をあさつてゐる。

濱には石風呂といふのがある。アーチ型に石を疊み上げて、柴を焚いた上に、水に濡らした筵を展べて、襤褸のどてらを着て人々は轉がつてゐる。焦熱地獄である。風呂を出て冷たい水を浴びた後の心持ちは何とも言へぬさうである。白い砂濱を絶えず村の人たちは石風呂の方へ歩いてゆく。

×

日中は近ごろになく風が強かつた。波が立つた。波の上の雲が吹きやられてしまつた結果、空は非常に美しくなつた。紺碧の空がまつたく磨きをかけられた。今まで見えなかつた島が白い波頭の上にかなたにもこなたにも浮き出して來た。中國の山も直ぐ近くに映つて來た。

今まで見えなかつた島の數を算へて見たりした。

日が暮れ、潮が濱に滿ちて來ればまた紘いちめんに酸漿提灯を點した舟が妓たちを乘せて窓の下を通る。恰度今朝、屠牛場に曳かれた牛が、悲しさうに鳴きながら渡つて行つたあたりを行樂の舟は上り下りする。そのたんびに花やかな提灯の燭が岸の屠牛場の硝子窓に燃えるやうに映り、ゆらぐ。

燭を點しつらねた船は鼓を打ち鳴らして沖へ出てしまふ。濱では夕涼みの人たちの影も夜が更けるにつれて、二人

に減り一人に減つてしまふ。捨てられたやうに濱にもやはれた舟と舟の間の暗い水の上に、初秋の空が白い星の光りを漂はしてゐる。

入江の闇は靜かである。眠つたやうに。

宿の女が二人、入江の水を見ながら緣臺に涼んでゐる。

一人の女が燈籠を作つて來て入江の水に泛かべた。かなり隔つてゐるので、何で作つたのかどんなものゝ上に泛かべてゐるのかわからないが、燈籠は女の手を離れて入江の暗い水の上を沖へ沖へと流れてゆく。

二人の女はいつまでも流れてゆく燈籠を見つめてゐる。

恐らく女たちはこの島に賣られて來たものであらう。そして夜な夜な荒くれた男たちに媚を賣つてゐるのである。

岸に立つて流れてゆく燈籠を見つめてゐる二人の女の上にも秋の風が吹き初めてゐる。

燈籠は沖の白い波に幾度か隱れた。隱れてはまた浮かび出た。

×

恐らく昨夜燈籠を流してゐた女であらう。今日は私の部屋に來て、宿の婢と一緒に私の荷物を車に運んでくれたりした。

「あさましいとは思ふのですが、どうしてもこの境界から拔け出ることはできませぬ。あたしたちの體はすつかり腐つてしまひましたから。こんな家業をしてゐましても、夫もあり子供もあります。一番大きな子は十六になります。東京に奉公に出してあります。ぜひ一度會ひたいと思ひます。一人は里子に出してあります。夫は永年病氣ですし、里子には毎月十圓づゝ送らねばなりませぬし、家の方は四十圓、あたしのお小遣が二十圓、どうしても月に六十圓は稼がねばなりませぬ。無理にもお客をとらねばやつてゆけませぬので。」

話してゐると、都會の浮ついた女たちよりはずつと感じがいゝ。人間らしい。苦勞をした女だけにしみじみとした話をする。

「あなたが東京におかへりになつたら、淺草のこれこれの町に行つて、子供がをりますからぜひ、故鄕へ歸るやうにと傳へてください。」女は子供の名を書いてくれた。

不運なる女、不運なる母、不運なる子。

×

金刀比羅だけはお參りをして歸らうと思つて多度津から汽車を乘りかへて琴平に下りた。思つたより感じのいゝ町である。殊に山は青ひやうもなく美しい。たゞ長い幾町もの石磴に沿うて寄附の金高を記した無數の碑が並べられてあるのがあたら名山を臺無しにしてしまつた。惜しい事だ。日本人の打算的な醜い半面を露骨にあらはしてゐるのがあの長い碑の行列である。

山から見た讚岐富士の姿は美しかつた。山には蜩が鳴いてゐたが、鳥の聲一つ聽かなかつた。日が暮れるころ青い田を隔てゝ善通寺の塔を見た。西行もそこいらの草の中を歩いたであらう。牛車を曳く人の姿も繪卷物の中の人たちのやうに古風である。

「出て見れば我のみならず初旅寢」一茶の句が生まれたのもこの附近であつたらう。

一茶は「石飯富山」といふ題で「人はみな今を春邊と飯比古の山のしら雲霞たなびく」と歌つてゐるところから見れば一茶がこのあたりを旅したのは冬から春にかけてゞあつたらう。

「十三日樋口村などいへる所を過ぎて七里となん風早難波茶來を尋ね訪ひ侍りけるに已に十五年後に死にきとかや後住西明寺に宿りを乞ふに不許

前路三百里只彼を力に來つるなればたよるべきよすがもなく野もせ庭もせをたどりて、
朧々小空はれなり迷ひ道」

飯富山といふのは讃岐富士のことであらう。ともかくこのあたりの旅に悲しい絶望を抱かせられたであらう一茶の心持ちが思ひやられる。

今年は十年來にないほどの旱魃である。

日が暮れると共に高い山々で雨乞ひの火か焚かれる。

汽車の窓から暗い天空に焚かれた遠い山の火を見れば、むしろ悲壯な感に打たれる。

×

四國の旅の疲れを一日京都に養うて、翌日法隆寺近くに富本憲吉氏の窯を見せてもらふことにした。

東山にはまだ朝の影がほの白く漂うてゐるころ宿を出て、本願寺の前の廣い通りに車を走らせた。

いつ來ても京都は落ちついたところである。街の並木に吹く風すらも懐かしい。

京都ではアカシヤの木も秋の風

旅に來て秋を迎へるのは嬉しいことである。旅ほど心から秋をありがたくあはれに感じるものはない。一所不住の生活を選んだ芭蕉の心持ちが想像せられる。

宇治の茶畑、桐の畑、柿の畑、そこいらには秋の風がいちめんに吹いてゐた。

木津川の鐵橋では汽車が吹き飛ばされはしないかと思ふほど強い風が吹きつけて來た。空を見れば黒い雲が亂れ飛んでゆく。

今朝京都を出る時、暴風を警戒すといふ掲示があつたことを思ひ出す。

木津川の土堤の下に小ひさな寺があり、そこに竹藪にかこまれて苔むした輪塔がある。平重衡の墓である。

今朝も草の中に塚が見える。

　　奈良までは三里の秋や風の中

重衡の墓を悼みながら奈良に入る。

次の汽車までは一時間しかないので、驛近くの佛を賣る店に立ち寄つて聖德太子の首、童子などを買つて、新聞紙に包む。

汽車の中でも新聞紙をひろげては佛像を並べて樂しむ。芭蕉の「菊の香」の句などを思ひ泛かべつゝ大和の山を見る。こゝでも地は裂け、稻は枯れかゝつてゐる。池といふ池は水門を切つてしまつて、白い池の底には靑い草が生えてゐる。いつ雨が降るとも思へぬ。

法隆寺で下りて丹波市ゆきの輕便を待つ考へであつたが、二時間も待たなければならぬので、俥を雇ふことにした。川といふ川はすつかり干乾びてしまつて、一滴の水もない。十坪ばかりの水溜りが殘つてゐたが、そこでは二人の女が洗濯をしてゐた。傍に五六人の子供たちがしきりに魚を捕へてゐた。

私は大和の家が好きである。白堊の壁、行儀よく仕切られた土の塀、ゴシック風な急勾配の草屋根、さらに草の屋根を受けたゆるやかな勾配の瓦の簷、いかにも藝術的な線の美を盡してゐる。變化と均齊、單純さと古典美、いろ〳〵な藝術上の要素が取り容れられてゐる。

柔かい山につゝまれ、山には古い時代の伽藍を持つ大和の平原は最も惠まれた鄕土である。

白い磧に沿うて低い櫟の木立があり、瓢の皮を乾した家がある。一顧の中に法隆寺から奈良、畝傍、飛鳥朝の跡が見わたされる。

大和は愛すべき平和の地である。

俥は村外れの田の中に止められた。そこからは道が狹くなつて俥をやることができないのである。二三町歩の田の眞ん中に一本の低い煙突が立ち、窯が見えた。垣根の外の小ひさな納屋の横には瓢が二つころがつてゐた。

奥さんや二人の子供さんたちは志摩の海岸に行かれた留守だつたので、富本氏のおつ母さんとお妹さんが、母屋（おもや）の方から御馳走を運んで來られた。

富本氏の釣の師匠株である大工さんも見えた。九州から丹波市へ仕事にやつて來たのだがたうとう大和に居附いてしまつて、怠けては大和川に行つて魚ばかり釣つてゐるといふ風がはりな男である。どんなに金がなくつても釣さへしてゐれば氣のすむといふ凝り方である。

その大和川も今では一滴の水もないまでに干乾びてしまつてゐる。雲が時々畝傍山の上をかすめて大和平原を生駒の方へ走つてゆくが、一滴の雨をも惠んではくれぬ。

大和の平原をまん丸く取り圍んだ遠い山の中心點が、恰度富本氏の窯のある家になつてゐるやうに思はれる。それほど富本氏の家は廣い平原の、一物も遮るものもない秋の風の中に建てられてゐる。

釣りに夢中になつてゐる旅の大工、赤繪の燒物を窯の前に据ゑて夢中になつてゐる陶工。二人の男が大和の平原の恰度眞ん中に秋の風を浴びてゐる。

世界のどこにも心の美しい人たちが住んでゐる。世界のどこにも偉い自分の生活を生きつゝある人々がある。

私たちは北海道に行つてモリスの理想とした世界を切り拓かうとしてゐる三人のH氏兄弟のことを語り合つた。牝（め）牛（うし）が仔を生んだこと、二十頭の羊を飼つたこと、服地を織る手機ができたこと、種子を播いたこと、いろ／＼なたよりが北海道からあつた。

愛すべき北海道の平原。愛すべき大和の平原。そこに默々として働きつゝある、生きつゝある尊ぶべき人々。

奈良でもとめた佛を富本氏に見て貰うたが、贋物といふことで大笑ひになつた。奈良では贋佛を作るのを專門にしてゐる佛師があるといふことだ。それでも贋佛を賣るにしても、買ふにしても奈良であるだけにいかにも佛の商ひといふことが面白く、腹も立たぬ。

奈良の秋にせの佛も尊かり

東大寺をはじめ奈良の寺々の尊い古佛を拜んで歩くのは元よりうれしいことであるが、あるかなしかの靜かな初秋の風に吹かれながら、佛を賣る奈良の町の店から店へと飾窓を覗いて歩くのも面白い。

富本氏の家を辭して、古い氣持ちのいゝ大和の小ひさな町を歩きながら田圃の眞ん中の輕便の停車場へ出たころは日は生駒に落ちてしまつて、法隆寺の塔がかすかに夕靄の中に見えた。夕燒の空は半天を焦くほどに燃えて、今にも大あらしが襲うて來るかと思はれるまでに雲はちぎれ〳〵に飛ばされてゐた。

酸漿の實も、百日紅の花も地に叩きつけられるまでに風は吼えながら大和の平原を吹いて行つた。

汽車が動いてからも、富本氏と可愛らしい富本氏の姪御といふお孃さんの小ひさな影だけが、久しいこと薄暗の大和平原の眞ん中に見えてゐた。

日が暮れてしまつたと同時にあらしにつれて雨が降つて來た。大和をめぐる山の嶺々では今夜も雨乞ひの火が焚かれた。天に對して雨を乞ふ人々の祈念の叫びが炎となつて闇のなかに燃えたけつてゐるのだと思ふと、むしろ凄いやうな氣がする。

奈良から乘つた五十ばかりの色の赤黑い、背の高い、逞しい男。腕にも胸にも一面に文身が見える。伴れの女といふのはまだ二十にもなるまい。それとも二十一二か。

「兩親にも隱れて出て來たんですから」と女は言つてゐる。女は小ひさな風呂敷包みを一つ抱へてゐる。二人とも人目を避けるやうにしてゐる。

若い女をたばかつて、つひに一生を闇の中に葬らせてしまふやうな恐ろしい職業の男でもあらうか。私の頭には伊豫の新居濱の宿で逢つた不幸な女のことが泛かんで來た。

雨がどしや降りに降つて來た。あらしが窓の硝子を小石でも叩きつけるやうな音を立てゝ打つた。女は男の後から部屋を出て行つた。木津川の驛に着いた時二人は下りて行つた。男は恐ろしいあらしの中に、暗いカンテラの下に突つ立つてゐた。若い女はベンチに腰を卸して風呂敷包みに半身を凭せかけて俯向いたまゝになつてゐた。恐らく自分の無謀な、向う見ずな計畫を後悔しはじめたのであらう。明日の運命に恐れをのゝきはじめたのであらう。

「復活」の女主人公カチウシヤが戰場にゆく主人公を汽車の中に探したのも雨のひどい夜であつた。戰場へゆく汽車は動き出した。かの女の處女性を破つた男、孕ませた男は酒を飲みトランプを打ちながら、カチウシヤには一瞥をも與へないで、否、カチウシヤがその驛にゐることすら忘れてしまつて、戰場へと立つてしまつた。我がまゝな男性に對する無垢な女性の絶望、反感、自暴、自棄。そして最後にかの女自身を滅すところの穽はかの女等を待つてゐる。

雨はます〳〵ひどくなつて來た。

今朝木津川の鐵橋をわたつた時と同じやうに、夜もまた鐵橋にかゝるころはひどいあらしが窓を叩きつけた。闇の中に木津川の白い磧がかすかにそれと見えた。重衡の塚を圍む竹藪も寺もたゞ一抹の闇の中に、あらしの中につゝまれてしまつた。

このあたり塚あり木津の螢草

私は無理に硝子窓を明けてそれらしい物の姿を見出さうとつとめたが駄目であつた。冷い雨が容赦もなく顏を叩き

つけるのであつた。

私は京都に來て十日ばかりになる。

×

日中はまだ暑いので、夕方になると三條の橋の上に行つて夕涼みの人々を見る。

旅だと思つて見ると何も彼も珍らしい。心を擊つ。

古い格子戸の前に縁臺を出して涼んでゐる人も、子供をあやしながら東山の方へわたつて行く若い母親の姿も言葉もなつかしい。

永く京都に住んでゐる人にはさうでもあるまいが、旅人にとつては磧を吹いて來る風までが懐かしい。薄暗い店の暖簾までが近松の世話物の舞臺を思はせる。京都に來て三條大橋の欄干にもたれて星を眺めてゐると、山につゝまれた都市といふものゝいかに愛すべきものであるかといふことをしみ〴〵と考へさせられる。大阪でも山を見ることができるが、京都くらゐ高くもなく低くもなく、しかもやさしい美しい山につゝまれた都市は外にはない。山を四方に控へながらいかにものんびりとしてゐる。山には塔があり、伽藍がある。夜になれば町をめぐつて山の燭がかゞやく。周圍に美しい山を持つた京都に來ると、疲れた魂が柔かな手で撫でられるやうな落ち着きを見出す。

このごろではどこも雨乞ひの火を焚くので、三條大橋の上に佇んでをれば西の方の高い山の嶺に毎晩火を焚くのが見られる。夜の高い山の火を見るのがうれしいので、夕方になれば橋の上に出かける。

昨日は南禪寺前まで電車に乘つて、八日ごろの月を仰ぎながら疏水に沿うて步いて歸つて來た。

朝早く、東山の蔭がまだ京の町半分をつゝんでゐるころ、三條大橋の上に立つてゐると建仁寺の托鉢僧が四五人おう〳〵と呼びながら、初秋の風に吹かれて橋をわたつて來るのに出逢ふ。花籠を頭にいたゞいた大原女にも會ふ。そ

のやうなことでも旅の者には嬉しい。

京都の町を歩いてゐると幾年振りかでほんたうな虚無僧に出逢ふ。虚無僧の魂はすでに失はれてゐるかも知れない。しかしどうせ何にせよ魂といふものがさうながく維持される筈はない。宗教にしてもその開祖を除いては誰がほんたうな魂を持つてゐようぞ。俳諧にしても芭蕉の他、幾人の人が魂を持つてゐるか。形だけでも見ることができるのはうれしいことである。

人間の仕事に、ほんたうな魂だけのものがどれだけあり得よう。形だけだと見えても、少し寛容な心で見れば形のなかに魂は存外生きてゐることもある。すべてのいゝことは形だけでも保存して置きたい。

おう／＼と京都の朝の町を呼んでゆく建仁寺の托鉢僧たちの聲を聴いただけでも悟る人は悟るであらう。よし悟道といふやうなむつかしいことは駄目だとしても、あの姿を見、聲を聴いたゞけでも、一日の正覺、一刻の正覺は見出し得らるべき筈だ。三條の大橋を尺八を吹きながら秋風に吹かれてゆく虚無僧を見たゞけでも、尺八の音を聴いたゞけでも、無常の覺りだけは感じ得べき筈だ。

何事もありのまゝに受け容れてゆきたい。

そんなことは幻覺だといふ人があるかも知れない。幻覺でもいゝ。そのまゝに受け容れてゆきたい。幻覺の中にも救ひはある筈だ。人生のことすべてが元々幻覺でないと誰が言ふことができようぞ。

私は三條大橋の上に立つてたしかに昨日秋風の聲を聴いた。建仁寺の托鉢僧を見た。天蓋を眼深く冠つた白衣の虚無僧を見た。星の落つるのを見た。人間のいのちの刹那々々に削られてゆくのを感じた。

箱根を越ゆるころはまだ合歡（ねむ）の花が咲いてゐた。日暮れ方の近江では初嵐の聲を聴いた。四國では山の上の雨乞ひの火を見た。すべてのこれらのものを私は心からうれしく受け容れた。さらに私をめぐつて集まつて來た誰れ彼れの

心を。そして人生を喜び、人生を寂しく思つた。

雲、鳥、秋の風、合歡の花、草、水の色、夕燒の空、夜の町の燭、美しい人の心、これ等のものを除いてどこに人生があらう。

もしこの世界から銀河が失はれたとしたら、もし夕燒と、空と、水と、草と、秋の風が失はれたとしたら、美しい人間の心が失はれたとしたら、私は生きてゐる價値を見出すことはできない。

×

草原に秋が來た。
子供らは夕燒の空の下で眞つ赤に燃えた顔をして蜻蛉を呼ぶ。
子供らは素つ裸である。
遠い山をめがけて
高い空をめがけて
吹いて行く秋の風を追つかけて
子供らは蜻蛉を呼ぶ
今大地は子供らを秋の眞ん中に置いて、暮れようとしてゐる。
大地は子供らのために日暮れようとしてゐる。
秋は子供らのために日暮れようとしてゐる。
素つ裸の子供らは秋の世界の眞ん中に立つてゐる。

×

旅人はたゞ一人夜の草原を歩む。
見よ地平線も、銀河も、白い湖の面もみんなかれのものである。
森には小鳥の夢あり、露あり、蔭あり、葉摺れのさゝやきあり、流れあり、すべて旅人のものである。
　秋の風は夜明けの畑にさゝやく。
菱の花は夜明けの水に。
空はすでに青く
ひたたきは木に啼く
旅人はたゞ一人草原を歩む
すべてのものたゞかれ一人のものである。

×

旅人はたゞ一人草原を歩む。
道は無限に白く、空はつゞく。
かれはたゞかれ一人の世界をのみ思ふ。
そこには時間もなく、空間もない。
かれはかれ一人の生を思ふ。死を思ふ。悠久を思ふ。
かれはかつて逢ひし美しき女を思ふ。寂しき思ひ出を道に捨てつゝ歩む。
草あり、草の花あり、思ひ出の夢を捨つ。

×

旅人はたゞ一人で歩む。
秋の風あり
女よ、死せし者よ、
草あり、草の花あり。
別るゝこと、死ぬること、愛すること、憎むこと
人間の行きつくべき世界の白き門あり
聲なし、光りなし、色なし、馨なし、思ふことなし
たゞ虚無の世界といふ。
女よ、かつて愛せし者よ
思ひ出を捨つ
草あり、草の花あり。

×

東の風吹け
かの女の家へ
西の風吹け
かの女の扉へ
思ひ出を捨つれば思ふことなし。
雲を見、山を見、歩む日は鈍し

忘れたる思ひ出を思ひ
忘れたる俤を思ひ
思ひ出を捨てゝ靜かに草を歩む
草あり、草の花あり。

×

南の風吹け
かの女の子供らの上に
北の風吹け
かの女の白き墓の上に
草原を歩むことゝ死の世界を歩むことゝ
神の他誰か知らん。
悲しみの面を靜かに凝視すべく旅を歩む日を愛す。
草あり、草の花あり。

憂鬱なる日よ

憂鬱なる日よ、かくても人はなほ生くべきか
地は暗き影を吸ひ、海は喘ぐ
薄曇りの空を見れば鉛の如き憂ひ湧く
防風は砂に這ひ
蟲は土を抱きつゝ生きてあり
日の暮るゝまで人は思ひ人は悩む

かの日地にうづくまりて泣きぬ
地に落ちぬ、涙
たゞ一人地を見つめて泣きし日は尊かりき
かの日懐かし

川原の砂を踏みて歩みぬ
水草はかなしき夢をつゝみぬ
千鳥海へ鳴きぬ

かの日一人泣きぬ

潮風は草の葉を吹きぬ
一人海に立ちて
孤獨なる日の影を見つめぬ
かの日一人泣きぬ

一人にて生くることは寂し
されど生まれざりしならばさらに寂しかるべし
かの佛も見ざるべし
かの靜かなるまなざしも

砂を踏みてこの寂しさを思ふ
草を踏みてかのまなざしを思ふ
樹の影のごとく靜かに人を思ふは苦し
かの日一日泣きし

×

小鳥らよ寂しからずや
汝と梢と
汝と木の葉と
汝と汝の唄と何のかゝはりありや

小鳥らよ寂しからずや
汝と空と
汝と海と
汝と日の光りと何のかゝはりありや

小鳥らよ寂しからずや
汝と五月の微風と
汝と雛罌粟の花と
汝と柔かき草に落つる汝自身の影と何のかゝはりありや

汝を育みし懐かしき巣すら
汝と何のかゝはりありや
空はやがて空に

海はやがて海に
微風はやがて無限に
巢はやがて地に
小鳥らよ寂しからずや

×

旅人よ寂しからずや
海は白き過去の夢に
地はかすかなるすゝり泣きに
疲れたる脚をとゞむれば
胸の疼く
忘れたるさゝやきの響く
小鳥らは鳴くに
微風は流れ行くに

旅人よ寂しからずや
木に凭るに木はもの言はず
地にうづくまるに地はもの言はず

芭蕉の墓に詣づる記

菊の香に奈良の古き佛たちを訪ふにはまだ秋は淺かつた。
けれども嫩草山に腹這ひになつて奈良の町を見、郡山、法隆寺、木津川と點綴せられたる伽藍の屋根に舊都の俤をたどつてゐれば、いつ來ても奈良は古き佛たちの懷かしまるゝ町だといふ感じがしみ〴〵と湧いて來るのであつた。

「春なれや名もなき山のうすかすみ」

といふ翁の句が、奈良の山を見る時、一番胸につよく應へて來る。芭蕉がうたつたのも奈良への旅の途中であつた。
山を下れば大佛の鐘を撞く旅の人々が、大きな鐘を見上げてゐた。
私は奈良の大佛の鐘の音が好きだ。京都にも、三井寺にも、石山寺にも旅人に撞かせる鐘はあるが、奈良の大佛の鐘が一番ありがたいやうな落ちついた心持ちを抱かせる。
京都ではどこのお寺も商ひをしてゐるやうな氣がする。本願寺を見ても智恩院を見ても、淸水を見てもさうである。奈良では私はほとんどそんな氣分を感じない。三笠山を下り、二月堂に出で、大佛のあたりを歩いてゐる間に、私たち自身が昔の大宮人たちののどかな生活を享樂しつゝあるやうな氣持ちになる。
奈良で感ずる佛教は、冷たい超人間的なものでなく、どこまでも柔かな、ふくよかな若い女性の美をわすれ得ない現世享樂の至境を眼のあたりに具現したものである。
あの大佛の鐘を撞いてゐる旅の人々を見てゐるとほんたうにのんびりした氣になる。一つの鐘の音は奈良の舊都をつゝむ深い山から、さらに町へと響く。

鐘つけば山にしみけり奈良の秋

×

奈良の町を歩いてゐる間に私は久しい間考へてゐて果さなかつた粟津の義仲寺詣でのことを思ひ出した。その夜は京都に泊り、翌日の朝近江にゆくことにした。

奈良を出て間もなく、木津川の左岸、竹藪に掩はれた堤防の下に小ひさな寺がある。そこに平重衡の首塚がある。汽車の窓から小ひさな輪塔が見える。

かれはそこの木津川のほとりで殺されたのであつた。

義朝の死を悼むべくばまた重衡の死も悼むべきである。

宇治の町に着いたころは日が傾きかゝつてゐた。さすがに茶の香が町中をこめてゐる。

宇治川の流れは碧落のやうに美しい。橋をわたりながら上手の平等院を眺める。

二停留場ばかり行つたところに黄檗山がある。普茶料理といふ名だけは聴いてゐたが、寺の前の店ではじめて蘭の花の吸物などを吸うたが、すこぶる風雅なものであつた。山門をくぐつて廣い境内の砂を踏んだころは、日がほとんど暮れてしまつてゐた。死のやうな靜寂につゝまれた廻廊を二人の若僧が小急ぎに急いで行つた。

×

日はまだ夏のやうに暑かつた。

三條大橋の停留場から大津行きの電車に乘つた。

疏水の傍を通りぬけて山と山の間を電車はひた走りに走つた。山城と近江の境であらう。

蟬丸の故跡などを眺めてゐる間に、白い湖が繒のやうに展げられて來た。

のそくさと大きな牛が空車を挽きながら歩いてゐるのも、滋賀の都時代の悠長な感じを湧かさせた。

町は湖の方へだらだら坂に沿うて下りて行くのであつた。湖の直ぐちかくで、石山行の電車に乘らなければならなかつた。

電車が動き出すと間もなく左手の窓から琵琶湖が一眸の下に眺められるのであつた。

矢走の沖には白い雲の影が落ちてゐた。

馬場といふ停留場で電車を下りた。すくくと伸びた稻田の中の停留場では、三人の驛員たちが將棋をさしてゐた。

「義仲寺はどちらです？」

「この道を眞直ぐにいんで右です。」

私は湖の方へ坂道を下つて行つた。

粟津、瀬田、矢走、比良、唐崎、比叡、白い湖の面、柔かな稻の穗、沖を走る舟、道ばたの木槿、すべてが私の眼の前に輝いてゐる。

私はいかに芭蕉がこの土地を愛し、いかにこの風景を賞でたであらうかなどゝ想像しながら歩いてゐた。日でりがつゞいたので、道は歩くたんびにひどい砂埃を立てた。木槿の葉も道の埃で白くなつてゐた。

藻を刈る舟の男の背に、九月の日がのびやかに照つてゐた。黑い水鳥が藻棹の先に水の輪を作つては姿を隱した。どこからともなく水鳥の寂しい聲が聞えて來た。

湖に沿うた道路の片方に小ひさな庵寺があつた。義仲寺といふ小ひさな標木が建てられてあつた。ほんたうに小ひさた庵寺であつた。

電車を棄てゝから、軒別に鮒だの、鯉だの、湖の魚を賣つた狹い店の通りを長いこと步かなければならなかつた。

芭蕉翁の碑は、三尺にも足らぬほどの小ひさな自然石であつた。石で築き上げた臺の上に碑が載せられてあつた。翁の墓にぬかづいた時、私は久しくあこがれてゐた翁に逢ふことのできたやうなうれしさと同時に、わけもない涙が落ちて來るのを覺えた。

あまりに尊い墓であつた。あまりに寂しい墓であつた。

芭蕉の墓と隣り合つて木曾義仲の墓があつた。これもあまりに小ひさな墓であつた。

芭蕉は實際木曾殿と背中合せの寒い夢を見てゐるのであつた。

私は義仲寺を守つてゐる老翁と語つた。

數年前この寺が縣の役人たちの手によつて毀たれやうとしたこと、老翁がこの寺に住むまでは御堂には毎夜乞丐の徒が焚火をしては定住の宿としてゐたことなどを聞いた。

芭蕉はよくこの寺に來ては弟子たちと俳諧をやつたし、恐らく冬の夜寒を幾度となくこゝに泊つたことであらう。そのころも無縁の廢寺でこそなかつたとしても、湖に騷ぐ葦の間の波音に夜もおちおち夢さへ結ばれぬほどの荒れ果てた庵寺であつたであらう。

襖の繪は全部蕪村が書いたものになつてゐるが、よく破かれもせず、焚かれもしなかつたものである。

私は義仲寺でも芭蕉の書を見たが、芭蕉の句から受くる感じに比べて、芭蕉の書は一層力強い感じと共にインテレクチユアルだといふ感じを抱かせられた。すくなくともかれは底知れぬ深さの人であると共に明知の人であるといふ感じを抱かせられた。かれは世を捨てたやうな悟りを持つてゐた一方では、どこまでも強い人間的な意欲、意志に取り憑かれてゐたところがあつたやうな氣がしてならぬ。ともかくかれはぼんやりした人ではなかつた。自分自身に對しても、弟子たちに對しても、世間に對してもしつかりと把持したところのある人であつた。その若い日にはさぞか

し鬱氣滿々たるものがあつたやうに思はれる。

非常に強い情の人であつたと共に、強い意志の人であり、明知の人であつたやうに思はれる。

墓の前に立つてゐる間に、私の頭には芭蕉臨終のことや、そのをりの葬ひのことなどがいろ〳〵と泛かんで來るのであつた。

「即刻不淨を清め白木の長櫃に納めまゐらせその夜直ちに川船にて伏見まで御供し奉るその人々には其角去來丈草正秀木節惟然支考之道吞舟次郎兵衛以上十一人花屋仁左衛門が京へ荷物を送る體にて長櫃の前後左右を取りまき念佛誦經おもひ〳〵に供奉し奉る。八幡を過ぐる頃夜もしら〴〵と明けはなれけるに僧李由の下りたまへる舟に行き逢ひければいざとて乘移り、相共に果敢なき物語して程なく京橋に着く。

それより狼谷通りにかゝり急ぎに急ぎしほどに十三日巳の時過ぎには大津の乙州が宅に入れ奉りけり」（花屋日記）

元祿七甲戌十月十二日申の中刻かれが最後の呼吸を引き取つてから、翌十三日の巳の刻大津の町にかれの遺骸が運ばれるまでの弟子たちの心持ちはどうであつたらう。さらにかれの死を聞き傳へた人々の悲しみは。

かれほど一生を通じて人々に愛せられ、かれほど死して後多くの人々に慕はれた文學者がかつて世界の歴史にあらうか。

「此狀十二日の暮頃に上野に屆きけり土芳、卓袋ひらき見るより大に驚き取物も取あへず松尾氏に參りたれば是も同時に書狀着せりと云ふより兩人はしたゝめそこ〳〵にして子の刻より發て案內知りたる近道にかゝり大和の帶解までたゞいそぎに急ぎけれど月入ての事なればくらさは暗し小路の事故提灯も消へぬれば其夜の明方に帶解に著く。…………………兩人共に殘念申ばかりなくさらば葬送に成とも逢ひ奉らんとて又引返し八間屋にかけ行幸ひ出船ありければそのまゝ飛乘り伏見京橋に着しは夜明なり、直に飛下り狼谷にかゝり義仲寺につきしは未だ入棺し給はざる前な

りければ諸子に斷りて死顏のうるはしきを拜しまゐらせ…………」（花屋日記）

こゝにも芭蕉の死を聞いて伊賀から駈けつけた土芳、卓袋の二人の師を思ふ心持ちがうかゞはれるが近江、京、大阪、美濃、尾張、伊勢その他諸國の人々でどんなにかあわてふためいて義仲寺へ駈けつけた人々があつたことであらう。

「……諸國の人々、三世値遇の緣を悦びわれも〱と香手向け奉るその數幾百人といふ數しれず境内狹ければ表より入りたる人は裏へ拔け出るやうにしつらへ置き田の刈跡に道を附けゝれば燒香の人々はすべて裏へ拔けゝるにぞさして騷がしきこともなく……」（花屋日記）

今は義仲寺の裏には餘所の家立ち並びて、拔け通ることはできなくなつてゐる。少しはなれたところには工場などが立つてゐる。

私は葬ひの日に集まつた人々のことなどを考へながら寺を出た。丈草が庵を結んで師の冥福を祈つた丈草庵の跡も、東海道線に近い方にある筈だが、時間の都合で立ち寄らなかつた。

たゞ當時の師弟の美しい情誼を思ふては涙ぐましい心にもなるのであつた。

ふたゝび馬場に引きかへした。道傍の木槿の下で桶の輪を入れてゐた男が何に怒つたのかたゞ一人で狂人のやうに罵りわめいてゐた。

稻の穗をわけて電車は石山へ走つた。秋の山が湖に對して明るく璧珠のやうに輝いてゐた。

石山の麓で湖水の魚をつけて晝食をとつた。

加賀に旅した折の「石山の石より白し秋の風」の句は石山の石を見てはじめてその味を知ることができた。時間がなかつたので幻住庵の跡をたづねることはできなかつた。

歸りには湖水の遊覽船に乘つて、瀨田の唐橋をくゞつて湖に出た。

かつて芭蕉が歩いたであらう山、詩腸を痛めたであらう湖邊も、一様に秋の夕陽を浴びて暮れかゝつてゐた。

膳所あたりであらうか。

松列樹の間からかすかな烟が稲田を這ふやうにして漂うてゐた。

私はふたゝび芭蕉の葬ひの日を思ひ出した。そこになほ人々は集まつて火を焚き、師の亡き骸を埋めつゝあるやうな氣がしてならなかつた。

膳所、粟津、大津、轉々としてかれは湖の周圍を移り住んだであらう。

山一つ越ゆればそこはかれの故郷の伊賀であつた。

かれは故郷を出奔した。しかもその多くの年を故郷の山と背中合せに住んでゐた。

世を捨てたかれはいつも世と背中合せに生きてゐた。かれはいつも故郷のあたゝかさを忘れ得なかつた。世のあたたかさを忘れ得なかつた。

京の歌舞伎を觀た歸りにかれは花やかな芝居のさまぐ\を描きながら、粟津へ歸つて來たことであらう。

なぜかれは故郷を捨てたか。しかもなぜ度々故郷をたづね、故郷に近い町々を轉々として移り住んでゐたのか。かれの若い日につながれた故郷の或るものへの悲しい執着が、かれが死ぬ日まで斷ち切られなかつたのではないか。

それにしても何故にかれは故郷に屍を葬られなかつたのか。何故に湖畔を永住の地としたのか。

「此秋は何で年寄る雲に鳥」

湖をめぐりて秋の雲沈み、鳥は美しい水の輪を湖面に描いては鳴いた。

石山から一緒に船に乘つた二人づれの若い女はいぎたなく甲板の茣蓙の上へ眠つてゐた。

聲なき土

聲なき土よ
お前の草原に立つて私は何を聽かうとしてゐるのだらう。
黒い土よ、武藏野の曠い原よ、煙つた木立よ
私は漂泊の旅人の心をもつてお前のまへに立つてゐる。
聲なき土よ
お前は何を私に語らうとしてゐるのだ。
二十年前の私の思ひ出か？
Aの黒い瞳？
Tの白い柩？
亡母の墓？
すべては苦しかつた。悲しかつた。
けれども黒い武藏野の原よ
お前のまへに立つてゐれば
もつと苦しいこと、もつと悲しいことが明日の世界から近づきつゝある跫音を聽くやうな氣がする。
否、苦しいこと、悲しいこと以上の空虚さが黒い土の上を歩いて來つゝある。

苦しいこと、悲しいことは喜びに次いでのいゝことである。人間の生活にとつてなくてはならぬものである。人間は喜びに耐へ得ると同じやうに苦しみにも悲しみにも耐へ得る力を持つてゐる。

けれども人間は空虚さに對してはほんたうに脆い。

黑い土よ

お前のまへに立つてゐると私は自然の空虚さを感じないではをれない。

私の胸は壓しつけられさうだ。

私の肋骨は締めつけられさうだ。

お前のまへに立つてゐると私の過去の苦しい思ひ出なんていふことは何んでもないことになつてしまふ。

Aは今では五人六人の子の母になつてゐるかも知れぬ。

そんなことはまるで私にとつて他人事のやうに思はれる。

今もし、Aが私の前を通り過ぎたとしても、私は或ひは聲もかけないかも知れない。

Tの自殺、亡母の死、私にとつて悲しいことであつた。しかし私はそれにも耐へた。

黑い土よ

私はお前の空虚さを一番恐れる。

お前は何も語つてはゐない、お前は空虚だからだ。

お前は言葉を持たない。

お前は言葉以上のものだからだ、絕對だからだ、絕對の空虚だからだ。

黑い土よ

お前の空虛のまへに立つ時、私は魂の喜びと、慴(をのゝ)きとを感ずる。
お前は恐ろしい魅惑の力を持つてゐる。
お前は何を語つてゐるんだ。
私はそれを聽きたいためにぢいつと草の中に立つてゐる。
愛、憎、喜、呪、悲、生、死……そんなことが何んだ！
もつとそれ以上の何物かをお前は語つてゐるのだ。
七月の微風が吹いてゐる。
玉蜀黍がゆらぐ。
黑い土よ
私は玉蜀黍の葉音を愛する。
お前のさゝやきを聽くことができるからだ。
黑い土よ、玉蜀黍の葉よ
私はお前のまへに立つて何を聽かうとするのだ。
私は淚をもつて靜かに私の思ひ出をつゝむ。
黑い土を踏む時、玉蜀黍の葉音を聽く時。
私は淚をもつて靜かに私の魂をつゝむ。
さらに遠い明日の寂寞を思ふて。
さらに遠い人生の漂泊を思ふて。

私は槇有恒氏の「山行」を讀んだ。そして人間がいかに本然的に苦鬪のために苦しみ、苦しみのうちに最高の生存意識を味はひつゝあるかといふことを考へさせられた。登山者は Enjoyment のためでなく、Suffering のために山を攀ぢるのである。苦しむことのうちに愉悅以上の淸福を見出すのである。イブセンの「ブランド」は何のためにあの雪の山にはいつて行つてしまつたか。「人生には幸福以上のものがある筈だ。」ブランドも、建築師ヒルダアもロスメルスホルムも幸福以上の或るものを覓めんがために生命を捨てたのであつた。

山に登ることは危險である。恐らく大アルペンの雪の中には幾多の山の犧牲者の屍が年々靜かに埋められてゆくことであらう。しかも新たなる登山者は希望と生命を賭けて、アルペンの雪を攀ぢのぼる。何のためであるか？

愛する人々にとつて愛は必ずしも幸福ではない。ロスメルスホルムにとつて愛は死であつた。しかもかれは愛のなかに幸福以上の或るものを感じ得たのであつた。

生くることは尊いことである。最も尊いことである。しかも生を抛つてまで購はなければならぬ幸福以上の或るものがあらう。

幸福以上の或るものを目あてとする時、私たちの生活に光りが生まれ、踴躍が生まれる。哲人の生活、殉教者の生活、詩人の生活が生まれる。

幸福のみに囚はるゝ時、私たちの生活は俗人の生活に墮する。宗教はコンヱンショナルな教義に死ぬ。

幸福を求めようとする人は植林の中をさ迷うたがいゝ。そこには木の實もあり、快樂もある。

生命を賭して高山を攀ぢて來た人々は木の實も發見せず、幸福も味はゝず、たゞ疲憊のみを持つて歸るであらう。

哲人とは何ものをも持たないで、空手、山を下つて來た男ではないか。

愛を得た者は愛に終り、富を得た者は富に滅びる。何ものをも得なかつた者こそ最高の人生意識を獲たのではないか。

人は火を追ふ蛾の愚を笑ふ。けれども、超人とは火を追ふ蛾の勇氣と本然性とを失はないところの人間の謂ではないか。

プロメシウスの傳説は畢竟、人間そのものが火をあこがるゝ蛾であるとを象徴したものではないか。

火を追ふ者は火に死ぬ。けれども火を追はぬ者も死なゝければならぬ。

人生が倦怠くなるのは私たちの心から火の影を忘れてしまふからだ。冒險心に弛みが出來てくるからだ。所詮人生は「全か然らずんば無である。」すべてを投げ出してかゝる勇氣のないところに、ほんたうな人生意識は燃えて來ない。

私たちの心をして常に幸福以上の或るものを憧憬れしめよ。

私たちの心をして常に火を追ふ蛾の勇氣を忘れしめてはならぬ。

もと〳〵一厘の値をも拂ふことなしに與へられた生命である。この生命のすべてを賭けることによつて、人生のすべてを得ようとする大冒險を敢てする者は超人である。

打算的な、偸安的な自分の心を叱らなければならぬ。

人生は收穫ではない。人生は憧憬であり、希望である。

十羽の小鳥を獲たといふことゝ、一羽の小鳥を獲たといふこととは、その人の生の價値問題に對しては、何の關係も持つてゐない。ブランドは一羽の小鳥をも獲なかつた。

死とは、幸福以上の或るものに對する憧憬の滅却である。

神を求むる者は、神を求むるがゆゑに死なない。神を求むる者はその憧憬の中に生きてゐる。神を求むる心を失ふ

と共に、かれの神は死し、かれ自身も死ぬ。

×

私は親切な心の足りないことを最も悲しく思ふ。人に對する思ひやりの足りないことである。

不注意といふことはたいてい親切心の不足から生まれて來る。

もすこし亡母の心に對して親切な見方をしたならばと後悔してゐる。亡母は私が故郷を去つて一週間目に死んだ。あの時、もすこし私が亡母の病氣を親切に見ることをしたなら、或ひは私は亡母の臨終に亡母を喜ばせることができたかも知れなかつた。

妻の心持ちに對して私は時々あまりにラフな見方をする。デリカシイが足りない。ほんたうに人間のデリケートな心持ちを掬むことができない。そのために對手の心を傷つける。

惡意があつてゞはないが、親切な心の足りないために對手の心を傷つけるといふことは悲しいことである。

沙翁が萬人の心を持つた人と言はれるのは、親切な心の人であつたといふ意味にもとられる。藝術とは要するに、親切な心の記錄ではないか。人生に對して親切な心を抱かないでどうして藝術が生まれよう。人を憎む時、人を呪ふ時、たいていは私たちは親切心を失つてゐる。

親切な心を持たない時、私たちの言葉は御座なりになる。私たちの見方はたゞ上つ面だけになる。そんな人の藝術は無理に飾り立てられてはゐるが、何の滋味をも持たぬ。風韻をも持たぬ。

人格とは親切な心のあらはれではないか。人を尊敬するといふことはいゝことである。しかし尊敬する心を起させるものは親切な心ではないか。親切な心によつて私たちは始めて人の美しさをも尊さをも知るのではないか。自分自身に最も責むべき物を見出すことによつて謙虚な念を抱かせるのも親切な心ではないか。

私たちは極めてラフな概念によつて色々な議論をしたり、人生を救ふなどゝいふやうな大きなことを言つてゐる。
こんなことは昔サドカイの徒がすでにくりかへしたことである。
小ひさくともいゝから、もつと〳〵親切な心、デリケートな心を自分のうちに培はなければならない。
たゞ一人の妻に對して、たゞ一人の友人に對して、もすこし親切でなければならぬ。
誰よりも私は不親切な自分の心を恥づかしく思ふ。

天城の春に居りて

伊豆の山と山との懐に抱かれた谿の村では軒に朝の日の光りが射して來ることも遲い。東に向いた窓の下には、この湯の町の眞ん中を貫いてゐる谿川がせゝらぎの音をなして流れてゐる。私の窓と面した彼方の岸は崖になつてゐて、そこには二本の椿が咲いてゐる。竹があり、櫻があり、杉も欅もある。花にはまだ四五日、間があるやうに思はれる。

崖の上を新らしく切り拓かれた道が通つてゐる。

この湯の町からさらにその道に沿うて二里ばかり奥の天城の懐に沿うて二つ三つ小ひさな部落があり、炭を燒く家もありするので、天氣のいゝ日は炭を背にした馬だの、行商人らしい男だの、獵師だのが一日に幾人となく川向うの山道を上り下りする。窓を明けては私はその人たちを眺めてゐる。三四日も窓から眺めてゐる間に、たいていそこを通る人も馬も毎日同じ人であり馬であることに氣付く。馬は非常に小ひさな馬である。そして柔順である。山の枯草や、炭を積んだまゝ、こつ〳〵と自分一人で厩に歸つて行く。こゝらの山の中にもゴム靴がはいつて來てゐて、子供たちはゴムの靴を穿いてゐるのであるが、山から下つて來る男にはまだもんぺのやうなものを穿いてゐるものもある。

わづかに芽ざして來た春の萓山を背にして立つたもんぺの男の姿は、いかにものどかである。

川をへだてゝ芝山がある。雜松の山がある。その間を菜花と麥の穗が點綴してゐる。

山を歩む人、旅人、小學校通ひの子供らが或ひは菜花の間にかくれ、或ひは芝山の陰にかくれてしまふ。時としては思はぬところに旅人の影を見出すこともある。犬を連れた獵師の姿が嶺の上に、青空に投影してゐることもある。

夕暮になると天城にはいつも雲がかゝつてゐる。

×

山の懐に抱かれた湯の町では、夕暮の寂しい影が、平原の町より早く軒のあたりに迫つて來る。町は暮れかゝつて、軒の下に薄暗が漂ふころも、岩ばかりの河の岸に立つて西の空を眺むれば、まだそこには天城のいたゞきに劃られた夕燒の色が取りのこされてゐる。

谿の湯の町のさゝやかな小川のほとりから、天城の上にのこされた夕燒の空を見る時、旅といふ心がしみ〴〵と湧く。

岫を出づる雲、岫に入る雲、山一つ越せば廣い海もあらうに、そこにはまだ日の光りものこされてあらうに、谿底の湯の町はすでに暮れてしまう。

私は日暮れころになると湯の町を出はづれたたゞ一筋の道を歩む。ほとんど毎日のやうに。

村の出はづれには一軒の理髮床がある。若い男がいつも眞つ白な被ひを着て硝子窓の中に坐つてゐる。理髮床に隣つた廣場には山から伐り出されたばかりのまだ木の香の新らしい材木が積み重ねられてある。毎日大仁まで湯の町の客を運んでゆく乘合馬車が、いつも夕方になれば、馬を外してそこの廣場に置かれてある。五六人の子供たちが空馬車の中にはいつたり出たりして遊んでゐる。

他に何の遊び場所も持たず、また遊ぶべき方法も知らぬ山の子供らにとつては、夕暮れの廣場に集まつてたゞ一臺の空馬車に乘ることがどんなに樂しいことであらう。

夕暮れの闇が幼き者の影を包んでしまふまで、かれ等は空馬車の中で遊んでゐる。歌をうたふこともしないで。たゞ折々かれ等の笑ひ聲のみが薄暗の中から轉げるやうに白い道の方へ傳はつて來る。

白い一筋の道は山の裾をめぐつて、水車小屋の前から右に折れて下田街道へ結びつくのである。

そこには人つ子一人歩いてゐないことが多い。たゞ一軒の水車小屋が見える。三基、四基の古い塚が枯れ草の中に輪塔の一部を見せてゐる他には、まだ冬枯れの寂しさを漂はせた幾重の芝山のみが五里十里と連なつてゐるばかりである。たまく\遠い芝山に春先きの野火を發見することもあるが、夕晴に空を舐めずる遠山の火はかへつて旅人の心に悠久な思ひを誘ひ喚ぶ。

終日囀つてゐた小鳥らも啼かず、天地すべてが夕暮れの眠りに落ちかけてゐる。

ほんたうにそこに立つてゐる自分一人が天地の間に唯一人友もなしに放り出されてゐる。もしそのまゝに永遠に自分一人が、そこに立つてゐなければならぬとしたらどんなにか頼りないことであらう。同時にそれは羨ましい境界でもあり、尊い孤獨の世界でもあるやうに思はれる。強くあれ。孤獨に耐へよ。かう言つたさゝやきが聞えるやうにも思ふ。

野火がだんく\明るくなつて行く。空が暗くなつて行く。

天城、箱根、富士の脈々につゝまれた大自然の中にたゞ一人の旅人のみが思ひつゝ、悩みつゝあるやうな氣もする。

停場の客馬車の中の子供らの影も見えなくなつた。

家々の戸にとざされてしまつた。

私は靜かな湯の町の夜を歩いてかへる。

私は花やかな都會生活と山の中のこの靜か過ぎるほど靜かな孤獨な生活とを比べて考へる。

公園を持ち、いろく\な美しい玩具を持つてゐる都會の子供らと、みすぼらしい客馬車にたゞ一つの幸福な世界を見出してゐる山の中の子供らの生活を考へて見る。

山の子供らはもう眠つたであらう。かれ等の或るものはやがてまた天城から大仁への馬車を驅るであらう。そしてやがてこの靜かな山の中に一つの墓を殘すであらう。かれ等の或るものは山に行つて、一生涯木を伐るであらう。そしてやがて山の中に一つの墓を殘すであらう。たゞそれだけの一生が言ひやうもなく懐いものゝやうにも思はれる。

×

私はまだこゝかしこに冬枯れの俤を殘した芝山を歩く。椿の下に、或ひは麥畑の中に盛り上つたわづかな雜草の中に墓らしい塚を見出すこともある。墓であるか、墓でないかさへはつきりとは分らぬ。恐らくそこの下にも、かつて一生涯をこの山の中に送つた人々の魂が眠つてゐるであらう。或ひは或る人々の魂はたゞ一つの墓さへも失つてしまつたであらう。

その人々がかつてこの地上に生きたといふこと、苦しんだといふこと、そのやうな記錄は永遠に人類の歷史から失はれてゐる。けれどもその人たちの生涯が何で無意味であつたと言へよう。

地上に殘された墓を見出さぬところに、私が何氣なく踏んでゐる土の下に、雜草の下にいかに多くの私たちの先人が眠つてゐることであらう。そこにこそほんたうに人間らしい愛憎の念になやみ、人間らしい苦しみを苦しんだ人たちが眠つてゐることであらう。

深い山の中に生まれ、哺まれ、生き、なやみ、やがてそこに名もなき塚を遺し、塚を失ふであらう子供らは村はづれの廣場でたゞ一臺の空馬車に餘念もなく夕暮れを遊んでゐる。

日は暮れてしまつた。

子供らの窓はとざされた。

子供らは眠つた。

山の子供らの眠りの上に恵みあれ。

×

昨日の夕方からひどい雨であつた。
夜なかになつて若い男たちが雨の中を川に沿うて山の方へ走つて行つたりした。
夜つぴてひどい雨が降りつゞいた。夜明け方になつて、湯の町から七八町も下の水車小屋の傍の水の中から一人の女の死骸が發見された。
一ヶ月ばかり前から湯治に來てゐた女の死骸が、川に臨んだ一室に寢かされてあつた。緣端の眞つ赤な乙女椿には朝から春らしい小糠雨が降つてゐた。
その女は昨日同じ宿のお客たちと一緒に湯の町からは十町ばかりも離れた山の中の瀧を見に行つた。
そこでもその女は羽織を脫ぎ捨てゝ、深い瀧壺を覗き込んだ。その刹那の顏は物凄いほどであつたと、同宿の女たちは語つてゐた。
「あたしは死にたくなつた。」とその女は道を步きながらも、連れの人たちに語つたさうである。
「死ぬのはどうした方法が一番いゝでせう。」ともその女はたづねたさうである。
「首を縊つたがいゝでせう」「川に身を投げた方がいゝでせう」「ピストルがいゝでせう」連れの人たちは笑ひながらこんなことを答へたさうである。一人の男は「死ぬなら、川のこゝに來て身を投げるがいゝ」と冗談半分に言つたさうである。
その夜、女は、川のその點から身を投げて死んだのであつた。
そこは川といつても、水車を動かすために山の水を引いた溝といふほどの狹い淺い流れであつた。どんなに想像し

ても人が死ねさうにもない流れであつた。しかも女は敎へられた通りに、そこから身を投げて死んだ。

「ヒステリイだつたからこんなところから身を投げて死んだのだ。」と町の人々は語り合つてゐた。

「夜なかにうなつてゐる聲がしたので、まさか人間とは思はなかつたが、家のまはりをまはつて見たが何も見つからなかつた。この淺い川のなかとは想像もしなかつた。」と、その流れの傍に住んでゐる獵師は語つてゐた。

翌日はすつかり空が晴れた。

山には小鳥が啼いてゐた。

女の死骸は山の火葬場へ運ばれて行つた。

×

川には河鹿が鳴きはじめた。

去年の夏霧島の大浪の池で聽いた河鹿は、オーケストラの中の笛の音を聯想させた。幾千年の水をたゝへたであらう高い山の上の湖水に聽くにふさはしい聲であつた。

この附近の伊豆の谿川で聽く河鹿は里に近いせゐか霧島で聽いたほど澄んだ聲を持つてゐない。悟つた聲を持つてゐない。悟りきれぬ聲である。なやましさを訴へるやうな聲である。麥笛を吹いて里の戀人を誘ひ出す若人を聯想させる聲である。やる瀬ない聲である。夕方など一人で聽いてゐると、幽い世界へ引き摺られさうな聲である。

こゝではさま〴〵の小鳥が一時に春の迫つたことを知らせるやうに囀りはじめた。

翅の裏の黃色な鶺鴒と、翅の白い、背の黑い鶺鴒は伊豆のどこの谿川にも見らるゝが、こゝにも夜が明けるころから鶺鴒が河原に來て鳴いてゐる。繡眼兒、頰白、ひたき、四十雀、何から何と名も知らぬ小鳥が梢から梢へと鳴きわたつてゐる。町の人たちに聽いてみても鳥の名も知れぬ。

朝、まだ夜が明けぬうちから眼をさまして耳を澄ましてゐると、いつも夜明けに眞つ先きに鳴きはじめる鳥の聲は同じものであることに氣がつく。ひたきや、四十雀の聲が鶯の聲より朝早くから聞えて來るやうに思ふ。

こゝでは川にゐる小鳥も、山にゐる小鳥も滅多に人を恐れない。五六尺の近さまで近づいても小鳥らは囀つてゐる。

今日私は雨の中にしばらく立ち止まつて頰白を見てゐた。頰白はその頰をしきりに雨に濡れた小枝でこすつてゐた。そして私が直ぐ傍まで近づいて行つても逃げないで囀つてゐた。

私はまた今をさかりに咲いてゐる咲き分けの乙女椿の花に埋まるやうにして、椿の甘い露を吸ひつゝある繡眼兒(めじろ)を眺めてゐた。

それはほんたうに美しい乙女椿であつた。私はいつもその椿の下を通るたんびにあまりに美しい八重の花瓣に見とれた。

三羽の繡眼兒はあの輕い華奢なからだを倒さにして椿の甘美な露を吸つてゐた。

それは人間が作つた王宮よりも美しい花であつた。私はその美しい世界にすべてを投げ出して、花につゝまれながら露を吸つてゐる小鳥の生活と、人間の生活と果して何れが幸福な生活であらうかなどと考へたりした。

時々はかいかいせみいが流れをかすめて鳴きわたることもある。

何といふ小鳥であらう。岩燕に似て岩燕よりやゝ大きな小鳥が、折々河心をかすめて矢のやうに迅く、川を下り、或ひは上つてゆくこともある。その小鳥だけがいつも鳴きもしないでたゞ一羽で光りを恐るゝやうに暗い岩の蔭を傳うて、一直線に水面をかすめて翔る。全身が墨のやうに黒く、いつも孤獨なのが、鳥の仲間の拗ね者のやうでいぢらしくもある。

×

今年は寒が遲れたせゐか、花はいつもよりおそいと山の人は言つてゐる。それでも狩野川に沿うた里のあたりでは、ちらほら櫻が咲きはじめた。東京では花の盛りだといふ新聞記事を見たが、こゝでは確かに十日ぐらゐ遲れたやうである。昨日天城の八丁池に仙人が住んでゐるといふので、見に行つたといふ一人の青年は、まだ池のあたりには三四寸の雪が積もつてゐたと話してゐた。仙人は留守であつたが、低い柴の小屋が池の畔に建てられてゐて、八幡大菩薩と書いた白い旗が立つてゐたなどゝ語つてゐた。

麥も伸び、菜の花も輝き、山の色も春めいて來たのに畑ではまだ雲雀が啼かないのが寂しい。天城にかゝるまでの途中に下田街道に沿うてところ〴〵に山の懷や、川岸に沿うて小ひさな部落がある。どんな小ひさな家の屋根にも、屋根の眞ん中を切つて煙を出すやうにしつらへた小屋根がある。草葺き屋根の曲線、小屋根の恰好は立派な繪を形作つてゐる。腰高な裾を附けた草葺きの穀倉の形も面白い。櫻や、桃や、木蓮や、椿や、れんげさうや、小米櫻や、梨やいろ〳〵な花につゝまれた一と構への農家は、美しい繪をなしてゐる。厩の小窓からは馬が首を往來の方へ突き出して、珍しげに旅人をながめてゐることもある。

葺き替へた古い屋根の萱を田圃にはこんで、人々は火を焚いてゐることもある。子供らは街道の緣にしやがんで火を眺めてゐる。

何といふ無心な子供らの顏であらう。赤ちやけた髮、黑く日に焦けた顏、不思議さうに旅人を見る眼。子供等は柔かな草にしやがんで、何を語つてゐるのであらう。旅人が近づけば一度に物語りをやめてしまふ。そして一樣にかれらの無心な眼を旅人にそゝぐ。かれ等は笑ひもしない。けれどもそこには人を懷しむ可憐な目なざしが、草の中にまたゝいてゐる。旅人が行き過ぎた刹那に、かれ等はまた何かを語り始める

街道からそれて小川に沿うて芝山の懷に入れば、そこに段々になつた田がある。田には今恰度れんげさうが咲いて

ゐる。若い夫婦の男女が土を打つてゐる。畦には二人の子供らが、赤い毛糸の襟巻につゝまれたまゝ旅人を見てゐる。

たゞ一人黙々として田を打ちつゝある Solitary Reaper を見出すこともある。

また思ひがけもない山峽に、靜かな小舍を見出すこともある。そこでは一人の老人が孫を對手に兎の箱を拵へてゐる。

その老人は夕方になるとよく草を積んだ馬を曳いて、私の窓から見える川向うの岸を下つてゆく。背には小ひさな孫が可憐な兩手で眼を塞ぎながら、眠らうとしてゐる。

×

"Man was made to mourn" といふバアンズの詩題は、人間の住むところ、どのやうな深い山中を歩いても見出される。

こゝの湯の町の一人の娘は、去年八月の二十五日に東京へ奉公に出て行つた。そして九月一日のあの地震で竈の前にしやがんだまゝ、他の二人の友達と一緒に燒死してゐた。

私の窓から見える川向うの百姓家の娘は去年横濱に嫁に行つたが、それも死骸すら見えなくなつてしまつたといふことである。

昨日雨の中を私はその百姓家の庭を通りぬけた。美しい咲分けの椿が三本庭にあつて、いつもその椿には繍眼兒が花の露を吸ひに來てゐる。

奥を覗いて見たが一人のお婆さんが暗い爐のはたにぽつねんとしやがんでゐた。

×

今日は村の入り口の理髮床の若い男の家に嫁さんが來るといふので、近所のおかみさんたちは仕事を休んで朝から

雨の中を髮を結つたり、菜畑の傍で野菜を洗つたりしてゐる。
鏡の直ぐ後ろの部屋にはもう十人ばかりの村の人たちが集まつて酒を飲んでゐる。
山はすつかり雨雲にとざされてしまつた
山の花が雲のなかにほの赤く燃えて來た。

×

夕方村はづれの駐在所の前を通つて見たが、めづらしく人だかりがしてゐる。五十ばかりの一人の男が眞つ靑な顏をして巡査の前に立つてゐる。
「一生、監獄から出られないやうにしてやるぞ。」
巡査の聲が往來まで聞えて來た。いつも空馬車の中で遊んでゐる子供たちが、駐在所の板塀の下に首を突つ込んで、こはさうに窓硝子の奥を覗いてゐる。
今日も終日山は雨にとざされてしまつた。

×

山の寺に詣る。
昨日雨の中を若い和尚さんが乙女椿の枝を伐つてゐたが、今日は小ひさな花御堂が飾られてある。
菜の花とれんげさうと乙女椿と結香の花で花御堂の屋根が葺かれてゐる。
いつも夕方になれば空馬車で遊んでゐる子供らが、今日は御堂に集まつて甘茶をいたゞいてゐる。花御堂の中の薄暗に立つてゐる釋尊の姿は尊く思はれる。
キリストの降誕祭が年々都會の冬の夜を賑はすに對して、釋尊の降誕が山の子供らによつてわづかに喜ばれ、祝は

れてゐるといふことは面白い對照である。

釋迦はまことにいゝ時に生まれた人であると思ふ。花が咲きみだれ、小鳥が啼き、子供らがうたふ春の光りの眞ん中に釋迦は生まれた。無常寂滅の大宗教が、このうるはしい春光の眞ん中から生まれたのであつた。

涅槃にはあらゆる鳥も集まり、獸も泣いてゐる。釋迦は子供らの友達であり、小鳥らの友達であつたことを考へると今日娑羅雙樹の間に子供らの手によつて灌佛會が營まれ、花御堂の中に眞つ黑な裸童子が立つてゐるのは面白い。

×

東京からやつて來た大工さんたちがずゐぶん前から、川の岸で木を刻んだり、鉋をかけたりしてゐた。湯で一緒になつたり、往來で逢つたり、仕事場の近くを散歩するたんびに顏を合はせたりするので、いつとなしに道で逢つても默禮をしたり、「雨で困りますね」くらゐの挨拶は交はすやうになつた。そのうちでも、棟梁の直ぐ次の大工さんといふのが一番面白い。年は五十に近いであらうが、酒が大好きで、いつも夕方になると一杯機嫌で湯の町を歩いてゐる。どうかすると晝の飯時に一杯やつて棟梁に叱られてゐることもある。

いつであつたか醉つたまゝに、橋の上で一疋の黑犬の首を摑へて、振つて歩いてゐるところを私に見つけられた。恰度晝飯の時であつた。

その日の夕方私はその大工さんと橋の上で逢つた。今度はすつかり醉がさめてゐたので、私の顏を見るなり、首をすくめて、さも〳〵きまり惡さうにお世辭笑ひをして逃げてしまつた。

二三日前の晩は、私は十二時ころ湯に行つたが、その大工さんは酒に醉つて快ささうに湯の中に眠つてゐた。それからなほ二時間も大工さんは風呂場に眠つてゐたさうで、夜中に若い弟子がゆりおこして宿につれて行つたといふことであつた。

今日は建て前だといふので朝早くから、その大工さんも若い男たちを指圖しながら、仕事場を駈けまはつてゐた。一つの新らしい家が建つといふものは、はたで見てゐても氣持ちのいゝものである。私は小半日建て前を見てゐた。今日はうんと飲めるだらうと思ふと、その大工さんの顏を見るごとに笑ひがこみ上げて來るのであつた。大工さんは私を見てはうれしさうに笑つてゐた。

旅から旅と一生その大工さんは家を建てゝ歩くのであらう。そして立派な家が建てられてしまつたころは、またさらに新らしい家を建てるために、どこかに旅しなければならないのであらう。大工さん自身は一生自分の家も持たないで、たゞ幾らかの酒に生活の幸福といふ幸福を見出し得てゐるやうに思はれる。

午後になつて急に山の中の溫泉町の靜寂を破るやうな陽氣な唄の聲が聞えたので、私は障子を明けて見た。例の大工さんが眞つ先きに、さも〳〵うれしさうに酒德利を抱へこんで山を駈けのぼつて行つた。建て前の振舞酒に醉つた男たちが、てんでに一升德利だの、重箱だのを提げて前の山を登つて行くのであつた。花は滿山を埋めるばかりに咲いてゐた。大工さんが手を振つて踊りながら、花の下を上つてゆく姿がいつ迄も見えてゐた。

仕事と生活の幸福の一致、創作卽幸福、Joy を伴つた Work、私はウイリアム・モリスの藝術論を考へて見たり、或ひは人間の幸福はどこに在るのか、幸福とは何ぞや、などと色々のことを考へながら、山をつゝんでしまつた雲のやうな櫻をながめてゐた。

×

數日前までは普通の雜木だくらゐに思はれてゐた山の梢といふ梢、枝といふ枝には花が咲いた。

この春は吉野の花を見たいと思つてゐたが、こゝの名もない山の花を見て今年は自分を慰めることにした。

花の山は朝と夕暮れがいゝ。殊に小鳥らの聲もひつそりと絶えた夕暮れの薄暗の中に雲のごとく湧いた花を眺めてゐると、旅といふものゝうれしさも寂しさも犇々と迫つて來る。

眺めても、見ても、眺め飽かぬ花の山は、かへつて無常寂滅の感を深くせしめる。

如月の花の下で死なんことを冀うた西行の心持ちは靜かな夕暮れの花を見る人々には幾分理解せらるゝことであらう。

寂寞を愛する詩人は花を愛する。

「吉 野 に て 櫻 見 せ う ぞ 檜 木 笠」（芭　蕉）

櫻ほど美しく、櫻ほどあはれなる花はないといふ感じは、旅の春において一層強く胸に響いて來る。

十代、二十代のころ見た櫻は愉しさや、甘美な憂愁を誘うて來た。今日見る櫻は人生そのものについての無常感を喚びさまして來る。

蜜蜂は一つの花瓣からさらに一つの花瓣へと蜜をあさつてゐる。小鳥は花から花へと梢をかへ、枝をかへて囀つてゐる。「身を分けて見ぬ梢なくつくさばや」といふ西行の心も、花瓣から花瓣へ、花から花へと春の山を驅けめぐる蜜蜂や、小鳥の心ではないか。小鳥らは人間より幸福でないと斷言することはできない。

「野の百合を見よ」といふ言葉は譬喩ではない。人間のすべての智慧を盡した生活よりも小鳥の自然の生活の方がどれほど幸福であるか知れない。

×

またひどい雨が朝から降りつゞいてゐる。二三日夕燒の空を見ることもできない。

河鹿だけがしつきりなしに崖の下で鳴いてゐる。

夜具を冠つて寢て見たが、流れの音がはげしくなつたので、どうしても眠れない。枕を替へて見たが、やつぱり水の音が氣になつて眠れない。

机の上から繪葉書を出して旅のたよりを書く。

小學に通ふ以前からの幼友達の長崎のUへ。たよりを書いてゐると、三十年前の故郷の春のことがはつきりと浮かんで來る。

對馬の兵營生活で一緒になつた大村のMへ。丹後のMへ。大井川の友Yへ。

明りを消してもどうしても眠れない。

再び明りをつける。

大隅のI先生に手紙を書く。

球磨川のほとりの奥さんやお子さんと別れて、大隅の寒村に或る一人の女と寂しい生活を送つてゐる詩人らしいI先生のことがいろ〳〵思ひ出される。

教會の反逆者であり、異端者であるI先生は私にとつて一番忘れられぬ人である。

去年私が霧島に行つた時、I先生はわざ〳〵大隅から山まで逢ひに來てくだすつた。私たちは二十年振りで逢つた。

私たちは霧にとざされた處女林の中を歩きながら語つた。先生は昔のまゝの詩人であつた。

私は自殺をしたTの叔父のことを思ひ出した。世を厭ふて種子島に隱れてしまつたのであつたが、今ではもう恐らく地下の人になつてゐるかも知れない。

妻の祖母のことを思ふ。かの女も行方知れず世を捨てゝしまつた。

人間が住んでゐるかぎり、そこには屹度寂しい詩人が生きてゐるであらう。Tの叔父のやうな心の美しい人が生き

ゐるであらう。どのやうな深い山にも、寂しい村にも。

×

かつて私の周圍に集まつて來た若い人々のことを思ふ。

いつの間にか私はたゞ一人で立つてゐる自分自身を見出さなければならなかつた。

かつて私は、ほとんど私のすべてを投げ捨てゝまで或る人々のために働かうと考へたこともあつた。しかし私は今ではその人々とすらまるで敵のやうに別れてしまはなければならなくなつた。

人間の愛憎の念ほど不確なものはない。

兄と弟とすら明日は爭はなければならぬ。戀人と戀人とすら明日は呪ひ合はなければならぬ。友と友とすら明日は憎まなければならぬ。

かつて愛することの深ければ深いほど、かつて信ずることの強ければ強いほど友はその友を強く憎まなければならぬ。

私たちは、いつたい、誰を信ずればいゝのだ。誰を賴ればいゝのだ。このやうな歎聲も洩らしたくなる。

結局自分一人だ。自分一人を強くするより他に途はないのだ。弱くなつてはいけない。自分の途を塞がうとする者の殖えるごとに、自分は一層力強くならなければならぬ。

人を憎むことは恐らく人を愛すること以上に苦しいことであらう。けれども自分は敗けてはならぬ。妥協に落ちてはならぬ。

なまじつかな愛よりは、ぢつと涙をこらへた憎みの方が、どれほどかれを生かし、自分を生かしてくれるか知れない。

×

或る人にとつてAはたしかに善人であるにちがひない。
或る人にとつてAはたしかに悪人であるにちがひない。
人間であるかぎりはAはたしかに善人であり、悪人である筈だ。
或る人にとつてAはたしかに正直な男であるに違ひない。
或る人にとつてAはたしかに嘘つきであるに違ひない。
人間であるかぎりAはたしかに正直な男であり、同時に嘘つきであるにちがひない。
或る男はすべての人の前に悪人であつたかも知れない。けれどもかれは神の前と、その妻や子供の前だけでは善人であつたかも知れない。
人は何故に人を憎まなければならぬか。
憎まるゝことは心寂しいことである。けれども時としては憎まるゝといふことはその人にとつて名誉なことである。
イブセンの作にあらはれて来る主人公はたいてい世俗の憎まれ者であり「人民の敵」であつた。
自分一人の力で生きて行かうとする人間、自分自身を誰にも奴隷となすまいと思ふ人間、いつも自分を自分の主として生きて行かうとする人間、自分で自分を辱しめることをしない人間、自分で自分を偽ることをしない人間は、世間の人たちからはストツクマン博士の立場に置かれなければならぬ
幸福は「人民の敵」のあの印刷屋のやうな日和見の人たちのみが持つことのできるものである。ストツクマン博士に與へらるゝものは生活の脅威や、忘恩的な町の人々の石のみである。
憎まるゝものゝ生活、敵視せらるゝものゝ生活のうちにのみ眞理を愛するものゝ生活がある。一人の力で生きて行

かうとする強い人間の生活がある。

×

　こなひだ橋の上で酒好きの大工さんに首を摑まれてゐた黒い犬のことを、湯の町の人たちは黒と呼んでゐる。黒はちよつと風がはりの犬である。こゝの町には家の數に比べて犬の數が多い。いろ／＼の犬が旅の人たちに馴れては菓子を貰つたり、牛肉を貰つたりしてゐる。

　黒は拗ね者とでもいふのか、誰を見ても尾を一つ振ることもしない。無愛嬌な犬である。そんな風で自然誰にも可愛がられない。人間に對してのみならず、同じ犬仲間でも受けがよくないのか、よく大きな犬に嚙まれてゐる。無論宿無し犬である。

　けれども黒にも時折は味方ができる。かつては、こゝの町に働きに來てゐた大工さんの群が、黒びいきになつて、どこかの犬を咬ませたといふので問題になつたこともあるといふ話である。またいつかは東京から養生に來てゐた鳳の弟子の何とかいふ力士が、黒を可愛がつたといふ話である。この頃では黒は毎日のやうに私たちが散歩をしてゐるのを見つけてはうしろからついて來る。少しも菓子を喰べない犬だから、せつかく家までついて來ても喰べさせるものがないので困ることがある。肉なんどをやつても、別に尾を一つ振ることもしない。可愛がりばえのしない犬である。

　それでも夜遲くなつてから、私たちの玄關で吠えてゐることがある。自分ではいつぱし忠勤をはげんでゐるつもりであらう。

　からだは無論のこと、爪の先まで眞つ黒な犬で、ちよつと見たところでは穴熊のやうな日本犬である。

　町には非常に悧巧な洋犬もゐる。人間で言へば人の眼顔を見ることの上手な方であらう。媚態を巧みにする犬であ

る。そしてどこの家へ行つても尾を振つてゐる。しかし私はそんな犬よりか無表情な黒が好きである。
このころは洋犬のやうな感じのする才人が多くなつて、黒のやうな無表情ではあるが、どこかに節操を持ち、情味を持つた人間がすくなくなつたやうに思ふ。

×

天城の御料地が直ぐ川の向うに横たはつてゐるやうな土地だから、たいていの犬は獵期になれば思ふ存分に野山を走らせられるのであらう。とても獵には役立たぬやうな犬までもが獵師の先に立つて山を上つて行く。
町に遊んでゐる時は、いかにものそくさして、自分自身のからだ一つを持てあつかつてるやうな犬までが、一度山道にかゝるといかにも嬉々として草を分けて走つてゐる。
私はよく雜木林や、草山を歩くが、そのやうな時、溫泉町の犬の仲間が林の中や草の中をいかにも樂しさうに遊びまはつてゐるのを見ることがある。太古かれ等が山に住んでゐたころの自由さが、ふたゝびかれ等の血管の中によみがへつて來るからであるかも知れない。まつたく、山を遊んでゐる犬の群は愉快さうである。
私は或る日、山の中に遊んでゐる犬の群を見てバアンズの “Twa Dogs” を思ひ出したことがあつた。
“Twa Dogs” は大地主の飼犬と、貧乏な小作人の飼犬とがたまたま連れ立つて小山に上つて行つて、大地主の專横さや、贅澤な生活や、代議士といふものゝだらしたさや、小作人の氣の毒な生活やについて語り合ふ。とどのつまり、われわれは人間に生まれなかつたことを喜ばなければならぬといふ結論になつて、二匹の犬は樂しい一日を山上で遊んで再會を約して家に歸るといふ筋の詩であるが、こゝの山に遊んでゐると犬の仲間を發見するたんびに私は “Twa Dogs” を思ひ出す。バアンズの詩はユウモラスな味を含ませて書かれてあるが、實際山で遊んでゐる犬を見てはじめて “Twa Dogs” の詩の味がわかるやうな氣がする。

山の子供たちは半里、一里、時としては二里も歩いて學校にゆかなければならぬ。ちよつと見たところではいかにもぼんやりしたやうに見えるが、それでも實際は夜明け方の水のやうな空の色に對しても、かけすや、鷽の鳴き聲に對しても、消え殘つた山の雪に對しても、かれ等の歸路を照らしてゐる夕燒に對しても細かな感受性を持つてゐる。かれ等はいかにもそれ等の自然の恩惠の一つ一つを靜かに感受してゆくかのやうに、道傍の可憐な草花を摘み、天城の空を流れた鰯雲を仰ぎながら、山を上つて行く。いかにもゆつたりとした足どりで。歌もうたはないで。

都會のあわたゞしい渦卷のなかに生きてゐる子供たちにとつては學校生活はむしろ少年の生活そのものではなくして、オブリゲーションであるやうに思はれる。子供たち自身が中學に入るため、大學に入るための不可避的なコースであると覺悟してゐるやうに思はれる。

山の子供たちにとつては一里歩み、二里歩いてゆかねばならぬ學校は、少年時代の自然生活そのものであるやうに見える。言ひ換ゆれば、學校生活はかれ等にとつて灌佛會にお寺に甘茶を貰ひにゆくと同樣なよろこびを與へてゐるやうに思はれる。

學校生活ばかりではない。ほとんどすべての生活行爲が都會ではほんたうの生活でなくして、オブリゲーションになつてゐる。都會人の生活は、生活の滋味を失つてゐるものが多い。したがつて都會では生活そのものが、よろこびでなくして、苦痛である場合がすくなくない。

村はづれの若い理髮師が花嫁を迎へたゝめに村の人たちは二日間といふものはほとんど仕事を休んで、花嫁と花婿のために駈けずり廻り、飲み、うたつてゐた。

その翌日は、去年産後間もなく桑を摘みに行つて死んだ若い女のために、村の女たちは法事の支度をした。

夕方私はその不幸な女の家の前を歩いてゐた。

ほとんど村中の女たちが薄暗い明りの下に集まつて、たゞ一人の坊さまの讀經を聽いてゐるのを見た。

都會では仕事の能率といふことがやかましく言はれる。人は生活を享樂し、生活の味を嚙みしめるために生まれた筈であるに、都會では仕事の能率が第一に算へられて、生活そのものは第二義第三義的のものゝやうに見做されてゐる。

こゝでは人々は隣人と共に生きるために生き、隣人と共に人間の生活を享樂するために生きてゐるやうに思はれる。

「花が咲きました。」

「もう雲雀が鳴きました。」

「美しい夕燒です。」

「早蕨が出ましたよ。」

「まだ雪が天城には殘つてゐます。」

から言つた自然の移り變りに對するきはめて平凡ではあるが、かれ等の人間生活にとつて最も本質的な關係を持つてゐる筈の自然現象に對して、山の人々の神經は鋭敏に働いてゐる。

ともかく山の人々は自然が與ふる生活のよろこびをそのまゝに受け容れ、自然が與ふる生活の悲しみをそのまゝに嚙みしめてゐる。かれ等は都會人のやうに仕事のために、能率のために、人間の生活の味を鵜呑みにするやうなことをしない。

hospitality といふ心が山の人の生活には生きて働いてゐる。久しい間の都會生活の渦の中に硬化しかゝつてゐた私たちの魂も、少しく氣をつけて山の人々の生活に浸されてゐる間に柔められ、素直さを取り戻す。

かりそめの生活表現をも、無關心では pass over させないといふ生活に對する丹念な注意力をまとめて把持してゐることは大切な事である。

然るに私たちの過度に煩雜な都會生活の結果は、私たちをしてともすれば一つ一つの生活表現に對して、きはめて稀薄な注意力しか持たせなくなる。

人は隣人との共助的生活によつて勵まされ、强くせられなければならぬ筈であるに、私たちの都會生活では私たちは隣人との生活によつて根氣を痲痺せられてゐる。だから私たちは隣人を待つべきであるに、隣人を避けようとつとめてゐる。隣人を避けることによつてわづかに生活の休息を見出さうとしてゐる。都會では生活は苦痛そのものとなつてしまつた。

山の人々の生活を見てゐると、生活に對して丁寧であることに氣付く。

たとへば一枚の葉書すら、すくなくとも一里或ひは二里の山道を運んで來る男の手によつて傳へられなければならぬやうな山の生活に於いては、一枚の葉書を讀むことに對しても、書くことに對してもとても都會の人たちが想像もしえないほどの感謝なり、よろこびなりが潜んでゐる。わづか一合か二合の振舞酒に招かれるといふことに對してもいひやうもない感謝が湧く。

一つ一つの生活表現が、生活の諸相が、山の人々の心には丹念に受け容れられ、咀嚼せられてゐる。

人間の生活を丁寧に、丹念に噛みしめてゆくことのできる生活は羨ましいと思ふ。

×

今日あたりは山の花は滿開であらうと思つてゐたのに、生憎の雨が朝からぽつり〳〵と降つて來た。

午後からは嵐を誘うて大粒の雨が地を叩きつけた。刻々と河の水量は增して行つた。河原の石が隱れ、崖がくづれ、

水は濁つて、物凄いほどに石を打つ音が聞える。村の人々は橋が危いといふ。
私たちが住んでゐるところは別莊風の家がたゞ八九軒あるばかりで、そこには一軒の店もない。卵一つ買ふにも橋をわたつて向う岸まで行かなければならぬ。もし今夜にも橋が落ちるとすれば、まつたく村とは交通が跡絶えてしまはなければならぬ。食糧にも困らなければならぬ。
雨も風も刻々に勢を増すばかりである。つひ十間ばかり先きの家も見えなくなるほど激しい雨の脚か、花を叩きつけ、土を蹴上げては、草山を斜に奔馬のやうに駈けてゆく。
私は外套を引つかけて風呂敷を抱へて橋をわたつて湯の町の方へ出かけて行つた。町には人つ子一人見えない。犬の影すら見えない。宿屋といふ宿屋は深く戸をとざしてしまつて、風呂場を覗いて見ても誰もゐない。
私は店の戸を叩いて卵だの、罐詰だのを買つて歸る。幾度か傘を風にとられさうである。山を叩きつけて、さらに次の山へと走つて行く雨嵐の脚を見てゐると恐ろしいやうである。天城も、裾の山も雨につゝまれてしまつて眞つ暗である。今にも山が崩れ、山つなみがこの湯の町を一と流しに押し流してしまふのではあるまいかなどと考へる。
もし橋が落ちて、食ふ物もなくなつたらどうしよう。私はどしや降りの雨の中を歩みながら、こんなことを考へた。不圖去年の大地震の折のあの不安な日夜のことが思ひ出された。同時に今まで疲れてゐたやうな私の心が急に引き緊つて來るのであつた。
あの數日夜だけは私たちの心はほんたうに生といふことに對して眞劍に燃えてゐた。
はげしい搖りかへしの最中に色々な流言が傳へられた。二千の囚人が監獄を破つて出た。三百の××人が次の部落まで襲つて來た。一方に於いては恐怖に囚へられながらも、一方に於いては自分の力に對して、或ひは弱い女や子供たちを保護するといふ勇氣に對して或る涙ぐましい感激を持つことができた。

あの恐ろしい震災の日夜に感じた悲壯な感激に似た或る心持ちが、橋を渡つて行く私の心に再び燃えた。橋を渡りつくした袂のところで、私は不圖或る一人の男が崖の下の水溜りに吐き口を拵へて、道を壞すまいとしてゐるのを見た。私は何だか見覺えのある男だと思つて立ち止まつてその男を眺めてゐた。

こなひだ駐在所で、「一生監獄から出られないやうにしてやるぞ」と叱られてゐた男であつた。

日が暮るゝにつれて、嵐はます〳〵烈しくなつた。いまにも屋根は叩き潰されはしまいかと思はれた。嵐はうなりながら、雨を叩きつけて行つた。崖を落ちる石の音が雷のやうに響いた。

その凄まじい嵐の中に、私は悲しさうな犬の聲を聽いた。私は戸を明けて見た。

黑が玄關に飛び込んで來た。そしていかにも嵐を恐るゝかのやうにくん〳〵と鼻の先きで泣くやうな聲をした。かれはわな〳〵と顫へてゐた。そして吼ゆるやうな嵐が家を叩きつけるたびにくん〳〵と訴へるやうな聲を絞つた。

夜の二時ごろであつた。どうしても眠れないので私は玄關に出て見た。黑は玄關の硝子戸の中にはいつて、板張りの上に丸くなつて寢てゐた。

「黑ッ！」と私は聲をかけた。黑は私の顏をぢつと見てゐた。が、急に左の前脚を突き出して、私の膝に投げかけるやうなことをした。恰度仔犬がふざけるやうな可憐な態で。あまりその態が可笑しかつたので、私はつひ笑ひ出してしまつた。

黑は今度は右の前脚をによきんとまた私の膝の上に投げかけた。

戸外では崖の石の落ちる音が絕えず雷のやうに響いてゐた。

恐ろしい嵐のうなり聲の下から、河鹿の聲がかすかに聞えてゐた。

荒都の中

S兄、H兄。

昨日は不在中に立退き先をお訪ね下されまことに失禮いたしました。

實は一日の大地震以來行方不明になつてゐます家内の母が、負傷をして何處かの病院に收容されてゐるらしいといふ消息を、昨朝或る人から傳へて來ましたので、急に勇氣を奮つて神田佐久間町から上野、飛鳥山方面をたづねまはりまして、夜になつてまたいつものやうに絶望と疲勞を抱いて歸つて來ました。

S兄、H兄。

原稿を送れとの仰せでございましたが、とても、左樣な次第でこの際何も書く元氣はありません。

一日以來十餘日、私たちはたゞ一人の老母を探すために、全身の精力といふ精力を盡してゐたのですが、のみならず、突然、家を追はれた爲に母を探す一方では、雨露をしのぐべき家を探さねばならず、一粒の米をも持たずに家を出た私たち夫婦は、その當座は一食一食ごとに街をさ迷うて、路傍に十錢のうどん一杯を分ち食はなければならぬ有樣でした。

朝、假の家を出て、終日本所、向島あたりをさ迷ひ、日が暮るれば疲れ切つた妻を叱りつゝ一つの風呂敷包みをかかへて(その中には買ひ集めた梨子だの野菜だの五六箇の鷄卵などを入れてあります)あたかも放浪者のやうに戒嚴令の布かれた町をさ迷ふのでした。

「何處に行つて泊らう？　母はどこに行つて死んだのだらう？」私たち夫婦の頭にはたゞこの暗い二つの思ひのみが

こびりついてゐるのでした。

妻は往來に立ち止つては時々すゝり上げて泣くのでした。私はいつもたゞ一枚のシャツと、ズボンだけで燒土と化した荒都の中を、さがしもとめて歩いてゐます。妻はいつもたゞ一枚の浴衣だけでのろい足を引き摺りながら私に叱られつゝ歩いてゐます。

もう今日で十一日になるんです。母は恐らく死んだでありませう。しかし今日も探しに出ます。妻は被服廠の跡をたづねたいと言つてゐます。しかしどうしてあの三萬幾千といふ凄慘な死骸の山を妻に見せられませう。

私はいやといふほど人間のあさましい心を見せつけられました。殊に富める人々の醜い心を。

同時に貧しい人々の美しい心を見ました。一つの握飯を二つに分け、三つに分けてゐる貧しい人々を見ました。罹災者たちは自分等の苦しみを忘れて人のためにつくしてゐます。飢ゑ疲れて燒地の上に寢てゐた男はがばと起き上つて傍にゐた人の荷車の火を消してゐます。

S兄、H兄。

今日も今から妻をつれて母をたづねに龜戸の方へ出かけますので、不在、失禮をします。死んでゐるにちがひありませんが、まだあきらめられませんので。

そのやうなわけですから今度は原稿のことは御免し下さい。

いづれ家を探して、決定次第お知らせいたします。

私は昨夜はじめて母の夢を見ました。母が一人で暗い町を歩いてゐるのでした。

庭の隅の小ひさな花

ほとゝぎすが鳴いた
男は女を起した
靜かな夜が雨戸の外に、暗い部屋の内に。
女のかすかな眠りの聲が。
今地上には二つの魂が相擁しつゝ眠つてゐる。
男はふたゝび眼さめた。
ほとゝぎすが鳴いた。
男は女の柔かな息づかひに聽きとれた。
かれは考へた。
「二十年の後、十年の後、或ひは明日、妻はその夫から、夫はその妻から永遠に別れなければならぬかも知れない。」
「二十年の後、或ひは十年の後、妻も、夫もこの地上から永遠に失はれなければならぬかも知れぬ。」
女はなほ眠つてゐた。
「二十年の後三十年の後、たしかに二人とも永遠に別れなければならぬのだ。」
男はどうしても眠れなくなつてしまつた。

×

輜重輸卒に召集されたために女と別るゝのがつらくて、女を殺して、自殺をした思慮を缺いた男がある。
こんな新聞の記事を讀んだら、敎育ある男や、都會の賢い女たちは恐らく笑ふだらうが！

×

Aよ、君は僕があの時以來君を憎んでゐると思ふか。
時として僕はどこかで君とたゞ二人だけで打ち解けて語つて見たいと思ふことがある。しかし君が、僕をたづねて來ない以上、恐らく僕は君を一生たづねてゆくことはあるまいと思ふ。
僕は少しも君を憎んではをらぬ。
君ほど美しい心の人間がこの世界にさうざらにあらうとは思はぬ。
しかし僕はこのまゝ或ひは一生君と打ち解けて逢ふ機會はないかも知れない。
こなひだも實は君が川向うを歩いてゐたのを見つけたんだよ。僕はよつぽど聲をかけようかと思つた。しかし僕は自分の弱い心を叱つてそのまゝ傍を向いて行き過ぎてしまつた。
僕は一町ばかりも歩いてから振りかへつて見たが、もうその時は君はゐなかつた。
僕の心のうちではまつたくすまないと思つた。そして頭を下げた。
君のやうな美しい人間と、憎み合つたまゝ死ぬのは寂しい氣もする。けれど、それがまたばかに英雄的なことであるやうな氣もする。
僕を憎んでくれ。僕も憎まう。

×

いゝ加減なおつきあひくらゐいやなものはない。

ほんたうにお互が心から自分を投げ出すほどの接觸でないならば、人は孤獨を守つてゐた方がいゝ。
人と人との接觸のうちで、人を利用せんための接觸ほど不愉快なものはない。
人間の心の泉は一つである。
或る人はその心に萬人の影を映すであらう。
或る人はその心にわづかに一人か二人の影をのみ映すであらう。
孤獨を守る者の心は後者に屬する。
いゝ加減なおつきあひの萬人を得んよりは、たゞ一人の心友を見出し得んことを冀ふ。

×

所謂天才は多い。才氣ある人は多い。
愚なるが如き君子の出現は今の世に望むべからずとしても、せめて愚なるが如き人間がもすこし多く世にあらはれてもいゝと思ふ。あらゆる社會の方面に。
天才教育といふことも結構であらう。しかし果して人間が人間を作り得るか、大きな疑問である。人間によつて作らるゝ人間がどんなものであるかといふことは、都會の子供たちを見る時一番よく考へさせられる。

×

かつてあれほど信じ合つたものが、幾年かの後にはこれほどまで憎み合はなければならぬのか、憤らなければならぬのかといふことを考へるたんびに、「いつたい私たちは誰を信じればいゝのだ」と喚きたくなつて來る。
一生懸命に人のためを思ふのが馬鹿だといふ人もある。けれどもいゝ加減ではどうしてもすまされない場合がある。
もしいゝ加減ですまされなければならぬのが人生の常軌であるとするならば、人生くらゐくだらない世界はないであ

らう。

自分のすべてを投げ出してかゝつた結果が、いゝ馬鹿を見たといふことになれば、まつたく人生に對して失望したくなることもある。

人間はだん／＼年をとるにつれてごまかされなくなるが、それは一面から見ればかれがそれだけ人生に對して最初から眞劍になることができなくなつたといふ證據である。かつてかれが抱いてゐた人生の光りが薄らいで來たといふ悲しむべき證據である。

一生、ごまかされても、裏切られても人生に對して何等かの光りを持つことのできる人は仕合せである。キリストだの、釋迦だのといふえらい人々は恐らくそんな種類の人たちであつたのであらう。しかし私たちのやうな凡夫にはなか／＼それができない。一日一日と自分の心の殼が堅くなつてゆくのが意識せられる。外部から來る意識の一つ一つを素直に受け容れることがすくなくなつて、先づ疑ひ、先づ批判してかゝるやうになつてしまつた。悲しいことであると思ふが、元々の素直さに立ち還りさうにもない。

×

敵を持つことのできない人間はお人善しではあるかも知れない。けれど、味方として頼もしい人ではない。不正直な人間、卑劣な人間、嘘をつく人間、殘忍な人間に對しては私たちはどこまでも敵でなければならぬ。そのやうな俗人に對してはどこまでも敵でありえなければならぬ。

生ぬるい愛といふことよりも、鐵のやうな憎み、火のやうな闘ひといふことが、ずつと英雄的な場合がある。

眞劍になつて人を憎み、人と闘ふことの如何に苦しいかといふことが、そしてそこに生きてゆくことのうちにいたましい唯一つの眞實の道があるといふことが、このごろ、かすかながらも意識されて來たやうに思ふ。

ほとんど忘れてゐたに、いつの間にか庭の隅から月見草が咲き出した。

×

夏が來ても、夏が來ても、かれ等は同じ庭の隅から、何の不平もなく同じ花を開き、同じ柔かな色を見せてくれる。

朝早くまだ庭には露がしつとりと眠つてゐるころ、不平もなく、憎みもなく咲いてゐる花を見るとおのづから頭が下るやうな氣がする。

かれ等には不安はないのか。不平はないのか。人間のみが夜も晝も妄執の炎に心を燒かなければならぬのか。

朝の微風が、朝の露が、憎みに燃えた私の心を大地そのもの丶、冷たさと靜寂さとにもどしてくれる時、私は憎み、憤りつ丶生きてゆかねばならぬ自分の生活をいたましく思ふ。

庭の隅の小ひさな花は今朝も不平なく憤りなく咲いてゐる。

落葉を聽け

この數年來はつきりとした形は捕へられなかつたが、いまにも何か知ら大きな社會的變革が來るであらうといふ不安はたいていの人々の胸に兆してゐたことであらうと思ふ。

はたして恐ろしい社會的變動が突發した。ほとんど豫期しなかつた形で、しかも豫想さへゆるさないほどの悲慘さ、殘忍さをもつて。

私たちはあの華やかであつた都市の中にあのいたましくも燒けたゞれたる幾萬の死屍を見、炎に追はれたる幾十萬の人々を見ようなどと何うして想像することが出來よう。

九月二日の午後であつた。私は駿河臺の燒跡に立つて、なほ燃えつゝある東京を見てゐた。くづれた崖に沿うて二人の女が二三枚の燒けたトタン板を運んで小屋を作つてゐた。一人は老人であつた。老人は口汚く若い女を叱りつけてゐた。老人はすでに發狂してゐたのであつた。

日は暮れかゝつた。お茶の水橋は燃えつゝあつた。私は振りかへりながら滅びゆく東京を見た。芝から京橋、日本橋、神田はすでに燃えてしまつてゐた。聖堂の下や、柳原附近ではまだ盛に餘燼の間から時々爆音と共に黑い煙が噴き上げられてゐた。深川や本所は煙にさへぎられて見えなかつた。藏前や下谷方面はさかんに燃えつゝあつた。

ボール紙で足を包んだ上をぎりぐと藁繩で結んだ女たちが、男に扶けられつゝこの世の人とも思へぬほどの顏色をして、喘ぎ喘ぎ本郷の方へ燒跡の道をたどつて行つた。十五六歲の女が私の直ぐ前に倒れたかと思ふと、もうすでに死んでしまつてゐた。荷車の上には荷と一緒に二人の子供が顫へながら寢てゐた。東京の山の手の燒けのこつた道

といふ道へは踵を接して、火に追はれ、死に脅かされた人々が潮のやうな群をなしてまるで痴呆のやうな眼を瞠いたまゝ機械的に歩いてゐるのであつた。

ゆりかへしは頻繁に襲つて來て私たちの心臓を衝くのであつた。親を失つた者、子を失つた者、妻を失つた者、殊に甚だしいのは三十幾人の家族を失つた人すらあつた。そのやうな人々が、あのやうな場合に人間の心に頭を擡げて來るあきらめといふ最も悲しむべき一念にせめてもの心のやりどころを見出して、焦土の中に路をたどつてゆくのであつた。

馬も死んでゐた。人も死んでゐた。人々は醜く焦げ黒ずんだ人間の死屍を橋の袂にも、川の中にも見飽くほど見なければならなかつた。たいていは幾百といふ死體がトタン板一つかけられないで一緒にかためられたまゝ、あすこにもこゝにも虚空を掴んで倒れてゐた。

空には恐ろしい炎が私たちの視野を埋め、地には死屍の間を縫うて、死におびえた大群衆が恐怖に追はれつゝ歩いてゐた。煉獄とはこんなところであらうか。恐らくこれは地獄以上のあさましさであらうなどと考へながら私は立つてゐた。

狂人と狂人でない人との差別はほとんどつかなかつた。たれもが比較的落着いてゐた。と、同時にたれもがほとんど痴呆のやうな眼を瞠いたまゝ歩いてゐた。何かしら人間力以上の或る偉大な力の前に、すべての人間が一つとなつて引き摺られ、鞭打たれつゝあるのだといふやうな考へが、私たちの胸に抱かれてゐた。

人生の同勞者といふ考へがあの時ほど強く私たちの胸を打つたことはないであらう。そこには道徳はなかつた。かうすることが善いことだといふやうな概念から出發した行爲はなかつた。そこには道徳以上のものが生きてゐた。人人は三日二夜の絶食と恐怖と戰慄とに疲れ果てゝ、すでに歩くことすら容易ではなかつた。それでも人々は同勞者の

ために人間のなし能ふかぎりの力を盡し、犧牲をはらつてゐた。たゞ人々は生きてさへゐればよかつたのであつた。お互ひが生きてゆくことさへできれば、それだけでたくさんなのであつた。

そこには幾多の醜い、あさましい獸的な心のあらはれも生きてゐたであらう。私たちはたしかに多くの醜い實例を知つてゐる。けれどもまたそこには、それ以上の美しい人間の心のあらはれも生きてゐた。

一人の男は、その子の全身を（頭だけを出して）土に埋め、その上に妻を這はせ、夜を徹して土を妻の上にかけて燒死を免れさした。男の爪はそのために落ちてしまつてゐた。

私の知人の家の或る忠實な乳母は、二人の少年を抱いて火の中に倒れつゝもなほ少年等を救うて被服廠から兩國まで走つた。かの女は全身を燒かれて間もなく死んだが、二人の少年は微傷一つ受けないで助かつた。

人間が本來、利己的な一面を持つてゐることも眞實である。同時に人間は自己を殺して人を救ふ美しい心をも持つてゐる。たとへ千人萬人の人が醜い心をあらはにしたとしても、一人或ひは二人、或ひは三人の人がこのやうに美しい心をあらはしてくれたゞけでも、私たちは人間であることのほこりを感ずる。

このたびの大震災で最も端的に私たちの胸を打つたものは、人間の生死に對する觀念であるべき筈であるが、何故かは知らぬがそれよりも先きに人間同志、人間同勞といふ觀念の方が強く私たちの心を動かしてゐるやうな氣がする。見も知らぬ人々が被服廠の跡に行つて香華をさゝげて涙を流してゐる心の底にも、すでに人間同勞といふ感じが動いてゐる。さらに生き殘つた人と人との間に交流してゐるところの仲間或ひは苦しみを共にする人といふ感じが、今日ほど強く實感として私たちの心を刺戟することは、かつてなかつたであらう。

今まで私たちひとり、ひとりの心の殼のなかに生きてゐた自分といふものが、自分ひとりの世界にのみ住んでゐようとするためには、何等かの良心の叱責を感じないではをれなくなつたといふことは事實である。

極端に言へば、人間が自分ひとりで生き、自分ひとりの世界に住むといふことは正しいことではないといふ感じが、私たちの心に今日ほど強く實感的に動いて來たことはないであらう。

私たちはやゝもすれば、自分は自分ひとりで生きてゐると考へることがある。よし一歩をすゝめて私たちが、かつて個人は全社會のアトモスフイヤなしには作られないといふ概念は持ち得たとしても、或ひは多少のさう言つた風な感じは持つてゐたとしても、今日ほど直接に明かに、顫動的に、個人は人類なしでは存在し得ないといふ實感が動いたことはかつてなかつた。

自分ひとりでいゝのではない。隣りの人を考へのうちに容れないでは生きて行かれないのだ。ほんたうの生活はないのだ。たとへ自分ひとりで生きて行かうとしても　私たちの周圍には私たちを惹きつけないでは置かぬところの或る叫び聲がある。呻きがある。人間全體の苦しみがある。壓しつぶされた屋根の下から私たちの救ひを求める人間の呻き聲がある。妻を失つた男の號泣がある。歔欷がある。

人間の心と心が今日ほど強く有機的に結び付いて何等かの形で人間全體のために新しい世界を創造しようとした時代がかつて存在し得たであらうか？

無論そこには、個人々々の意識がいつもより強く、はつきりと動いてゐることも事實である。同時に個人々々の忍耐、獻身、努力といふものが全人間と有機的に結びついてゐるのだといふ意識、希望、憧憬、信念があやふやのものでなく、實感として燃えつゝあることも亦事實である。

×

私はロシヤ人の長い間の民族的苦惱について、今日までよりは一層はつきりと想像することができるやうになつた。恐らくロシヤ人は民族として十八世紀に於いても、私たちの想像もゆるさないほどの幾多の人間的な苦惱を一樣に經

驗したことであらう。私たちが自然の暴力によつて嘗めさせられた苦惱以上の苦惱をば過去幾百年の間に嘗めつゞけて來たのであらう。殊にその被支配階級の人々、農奴の群に於いては父子相傳へて苦惱、忍辱の裡に悲しきあきらめの生活に生くるより他に途はなかつたのであらう。

斷頭臺に追はるゝ死刑囚の群、シベリヤに追はるゝ不運なる囚人の群、過去幾世紀のロシヤ民衆は絕えず城塞の牢獄と、シベリヤの荒野に脅かされつゝ生きて來たのであつた。脅かさるゝ人々の群から同勞同愛の人道的な思想が生まれて來たのはきはめて自然なことである。

トルストイに於いて、ドストイエフスキイに於いて、ツルゲーネフに於いてゴルキーに於いて私たちは、人間全體の意識の上に築きあげられた同勞者的な藝術を見出す。私の狹い讀書の範圍から覗かれた近代ロシヤの作家の作品に見出される最も明かな、最も太い線を描いてゐるものは同じ苦惱の下になやめる人々の心と心とを結びつける仲間の觀念である。

無限に廣いロシヤの草原を橫切る荷馬車の群は十日或ひは二十日と、草原に起き草原に寢ては自然と鬪ひ、掠奪者から自分等を防禦しなければならぬ。草原を旅するロシヤの民衆にとつて賴るべきはその隣人のみである。人間のみである。

またその傲岸、殘虐な支配者に對して、賴るべきは被支配者の仲間のみである。人間のみである。

ロシヤの自然、ロシヤの政治、ロシヤの地理の影響が主なるものであつたでもあらうが、ロシヤ人くらゐ永く共に苦しみ、共に虐げられ、共に步み來つた民族は他にないであらう。

たとへばゴルキイの「夜の宿」を見、或ひはチエホフの「國道で」を讀んで見て、私たちが第一に感ずることは、そこに出て來る人たちが二言目にはお互ひを罵つてゐる。冷笑してゐる。疑ひ合つてゐる。しかもかれ等はお互ひの不

運に對して、無關心でをれない。

そこに集まつてゐる人々はどんなに藻掻いても、あせつても一生救はれることのできないどん底に落ちこんでゐる。親から子、子から孫へと、かれ等は幸福の世界の光りから遠ざかるのみである。

「日は上り、日は落ちても

こゝぢや日の目も見えやせぬ」

「夜の宿」の門番のクリヴォイ・ヅオバや、帽子屋のブブノフばかりではない。そこにゐるすべての人々が日の光りをあこがれたまゝ、一生日の目を見ないで死ぬのである。首を縊つて死んだあの俳優でも世界のどこかには、かれの狂つた頭を癒すことのできる病院のあることを信じてゐた。世界のどこかにさへ行けば「新しい生活」がかれ等を待つてゐるにちがひないことを信じてゐた。

かれ等はまつ暗などん底の生活にゐても、明るい新生の世界を忘れ得なかつた。自暴自棄の生活に落魄してゐても更生の春を忘れ得なかつた。シベリヤの牢獄の鐘を聽きながらも、復活祭の歌を忘れ得なかつた。

かつて不運なるロシヤの數世紀間の民衆はみなあの首を縊つて死んだ俳優の絶望と憧憬とを抱いて同じやうに日の光りも見ないで死んだのであつた。どんなに沈んでも、落ちても一面に大まかな、子供らしい夢を描いてゐたのがかれ等であつた。かれ等はいたましいドン・キホーテであつた。

「國道で」を讀んでも私たちはそこに集まつたところの落ちぶれた地主や、老巡禮や、勞働者や、旅人などの間に醸されてゐる自暴自棄的な空氣、同時に人のいゝドン・キホーテ式のユーモラスなあたゝかさを見出すことができる。

何十年といふ長い月日の間、かつて自分を棄てゝ行つた女を忘れ得ないでゐる地主や、その不運な落ちぶれた地主のために同情を寄せないではをれぬ周圍の貧しい人々の間では、お互ひの罵り合ひお互ひの冷笑し合ふ言葉の底に苦

しめる仲間といふ意識が燃えてゐる。

最初はたゞコップ一杯の酒でも貸さなかつたいつこくな旅籠屋の主人や、盗人のやうに思はれてゐた旅人までが、捨てられた地主に對して心からの同情を寄せて行くといふ心持ちは仲間なればこそ生まれて來るのであろ。

×

九月の二日三日と、私は兩國橋の袂で幾百といふいたましい人間の屍を見たのを手はじめに、龜澤町から江東橋の電車道では一臺々々のボギー車に滿員のまゝ燒け死んでゐる人々を見た。さらに被服廠の跡で幾萬の死體を見なければならなかつた時、私は神の存在を疑はずにはをれなかつた。「何處に神がある？」私は焦土の上に立つたまゝから叫ばないではをれなかつた。

人々は犬の如く、猿の如く、醜く死んでゐた。蒸され、焦され、打ち碎かれて死んでゐた。幾萬坪の廣場は人間の醜い屍で掩はれてゐた。あの悲慘な光景を見て誰が泣かないでをられよう。誰が神に對してプロテストしないでをれよう。

「神は愛であるかも知れない。けれども神は同時に殘忍であり、憎みである。」私はかうも思つた。

賴るべきものは人間ばかりなのだ。よし、人間の力がどんなに弱いものであるとしても、仲間が集まり、一緒になつて働く時、それは神の力以上の力をあらはし、神の愛以上の愛を持つことができるのだ。私はかうも考へた。

「何のために生きてゐるのだ？」「生とは？」……「夜の宿」の巡禮ばかりではない。この問題は私たちの頭から一刹那も離れることはできない。

色々な科學、色々な哲學、色々な宗教によつて證明せられた人生がある。しかしそれはすべての人生を捉へたものではない。人間は永久に人生のすべてを捉へることはできない。人生は捉へるにはあまりに無邊際である。私たちは

何も言はないで人生の前に頭を下げるより他に途はない。

神についても私はやはり同じ考へ方を持つてゐる。神は愛かも知れない。神は憎みであるかも知れない。神は私たちにあまりに美しい人間の心を作つてくれた。同時に神は私たちの手からあまりに無雜作に愛する妻を奪ひ、愛する子を奪ひ、愛する友人を奪ふ。

私は唯物論者の立場からして、全然神を否定することもできない。神が何であるかは知らない。時としては神の存在をすら否定しようとすることもある。

けれどもたゞ一莖の草花にすら神の聲を聽くことができるのではないか。一片の落葉にすら神のさゝやきを聽くことができるではないか。

「地獄とは人を愛し得ざるの苦しみである」といふ言葉は、さらに押しひろげて、「地獄とは神によりて作られたる何物をも愛し得ざる苦しみ」と解することもできるであらう。

有緣といふ言葉は非常に面白い言葉であるやうに思ふ。

私はつひ地震ころまで寄寓してゐた郊外の庭に、この秋ばかりはと思つてコスモスだの、ダリヤだの、菊だのを植ゑて暇さへあれば妻と二人で面倒を見てゐた。地震後急に郊外の家を出なければならなくなつたので何も彼もそのまゝにして出て來たのであつたが、家を出た翌日私は雨の中を郊外の故の庭に行つて見た。そこには新しい主が住んでゐたが、籬に這はせて置いた夕顏がはじめて花を持つてゐた。しかもそれが心なくも無殘に折られて地の上に落されてゐた。このやうな場合に、花を愛したことのある人々は誰でも經驗するであらうが實際私は泣きたくなつた。

人と人との間に仲間の感激が湧いて來るのは言ふまでもないことであるが、草に對しても、木に對しても、時としては空に對しても、雨に對しても私たちは仲間の感激を持ち得る筈である。

詩人はよく歌ふ。かすかな夜明け方の物の香、ほの暗き野の道、ゆらめく燭、黄昏の街、白日の都市、落葉、新緑、微風、暴風、工場、鐵を斷つ音、死、生、愛、憎、歡喜、悲哀、苦惱、草の葉、小鳥の聲すべてが詩人にとりては有緣の仲間であるからだ。

キリストはよく、子供や、雀や、小羊や、駱駝や、野の百合や麥のたとへを引いて說教をした。ルナンが說いてゐるやうに、キリストの生活が最も美しい自然にめぐまれてゐた結果として、ひとりでに自然物を譬喩として持つて來たのでもあらうが、キリスト自身がまた實際に子供を愛し、駱駝や、雀や、雜草にまでも有緣感を持つことができたからであらう。

キリストが最後にエルサレムの城門をくゞつた時、人々は相競うてかれのために橄欖や棕櫚の葉を道に布いたといふのは面白いことである。名譽によつて迎へられず、黃金によつて迎へられず、貧しき人々のホザナと呼ぶ聲と、橄欖の葉を投ぐることによつて迎へられたことは、何といふ美しい劇的な、童話的な事實であらう。

たゞコスモスの一片を愛して見るがいゝ。そこにはソニヤの瞳の美しさもある。そこにはバルバラの不運なる生涯もある。そこには神の愛もある。そこには神の囁きもある。そこには神自身の姿もある。

落葉を踏んで森を歩いて見るがいゝ。

そこにはトルストイの深い惱みに刻まれた額がある。あの獅子のやうな眼がある。

そこには「生けるものみな死す！」といふ神の儼かな聲がある。死！　死！　へと落葉は落ちる。靜かな死。儼かしい死。すべてのものを愛し、生き、惱み、やがて死なねばならぬ靜かなるあきらめが、靜かにして嚴かなる事實が、私たちの前に展げられてゐる。

森を歩いて見るがいゝ。落葉を踏んで私たちは泣くべきか、考ふべきか、叫ぶべきか、祈るべきかを知らない。た

だそこに立ちどまつて落葉を見るがいゝ。

落葉と私。そこにも有緣の絆がある。

私たちは禮拜堂に立つて、祈る言葉を知らない。私たちはたゞ神の前にぬかづけばいゝのだ。最も美しい心の嬰兒は言葉を持たぬ。

私たちは森を歩む時、言葉を忘れなければならぬ。有緣の實在の世界は言葉を絶したる境にのみ存在する。

私たちは森に入つてたゞ頭を垂るればいゝのだ。

×

愛とは有緣の我が、有緣のかれを直覺し得た刹那の歡喜そのものではないか。

愛は歡喜である。愛は歡喜の歔欷である。愛はすべての我を、有緣のかれに捧ぐることによつて全くせらるゝ。

ニキタも、ラスコルニコフもドミトリイもソニヤも、私たちにとつて有緣のかれではないか。自暴自棄的な冷笑と狐疑とに充ちた「國道」傍の旅籠屋の陰鬱な空氣も、一人の不運な、意氣地なしの地主に對する仲間の感激が同宿の人々の胸に燃えた刹那に、明るい、温かいものと變つてしまつた。

有緣の仲間を見出すことの出來ない間は、私たちの世界は冷笑と自卑と絶望とに充たされた牢獄に過ぎない。

私は父を與へられたこと、母を與へられたこと、妻を與へられたこと、兄弟を與へられたこと、友を與へられたことをありがたく思ふ。私はその人々の間に尊い有緣をめぐまれたからである。そこから人生についての斷案を實感することをゆるされたからである。

無論、人間と人間とが相知り、相接するといふことの半面には、私たちが夢想だにしなかつた醜いもの、苦しいもの、切ないものが潜んでゐる。

かつて相愛したるもの、かつて相信じたるものもやがて相憎み、相疑はなければならなくなるといふことは、ほんたうに苦しいことである。しかも憎んだまゝに、呪つたまゝにしてお互が死んでしまはなければならぬといふことは耐らなく苦しいことである。

どんなに努力して見ても、一度傷つけられ、疑ひによつて壞られた心は容易に繕ふことはできない。自分自身の弱い心を叱つて見てもどうすることもできない。

弱い心の人にとつては人生そのものが暗くされて來る。けれども私は思ふ。かつてかれを信じ、かつてかれのためにすべてをさゝげたといふことだけで、私たちは自分自身を慰め得られる筈だ。

さらに、今日なほかれのために、自分自身の足らざるを責め、力弱きを叱ることによつて救はるべき筈だ。かつて私たちがかれのためにさゝげた眞愛が正直でさへあつたなら、純なものでさへあつたなら、もうたゞそれだけでたくさんではないか。偶然の結果として負はなければならなくなつた苦痛の裡にすら救はあるべき筈だ。

信も愛も、人生そのものすら刹那的ではないか。人を信ずることのために生まれて來る悲しい明日の結果を恐れたところで、それが何のたしにならう。

私たちは僞らぬ心、僞らぬ自分をさゝげてさへゆけばいゝのだ。信も、愛も、生くることも、死ぬることすらが眞劍なのだ。捨て身なのだ。人生には遊戯はない。人生はいつも生一本なのだ。

×

信ずるの心を失ふことは人生に對する光りを失ふことである。人生そのものを失ふことである。何物をも信じない

といふことは決してその人の名譽でもなく、その人を大きくするものでもない。
何物をも信じ得ないといふ人々のうちには性格的に氣の毒な人もある。けれども信じ得ないことが決してその人を尊敬する理由にはなり得ない。
よし一歩を讓つて何物をも信じ得ないとしても、その人が立派な人間でさへあるならばその人は必ず私たちの仲間としての涙を持ち、愛を持ち、あたゝかさを持つてゐる筈だ。かれは自分の涙を、自分の愛を疑ふことはできない。「人間は生まれ、生き、戀し、苦しみやがて死んでゆくものだ」と考へたあの虛無的なチエホフの作品を讀んだ人々は必ずやこのことを氣付くにちがひない。

×

話は元にもどる。
私たちは今度の震災のために或ひは一時的であるかも知れないが、ともかく人間全體が死に脅かされつゝ一緒に生き、一緒に苦み、一緒に助け合ふといふことの經驗をば、實感として持つことができたのであつた。
それは最も突きつめた實感であつた。一歩間違へば生命を捨てなければならぬといふクライマックスに於いて經驗し得たところの尊い體驗であつた。
九月一日、二日、三日、四日ころの私たちはほとんど生命の保證さへ與へられてゐなかつた。往來を步いてゐても、何時、私たちは誤り殺されたかも知れない。日が暮るゝにつれて恐ろしい不安が私たちの心を脅かすのであつた。嵐のやうな叫び聲が町から町へ、村から村へと夜を徹して響いた。月光の下に銃聲が聞えた。
あのやうな數日の間に私たちの隣人に對する心持ちはすつかり淨化されてゐた。溫かにされてゐた。お互ひの家と家との間に橫たへられてゐた塀も垣根も取り除かれて、みんなが一つの家の人となつて數日を暮らすことができた。

所有に對する欲望も非常に純化せられてゐた。必要以上の物を所有することの愚を知つた。必要以上の物を食ふことのわづらはしさを知つた。キリストの所謂「今日は今日にて足れり」の生活の心易さを知つた。

生命の不安があればあるほど、一日生きることのいかに驚きかを知ることができた。

あの數日間の突きつめた心持ちこそ、私たちが一生を通じて育て上げてゆかねばならぬ純一無碍の信念ではなかつたのか。

そこには富める者もなく、貧しき人もなく、みんなが同じ時、同じ町に苦しみつゝある仲間だといふ感じのうちに生きてゐたのであつた。

そこには虛榮も虛飾もなかつた。私たちはシャツ一枚と、ズボン一着と、水筒一つだけで何處にもゆくことができた。そこはイヷンの王國であつた。住むに心易い王國であつた。

×

地震からわづか二ヶ月經つたばかりであるが、私たちの周圍はあの日以前とあまりちがはなくなつた。或る者はあの日以前よりももつと露骨に獸的なあさましい心をあらはにしてゐる。

地震後五六日すぎてからであつた。私は三四人の人々が、地震後如何にして金を作るべきかといふ相談をしてゐるのを聽いた。商人としてそれは極めて自然のことであるかも知れないが、私は不愉快でならなかつた。みんながいかにして不運なる仲間を救ふべきかといふことを考へてゐる間に、かれ等はいかにして金を作るべきかといふ問題に夢中になつてゐるのであつた。

私は商人といふものがつくづくいやになつた。イヷンの王國には軍人もなければ、商人もなかつた。そこに住んでゐる人々は無智の人であり、勞働する人だけであつた。

大地震と天啓とを結びつけて考へるやうなやり方は今日の私たちには受け容れられない。けれども私たちがこの大災に面して幾多の尊い體驗なり、信念なりを見出し得たことは動かすことのできぬ事實である。その尊い幾多の體驗や信念を失つてしまふといふことは、私たちの一生にとりて償ひがたき損失である。

私たちはまだあの恐ろしい日を忘れてはならない。私たちは靜かにあの恐ろしかつた日夜のことを考へて見なければならぬ。今は一時を糊塗して自らを忘るべき時ではない。今は最も哲學的に人生を究めなければならぬ時である。今はわづかな物慾に心眼を暗くする時ではない。今は靜かに自己の內界に沈潛して悠久を思ふべき時である。

あの恐ろしかつた日の影を、私たち自身の心に深く刻みつけねばならぬ。あの恐ろしかつた日の影がもし上滑りに私たちの心の上を滑つて行つたとしたら、私たちは恐らく永久に救はれないであらう。

怠惰なのんきな私たちの心はともすればあの恐ろしかつた日をすら忘れようとしてゐる。私たちは自分の心を責めなければならぬ。自分の心を眞諦の底に沈ませなければならぬ。

生きてゐるから苦しまなければならぬ。苦しめばこそ深くされる。生きるといふことは自分の心をさらに責めることだ。さらに嚴肅にすることだ。

西行の心も、芭蕉の心も今の私たちにはわからなければならぬ筈である。

×

「砧うつてわれにきかせよ坊が妻」

「秋深きとなりは何をする人ぞ」

二十代に讀んだ折のこの句の味と、三十代に讀んだ折のこの句の味の間には、まるでちがつた深さなり、しみ〴〵さといふものが附いて來た。四十となり、五十となつたなら、またどんなにかその味や深さがちがつて來ることであ

らう。

芭蕉の婆の深さほど、芭蕉その人の生活なり、人格なりの底を剔り出してゐるものはない。短い一句のうしろに芭蕉その人の寂しい瞳がまたゝいてゐる。芭蕉その人の恬淡さ、親切さが動いてゐる。

「子供らのなすところを見よ」と敎へた芭蕉の句そのものが子供の句ではないか。秋の山に泊つて月を眺めながら、坊が妻に砧を打てとねだる心は子供の心ではないか。

時雨日の病床に見もせぬ隣り人を不圖思ひ出づるまゝにうたつた心の靜寂さ、自然さ、子供なればこそと思はれる。東海道の旅一つしたことのない人に俳諧はわからぬと言つた芭蕉の言葉は、何も彼も捨てた人でなければといふ意味ではないか。

旅に出た時のみ私たちは何物をも所有せぬ境涯に住むことができる。家もなければ、或る程度以上の貯へもない。知る人もない。ほんたうの孤獨者である。心細いことである。

けれどもその心細い境涯、頼りない境涯ほど私たちに自由を與へ、澄める心を與へる世界はない。

そのやうな折に、自分ひとりで靜かに、「奥の細道」を讀んで見るがいゝ。キリストの山上の垂訓を讀んで見るがいい。何物をも持たぬものゝ寂しさと共に尊さが感じられるであらう。

子供らにとつては富が何であらう。土地が何であらう。人間の手によつて作られたものが何であらう。

子供らは夕燒けの空を持つ。子供らは藪の雀を持つ。風を持つ。雪も、雨も、旅人の姿も、野火も、山も、川も、雲も、日も、月もことごとく子供らのものである。

いつから人々は夕燒けの空を忘れ、雀を失ふやうになるのか。何故に人々は子供の持つ世界を持つことができなくなるのか？

×

生きよ。靜かに、しかし强く、苦しめ。一つ一つの涙を嚙みつゝ生きよ。
私は自分の心にかう叫ぶ。ともすれば生をすら避けんとする弱い心を叱して。
生きることはうれしいといふことは眞實である。しかし生きることは苦しいといふことはさらに眞實である。
眞面目に人生を考ふれば考ふるほど人は幾度か自殺についてすら胸をなやまさなければならぬであらう。
眞率に人生を生きようとする人にとつては、生きるといふことは大きな冒險である。いつも命がけである。命を投げ出して生きる人にのみ人生そのものゝ深さも、味も實感せらるゝであらう。
自分自身の安全を保證しつゝ生きて行くやうな小悧巧な生活には人生はない筈だ。
イプセンの「ブランド」は眞理を索めるためには雪山の中に子を失ひ、妻を亡ひ、すべてのものを失つてなほ雪の山深くはいつてゆかなければならなかつた。
命を投げ棄てゝ生きて行くところに、ほんたうな生き方があるのではないか。命以外のものを投げ捨てることにすら躊躇して何うしてほんたうな生き方が得られよう。
死の後には恐らく苦しみはないであらう。苦しみは生のみに與へられた神のたまものである。
一莖の草花でも見落してはならぬと同樣に私の心をして、たとへ一滴の涙といへども見失はせてはならぬ。

×

人がやがて人から別れなければならぬことは苦しいことである。
人がやがて人を憎まなければならぬことは悲しいことである。
けれども、もし私たちの世界にお互を尊敬し、お互の幸福を祈る友といふものがなかつたとしたら、どんなにか寂

しいことであらう。

宇宙は無邊大である。けれども私たち自身の世界といふものが、果してどれほどのひろがりを持つてゐるであらうか。

恐らく人は時としてあまりに寂寞な孤獨の影を踏みて生きつゝあることに氣付くであらう。けれども友を持つことによつて私たちは無邊際の宇宙に一つの星を見出し、二つの星を見出し、三つの星を見出す。世界は永劫に闇につゝまれてゐるかも知れない。たゞ私たちが友を見出すことによつて、闇のなかに幾つかの星がまたゝき始める。

子を愛する者、妻を愛する者、友を尊敬する者の世界は幾つかの星を持つ。

釋迦の愛、キリストの愛、アシシのフランシスの愛は全宇宙の空に星を撒き散らした。

×

もしAが死んだとしたら

もしTが死んだとしたら

もしKが死んだとしたら

私の星は失はれる。

だが私は感謝する。

私は孤獨でなかつたことを。

かつてAとTとK……とを持ち得たことを。

私の人生はほんたうに貧しいものではあつた。

けれども私は貧しいながらも幾つかの星を持つことができた
私は星を持つことのできた私自身の人生を感謝せずにはをれぬ。

×

妻よ。
手を止めよ、靴下を編む。
夜が更けた。木の葉を吹く風を聽け。
昨夜別れたあの若い人たちは今夜も恐らく夜を徹して北見の山の話をくりかへしてゐることであらう。
石狩の高原のことを、網走の漁場のことを。馬橇のことを。黒い海のことを。
昨夜あの人たちと別盃を酌んだ時、あの人たちの眼は輝いてゐた。
あの人たちは北海道のことを話しては感激の聲を洩らした。
妻よ。
私たちも行かうではないか。北海道にでも、さらに樺太にでも。
恐らく、そこの雪の中では、もう恐ろしい人の憎みもないであらう。
私は白樺の林のために北海道に行かうと思ふのではない。石狩の高原を思ふがゆゑでもない。
私はたゞ北海道にさへゆけばいゝのだ。
あの若い人たちは未知の世界にあこがれて魂を躍らせつゝ雪の國へゆくのだ。
私はかつて私たちの生活を掩うて、そして現在なほ私たちの心を暗くしてゐる人間の憎みを恐るゝがゆゑに雪の國を索めようとしてゐるのだ。

妻よ。

あの若い人たちのために美しい靴下を編むにふさはしい夜ではないか。

ごらん、星が降るやうだ。

あの人たちはあの恐ろしい大震災の最中に、何も彼も捨てゝ三階の窓に懸けてあつた小鳥だけを救ひ出して逃げたんだよ。

そして驛までつれて行つて小鳥をはなしてやつたのだよ。

あの若い人たちの美しい心を思ふとありがたくなつて來る。あの三人の若い兄弟たちは東京を捨てゝ雪の國へ飛んで行つた。

妻よ、あの心の美しい人たちのことを夜つぴて語りながら

あの人たちの幸福を祈らうぢやないか。

妻よ。さあ、スコッチを從いて上げよう。

あの人たちの靴下を編みながら、あの人たちの話をしよう。

悲しき玩具

秋の彼岸過ぎに植ゑて置いたクロッカースが、二三日前霜除けの下の藁をはねのけて、可憐な頭を一二寸黒い土の上に擡げて來た。

妻の母が地震でひどい怪我をして、そのころは本郷の大學病院にはいつてゐたので病院に通ふ途中で買つて來た球根を植ゑつけて置いたのだつた。今日は妻の亡母の二七日にあたる。

私の母は數年前に死んだ。

私も妻も母といふものを世界に持たなくなつた。

雪と空をあてもなく飛んでゐる二羽の小鳥のやうな氣がしてならぬ。

親はその子がどんなに大きくなつても、いつまでも子供のやうに思つてゐるが、子もまた親がどんなに年をとつても、老衰をしても、生きてさへゐてくれゝば賴りどころがあるやうな氣がする。親に對する時だけは子供の心にかへることができる。

下の關の海峽を門司にわたつて九州の地を汽車で二三時間も走つてゐると、しみ〴〵と自分の故郷に歸つたといふ感じがするが、あの雪につゝまれた國境の山を見てゐる間に、不圖もうそこには母がゐないのだと思ひ出す刹那に、雪をいたゞいた山も、遠い麥の平野も私にとつては空洞のやうな寂しさを持つて來るのみである。

汽車の窓の方を向いたまゝ私は幾度涙を隱したであらう。

人は何のために生まれたか？　生きてゐるか？　それは永遠に解かれない謎である。けれども私はかつて母を持ち

得たことを自分の生に對して感謝せずにはをれない。
母は田舍育ちの無學な人であつた。たゞ私を盲目的に愛してくれた。溺愛してくれた。
私は無學な、そしてその子を溺愛することのできた母を持ち得たことを心からありがたく思ふ。
母は無晴と私に厚着をさせた。そのためか私はちよつとした寒さにも風邪をひくやうな子供として育て上げられた。
でも私はそのやうな母を持ち得たことをありがたく思ふ。
母は烈婦でも賢母でもなく最も平凡な農夫の娘であつた。だから戰爭の噂が立つごとに私が戰爭に行かなければならぬことのみを心配してゐた。
いつもおづおづとしてゐた氣の弱い母の眼がまだ私の心に刻みつけられてゐる。
私はかつてあのやうな母を持ち得たことだけに對しても、この世界に生まれて來たことをありがたく思ふ。
汽車は九州の平原を走つてゐた。
ゆるやかなスロープの植畑には人々が働いてゐた。
靜かな秋の日の光りが土を打つ鍬の刃に反射することもあつた。
そこには若い無智な母親たちが櫨の下の草にしやがんで嬰兒を抱いてゐた。
また或る時は綿草の畑の中の乳母車に眠らされた嬰兒もあつた。
地のつゞくかぎり、畑のひろがるかぎり、そこには無智な若い農夫の妻が、若い母が草の上に働いてゐた。
そこには溺愛する若い農村の母の柔和な眼が、遠い地平線の雲を見てゐた。
私は農村の無智なる若い母を愛する。
かつて私の母がかの女等の一人であつたことを思ふが故に。

×

朝起きて見ると毎朝のやうに木の下に雀の羽根が落ちてゐる。
時としては小鳥の頭だけが落ちてゐることもある。
毎晩のやうに梟が飛んで來て塒の小鳥を襲ふのである。
私は梟を憎む。
どうかして捕へてやらうと思ふこともある。
けれども晝間の梟を見ればどこにも憎むべきところがない。
小鳥らは夜の殘虐な征服者をあざけるやうに、梟をめぐつて囀り集まつてゐる、梟は好々爺然として薄暗い梢に眠つてゐる。
私はあの羽音一つ立てないで巧に小鳥を殺す夜の梟を憎む。
けれども小鳥らにからかはれながら眠つてゐる晝の梟を見ると微笑みたくなる。
なぜ神は夜の梟を作つたのか？
なぜ神は小鳥を襲はなければならぬやうに梟を作つたのか？
小鳥は生きなければならぬ。梟も生きなければならぬ。
梟は生きるためには小鳥を襲はなければならぬ。
私はすべての運命を悲しむ。
人間の運命を。梟に襲はれなければならぬ小鳥の運命を。
さらに小鳥の塒を襲はなければならぬ梟の運命を悲しむ。

神はすべての悲しき矛盾を、いたましき運命に背負はせて生ける物を作つたか？

×

子供らは玩具をもてあそぶ。
汽車を。金魚を。軍艦を。
子供らは終日玩具を弄ぶ。
その枕頭にすら玩具を。
玩具のない生活はどんなに子供らにとつて寂しいことであらう。
玩具は子供らにとつて喜びであり、光りであり、いのちである。
しかし作られた人間は所詮終生何らかの玩具なしには生きてをれない。
戀愛、名譽、地位、所有……すべて玩具ではないか。
大人たちは生命をかけてかれ等の玩具をもてあそんでゐる。
私たちは城のやうな大きな邸を玩具にしてゐる大人を見る。
立派な自動車を。大きな會社を。大きな工場を。
しかし大人の玩具には、いかにたくさんの悲劇が潜んでゐることであらう。
一人の肥え太つたブルジョアが大人の玩具に微笑んでゐる時、
幾萬の貧しい男や女たちが工場の暗い車輪の前で、刻々に生命の鎖を刻みつゝあることであらう。
夕方の汽笛が鳴る時、工場の門に立つて見よ。
そこには終日一つの玩具をも見出すことのできなかつた不幸な人たちが、青白い顔をして油にしみた黒い手をして、

黄昏の寒い街に吸ひ込まれてゆく。
私は藝術の水甕を作る。
それは私の生命なのだ。私の玩具なのだ。
玩具なしにどうして生きてをれよう！
人生はあまりに頼りない。
私は玩具を作る。私は生の不安を忘れる。私は死の恐怖を忘れる。
私は藝術の水甕を作る。
私はどんな水甕を作り上げ得るか。それは私にもわからない。私はたゞ土をこねてさへゐればいゝのだ。
何のためだか知らぬ。
たゞ働いてさへゐればいゝのだ。
やがて私はその玩具にさへ飽くかも知れない。
私はその水甕を地に叩きつけて、やがて死んでゆくかも知れない。
それだけなのだ。私の一生は。それでたくさんではないか。
私の死後また誰かゞ生まれて來るであらう。
私に捨てられた玩具は土に還るであらう。
私の後に生まれて來た男は再びその土を捏ね上げて水甕を作るであらう。
かれも亦やがて水甕を叩きつけて死ぬであらう。
それでいゝのだ。

地は永遠に殘るであらう。
土を捏ねる人間は永遠に生まれ來るであらう。
私たちの人生は悲しき永遠の玩具にのみ存在する。

×

私は冬の夜を步いてゐた。
私は地平線の上に幾つかの燈の群を發見した。
そこには幾つかの町があるのだ。
私はそこに幾千の人たちが、私と同じやうに悲しき大人の玩具を作りつゝあることを想像せずにはをられなかつた。
そこでは恐らくその刹那に悲しき玩具を地に叩きつけて、寂しく死んで行つた男もあつたであらう。
地のつゞくかぎり、人間が住んでゐるかぎり、そこには悲しき大人の玩具を人々は作りつゝ求めつゝあるであらう。
私はさらに大空を仰いだ。
そこには無數の星があつた。
私は思つた。
「恐らく、あの一つ一つの星にも無數の人類が悲しい大人の玩具を作りつゝあるのかも知れない。
夜も、晝も、そして永遠に！」

師と弟子

「時雨ふれ笠松へつく日なりけり」

或ひはこの句は私の記憶がまちがつてゐるかも知れぬが、ともかく芭蕉は木曾川を下る時こんな句を作つてゐる。誰と木曾川を下つたか、いつであつたか、それも私は記憶してゐない。

私自身二年前に木曾川を下つて、日暮れころに笠松へ上つたことがあるので、この句は一層私に懐かしく思はれる。反古のなかにあつたのを、芭蕉の死後發表されたものであつたかと記憶してゐる。この句について語ることは芭蕉にとつて迷惑かも知れぬが、私はこの句を見るごとに犬山の丈艸を思ふ。

「風俗文選」には丈艸の事を記して「佁丈艸者。尾州犬山產也。壯年辭武出家。隱松本山上蕉門之騷客也、能詩。後三年閉關而終不出病死。常讀法華經。年四十四」としてある。

何ゆゑ丈艸が武を捨てゝ出家をしたか、いろ／＼な傳說もあるやうだが、ともかくかれが尋常一樣の出家でなかつたことだけはこの短い記事からだけでも推察することができる。

義仲寺に芭蕉の墓をたづねた日、直ぐ裏の山に丈艸が庵をむすんでゐたことをきいて、師弟の間の美しい情誼に泣かされたことがあつた。

「うづくまる藥の下の寒さ哉」

この句を病床の芭蕉に褒められた時、丈艸は恐らくありがたさの涙に咽んだことであらう。

四十四年の生涯は長くはなかつた。しかしかれはまことにありがたい生涯を見出し得た。芭蕉はよき弟子を持ち、

丈艸はよき師を見出し得たのであつた。かれ等はよき日に生まれた。

芭蕉は貧乏であり、一蓑一笠の旅を愛してはゐたが、無下に人の施しを贅澤だとして辭退することはなかつたやうである。芭蕉はほどくにせよといふことを人にも教へた。强ひて人の親切心を無にするやうな野狐禪的乞丐の生活はしなかつた。馬にも乘り簾にも乘つたことはあつた。たゞいつも乞丐行脚の生活を心に描いて忘れなかつた。

丈艸は身を持することすこぶる嚴であつたやうに思はれる。

「丈艸法師の臥具のかい破れてしかも寒げに見えければ新しき夜具一具をおくりけるに、即時にかへし申されける。その仔細を問ひければ、丈艸曰去るころ智月尼よりさもきよげなる蒲團を贈りたまひけるにその夜被りてこゝろよくあたゝまりいねたりけるに誰とは知らず引めくりていにけり。その後正秀よりおくらんと申されけれど辭して受けず。盜まれて惜きと思ふは着心なり持たざれば取らるゝ氣遣ひなし。とられざればをしき心も起こらず、惜き心なければ罪もなし。古紙衾は取られてもをしき心なし、この執情のおそろしければ辭して返す也。」

これは肥後八代の僧文曉の「芭蕉談」に蒐められたものであるが、文曉の談のうちにはともすれば事實をやゝ誇大にしたり、小說化したりしたやうな點がほの見えるので、どこまで信じていゝかわからぬが、丈艸がともかく一念精進の徒であつたことは、その他のいろいろた記事から推し測られる。

×

「今日幻住庵に訪ひたりしに屛風襖等または四壁悉く書寫したりしものにて張捨たりと見えて、やぶれたるありまためくれたるもありて紙員百五十牒もあらんかと見えけれど連續したるはまれなり大體つゞりてよみくだし見るに何を寫したりともしれねどめでたき道の記なり和文の簡古なる今の世に誰あるべき共おもはず。よみつゞらんとすれば心ゆかず。扨も惜き事也……丈艸云……是はどこの記是はそこの景色也人に見せて益あるものにもあらず又祕すべきも

のにもあらず冊にして世に殘し置くべき書にもあらざれば秋も時代に夜寒の時しなれば讀經靜座の間々さびしく茶をきつする書の寢ざめかく四方に張り置きてよみはべればその國そこに再び杖を向けし心地して……更々惜しき事なし。師にわかれまゐらせしよりこの方口を閉ぢはべれば風詠もなし。日々一石一字は先師翁の追福し奉るまでなり。この志しとげなば一蓮託生を待つ計りに候とて……」

これは醫師の木節から去來におくつた手紙になつてゐるが、日々一石一字といふのは川からひろつて來た小石に法華經の文字を一石に一字づゝ書きつゞけてゐたのであつた。芭蕉も幻住庵にこもつてからは小石に經文を寫すのを日課の一つとしてゐた。

自分の一生に書いたものをすつかり壁に張りつけて、暇々に讀みかへしては曾遊の地を忍ぶ無慾な俳人の高風が慕はれるではないか。

芭蕉は子供たちに最初は錢をやつて川から小石をひろつて來てもらつたが、子供たちは錢を餘りよろこばなかつたので、後には菓子を買つてやつた。丈艸は芭蕉よりも貧乏であつたから子供に菓子を買つてやることもできなかつたかも知れぬ。

さらに丈艸がどれほど眞劍に最後まで乞丐行脚の生活を忍び得たかについては、かれの「贈新道心辭」を讀むがいゝ。「世をのがれて道を求むるほどの人は皆一かどのこゝろざしを發してまことしきつとめともしあへれど、年を重ぬれば、またかれこれにひかるゝ緣おほく、事繁くなりて更にはじめの人ともおもほへぬふるまひのみぞおほかる。古人もこの事をいましめて出家以後の出家を遂ぐべきよしすゝめはげましぬ。……」(風俗文選)

今日救はれたもの、明日必ずしも救はれはしない。今日の救ひは今日きりである。明日はまた明日の救ひを見出だすために苦まなければならぬ。

ホーマーの作品もほろびるであらう。ダンテも沙翁も近松もいつかはほろびるであらう。すべての藝術はほろびるであらう。

自己の藝術を壁に張り捨てゝ、自己の藝術にかれ一人あそぶことのできた丈艸は羨むべき詩人であつた。

丈艸ばかりではない。もし杜國がいきながらへてゐたなら、かれ等師弟の間にもつと／＼美しい插話が殘されたことであらう。

夢に杜國を見て泣いた芭蕉の師の心のたふとさ。

「すてはてゝ身はなきものとおもへども雪のふる日は
さふくこそあれ。花のふる日はうかれこそすれ。」

花下に狂ふ人あれば、かれは靜かにそれを觀するだけのゆとりを持つてゐた。

「誰人か菰きておはす花の春」

ともかくかれは丈艸とおなじく道を求めて道の中へ入つたが、さらに道を出ることのできた寛かさを持つてゐた。

「杜國は俳諧をわれに學びてわれよりもさとし、一を聞いて十をさとる。われまた神學を杜國に聞いて杜國より鈍し。十を聞いて一もさとらず」恐らく芭蕉が杜國についてから語つたのは事實であつたらう。

芭蕉の多くの弟子たちのうちには、或ひは芭蕉以上の才を持つた人もゐたであらう。たゞ芭蕉はその人間たる點において誰よりも深く、誰よりもあたゝかであつた。

×

無論蕉門にも路通の如き人もあり、凡兆の如く終に行く方も不明な人もある。

一人の師をめぐりていろ／＼な嫉視も排擠も或ひはあつたであらう。

しかしながら最後まで大多數の弟子たちが、かれを神のごとくうやまひ、父のごとくなつかしんでゐたことを考へると、これは恐らく世界の文學史上、類のない美しい事實である。

俳諧といふ文學形式、或ひは俳諧の本質そのものがもと〳〵人と人と相親み、隣人と共に相樂しみ、相苦しむといふ獨自性を持つてゐる關係からして、あれほどの多くの人が結びつくことができたと言へるかも知れないが、俳諧といふ文學形式をあのやうな最も温かな隣人相依の創作藝術とせしめた芭蕉の人間としての大きさ、廣さは驚歎すべきものであらねばならぬ。

芭蕉はすくなくとも今日の詩歌壇の人々のやうに神經質ではなかつた。自分を無理にも押し立てゝ行かうとすることはなかつた。だから或る批評家に言はしむれば「埒もなき男」であつた。

「文學は人間と人間との交通の手段である」といふ言葉はたしかに一面の眞理をふくんでゐる。日本の俳諧はその點において見事にその目的を達してゐた。

「俳諧のかたちたるや、蓑笠竹杖草鞋しめつけて朝立ちしたるがごとし。京田舍去りきらひせず、一所にあなまとひせず、雪の市中に押され、陽炎の芝原にこけたり、あるは山寺の小料理になぐさみ、士亭に逗留をあかれたるも一段の笑ひなるをや。月ほとゝぎすの曉を木の根岩ばなに寢さめて、また見ぬ方にあゆみをすゝむ。はてかぎりなき津々浦々。薩摩潟、蝦夷が千島の門背戸までもさらばいへ殘すものあるかは。これ吾道の廣みにしてわがあそび所といふべし……」（風俗文選。丈艸。詩歌俳諧辨）

和歌が高踏的となり、貴族的となつた際に俳諧は最も打ちくだけた市井の言葉を以て、最も庶民的な、隣人と相偕に樂しむべき藝術として生まれて來たのであつた。

私たちの今日の藝術はあまりに「京、田舍を去り嫌ふ」傾向がおほくなつてゐる。あまりに差別的である。朋黨的

である。打算的である。左顧右眄である。

私たちの藝術はなほ一度一番低い、一番廣い世界から出發しなければならぬ。それは芭蕉の深さと、寛さとを持つた人の手に委ねられなければならぬ。

杜國も生まれなければならぬ。丈艸も生まれなければならぬ。すべての民衆が藝術によつて實際に人を信頼し、人を愛し、人のために涙をそゝぐだけの暢然たる世界が生まれて來なければならぬ。師と弟子とが一つになるやうなアトモスフイヤをもつた藝術が生まれなければならぬ。眞實に隣人と隣人とが藝術の至境において相扶け、相慰むることのできる藝術環境が生まれなければならぬ。

怠惰なる秋

私は怠惰なる日を愛する。怠惰なる秋の朝を愛する。
かすかなる物の影は冷たき地に這ひ、緣に這ひ、私の心に這ふ。
高い木で百舌(もず)が啼く、草の下にこほろぎが鳴く。
何でもないたゞこれだけの月並な秋の聲、秋のシインに觸れたゞけでも私の心は動く。
微風が吹く、葉がゆらぎ、網の日を作つた地上の影が顫く。窪みの行潦(にはたづみ)が搖れる。
二尺ばかりの水煙が地を這ふ。
何でもない、こんな庭の秋の色を、秋の動めきを見つめてゐるだけでも私の心は踊る。
私は秋の怠惰なる日を愛する。
秋の怠惰な日を悦ぶ心を賦へた神に感謝する。
秋の怠惰なる日、空を見れば私の心は澄む。私の心の奧の奧に眠つてゐたいろ／＼な思ひ出が、いろ／＼な思ひが、いろ／＼な影が動く。
その思ひ出、その思ひ、その影は、私にとつて世界の何物よりも尊いものである。
私は本を讀まない秋の日を、悔みはしない。私は何一つ作り出さなかつた怠惰な日を悲しみはしない。
私は怠惰であつた。けれども私は忘れかけてゐた思ひ出を見出した。雜念の靄につゝまれやうとしてゐたいろ／＼な思ひを、いろ／＼な影を、磨き上げた玻璃に映すことができた。

それは私にとつて哲學を思惟するよりも尊い經驗であつた。それは私にとつてパンのための藝術を作り出すことよりも尊い精進であつた。

哲學も藝術もそれが私たちの心に、靜かな影となつて、心影となつて再び三度生きかへつて來るのでなければ眞實な相は摑まれないであらう。

すべての自然の相といひ、すべての人間生活の意欲といひ、執着といひ、哀愁といひ、歡喜といひ私達は果して現實在として一つのものでも持つ事ができるか。すべては過ぎ去つた心影ではないか。現在の世界に現實存はない。現在の世界では私たちはたゞ過去の心影を靜かに、できるだけ靜かにたしかに思ひ出すより他に方法はない。

怠惰なる秋の日は私に王侯以上の富を與へる。私は秋の日を怠惰なるがゆゑに、すべての空を持ち、微風を持ち、行潦に映る雲を持ち、私の心の表を撫でゝ行くあらゆる過去の心影をさながらに持つことができる。

×

秋の風が吹く。青空が漂ふ。
怠惰なるがゆゑに、私の心は秋の風を聽き、青空を仰ぐ。
いたましき過去の心影は重い鎖につながれつゝ私の心を撫でゝゆく。
いたましき過去の心影の行列
秋の朝をいたましき心影の行列が歩む。
とざされたる扉、空虚なる鋪道。鈴懸の葉は落ち、野良犬は眠る。
鎖の音は死の町の秋に響く。
死んだ女、死んだ男、かの友。いたましき心影の行列は歩む。

心影の世界に於いては人は永遠に生きる。
秋の風が吹く。かけすが鳴く。
いたましき心影の鎖は斷たれる。
地上から失はれた人々。
すべての美しき人々の上に冷たき土。幾何の墓。
靜かなる行潦は動く。
老いんとする我。

×

この靜かなる心
紙を喰む蟲のごとく一つ一つの心影が私の心臓に
靜かなる心影の音
靜かなる心影の跫音
秋は沈む、草叢に眠る蟲のごとく靜かに。
たゞ秋の一日の怠惰、たゞ秋の數日の怠惰、
墓の下の人々生き、來り、我が心遠くに住み、惱み、思ふ。
この靜かなる心の奥に死の國のさゝやき
この靜かなる心の奥に實在そのものゝ寂しき永遠の影
死の國のさゝやきを聽かんがために

實在そのものゝ寂しき韻を聽かんがために今日も怠惰なる秋の日を過した。
何もせず、何も思はず、たゞ心の奧の秋の扉を見つめたまゝ。

×

怠惰な秋の日の午後
草の中にしやがんで山を見る。廣い川を見る。汽車は幾度か長い鐵橋をわたつて往き、來る。
東に往く旅人、西に往く旅人。
秋の風は川の眞つ白な磧を奥の山へ吹く。
それはほんたうに廣い磧である。
磧をへだてた向う岸の町がかすむほどに廣い磧である。
私は廣い磧の一つ一つの礫を見つめる。
一つ一つの礫が、一つ一つの悲しみを持つてゐるやうに思はれる。
私は廣い流れを見つめる。
一つ一つのさゞなみが一つ一つの憂鬱さを持つてゐるやうに思はれる。
何と名づくべき悲しみでもない。何と名づくべき憂ひでもない。たゞ一つ一つの礫は喘ぎ、一つ一つの波は秋の憂鬱さを射かへしてゐる。
長い鐵橋を旅人は西し、旅人は東する。
私は廣い磧を見つめてゐる。私自身が旅人であることを忘れて。
永劫の時を通して、私はこの刹那たけそこの草の中にしやがんで、そこの磧を見たのであつた。恐らく永劫を通じ

て私はふたたびこの草の中を歩むこともあるまい。
私は磧の礫に對してほんたうに永遠のさよならを言はなければならぬ。遠い山に對しても、水に對してもそこに立つてゐた人々に對しても、鐵橋を吹く秋の風に對しても。

×

私は廣い川の畔の草の中に立つてゐる。
草を吹く秋の風を聽いてゐる。
旅人は西し、旅人は東する。
風は一つの草から一つの草へと永遠のさよならをさゝやいてゆく。
旅人は一つの山から一つの山へと永遠のさよならを投げかけてゆく。
時とは永遠のさよならではないか。
刹那とは永遠のさよならの一つ一つではないか。
秋の風は過ぎゆく
一つ一つの永遠のさよならではないか
人は眞實に生きることはできない
人はいつも永遠のさよならのなかにのみ生きてゐる。

×

音、一つ一つの音、音なき音
光 に溶け來る音、いづこより流れ來るか音なき音

秋の朝の冷たき木蔭に凭り立つ音
青空に流れてゆく音なき音
いづこへ
すゝり泣き、木の葉の落つる寂しき笑ひ
いづこより
地を踏みて朝の街に思ひつゝ歩む
昨日歩みし街
住み馴れし街
秋の朝の光り
旅人のこゝろを我に見出す。

×

秋の曇り日の光りを一つ一つペンの背に負うて私の詩が白い紙の上を歩む
小鳥らは木にありて
草は地にありて
私の血は脈管に遠し
かれらこの心と何のかゝはりもなし
ペンを走らせる我、思ふ我、憂鬱な心、
神は遠し

ペンは走る。空しき心の足跡を曇り日の光りは照らす。

×

廣い草原に立つて思ふ存分笑つて見たい
何もかも忘れて、忘るゝまで笑つて見たい
かれは笑つた、ほんたうに笑つた
笑つてしまつたらかれはきよとんとしてゐた
胸が痛いと言つてゐた
頭が痛いと言つてゐた
たまらなくなつたと言つてゐた
かれは地にうづくまつてしまつた
かれは泣いてゐた
傍で見てゐた神は笑つた
かれはすゝり上げて泣いた。

×

何も彼も忘れて、忘るゝまで笑つて見たい
かれは笑つた、ほんたうに笑つた
そしてきよとんとしてゐた
秋の風が吹いてゐた

たまらなくなつたと言つてかれはまた笑ひ出した
笑ひこけた、泣きながら笑つた
横つ腹が痛むと言つて笑つてゐた
ぼろ〳〵と草の中に涙を落した、手の甲で拭いた、そして笑つた
かれはきよとんとして草の中に立つてゐた
かれはたうとう氣が狂つてしまつた
秋の風がかれの汚れた鬚面を吹く
かれは今日も街を歩きながら笑つてゐた。

×

歩いて歩いて歩き通しに歩いて見よう
疲れ切つて何も彼も忘れてしまうまで
惟然坊は歩きに歩いた
西行(さいぎやう)も歩きに歩いた
何も彼も忘るゝために
歩きに歩いて魂を磨り減らしてしまふことができたらどんなにうれしからう
秋の風が吹く
惟然坊を吹いた風が、西行を吹いた風が
惟然坊が一生歩いても、西行が一生歩いても

地は一寸も減りはしなかつた
秋の風は一尺も短くはならなかつた
秋の風が吹いてゐる
惟然坊も、西行も死んでしまつた。

×

なぜ踊ることができないのだ
誰か笛を吹いてくれ
踊つて踊りぬけたら人間の世界がどんなにか面白からう、人間の世界がどんなにばかばかしからう
誰かゞ踊つてゐる
誰かゞ笛を吹いてゐる
たつた一人だ
街の男や女たちが笑つてゐる、冷笑してゐる
でも、たつた一人の男が踊つてゐる、たまらなく愉快さうに
たつた一人の男が笛を吹いてゐる、たまらなく面白さうに
世界で一番幸福さうな顔をしてたつた一人の男が踊つてゐる
たつた一人の男が笛を吹いてゐる
みんなはなぜ踊らないのか、笛を吹かないのか
狂人だ！　狂人だ！　とみんなが言つてゐる、笑つてゐる

けれども男は踊つてゐる、男は笛を吹いてゐる
秋の日が踊る男と、笛を吹く男の上のみにかゞやいてゐる。

×

プロメシウスが神に罰せられなければならなかつたなら、酒を作つた男も鷹に腸を裂かれなければならぬ。
なぜなら酒を作つた男もプロメシウスと同じやうに人間に至上の幸福を持つて來てくれたからである。
プロメシウスの焔火（ほのほ）、酒を作つた男の酒甕！
人間は酒を飲むことによつて神の世界の扉を覗きこむ
酒に狂うた男は神の鞭を忘れてしまふ
狂人になるといふことはめぐまれることだ。
コスモスのやうに瘦せこけた赤い鷄頭が庭の隅にある
狂人の眼で見ればそれはたゞの鷄頭ではない
そこには王冠がある、雪の中のたとへばクレムリンの大伽藍が見える、燒けさかるモスクワの街がある
一片の葉がゆらぐ
狂人の眼には
或るものゝさゝやきが動く、遠い世界の人々の俤（おもかげ）が映る、悠久が流れる。

×

狂人でなくてどうして貧しき者は幸なりと說くことができよう
狂人でなくてどうして草の上に神の炎を見ることができよう

狂人でなくてどうして五千人の聽衆をたゞ幾片かのパンと魚だけで滿腹せしむることができよう
狂人でなくてどうして十字架に上ることができよう
狂人でなくてどうしてイヷンの馬鹿の王國の實現を想像することができよう
狂人でなくてどうしてガンヂの言葉が語られよう
自然はいつも狂人に似てゐる
自然は平氣で幾十萬の人を殺す、狂人だからだ、だから自然はまた全く無報酬で幾億の人々を生かす
秋の風は狂人だ、だから世界のどこまでも考へなしに走つてゆく
そこに生きとし生けるものゝ心を打つて寂寞に狂死せしむべく
狂人である秋の風に吹かれて狂人西行が生まれ、惟然坊が生まれ、芭蕉が死んで行つた。

×

一生を壺を作る男
一生を繪絹の前に坐る男
一生を草を植ゑ、草を刈る男
それが狂人でなくて何であらう
何かに狂つて現實を忘るゝのでなければ、生きてをれないのだ。空虛といふ脅迫のために寂寞そのものゝ跫音のために
偉大なる狂人ミケランゼロの玩具が美術館に飾られてある
孤獨な狂人ベートウヹンの手ずさびが高い丸天井（まるてんじやう）の窓から流れて來る

しかし、かつてありし偉大なる狂人等のすべての事業もいつかはすつかりこの地上から滅びてしまふであらう
しかし人間が生きてゐるかぎり、狂人等は壺を作り、詩を作り、繪を描くであらう
絶えず人間を脅かし、忍び寄る或るものゝ跫音を恐れつゝ。

雨の日

雨が降つて來た。
空をのみ見てゐた私の心は雨に濡れた地上を見る。
柔かな草の葉を。冷たい石の上を。
雨の日に下つた木曾川を思ひ。大井川を思ふ。今もその川のほとりにゐる友たちを思ふ。
草の葉を打つかすかな雨の音は、深きよりさらに深きに遠きよりさらに遠きに私の心を誘ふ。
草の葉もうなだれ、すべての嫩葉もうなだれる。靜かな雨の音を聽くごとに、柔かな雨の絲を見まもるごとに、嬌れろ私の心がうなだれる。
雨は森を眠らせ、草原をまどろませ、町を休息の靄につゝむ。靜かな、虚しき搖籃。
雨は私の魂に悠久をよみがへらせ、過去をよみがへらせる。
雨は私に隣人の吐息を聽かしめ、隣人の笑ひを聽かせる。雨は地にあるすべてのものを一つにつゝむ。生ける者すべてが兄弟であるといふ實感が、雨の日ほど深く感じられる日はないであらう。
馬車を驅れる男、道を歩いてゐる男、草の中を走る犬、すべてがうなだれてゐる。生けるものすべてが負はなければならぬ運命を思ひつゝあるかのやうに。
さゝやかなる雨を聽く時、私の心から憎みを去れ。
さゝやかなる雨を聽く時、私の心から呪ひを去れ。

町も、森も、一様に靜かな雨に暮れてゆく時、どうして人が人を憎むことができよう！

×

雨の日ぬかるみの道を歩きながら不圖人を思ふ。
野茨は雨にぬれ、穗麥は青い波を打つて白壁の町までつゞいてゐた。
私はそこに立ち止まつて野茨を見た。穗麥を見た。中學時代の少年のやうに。
思ひ出！　人の傑！
夢を追ふ心を人は笑ふであらう。
けれども私はこのかたくなゝ心の底になほ夢を追ふ念の失はれてゐなかつた事をありがたく思ふ。
思ひ出。それはたれにも束縛せらるゝことのない私のたゞ一つの自由な世界ではないか。
儚い思ひ出と人は笑ふかも知れぬ。
しかし、それでたくさんではないか。
雨にぬれながら、野茨を見、穗麥を見る、眞晝間に思ひ出の夢をたどる時、たれが私が生きて惱みつゝあることを知らう。
しかし、それでたくさんではないか。
Aも幸福であれ！　Bも幸福であれ！　Cも！
二十年の時が過ぎた。
なほ一人雨の中に立ちつくして少年の夢を追ふ自分自身をあはれにも思ひ、ありがたくも思ふ。

×

夢みることは悲しい。

夢みることは苦しい。

夢みることは懐かしい。

詩は人生の夢ではないか。すべての藝術は人生の夢ではないか。大きな革命も人生の夢ではないか、大きな事業も夢ではないか。

人はさらに大なる夢を求めんがために天文を學ぶのではないか。博物を研究するのではないか。すべての科學は夢の所產ではないか。

ソクラテスはさらに大きな夢を見んがために毒盃を仰いだのではないか。

キリストは偉大なる夢遊病者ではなかつたか。かれは最も大なる夢の代償として十字架を擔つた。

嬰兒は何故に天國に入ることを得るか。

かれは夢を見るがゆゑである。

天上の星を見てたゞ鑛物質のかたまりのみを感ずる人は星を見ても救はれない。

天上の星に、寶石のさゝやきを見、無限なるものゝ神祕を感ずる者でなければ救はれない。

ヂオコンダの脣（くちびる）に神祕を見出したレオナルド・ダ・ヰンチは救はれた。

女の脣に、女の眼に何等の神祕をも見出すことのできぬ人間はフイリスティンである。

フイリスティンは神祕を見出し得ないがゆゑに救はれない。

ドストイエフスキイは殺人者の眼に神の世界を見出し得た。トルストイはニキタの脣に神の言葉を見出し得た。

ニキタはどこまでも嬰兒を壓殺した罪人である。しかもニキタの脣に神の言葉を聽き得たと信じたのはトルストイ

の夢ではないか。

マグダラのマリヤはどこまでも汚れたる女であつた。しかもかの女を友人として恥ぢなかつたのはキリストが夢遊病者であつたからではないか。

夢を追ふキリストにとつて、神の國の救ひはあまりに偉大であつた。それに比べてマグダラのマリヤの罪はあまりに小ひさなものであつた。

神の無限なる愛に比べて、人間の罪はあまりに小ひさい。殺人者も、放蕩者も、娼婦もすべて神の作つたものとして神の愛につゝまるべきものである。

どのやうな惡も、神の愛を曇らすほど大きな惡はない。

どのやうな善も、神の善に比ぶればあまりに小ひさ過ぎる。

人間がもし、善によつて救はれなければならぬとしたら、恐らく一人も救はれないであらう。

人間は決して善によつては救はれない。

コロレンコーの「マカアの夢」を讀んだ人はこのことについて思ふであらう。

マカアは神のさばきの前に立つた。

かれは一生を通じて幾萬本の木を盗み伐つた。かれは地獄に落ちなければならなかつた。かれは生涯を通じて、一つの善をもたさなかつた。しかもかれは救はれた。

神はマカアをあはれんだ。神は一滴の涙を落した。神の一滴の涙は、マカアの生涯の惡の重さよりも重かつた。

×

私は或る日、教壇の上で不用意に「そんなことをしても惡くはない」と言つたことがあつた。一人の學生が即座に

「いつたい豪いといふのはどんなことです？」と訊ねた。

私は何だか恥づかしい氣持ちになつた。

まつたく私たちは豪い人、豪くなるといふやうな概念に、ともすれば、取り憑かれ易い。

人類がほんたうに要求してゐるものは豪い人であらうか。頭のいゝ人、天才的な人、てきぱきと仕事のさばけてゆく人、そんな人も必要である。

けれどももつと私たちの周圍にあつて欲しい人、親しんで見たい人がありはしないか。

ワルト・ホイットマンを想像して見るがいゝ。渡し船のお客とも、船員とも、郵便配達夫とも、子供たちとも、誰とでも心からの「ハロー……」を投げかけることのできた凡人らしい詩人の俤を描いて見るがいゝ。

良寛を、白隱を、芭蕉を、大雅堂を想像して見るがいゝ。もしこんな人たちが私たちの周圍から失はれてしまつたとしたら、どんなにか人生は物足りなく思はれることであらう。

芭蕉も白隱もホイットマンも豪い人といふにはあまりに子供らしい人たちであつた。あまりに人間らしい人たちであつた。豪いといふやうな差別的な言葉を用ふるにはあまりに醇であり、あまりに深かつた。

すべての人々が白隱になり、ホイットマンになることはできない。けれどもあの人たちが歩いて行つた道だけは心がけ一つで歩ける筈である。最も親切な、子供のやうな心を持つて行く人でさへあるならば。

都會に生きてゐる人たちはたいていは田舍に生きてゐる人たちよりは自分自身を豪いと思つてゐる。世間的に名のある人は、名のない人たちよりは、自分自身を豪いと思つてゐる。眼に見ゆる藝術を作る人は、眼に見ゆる藝術を作らぬ人よりは、自分自身を豪いと考へてゐる。

私たちは本も捨て、繪筆も捨て、田舍に行つて見るがいゝ。私たちは名もないほどの山間の小ひさな村にも眞面目な

聖書の研究者があり、眞理への精進者があることを見出すであらう。そこにはいろ〳〵な美しい人間の心のあらはれがある。尊い犠牲があり、忍苦があり、愛がある。その人たちは恐らく誰にも知られないで、かれ等が生まれた土地に生き、信じ、愛し、苦しみつゝ靜かに元の土に還り、眠つてしまふであらう。一つの詩も、一つの藝術も作らないで。

けれどもその人たちの生活がどうして都會の人たちや、所謂思想家や藝術家たちの生活に比べて劣つてゐるといふことができよう。かれ等の生活こそ星や草木のそれの如く自然であり、尊くあるのではないか。

私たちが第一に持たなければならぬ人は自然の人である。最も人間の仲間らしい仲間である。

かれが眞實にどれだけ人間の仲間となり得たかといふことが、かれの生存の意義の深さを決定するものではないか。

木曾川線の友の上に祝福あれ。
大井川線の友の上に祝福あれ。
すべて私たちの善き仲間（コムラッド）の上に。

西行にしても、芭蕉にしてもなぜ生涯を旅で過したか。殊に西行には妻もあり子供もあつたやうであるが、その愛執の絆までも斷つて何故に漂泊の旅に出なければならなかつたのか。

人間である以上は、殊に多感の詩人である以上は芭蕉にも、西行にも Love-affairs もあつたであらう。しかしそれが家出の動機であつたとは私は考へたくない。

「いつのころよりか片雲の志云々」恐らく芭蕉自身すら、いつのころから漂泊の旅に身を委ぬべくなつたかはつきりとは記憶してゐないであらう。それほどはつきりした動機があつたとは思はれぬ。同時に何故に旅から旅へ經めぐり步かなければならないのか、かれ自身答へることはできないであらう。

「兎角拙者浮雲無住の境界大望故如此漂泊いたし候」

「殘生いまだ漂泊やまず湖水のほとりに夏をいとひ候猶こち風に身をまかすべきやと秋立つ頃を待かけ候」

一所にぢつと家を定めて住んでゐることは芭蕉にはできなかつた。

諸法從來常示寂滅相。「しばらく足のとゞまる所は蜘蛛のあみの風の間にと存候へば」

人生そのものを風の間の蜘蛛の巣の運命に過ぎないと見た佛敎的な思想の背景が、かれの漂泊の志念を一層固くしたことは爭はれない。西行も、芭蕉も佛敎思想の背景なしには生まれ得なかつたといふことはできるであらう。が、もともと西行なり、芭蕉自身のうちに、いかに多くの漂泊者的な血が先天的に流れてゐたであらうといふことをも想像せられる。

かれ等は生まれながらの漂泊者であつた。それがたま／＼老莊、或ひは佛教の思想と結びついたがために、あのやうな文學形式となつてあらはれ、あのやうな生活形式となつてあらはれて來たと見るが當然であらう。

私はこのごろパピニーの「きりすと傳」を讀んだ。その中にキリストは生まれながらにして罪を知らぬ人間であつた、最初から最後まで完き人間であつた、子供そのものであつたといふ意味の言葉が語られてゐるのを讀んだ。

福音派の人々に言はしむれば、この結論は當然の事實であつたにちがひない。しかしかのルナンの耶蘇傳を讀んだ私たちにとつては、パピニーのこの言葉は、全然新しい意義と力とを持つて訴へて來るのであつた。ルナンが說いたやうに、かつて荒野に於いて惡魔の誘惑を感じたキリストが、人間の達し得る最高の世界まで精進によつて達し得たといふ風に、キリストを見るのもまことに面白い見方である。しかしパピニーのやうにキリストは最初から最後まで完全な人間であつた、神の子であつたと見るのも面白い。そのやうな場合が實際に存在し得ないと斷言することはできない。

久しい間自然主義的な見方に馴らされてゐた私たちはやゝもすれば、あまりに人間をあさましいもの、卑しいものに決めてしまひやすい。しかしながら、私たちは實際の人生に於いて私たちが想像してゐたより以上に醜いものや、呪ふべきものゝ存在してゐることを知ると同時に、私たちが想像もし得なかつたほど美しいものや尊いものゝ存在しつゝあることをも知る。

アシシのフランシスや、孔子や、釋迦といふやうな人々は恐らく、私たちの小ひさな、卑しい心では想像することもできないほど立派な人であつたにちがひない。かれ等は生まれながらの神の子であつたにちがひない。

トルストイは非常に偉大な人であつたにちがひない。しかしかれは生まれながらの神の子ではなかつた。ロマン・ロｰラン流に言へば、あの最も人間らしい弱點を持つたトルストイがあの神の完きを得ようとした苦しい修行のうちに

私たちを勵ますものがあるにちがひないが、アシシのフランシスや、キリストのやうに最初から神の子であつた人の生活の尊さといふものがしみ〴〵感じられる。

どのやうに深い信仰を持つてゐても、「どのやうな懊惱を持つてゐても」ヨブはヨブであつてキリストではあり得ない。トルストイはヨブではあり得るであらうが、キリストではあり得ない。かれは最初からヨブとして生れたのであつてキリストとしては生れなかつた。

バプテスマのヨハネはつひにキリストになり得なかつた。かれはキリストとして生れなかつたからである。アシシのフランシスは誤つていつまでも遊蕩兒の群にはいつてゐたとしても、かれはその人々の間に聖フランシスの愛を生かし得たであらう。キリストはたとへ賭博者の群に墮ちて行つたとしても神の子の愛を周圍の人々の間に成長させ得たであらう。

かれ等は生まれながらの神の子であつたがゆゑに。

もし、トルストイが或ひはパウロが誤つて收税吏や賭博者の群に墮落しつゞけたとしたら、その結果はどうであつたらう!

西行或ひは芭蕉のやうな人たちは、いづれにしてもあのやうな漂泊の生涯に入ることが最も自然的な人間として生まれたのではなかつたか。即ち生まれながらの漂泊者ではなかつたか。

「生まれながら」のといふ言葉の尊さがおぼろげながら、このころ分つて來たやうな感じがする。

人間のいろ〳〵な外的な努力といふものが、その「生まれながらの」本質に對して、ほとんど何の力をも持つてゐないといふことをも感ずるやうになつた。

したがつて、外的な努力を加へる前に、先づ眞實に「生まれながらの」自分自身の姿を見出すことが何より大切な

ことであるといふことを考へずにはをれない。

どんなにあがいてもトルストイになれない人もあるし、そのやうな「生まれながらの」人がトルストイの眞似をすればずゐぶん僞善者にもなりかねないし、西行や芭蕉に似通つた「生まれながら」を持つた人があるとしたら、その人はやつぱりかれ等の歩いた道を歩くより他に、ほんたうな生き方はないのではないかと思ふ。

萬人の人と倶に生きるのも、たゞ一人のうちにのみ生きるのも宿命であると思ふ。

かれはかれ以外には歩き得ない。宿命である。

×

或る時は死といふものが非常に恐ろしく思はれることがある。生きてゐることがたまらなくうれしく思はれることがある。たいていそれは美しいのびやかな自然のなかに自分を見出し得た刹那である。漂泊の旅に於いてゞある。

或る時は死をさまで恐ろしく思はないことがある。生きてゐることをさまでありがたく思はなくなることがある。たいていは人間生活の渦中に呼吸しつゝある自分自身を見出し得た刹那に於いてゞある。

私は數日前戸山ヶ原を通り抜けた。そして久し振りにあの櫟林の中に日向ぼつこをしてゐる青年たちを見た。まだ秩父あたりの山には白い雪が積つてゐた。まさに芽生えんとする武藏野の曠原をへだてゝ遠山の雪を見たゞけでも私の心は無性に躍るのであつた。空は文字通りに瑠璃のやうに輝いてゐた。それはこの十數年來見たことのないほどの美しい空であつた。地震以來東京の空はたしかに美しくなつた。

私は去年見た薩摩の空を想ひ出した。かつて見た對馬の空を想ひ出した。

美しい空の下に生くることのいかに幸福であるかをつく〴〵感じさせられた。

人間は齢をとるにつれて星を見ることがすくなくなる。あわたゞしい生活に追はれ、人間的な生活の屈托に囚へ

られた私たちの眼はいつも暗い地上を見つめがちになつてしまふ。生きてゆくために人は人といかに相憎み、相嫉み相陷れなければならぬか。人はパンを奪ひ合ふところの犬を笑ふ。けれども人と人と集まるところには、それ以上の醜いパンの爭奪がある。人間の爭ひはお體裁を作つてゐるだけに一層醜い、一層陰險である。

小ひさいにせよ、大きいにせよ、いやしくも一つの集團生活のなかに生きてゆかなければならぬ以上、私たちはそこに愛よりも、より多くの憎みを苦しまなければならぬ。

この大きな都會の朝と夕暮れとに立つて見るがいゝ。

朝の電車に群がつてゐる人々の顏のあまりに蒼白いのに驚くであらう。かれ等は今日の一日の仕事の苦痛を恐れてゐるのではない。今日の一日の人と人との憎惡にをのゝいてゐるのだ。

黄昏に見るかれ等の顏はさらに蒼白である。かれ等は一日の人と人との憎惡と陷穽に疲れ、喘ぎつゝ歸つてゆく。

學校の教師であれ、官吏であれ、會社員であれ、勞働者であれ、いやしくも人に使はれ、人と共に働かなければならぬ人であつたなら、そしてその人が正しい感受性を持つてゐる人であつたなら、正直であることを欲し、美しい心に生きることを欲する人であるならば、恐らく殆んど毎日夜のやうに、その集團生活の醜さから逃れんことのみを思ふであらう。

神は田園を作り、惡魔は都會を作つたといふ言葉は恐らく眞理であらう。神は孤獨を作り、惡魔は集團を作る。

黄昏の町を歩いて見るがいゝ。

そこには俯向きがちに歩いてゐる男を屹度見出すことができる。

黄昏の川端を歩いて見るがいゝ。

そこにも靜かに流れを見つめつゝ歩いてゐる男を發見する。

黄昏のバアに、黄昏の街路樹の下に。
かれ等は星を見ない。生活の屈託、生きるための人と人との憎みのためにかれ等の眼は重く涙に鎖されてゐる。
もし親がなかつたらもし妻がなかつたら、恐らくかれ等はその夜かぎり再び集團の生活へは歸らなかつたであらう。
親を思ふがゆゑに、妻子を思ふがゆゑに、かれ等は憎みつゝも、呪ひつゝも、醜い集團生活の中へ歸つてゆかなければならぬ。小ひさい、しかしながら尊い殉教者たちが黄昏の電車の前に群がつてゐる。
星はいつもかれ等の群の上にさゝやいてゐる。しかしかつてかれ等のうちの一人の男も星を仰ぎ見ることもしない。
かれ等の不幸なる視線は暗い地上に冷たい土に縛られてしまつた。
まつたく、人間は一日一日と空を見ることをしなくなる。空の美しさをすら忘れてしまふ。
近代のあらゆる知識が生んだこの大きな都會の夜のすべてのアーク燈を持つことよりも、靜かな夜の一つの星をもつことがもつと幸福なことではないのか。
王宮の一室を持つことよりも、柔かな草の上に仰臥して天と地のすべてに抱かれることがもつと幸福なことではないのか。
私たちは青空のいかに尊きかをほんたうに考へたことがあるか。
私たちは太陽のいかに尊いかをほんたうに考へたことがあるか。
五月の朝の微風に涙ぐむほどの感謝をさゝげたことがあるか。
黒い土を破つて芽生えする一莖の草花に神祕なる大自然の愛のさゝやきを聽いたことがあるか。
　「身を分けて見ぬ梢なく盡さばやよしのの山の花のさかりを」（西　行）
私たちは春の花に對して、かほどまで、貪欲になり得たか。

太陽に對して、青空に對して、五月の微風に對して、一莖の草花に對して、私たちはあまりに無慾である。私たちは自然に對してもつと〳〵貪る心を持たなければならぬ。

芭蕉は雲と鳥に對して貪欲であつたがために一生を旅に送つた。

「佛には櫻のはなを奉れわが後の世を人とぶらはば」（西行）

西行はその死後までも櫻の花と相別れんことを惜しんだ。かほどの自然に對する執着を持つたればこそ、かれは一生を旅に送り得たのであつた。

「花見ればそのいはれとはなけれども心のうちぞ苦しかりけり」（西行）

ほんたうに花を愛する人にしてはじめてこの心を掬むことができるであらう。ほんたうに人生の無情を觀ずる人にしてはじめてこの寂しさを感ずることができるであらう。

×

芭蕉に秋の句多く、また秋の句のすぐれたるもの多きに對して、西行に春の句多く、また春の句の人の心を惹くもの少からざるも面白い現象である。

このことについては私はかつて書いたことがあるが、芭蕉と西行と比べて芭蕉は秋の日の靜寂を思はせ、西行は春宵のものうき涙を想はしめる。芭蕉の句は時として釋迦を、西行の歌はあまりに、多く解脱し得ざる蕩兒の佛を聯想せしむる。しかもその子供らしさに於いて、匠まざる句と歌に於いて相似たる神品の薫りを放つてゐる。

西行の歌には玉石相混じたる佛がある。芭蕉にはそれがすくない。芭蕉は西行以上に藝術に對して一層神經質的であつたやうだ。

西行は世を捨てたと云ふものゝどこまでも死を恐れたやうである。花を見るにつけても月を見るにつけても。

「花にそむ心のいかで殘りけん捨果ててきとおもふ我身に
わきてみむ老木は花もあはれなり今いく度か春にあふべき
いとふよも月すむ秋になりぬればながらへずばと思ふなるかな
捨ていにし浮世に月のすまであれなさらば心の止らざらまし」

老木をいたむ心のうちには、すべての生けるもの丶死をいたむ心が動いてゐる。かれは死の恐れをのがれんとしてつひにのがれることができなかつた。

世を捨てたと思ひながらも、かれは自然を捨てることはできなかつた。かれにとつて自然はあまりに美しかつた。あまりに蠱惑的であつた。かれは自然の享樂者であつた。

芭蕉を見る時、私たちは芭蕉が無常を凝視し、いかに靜かに無常の中に貧き日を、寂しき自然を樂しみ得たかを感ずることができる。かれは寂寞を主とし、悲しみを主とし、孤獨を主として、なほこの靜かなる無常の中に悠久たるものを樂しみ得たやうに思はれる。

死はかれにとつて寂しいものではあつた。しかしかれは死を恐れなかつた。靜かに死を待つことができた。

「花にうき世我酒白く飯黑し
世にさかる花にも念佛申けり
奈良七重七堂伽藍八重ざくら
花の山袈裟落された坊主達
初ざくら折しもけふはよき日なり
さくら狩きとくや日々に五里六里—

そこには落花に對する悲しみよりは、さかりの花と偕に樂しみ、偕に醉はんとする世間なみの春の心が動いてゐる。あたゝかなユーモアさへ流れてゐる。あるがまゝの自然、無常そのものゝなかに自然を樂しむ心が動いてゐる、

「野ざらしを心に風のしむ身かな
秋かぜや藪もはたけも不破の關
猪もともに吹るゝのわきかな
死もせぬ旅寢の果よ秋の暮
馬かたはしらじ時雨の大井川」

最も寂しかるべき秋の自然の中にあつても、かれはその寂寞を主として靜かに寂寞を享樂してゐる。靜かに人生の無常を觀ずることによつて、さらに深く無常の悠久さを享樂してゐる。

かれは死に勝ち、無常に勝ち、寂寞に勝つた。

死も、無常も、寂寞もかれの生活内容の一部分として無くてはならぬものとなつた。

かれは死を、無常を、寂寞を獲りあつめてその魂の糧とした。

悲しみを知る者にとつて、悲しみなき世界はいかに空虚であらう。

寂寞を知れる者、無常を知れる者にとつて寂寞なき日、無常なき日はいかにブランクなものであらう。

×

故鄉を思ふ日私の胸は傷む。

父がたゞ一人で夜具にくるまつて寢てゐるであらう。私が送つてやつた毛皮の帽子を眼深かに冠つて寢てゐるであらう。

子供らをみんな旅に出してしまつた父が、母の佛壇の前に夜も晝も眠つてゐるであらう。
眼がさめれば茶の間に來て酒を飲んでゐるであらう。
朝も晝も晩も、眞夜中も。父は起きて來ては酒を飲んでゐるであらう。
私は故郷に歸るたんびに酒を攝することを父にすゝめた。そのたんびに父と喧嘩もした。
子供らを旅に出してしまつた父がどんなにか旅の娘らのことを案じてゐるであらう。
父よ、眠ることがあなたには救ひなのか。
醉ふことがあなたには救ひなのか。
父よ、子供らを育てゝしまつて、妻に別れて、たゞ一人で故郷の家に酒を飲むあなたの老年の心が、私に今幾分わかつて來た。
今度故郷に歸る時、私は灘の酒を買つて行かう。
父よ、そしてあなたと醉ひつぶれるまで飲まう。

×

備後の兄よ。
山陰境の山にはまだ雪が消えがてに殘つてゐるであらう。
放牧の牛が枯草の上に眠つてゐるであらう。
あなたは小松山をあさつて雉を追うてゐるであらう。
「青山を見い。白雲を見い！」
あなたは今も自分自身に向つてかう言つてゐるであらう。

今はその靑山もまだ冬枯れの中に眠つてゐるであらう。
今はその白雲もまだ雪の山に眠つてゐるであらう。
あなたが生涯の事業の第一着手として作つた大きな門だけが、冬枯れの草の中に靑山白雲を背景として立つてゐるであらう。
蜜蜂の巣は雨にさらされ、葡萄畑は雜草の中に蕭條たる冬を眠つてゐるであらう。
双髮すでに白きあなたはなほ美しい理想を描いて門の前に立つておゐでゞせう。
遠い山が瀨戸内海の夕照を紫色に反射する時、あなたは消夫藍の畑に立つて夕燒の空を見ておゐでになるでせう。
破れたる白壁の倉が
煤けたる破風が
あなたの眼にどんなに映るでせう。
あなたは今日も恐らく半日をあの荒涼たる西の桑畑にたゝずんで、人生についてお考へになつたでせう。
あなたは恐らく今夜もあのお寺の庫裡のやうな廣い煤けた母屋の爐の傍で悠久について瞑想してをられるでせう。
姉が經濟上の問題で一人胸を痛めてゐる時も、あなたは自分ひとりの哲學を考へておいでになるのでせう。
恐らくあなたは今日の午後葡萄畑に山の兎が眠つてゐたことを姉にお話になるでせう。
姉が馬鈴薯を爐の中で煮ながらあなたの哲學を聽いてゐるでせう。
村の人たちが、絲を繰つたり、藥草を刻んだり、町に出す米をごまかしたりしてゐる時に、あなた方だけが美しい夢を、永遠を、語つておゐでになるでせう。
村の人たちは恐らくこの夜中にも、今度はあなたの東の山が賣物に出される日を想像してゐるでせう。

或ひは沼の下の田が誰かの手に渡さるゝ日を。
あなたの畑がだん／＼狭くなつて行つても
あなたの山がだん／＼小ひさくなつて行つても
あなたは悠久を思ひ、人生を觀じながら、寂しい微笑を爐の火に映しておゐでになるでせう。

恐らくこの夜中に山陽線の汽車は旅人を載せて山一つ隔てた線路を走つてゐるでせう。

よし窓を明いて星の下にあの山を見た旅人があつたとしても、かれはどうして山一つ彼方の草の中に美しい夢を追ふ老哲學者が住んでゐることを想像することができませう。

私は夜汽車の旅に、窓に映る山沿ひの孤燈を見るごとに、よくあなたを思ひ出します。燈のあるところ必ずあなたのやうな美しい夢を追ひつゝある哲學者を見出すでありませう。

燈のあるところ必ず人間的の苦惱がありませう。同時に悠久を思ふ隱れたる哲學者が生きてゐるでありませう。

あなたを思ふ時、私の眼には冬枯れのすべての山も、町も鮮く映つて來ます。

そこに隱れたる幾多の詩人や哲學者を思ふがゆゑに。

×

眞理の尊きことよ。

しかも眞理の名によつていかに多くの人々が自己を最も正しとし、いかに多くの人々を鞭打ち、いかに多くの人々を批評し、いかに多くの人々を殺しつゝあることよ。

眞理はさまで容易にすべての人々が所有し得るものであらうか。

キリストは眞理を見出し得たであらう。

釋迦は眞理を見出し得たであらう。

イプセンの「ブランド」は雪の山の中にたゞ一人の愛兒を亡ひ、妻を失ひ、しかもなほ眞理を見出し得なかつたかれはかれ自身をさらに深く雪の山の中へ拋げ棄てなければならなかつた。

眞理を見出すことのいかに困難であるべきかを想像することができる。

眞理を口にすることのいかに恐るべきかを知らなければならぬ。

さらに眞理の名によつて人を裁斷することのいかに恐るべきかを。

春日遲々。人間と人間のみが相憎み、相爭ふ。

×

私は春の日の旅を愛する。

伊豆の山、久能山、奈良、法隆寺、近江の寺々を愛する。

京都の春の夜街を歩くことを愛する。

春の日に大井川を下ることを愛する。

春の日に木曾川を下ることを。

私は春雨の京都の街を歩くことを愛する。京都の町を歩む人の靜かな下駄の音を。

春雨の大和路の巡禮を愛する。

菜の花と麥の畑のところどころに罌粟の花の白き法隆寺への道を愛する。

私は旅の宿の孤獨を愛する。殊に雨の夜の宿を愛する。

そこでは私はほとんど絕對の孤獨と沈默とを持つことができる。

あわたゞしい生活のために忘れられてゐた過去の自分のなつかしい姿が私の心にしみじみとよみがへつて來るのも旅の宿である。

自分といふものをほんたうに考へさせられるのも旅の宿である。

春雨の夜の旅の宿は、嚴かな禮拜堂よりも、一層私の心を落ちつかせる。

電車もなく、自動車もない田舍の町を靜かに一人で歩む旅の夜は殊にうれしい。

低い軒の下に戸は鎖されて、奥のかすかな燭のまたゝきが雨に濡れた往來までさして來てゐることもある。

そのやうな時、私はかつて夢の中にそのやうな町を歩いたことを思ひ出すこともある。

たゞ一夜二夜のゆかりであつても、その宿の人々に對して、その靜かな町の人々に對して、何かの宿命的なゆかりでもあるやうな懷しさをしみじみと感じさせられることがある。

たいていの町には靜かな川が流れてゐる。あてもなく夜の町を歩いて道を迷つてゐても、いつの間にか同じ川岸へ出て來る。輕い安堵の心が湧いて來る。

橋欄によつて水の音を聽きながら來し方行く末の旅を思ふのもなつかしい。

雨上りの空にはおぼろな星の影が雲の切れ目から覗いてゐる。田舍の町の星の光りは殊に美しい。

このごろではたいていのステーションには乘合自動車があるが、旅にはまだ古風な乘合馬車の方が野趣があつていい。

雨上りの石ころ道を蹴つてゆく蹄の音も旅なれば興深く聽かれる。乘り合せた旅の人にもかりそめの親しみを抱く。

麥畑から吹いて來る四月の柔かな風が旅人の頰を撫でゝ椿の列樹をくゞつて麥畑へと吹く。

「いざともに穗麥くらはん草枕」

芭蕉の句の思ひ出さるゝのもがた馬車で走る春の野である。
陽炎につゝまれ、春光に溶け、野火を望みつゝ走る旅は思ひ出すだけでも胸をとゞろかす。
雲雀啼く青草原に立ちて、遠山の雪を見る時、一番に胸を打つものは「生きてありき」といふよろこびである。
もし私たちの世界に、美しい人の心がなかつたなら、何で生きてゐることがうれしからう。
もし私たちの世界に春の微風がなかつたら、小鳥の唄がなかつたら、遠山の雪がなかつたら、春の山の野火がなかつたら、谿川のせゝらぎがなかつたら、何で生きてゐることがうれしからう。
春！　生きる時は今だ！
私たちにめぐまれた命のよろこびに胸の血を波打たせる時は今だ。
義朝の墓も、小督の塚も、重衡の蘭塔も春の光りに供養せられてゐるであらう。蓮華草も咲いたであらう。芹の葉も薫るであらう。
麥の畑の徑をめぐり、豌豆の花をいとしみつゝあてもなく春の草原を歩いてゐる間に、私たちは、たま〳〵古きゆかりの塚を見出す。或る時は美女の塚を、梟雄の塚を、力士の塚を、旅に死せる人々の塚を。あはれな物語りを傳へられたる塚を。すこし氣をつけて見ると名もない木の上にも必ず小鳥が啼いてゐる。或ひは啼きつかれては美しい翅を休めてゐる。
名もない草の葉を春の柔風が吹いてゐる。
名もない花が古い塚や、朽ちかゝつた草屋根をかざつてゐる。
一塊の土の上にも陽炎がゆれてゐる。
私たちが長いこと忘れてしまつてゐた燈心草が小川に沿ふてすく〳〵と繁つてゐる。

川を流れてゆく小ひさな木片にも春の光りが踊つてゐる。
紅い椿には繡眼兒が
白膠木には鶲が
水松樹には四十雀が
小學時代からすつかり忘れてゐた自然が私の胸に、再び取りもどされて來る。
もし詩人ウォーヅオースがうたふやうに、少年期は人生の最もめぐまれた時代であるとするならば、かつて生まれざりし以前の世界い天福に充たされた日の俤を持つてゐるものとするならば、春の日の旅人はよし、しばしであるとしても、人生至上の天福を再びすることができるのだ。旅は人をして少年期によみかへらせるから。
旅人は春の野を歩む。
かれ等の道の兩側には光りがためらうてゐる。かつて天上を照らした光りが。
かつて天福の世界にめぐまれた微風が、空の鳥が、空の色が、最も貧しき旅人の上にほゝゑんでゐる、春あればこそ人生は生きてある價値を見出す。
春風に吹かるゝがたゝ馬車の貧しき旅人！　お前は人生で最もめぐまれた日を見出してゐるのだ。

×

私は二三日前とげぬき地藏の前を歩いてゐた。
竹で編まれた小ひさな花籠を山門の前で賣つてゐる男があつた。
私は三十年前の自分をそこに見出した。
竹で編まれた花籠。紫や青や赤の市松模樣に染められた花籠。

私はあの花籠をどんなにか欲しがつたであらう。
削り立ての竹は銀のやうに春の光りにかゞやいてゐた。
削り立ての竹は幼い子供の心に遠い世界を夢みさせる不可思議な香を、春の風に漂はせてゐた。
麥畑に働いてゐた母にせがんで私は幾度花籠を買つて貰つただらう。
人生のすべての幸福が、春のすべての光りがあの小ひさな花籠に盛られてあつた
櫨の土堤の下で　いつも赤い股引をはいてゐた大きな男の栗毛の馬が死んだ時、土堤の下で火を焚いて人々は馬をとりかこんでゐた。
蠶豆の花が咲いてゐた。
人々は蠶豆畑の傍に馬を埋めた。
私は花籠を抱へたまゝ馬のお葬ひを見てゐた。
貧乏な家の子供として私は垢染みた襤褸を着てゐた。
幼な心にも母がいつも金の工面に涙ぐんでゐるのを感じたこともあつた。
しかしあの頃は一番幸福であつたやうに思ふ。
たゞ一つの花籠に人生のすべての幸福が盛られてあつた。
またあの頃は鉋屑で作つたチヤルメラを買つてもらつたことを覺えてゐる。
春の音といふ音が、あの赤く青く染めたチヤルメラの中から流れて來るやうに思はれた。
菜畑の間を、濠に沿うてどんなにチヤルメラ賣りの男の後を追つかけて歩いたであらう。
父は怒る時は私の頭をなぐりつけたが、機嫌がいゝ時はよく肩馬に乘せてチヤルメラを買つてくれた。

私がチヤルメラを吹く時、母はよく黙々として桑畑で働いてゐた。
春の風が吹いても滅多に母は笑はなかつた。
しかし世界中で私は母が一番好きであつた。

×

私の故郷ではどこの町に行つても土でこしらへた鳩が、葭簀張りの店で賣られてあつた。
赭い土で作られた素燒の鳩は白い胡粉や單調な紅色の繪の具で塗られてあつた。
春の日を浴びた土の鳩は雨戸を横にして作られた臺の上に、きよとんとした可愛いゝ眼を瞠つてゐた。
お尻の方に唇をあてゝ吹けばほう／＼と山鳩の聲をして鳴いた。
伊太利の Ocarina といふ陶土の笛を聽いたことがある。その形が鵞鳥（Oca）に似たところからこの名が出たと辭書には書いてあるが、幾つかの歌口もついてゐるし、私の故郷の土の鳩よりは幾分進んだ玩具であるが、私の故郷の土の鳩と、その野趣に於いて、單調さに於いてすこぶる似てゐる。
伊太利では森の中で牧童たちが吹くといふことである。牧歌的な感じを抱かせるものである。
故郷の土の鳩もその單調な聲、その單調な形に於いてすこぶる郷土的であり、牧歌的である。
セルロイドやいろ／＼た進歩した玩具が田舍の町の店頭にもかざられて來るので、このごろでは土の鳩はだん／＼すくなくなつてしまつた。
私は春の田舍町で吹いた土の鳩の音を愛する。
あの胡粉で塗られた翅を愛する。
ほう／＼と土の鳩を吹けば筑紫の春がよみがへつて來る。

筑紫の春の風が、春の光りが、少年の日が。
伊太利の田舍の子供らは春が來れば今もあの Ocarina を吹いてゐるであらう。
筑紫の麥畑の中では今も子供らはあの土の鳩を吹いてゐるであらう。
春の風が吹けば私は筑紫を思ふ。
花籠を思ふ。チヤルメラを思ふ。土の鳩を思ふ。
私がほう〳〵と土の鳩を吹いてゐた時、默々として麥の畑に働いてゐた母を思ふ。
筑紫の春を今日この刹那に步いて見たら屹度
あの黃金の菜の花の平野に——まつたく南國の菜の花はかゞやいてゐるが——
あの限りもない麥の平野に
春の微風が吹いてゐるであらう。
昔のまゝの私が、繈褓の着物を着て、げんげ畑の傍で土の鳩を吹いてゐるのを見出すであらう。
麥の畑で私の母が默々として働いてゐるのを見出すであらう。
三十年前の母と私は、今日もあの筑紫の野に寂しい眼を瞠つて春の光りを浴びてゐるであらう。
春が來るごとに恐らく永遠に
私は故鄕のげんげ畑で土の鳩を吹くであらう。
亡くなつた母があの麥畑で默々として働きながら、私の鳩の聲を聽いてゐるであらう。

伊賀の旅

四國、中國の旅の到るところ幾十年來の旱魃だといふことで、八月になつてもまだ田植もせず荒れたるまゝに捨てられた田もあつた。田の隅に井戸を穿ち、一本の桔槹に一家總出で、女も子供らも焦くやうな日に照りつけられながら水を田に揚げてゐるところはまだ慰めんすべもあるやうに思はれた。美しい伊豫讃岐の山々を背景として七十にも餘つたほどの媼が一本の桔槹の綱に縋りついて、赤く燒けた稲田を見つめてゐるのは言ひやうもなくあはれであつた。

大和法隆寺近くに友人を訪ねた日も大和川には一滴の水すら見なかつた。

京都に歸つても、三條の橋欄に凭れて鴨川の夜風を納れてをれば、京都をめぐる山々に雨乞ひの火が闇の空に燃えてゐるのを見かけた。

今年は比叡にも登るつもりであつたが、その夜からひどい嵐が京都の町を吹いて、三條四條の大通りのアカシヤの並樹の葉が地に叩きつけられるほどであつた。八十日振りの雨だ、慈雨だといふので誰も彼もその雨を心から喜んだ。朝になつて雨は餘程小降りになつた。しかし比叡も鞍馬も深い雨霧にとざゝれてゐた。ともかくもこゝ二三日では比叡に登れさうもない。急に豫定を換へて伊賀上野に芭蕉の故郷を訪ぬることにした。

鉄屋町の借家を出て、三條小橋から七條行きの電車に乘る。鷗外の小説に高瀬川を下る舟中の囚人と役人の物語を書いたものがあつた。囚人は若い男であつた。三條小橋に來て電車を待つ間私はよく狹い、溝といつた方がいゝくらゐの、そして家々の軒下を流れてゐる淺い高瀬川の水を眺める。

ほうほうと、初秋の町を托鉢する建仁寺の僧たちが三人三條の大橋を渡つて來た。

七條で電車を捨てゝ、ステーションの方へ急いだ。わづかに手の甲に感ずるほどの細雨を伴うた雲が低く東山あたりの塔をかすめてゆく。

廣場で七つ八つぐらゐの一人の巡禮が後を追うて來た。銀貨一つ手にわたして、「御咏歌をうたつておくれ」と言へば小娘は笑ひながら別れてゆく。菅笠はいゝが、ゴムの靴を穿いてゐるのが可笑しい。

奈良から夕方の汽車に乘るたんびに、伏見あたりを通るころになれば京都の夜の町が車の窓の左手に見える。あのあたりから見た京の夜の町はいつも面白い。朝京都を出て奈良地方へ出かける時は、またあの附近で、右の窓から振りかへれば東寺の塔が見える。四月、菜の花のころは、畑をへだてゝ殊にいゝ眺めである。

今日も東寺の塔は雨に煙つて見えた。

木津川の土堤の下に重衡の墓をいたみながら、關西線に乘りかへる。私にとつてはこの線は初めての旅である。

汽車は木津川の左岸に沿うて喘ぎ登る。右も左も美しく繁つた松山、杉山である。時として黝い岩にのごとく聳え立つた孤峰もある。柔かな山を負ひ、清冽な流れ、白い磧を前に控へ、杉や竹の林に抱かれた小ひさな村里が木津川の兩岸を點綴してゐる。壁は白く、屋根の勾配も形もきはめて落ちついてゐる。一つ一つの小ひさな村が自然に藝術的な均齊や調和や落ち着きを感じさせる。笠置の温泉村の下には深い淵が淀み、ボートを浮かべて遊んでゐる人たちもあつた。

汽車は木津川の左岸より右岸に移り、山を縫ひ、高原を走る。山が迫り、水が急になるにつれて山は一層美しく、空は海のごとく輝く。あたりの風光が何となく、去年下つた球磨川に似てゐる。

汽車は歩一歩大和と伊賀の國境に近づく。振りかへれば大和の道は斜に木津川に沿うて、麓へ麓へと消えて行く。

私は未だかつて大和と伊賀境の高原のやうに美しい姫百合の咲きみだれた草原を見たことがない。靑い草の中に燃ゆ

るばかりの姫百合が咲いてゐる。桔梗が咲いてゐる。

谿の奥、岩角の紅葉が白い瀬に臨んで燃えてゐるところもある。月ケ瀬まで二里、三里などといふ標木が見える。

幾つかの高原のステーションを通る。

人を恐れることを知らぬのであらうか、一羽の鵯が、直ぐ鐵道の傍の三四尺の稚松に啼きながら、汽車を見送つてゐる。

木津川の美しい水と山と村とを見つゝ、登りつくしたところに、大和を越えたばかりの伊賀の高原がある。西に山一つ越ゆれば奈良である。北に山一つ越ゆれば近江である。京である。芭蕉が近江にゆき、奈良に遊び、京にさ迷うたことなどをさま〴〵に想ふ。

鈴鹿は雲につゝまれてゐた。東西南北みな秋の風に吹かれた山にとりかこまれた高山といふ感じが、伊賀を見た刹那に私の胸に湧いた。

山沿ひの上野町の停車場から、さらに町までは小ひさな輕便鐵道の連絡があつたのだが、それを知らなかつたので俥を雇ふことにした。ステーションから十二三町を離れて、桑の畑や稻の田をへだてゝ一連の丘阜がある。北方は美しい杉の山になつてゐる。白鳳城といふ昔の城の址といふことである。その城址の山を北に負うて丘の上に擴がつてゐるのが伊賀上野の町である。上野町全體が一つの纒つた丘の上の町になつてゐる。ステーション前の廣場を下りて、俥は稻と桑の間を一直線に白鳳城の丘に走る。城址に近づくにつれて道はまた上りになる。棍棒の下に結びつけられた犬が喘ぎつゝ俥を曳く。

上野町の西はづれ、丘を下りたあたりに木立が見える。

「あすこが伊賀越の道になつてゐます。荒木又右衛門の仇討はあの邊です。」俥夫は得意になつて、荒木又右衛門の仇

討の話をして聽かせる。吉野山の武藏坊辨慶の話、笠置山の後醍醐帝の話と俥夫は白鳳城に着くまで少しも話を休ませない。

白鳳城跡の杉林を通り過ぎると、上野の町が見える。繭を小山のやうに積んだ家がある。くづれかゝつた土塀にかこまれた家がつゞく。修竹の藪が多い。

「こゝは丸の中です」と俥夫は言ふ。どこにも昔の城下に見出さるゝ士族町である。

芭蕉の兄松尾半左衛門の邸もこの近くにあつたのであらう。城孫太夫の邸も。

「さま〴〵櫻」もこの近くに保存されてあることを聞いてゐたが、時間がないので眞つ直に松尾家の菩提寺愛染院に俥を走らせる。

愛染院の前に俥を止める。塀を越して芭蕉の葉が眼につく。近くの子供らがめづらしげに門の前にむらがる。本堂からは讀經の聲が聞えて來た。

堂の前を左に、さらに右して竹にかこまれたさゝやかな草堂がある。堂の中に丈二尺ばかりの自然石がある。芭蕉の故郷塚である。浪花から淀川を溯つて伏見に出で、狼谷を越えて近江義仲寺に芭蕉の亡き骸を運んだ時、伊賀上野から馳けつけた土芳、卓袋が芭蕉のかたみを抱へて來てこゝに葬つたのである。

「家はみな杖に白髮の墓詣」

愛染院の門をくゞる時、甃石を踏む時、御堂の前にぬかづく時、第一に思ひ出さるゝのはこの句である。鬢髮やゝ白き芭蕉の痩せぎすな姿が修竹の前に浮かぶ。

讀經を終つた住持に案内せられて庫裡と本堂の間の廊下の薄暗いところに芭蕉の位牌を拜し、芭蕉の像を觀る。芭蕉が死ぬる一年前に弟子と二人して作り上げたといふ塑像である。朴々たる老人である。好々爺である。梅室？が

刻んだと傳へられてゐる木像はずつと見劣りがする。

竹叢を背景とした芭蕉の故郷塚を辭して門を出づ。新らしい塔婆の前に立つて讀經してゐる住持の袈裟が苔むした碑の小陰に見えた。門前では俥夫がビスケットを俥を曳く犬にやつてゐた。雁來紅の秋風になぶられてゐるのが、忘れられたやうな古町の寂しさを一層深くしてゐた。

壞れかゝつた土の塀、低い武家風の門の奥には柔かな修竹がつゝましやかに邸々をつゝんでゐる。或ひは大和へ或ひは近江へ山を越えて走る初時雨が山々につゝまれた伊賀の町を一薙ぎに横切る時、修竹を打つ時雨の音はどんなにか寂寞の詩人の心を打つたであらう。

上野の町はまつたく竹の美しい町である。竹叢の寂しい町である。修竹のそよぎの靜かな町である。

「降ずとも竹植うる日は蓑と笠」

東西南北に山を控へた高原の伊賀の町の人たちは、國境をめぐる山々の雨雲を氣づかひつゝ竹を植ゑたであらう。竹植うるといふ句の感じは修竹につゝまれた伊賀の町に來てはじめて實感となつて浮かぶ。

俥を南へ走らせる。たいていは軒の低い平家である。京都の横町を聯想させる感じのいゝ、落ちつきのある、明るいきちんと纒つた町である。晝ながら、旅人の胸には黄昏の街をゆくやうなわびしさが湧く。

さゝやかな冠木門の奥に修竹の林があり、中に草庵めいた家を見出すこともある。

「冬籠またよりそはん此はしら」

故郷に歸つて、冬を送つた芭蕉は恐らくそのやうな竹林の中に、自然木の床柱に凭りかゝつて旅の疲れを憩うたであらう。旅に聽いた時雨の音を思ひ出したであらう。風の聲に耳を傾けたであらう。

無名庵、瓢竹庵、東、西麓庵、蓑蟲庵をはじめ如是庵、半殘亭、風麥亭等算ふれば、この小ひさな秋の日を浴びた

修竹の中に幾多のゆかり深い枯枝廢壁を遺してゐることであらう。

「長閑さや櫻の上にちる櫻
さま〴〵のこと思ひだす櫻かな
土手の松花や木深き殿作り
風いろやしどろに植ゑし庭の萩
枯芝やまだ陽炎の一二寸
丈六に陽炎高し石の上
故郷や臍の緒に泣く年のくれ」

これらの句が作られたのはこの丘の上の靜かな町であつた。
そこにもこゝにもこんもりとした竹の林があり、傾きかゝつた門がある。鷄頭の花の眞つ紅な間にレグホンが餌をあさつてゐる家もある。

蓑蟲庵は上野町の南。上野町を抱く平原の丘の端にある。

愛染院から商賈の軒に沿ひ、幾曲り俥を走らせて蓑蟲庵に着く。雨催ひの雲が時々上野町の空を低くかすめて飛ぶ。

蓑蟲庵の南にも今は幾軒かの家が立ち並んでゐるが、昔は庵は丘の端になつてゐて、そこからは遠い山が伊賀の平原をへだてゝ眞正面に見えたらしい。今でも縁に凭れば木立を通して南の山が見える。

いつ誰住むともなく古びたる扉、いつ開かるゝともなく鎖されたる門の前に車をとゞめて、左り手に片寄つた小門から案内を乞ふ。五十ばかりの女があわたゞしげに走り出て來て、庭に案内してくれた。外庭には秋草の中に秋茄子が赤く枯れてゐた。

柴折戸をくゞつて中に入る。落葉朽葉二三寸が程に積もり、やゝもすれば飛石を埋める。梅があり、櫻があり、百日紅がある。芭蕉手植の松がある。一抱へほどの松である。朽葉につゝまれた池があり、池には水草の花が暗い底にまどろんでゐる。小ひさな橋がある。庭の東南隅のやゝ小高きところに亭があり、亭の前に芭蕉遺愛の燈籠がある。細長く痩せて、苔むしてゐる。

芭蕉が夜もすがら月を眺めて土芳と語つたであらう濡れ緣も、沓脱ぎもそのまゝになつてゐる。濡れ緣に腰を卸して空を見れば、小暗きまでに繁つた木立を通して靜かに秋の雲が動き、秋の聲が流れる。

水を含んだ老木の枝には蝸牛が眠り、蓑蟲が夢みてゐる。蝸牛も蓑蟲も芭蕉がこの庭を歩いた日以來眠りつゞけてゐるのであらう。それほど庭は暗く、濕り、靜かである。一葉の地を打つ音すらも秋を深めるほどに。

「今宵たれ吉野の月も十六里」

この句を讀んだ芭蕉の心も、こゝに來て、この濡れ緣に腰を卸して、蝸牛と蓑蟲の眠りを見る時、はじめて想像することができる。

まつたくこの一句の味も、伊賀の蓑蟲庵を訪れてはじめて味ふことができたやうな氣がする。

「みの蟲の音をきゝにこよ草の庵」

蓑蟲庵は蓑蟲の音を聽いて芭蕉を懷ふにふさはしい庵である。

あわたゞしい旅には蓑蟲の聲を聽く餘裕もない。

再び俥を走らせて上野町を一直線に北に横切る。めづらしげに竹林の間から走り寄る子供らもある。

赤い土を掘りかへした竹林の蔭に古い屋敷風な家が見える。さつき見た繭を積んだ家の前を通り過ぐれば間もなく白鳳城跡の杉林である。俥は霜山を隔てた彼方の山の麓のステーションへと一直線に走る。七八軒の家が小ひさなス

テーションを圍んで山の裾の小高い丘に並んでゐるのがうらさびしい。

鈴鹿はまだ雨雲に隱れてゐる。

ステーション前の坂を、荷車を曳いて下つて來た五十ばかりの男が、愛染院の芭蕉の像に似てゐたのを振りかへつて見た。

私は伊賀の山を越えて、再び大和へかへらなければならぬ。

日は大和境の山に暮れかゝつた。

壺

片田舍の小驛からさらに眞つ白な埃道を小一里も歩いて、二三百年も昔から眠つてゐるやうな靜かな山の中に、二十戸足らずの家が小徑に沿うて並んでゐる。陶土を搗く水車小屋が一つ、小川に臨んで建てられてゐる。柘榴の花が紅く咲き、稻の穗が山の中の村をつゝんでゐる。子供らは青笹の葉に結びつけた星祭りの色紙をかつぎながら跣足で飛んでゐる。

二度目に私が柿右衞門の家をたづねた夏の印象はこれであつた。

時折り山一つ越えた線路から汽車の音がかすかに聞えて來るほかには、そこにはまだ近代生活の何物をもはいつて來てゐないやうに思はれた。

そのやうな山の中で三十人ばかりの男や女たちが、甕の中の白い土を捏ね、轆轤を踏み、壺を作り、土を刻み、繪筆を舐めてゐるのを見るのはむしろ一種の驚異である。

田舍の小學校を想はせるやうながらんとした建物の中に、人々は硝子窓を洩れて來る光りを浴びながら默々として働いてゐる。轆轤の廻る音と、時折り甕の土をまぜかへす音のみがモノトナスな響きを部屋の中へ傳へる。

こゝでは陶土を捏ねることも、壺を作ることも、繪を書くことも、窯に火を入れることも三十人足らずの人々によつてなされる。モリスがいふやうな近代の Commercialism によつて齎せられた分業作業の機械的な感じは見出されぬ。或る一人の男は二年或ひは三年の時を費してたゞ一つの制作を完成しようとしてゐる。かれの机の上には、一羽のモデルの鴛鴦と石膏とが並べられてあつた。

庭には澁柿の青い顆が落ちてゐた。

「經濟力の壓迫が私たちの仕事をまで左右しようとしてゐます。その壓迫に勝つて少しでも立派な仕事を成し遂げてゆかうとすることはずゐぶん苦しいことではありますが……」十二代の柿右衛門氏は素朴そのもの丶やうな風采の人である。家を賣り、田を賣り、すべてのものを賣りつくしてなほ立派な仕事を遺さうとしてゐる人たちがこの山の中に働いてゐる。

レオナルド・ダ・ギンチはすべての藝術の中、繪は最もすぐれたものであると言つたことを記憶してゐる。或る批評家は音樂をもつて最もすぐれたるものとした。

しかし私はこの靜かな山中に默々として働きつ丶ある陶工たちを見た刹那に、かれ等が手にしつ丶ある一個の壺のいかに尊き藝術であるかを思うて頭を下げないではをれなかつた。

默々として山の中に作られたる壺は、今默々として私の部屋の棚の上にある。かれは何ものをも語らない。私は何物をも語らぬ藝術の尊さを知る。

詩歌小說それらの藝術のうちにはや丶もすればあまりに多くの饒舌が潜む。

私は言葉を語らぬ藝術の深さを愛する。

×

柿右衛門の村からさらに幾つかの山を越えて三河内の村がある。そこでは昔から唐子の物を燒く。牡丹の花間に蝶を追ふいたいけなる唐子等の繪が、たゞ一色の藍で描かれてゐる。昔、異國の三人の陶工が捕虜となつて日本に連れられて來た。かれ等は陶器を作ることのみを知つてゐたが、繪を書くすべは知らなかつた。しかしかれ等はどうしても繪を書かないわけにはゆかなかつた。

故郷に殘して來た子供らの俤を思ひ出して描いた稚拙な唐子模樣が今日のそれである。
あの草青い山の中で三人の捕虜たちは幾年の間、子供らを思ひながらあのたど〳〵しい繪筆を握つたことであらう。
愛執から生み出された青い草山の中の藝術！
私は默々として作られたゐ山の中の三人の男の藝術を愛する。そこには全我的な熱があり、愛があり、憤りがあり、眞劍さがある。

×

日は夕暮れの町にかゝつてゐた。
私は苧殼を買ひ、酸漿を買ひ、焙烙を買つて歸つて來た。
私は草市の夜を愛する。そこではみんなが、たゞその一夜だけは過去の人々のことを思ひ、しみじみとした心を持つことができる。
ふだんはみんながてんでに自分勝手のことを考へてゐるのが、その夜だけは一樣に死の世界について考へる。殊に今年の草市はいつにもましてあはれである。
九月二日の午後柳原の大通りで死にかゝつてゐた十四五歳の娘や、兩國の橋の上で倒れてゐた老婆の俤が私の頭に浮かんで來た。
大川一面に浮かんでゐた人々のことや、龜澤町から緑町五丁目までの間に燒けたゞれてゐた幾千の人たちの姿は思ひ出すのさへ心苦しい。
十三日も月はいつになく美しかつた。
暗く茂つた楓の下で迎火を焚いた。

故郷の母や、妻の母や、自殺をしたTが來てくれさうな氣がする。燃えさかる迎火の前に合掌する刹那だけは私にも宗教がよみがへつて來る。

×

「はるかに定家の骨を探り、西行の筋をたどり、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入べきやからわづかに都鄙かぞへて十の指をふさず」（芭　蕉）

芭蕉の時代にもほんたうな藝術の道を覺りえた人たちの數はこれくらゐのものであつたであらう。一生藝術の道を求めてなほ求めえないのが普通であるかも知れない。蝸牛角上の爭ひや、名聞やに走り疲れてゐる間にかれ等の藝術はいつか滅びてしまふ。藝術は一人の仕事である。唯一人の精進である。唯我獨尊の氣魄である。

もし藝術の道に正覺する精進を持たず、大膽さを持たず、孤獨の力を持たぬならばむしろ藝術を捨てた方がいゝ。人間全體のために。

×

繪師の誰かゞ歌右衞門と同じ時代に生れ合せたことをありがたく思ふと言つたことがあつたが、實際生れ合せには運不運があるにちがひない。

同じ時代に生れ合せたことをありがたく思ふ人たちの藝はできるだけたくさん見て置きたい。そのやうな人たちとはできるだけ幾度も逢つて置きたい。そのやうな友だちとはいつまでも一緒に生きてゐたい。

旅人のごとく

私は旅を愛する。

旅といふ言葉ほど不思議な魅惑を持つてゐるものはない。

かつてマアカス・アウレリウスは人生を旅になぞらへ、芭蕉も一生を羇旅邊土に過した。三界を輪廻する佛教の思想も畢竟は魂の旅を意味するのではないか。

何故に旅といふ言葉は、私たちの心をいやが上にも執念く惹きつけるのであるか。

恐らく人間の血管の中には、かの渡り鳥のやうに、野から野へ、草原から草原へと渡り歩いた原始人の血が、今もなほ潜んでゐるのであらう。

そこには未だ國家といふもの、社會といふもの、都市といふもの、經濟といふものゝ束縛もなく、繋鎖もなかつた。かれ等は鳥の如く自由に翔り、鳥の如く自由にうたひ、鳥の如く自由な世界を持つことができた。かれ等はまた鳥の如く自由に、時と空間とを支配することができた。

そこではすべての人間がボヘミアンであつた。コスモポリタンであつた。そこでは恐らく誰もが人を支配することもなく、支配せらるゝこともなかつたであらう。そこでは誰れもがこの大自然の所有者であり、たゞ一人の個人が、墻をめぐらして、或る範圍の自然や土地を所有せねばならぬやうな必要もなかつたであらう。そこでは、小悧巧な人間の頭によつて編み上げられた道徳だの、習慣だののといふやうなものもなかつたであらう。すべてがあるがまゝに咲く、あるがまゝに伸びて行つたであらう。

そこでは人は金錢だの、土地だの、名譽だの、といふやうな人間の魂を歪にし、人間の幸福を曇らせる誤つた我執を持つ機會すら與へられなかつたであらう。

そこでは人はたゞ人であるといふことだけでこの上もない自由を持ち、生存の喜悅を持つてゐたのであつた。生きて野を歩き、草原を旅するといふことだけで、かれ等は人間としての幸福と名譽とを持つことができたのであつた。

神が人間を作つたとして、神が同時に人間のために金錢を作り、劃られたる土地といふものを作り、名譽を作つたとはどうしても考へられない。

裸體のまゝの人間を神は作つたであらう。人間は神が作つた魂と裸體だけを持つてゐればたゞそれだけでたくさんなのだ。それが一番立派なことであり、尊いことである筈だ。

金錢、土地、名譽、これは惡魔によつて作られたものではないか。そこにはあまりに多くの魂をけがすものが潛んでゐる。

かつて鳥の如く自由に野を、草原を、雲を、流れを、微風を翔けめぐりながら、神によつて作られた人間の幸福を味ひ得た原始人が、何故に人間としての幸福を失つたのか。かれ等は排他的な一民族一都市を築き上げることによつて、そこに城を作り、町を劃つた。そこには富、土地、名譽などといふやうな人間の呼吸を窒息せしむるところの凝滯物が積みかさねられた。鳥の如く自由に空を翔る人間の魂の翼は、それ等の凝滯物の重みによつて折り曲げられてしまつた。かれ等の魂は今や、富、土地、名譽といふ惡魔の鎖によつて縛られてしまつた。

翼を折られたる人間は旣う天上を見ることを忘れて、地の上にのみ惡魔的な視線を投げる。地の上にのみ繫がれたるかれ等の視線の溷濁を見よ。かつてはかれ等もまた聖母の如く澄みたる眼を以て天上を仰いだであらうに。

×

旅！　地上に緊縛せられたる人間の魂が、再び原始人の自由さと、光りと、幸福とを見出す機會があるとするならばそれは、旅の世界に於いてのみではないか。

そこでは私たちは家をも、都市をも、國家をも、社會をも持たないところの赤裸々な一人の人間によみがへる。そこでは私たちはＡでもない、Ｂでもない。私たちは魂そのものとして生きる。

魂には名はない。自分の名をすら持たない人間そのものである。そこでは私たちは自分の名を名のる必要すらも持たない。そこでは私たちは渡り鳥のごとく自由に翔り、自由に思ひ、自由に默することができる。

そこでは私たちは自分の魂を見つめてゐればいゝのだ。たゞ自分自身でさへあればいゝのだ。人のために強ひられたる媚笑を作る必要もなく、人のために鈍い沈默を掻きみださるゝ必要もない。そこでは私たちは何を思ふことも、何を語ることも自由である。久しい間失はれてゐた空間と時間の自由が再び私たちの魂によみがへつて來る。

私たちは一人の人間となつて野を歩く。

見よ、私たちの視界に展開せられて來る遠い山も、草原もみな私たちのものではないか。空も雲も微風も夕燒もすべて私たちのものではないか。草に仰臥する時、地と天とすべて私たちのものではないか。鳥の囀と星のさゝやきとすべて私たちのものではないか。

人間が神によつて作られたまゝの人間に還る時、かれは神によつて與へられたすべてのものを自分のものとして受け容るゝことができる。

「貧しき者は幸なり……。」キリストの言葉は旅人の心を持つ人によつてのみ實感せらるゝ。一坪の土地を持つものは、一坪の世界のみを見る。一坪の土地をも所有せざるものゝみが、神によつて作られたるすべての世界を所有することができる。

渡り鳥の如き旅人！　汝は家を持たず、國を持たず、社會を持たず、都市を持たぬ。渡り鳥の如き旅人！　汝は何物をも持たざる貧人である。貧人であるが故にめぐまるゝ。汝は貧しきがゆゑに、國家以上の人類を持ち、都市以上の全世界を持つ。

渡り鳥の如き旅人！　汝はいつも孤獨である。けれども孤獨なるがゆゑにめぐまれる。汝は孤獨なるがゆゑにめぐまれる。汝は孤獨なるがゆゑに、自由にその隣人を選むことができる。孤獨なるがゆゑにすべての人間を受け容るゝことができる。

キリストは一人で祈つた。かれはいつも孤獨であつた。孤獨であつたればこそ、マグダラのマリヤを愛し、ラザロを愛し、シモン、ペテロを愛することができたのではないか。

旅人よ。キリストとその弟子たち、信徒たちのあの原始的な、貧しい生活を羨ましいと思はないか。五千人の聽衆に對して分たれた食物はわづかに幾尾かの魚と、幾つかのパンだけではなかつたか。しかもかれ等は世界の人類がかつて經驗した最も尊い幸福と名譽を持つことができたではないか。

かれ等はあの馬太傳第五章――七章の山上の說教を、かれ等自身の耳を以て聽く機會を與へられたではないか。かれ等はキリスト自身の唇から、あの美しい言葉を聽くことができたではないか。

かれ等はまたキリストと共に、安息日に麥の穗を摘んで食つた。いかにかれ等が貧しく、飢ゑてゐたかといふことが想像される。けれども人間の歷史上、かれ等ほど幸福な人間を他に求めることができようか？

かれ等はキリストの衣に觸れ、キリストと共に草に眠ることができた。

旅人よ。もし汝がキリストの弟子たちの貧しい放浪者の旅を羨ましいと思はないならば、汝は救はれないであらう。

旅に在るとき、私たちは土地を持たず、富を持たず、名を持たず、たゞ一人の人間として赤裸々の人間として、生

き感じ、思ふ。

無花果の下に水を乞うたキリスト、癩病人の家に宿りをもとめたキリスト、娼婦マリヤに香油をそゝがれたキリスト。かれはいつも土地を持たず、富を持たぬ貧しい旅人ではなかつたか。かれは小ひさな教會堂をすら持つこともできなかつた。枕するところすら持たなかつた。

旅人よ。私たちの生活をして、キリストのそれの如くなさしむることは到底、不可能なことであるかも知れない。殊にめぐまれない私たちにとつて、それは容易なことではない。

しかしながら旅人よ。私たちが旅をしてゐる間だけでも、せめて私たちの心のうちに、原始人の自由さとよろこびとを取りもどすことをつとめようではないか。何も彼も忘れて、自分自身の名をすら忘れて、空を見ようではないか。草原を見ようではないか。

それこそ最も深い、最も眞實な祈りではないか。

旅人よ、空を見よ。野を見よ。すべてのものが、今日もなほ私たちに賦へられてゐる。恰かも人類の祖先たちにめぐまれてゐたやうに。

×

風が吹く。

旅人の心はかすかなる微風に對しても感謝を感ずる。

柔かな日の光りが草の葉に顫く。

旅人の心はかすかなる日の光りにも涙ぐましい感謝を見出す。

見知らぬ人の微笑にも旅人の心は躍る。

旅人の魂は處女の如く素直に、すべてのものに羞恥む
生けるものゝよろこび、生けるものゝ悲しみ、
生けるものゝ孤獨さ、すべてが旅人の魂にのみ、さながらに迫る。（東海道汽車中にて）

バイロンの日を

S兄　二十日の旅を伊豆で送りました。花の前から後にかけて雨が多く天城にはいつも雲がかゝつてゐます。二三日前は急に寒くなつて、綿入れなど行李の底から出して着ました。

昨日湯ヶ島にH君を訪ねて行つて、日がすつかり暮れてから下田街道を歩いて天城を振り返つて見ましたが、草山には淡い雪が薄暗の中にほの見えてゐました。

今日は昨日に引きかへて再び春がもどつて來ました。久し振りで雲一つ見ぬ青空を見ました。今日はバイロンの死後一百年の記念日です。かれの作品を讀んだ人にとつても、讀まぬ人にとつてもバイロンといふ名は不可思議な響きを持つてゐるやうに思はれます。恐らく都會の何處かではバイロンのために今日は美しい集りも催されてゐる事でありませう。私は天城の山の中で靜かにバイロンのことを思ひながら、草山を越え、櫟林に入り、さらに草山を歩きました。そこはかなり高い草山でした。天城、十國峠、乙女峠、裾野に至る春の山の背が眞晝の春光に輝いてゐました。高原の草はまだ淺うございますが、高い草山に芽生えたばかりの櫟の柔かな新緑が青空に投影してゐる色の美しさといつたらありません。私は二三日前から下田街道を通るたんびに、草山の美しい新緑に心を惹きつけられては、何の樹であるかを疑つてゐたのでしたが、今日草山に上つてはじめて櫟である事を發見しました。天に投げられたる翡翠！私は草山を仰いでは櫟の柔かな葉の光りに恍惚たらざるを得ませんでした。

天城を越ゆる馬車が幾度か草山の麓を低く、白い路を走つてゐました。平原は花にかざられてゐました。そこからは天城の懷に抱かれた湯ヶ島の白い倉の壁も見えました。そこには二三株の櫻がまだ紅く、麥畑を背景に

燃えてゐました。黄金の棒を掘出すのだといつて町の人たちが、昨日も山を掘つてゐましたが、その小高い丘も見えました。今の世に、そのやうな神のお告げを信ずる夢想家を見出すといふことを面白いと思ひました。

旅役者の群でありませう。赤い旗を立てゝ太皷を叩きながら菜畑の間を、杉山の蔭に隱れてしまひました。昨日下田街道を通る時、私は或る煤けた旅籠屋の二階で旅廻りの役者たちが立廻りの稽古をしてゐるのを見ました。軒の下には山籠が一挺置かれてありました。

どうかした風の調子にしばらく太皷の音だけが草山の上まで響いて來るのでした。

岩燕が草山の胸を撫でゝ青空に向つて矢のやうに翔りました。山鳩が飛び、雉が鳴き、雲がいつとはなしに天城をつゝみはじめました。

十日ばかり前の雨の夜に旅の女が身を投げて死んだ淵のあたりを、子供の群が歩いてゐます。唖が默つたやうに。

私は時々不思議に思ふことがあります。二十日の伊豆の旅に、私は一度も子供らの歌を聽いたことがないのです。なぜ山の子供らはうたはないのでせう。春になつても。

そこには天城といふ大きな、餘りに靜かな自然が、何かの原因を作つてゐるのではないでせうか。

しかし私はこんな話を聞いたことを思ひ出します。かつて一人のスコットランド人が信濃の高原を歩いてゐました。かれは不圖或る山家からバアンズの "Should Auld Aquintance be Forgot" がうたはれて來るのを聽いて、あまりのなつかしさに涙を落したといふのです。しかしそれは「螢の光」を子供がうたつてゐたのですが、曲が同じ所から、そんな印象をスコットランド人に與へたのでした。私は今日バイロンの記念の日に伊豆の山を歩きながら、信濃の子供らのことや、その外國人のことを思ひ出しました。そして春になつても歌一つうたはぬ天城の子供らを寂しく思ひました。子供らの歌一つ聽かぬバイロンの日を哀れに思ひました。

螢

かすかな光りとも見えぬ光りを生命として夏の夜を漂ひゆく螢は、闇の中に忘れられた人間の魂のやうにも思はれる。或ひは何時か、何時の世にか悠久を思ひつゝ死んだ人々の吐息のやうにも思はれる。

青い火は或ひはほのかに、或ひは暗く、たえず吐息をついてゐる。

音もなくかすかなる光りを抱いて闇の中をかける。

青い光りの線が或る時は一直線に、或る時はゆるやかな曲線を描いて、やがて滅え、やがて星の群のなかに見えなくなつてしまふ。

或る時は道ばたの小ひさな流れに沿うて青い光りの吐息を見る。

或る時は麻畑の中に、或る時は眠つたやうな黝い大河の上に、たゞ一つ飛んでゐる。一人行く旅人のごとく。

廣い平原を歩く旅人は、或る沼のほとりで、或ひは或る川のほとりで、そしてそこからは地平線の星のまたゝきが見ゆる時、群をなした螢の光りと、星の光りとを區別することができなくなることを經驗するであらう。

そのやうな夜である。地と天の境が取りのぞかれて、星は地に、螢は天に、そして人間の心は螢と共に天上を思ひ、天上を歩くのは。

螢を追ひつゝ私たちは不圖立ち止まつて天上を見る。そこには私たちの美しい傳說の天の川が流れてゐる。時として螢は織女星を目がけて高く、森をかすめ、塔をかすめて、かけりゆく。

螢を追ふ人たちは、遠く稻田の原を越えて夜の闇をたゞよひ來る笛の音を聽くであらう。

夏の夜の笛。それは都會の人たちの夢にも想像することのできぬ哀韻と悠々の思情をこめたるものである。そこには人間の憎みもない。そこには人間の愛慾もない。

夏の夜の稲田の笛！　私はそれを思ふだけでも苦しい。

人間の子が生まれて、天に對し、地に對し、生そのものに對し、はじめて驚異を感じ、悠久を感じ、寂寞を感ずる時、少年の唇にはあの夏の夜の笛のみが捨てられぬものとなつて來る。

人間の宗教、人間の哲學、人間の寂寞、恐らくこのやうな悠久に對する人間の思情は少年のあの笛の音のなかゝら始めて語らるゝものであらう。

螢を追ふ人たちよ。あの黒い瞳の少年の笛を聽け。天に訴ふる聲。地に訴ふる聲。訴ふるところを知らざる聲。天の川の星も、地平線も、かれ自身も渾然としてたゞ一つの悠久のうちに溶けつゝ、漂ひつゝ、やがて、滅えて行く少年の笛の聲を聽け。

かすかなる螢の光りは空をかけり、黝き空に滅えゆく。かすかなる少年の笛の音は夜の空に滅えゆく。

太陽は私たちにソロモンの榮華を見せる。夜は私たちにたゞかすかなる螢の光りと、少年の笛をめぐむ。

太陽は私たちの魂をソロモンの王宮の美しさに誘ふ。

夜は私たちを寂しき魂の世界へみちびく。

螢は私たちの窓をかすめて、野を越え、やがてかすかなる空に消える。

私たちは天を思ひ、悠久を思ひ、人を思ふ。

少年の笛は螢の光りを追ひつゝ野を越え、やがてかすかなる空に滅える。

私たちは生を思ひ、死を思ひ、悠久を思ふ。

笛を吹く少年は眠つた。
螢はつばさをやすめて草に眠つた。
星は地平線の上にさゝやきをやすめた。
地も空も眠つた。
私はたゞ一人夜を歩いてゐた。
恰かも無限の闇を歩く旅人のごとく。
私は何も考へなかつた。
闇を無限に歩くことが私の宿命であるかのやうに私は闇の中を歩いた。
かすかなる光りが私の胸に歩み寄つた。
かすかなる笛の音が私の胸によみがへつて來た。
私は廣い平原の中に立つてゐた。
螢は眠つてゐた。
少年も眠つてゐた。
星も眠つてゐた。
たゞ二十年前の私自身が
二十年前の夏の夜が
私の心によみがへつてゐた。
私はたゞ一人眼ざめてゐた。

三保までは二十町、龍華寺までは一里、久能までは十五六町。しかし日中はまだ焦くやうな暑さですから三保にも龍華寺にもゆきませぬ。久能には親しいT氏が病を養つてゐるので一日置きくらゐには濱を傳うて出かけます。T氏の方からも何かおいしい物でも出來れば女中に持たせて屆けてくれます。昨日もT氏の小ひさいお孃さんが茄子を漬けたのを持つて來てくれました。私たちは妻と二人で濱に沿うて小ひさな橋の袂までT氏のお孃さんを見送つてゆきました。道ばたには木槿が咲き、赤い百合が盛りです。海沿ひの小ひさな松山を越えてゆく人を見送つてゐる間に日が暮れてしまひました。ほんの十四五町の間を歸つてゆく人を送るといふことでも、こゝでは何んだかしみ〴〵とした心になります。

昨日は二里餘の道を淸水まで出かけて行つて臺所の物を買ひ集めました。土釜、鍋、まないた、庖丁、しやもじ、土瓶、火箸、筆、インキ、提灯各々一、茶碗、箸各三人前、木炭一俵、白米一斗といつた風な買ひ物を乘合自動車に託して運んで來ました。

魚は一日に一度淸水の町から一人の男が運んで來てくれますが、濱に出ると地曳網の魚が手にはいることもあります。仕事に疲れると濱邊の道に出て待つてゐますと、いろ〳〵な野菜を擔いだ女たちが通りますので、その女たちからさゝげだの、茄子だのを買ひます。淸水から魚を賣りに來る男は面白いひようきん者です。正直な聖人見たいな男です。

濱で地曳網を引いてゐる男たちとも顔馴染になれば手傳つてやりたいと思つてゐます。

お天氣つゞきで筧の水が涸れかゝつてゐますので水だけは心細いやうですが、少し山を下るといゝ桔槹(つるべ)の井戸があります。毎朝、寺のお住持さんが手桶で汲んで運んでくれます。そのうちには私自身で汲むつもりでゐます。

私たちの現在の生活は非常に單調です。理想的なほど單調です。

朝五時か五時半には起きます。海が煙つてゐます。冷たい水で顏を洗ひます。もうそのころは寺のお住持さんは朝のお勤めをすませて苺に水をやつてゐます。お住持さんは毎朝三時に起きてゐます。

私たちは眞つ先に庭の直ぐ下の海を眺めます。そして白い波頭が立つてゐるか、ゐないかを氣を付けて見ます。波の高い日は屹度涼しいからです。駿河灣の面が鏡のやうな朝もあるし、また朝から白い波が高く立つてゐる時もあります。濱を洗ふ白い波の音は四六時中絶え間もありません。

妻が土釜で飯を焚いてゐる間に私は濱を歩いて歸ります。地曳網を手繰つてゐる男女の聲が霧の中をほうほうと響いて來ます。御前岬や伊豆の半島が水煙縹渺(へうべう)の間を走つてゐることもあります。

伊良湖岬はこゝからは見えませぬ。御前岬を一つ越ゆれば伊良湖岬になるのでせうが。

私はこゝからかすかに御前岬を見るたんびに伊良湖岬を思ひ出します。さらに世を憚つて伊良湖岬に寂しい生活を送つてゐた若い天才の杜國や、道を曲げてわざ〳〵杜國をたづねて行つた芭蕉のことを思ひます。

「鷹一つ見つけてうれしいらこ岬」

海を渡つて來る鷹を水天髣髴の間に見出し得た師と、薄命な弟子の當時の心情がいろ〳〵に想像されます。

×

六時に朝の食事をすませます。手紙を書きます。九時には新聞が來ます。地曳網を引く人々の聲が濱から高く聞えて來ます。前の海を清水港へゆく汽船が一日に一度、二日に一度くらゐの割で、大きな影を水平線の上に投げかけま

す。汽船を見るといふだけでもこゝでは懐しく思はれます。

こゝに來て一番驚くことは土地の人々の勤勉なことです。今ではたいてい三時には起きて、四時少しまはると畑に出てゐます。十三四の娘たちすら手桶を擔いで苺畑に水を注いでゐます。草を挘つてゐます。朝寢をしてゐるのがすまないやうな氣になります。私たちが朝の食事をはじめるころまでに、村の人たちは一仕事すましてゐます。手甲脚絆を着けて手拭を冠つた娘たちが鎌を持ち、鍬を握つて終日働いてゐる姿を見ると白い手の都會人たちの怠惰な生活が直ぐ聯想されて來ます。まつたく田舍の人たちは終日休む暇なく働いてゐます。焦くやうな太陽の下で。

人々は夜が明けるのを待ちかねたやうにして野良に出ます。人々は私たちが想像してゐるほど決して自然に對して無關心ではありません。否、田園の人々ほどよく自然を感じ、自然を知つてゐる人はありますまい。朝の空の美しさ微風の快さ、小鳥の鳴く音、それらの自然のあらはれに對して人々は最もデリケートな感受性を持つてゐます。

都會の人々が富の上に、或ひは社會的地位の上に、名譽の上に、生活欲の刺衝を見出してゐる間に、田園の人々はむしろ自然そのものゝ藏されたる蠱惑のなかに生活を享樂しつゝあるやうに思はれます。

恐らく都會の人にとつては單調すぎるほどの同じ波、同じ島影、同じ空を眺めつゝも、田園の人々は飽かず一生を自然の中に送つてゐます。私たちが想像してゐる以上に人々は自然の單調な表現のうちに、深い複雑な蠱惑を見出してゐるやうに思はれます。

私は日が暮れかゝるころから濱邊を歩きます。三保から御前岬までの山の裾を縫うて走る白い波頭を見つめてゐます。

夜釣りの男たちが砂の上にしやがんで白い波頭を見つめてゐます。

人々はきつと聲をかけてくれます。いかにも溫かいホスピタルな心を私は人々の言葉に見出すことができます。

「旦那、殺生の方はお好きですかい？　わたしの絲を貸して上げませう。月の夜の美しさつたらありませんよ。濱に出て蓆の一枚も敷いて寢てゐてごらんなされ。こゝの濱ほどえゝところはありません。」

私はよくこんな會話を夜釣りの男たちから聽きます。

濱に夜釣する男の焚火は迎火に似たあはれさを覺えさせます。こゝでは都會生活に於けるよりは、ずつと人と人とがほんたうに仲間であるといふ感じを抱くことができるやうです。都會人がほとんど共通に持つてゐる豪がりや、エゴイステックな考へが、濱の人たちにはないからだと思ひます。

すべての人は、この大きな自然の前に置かれた刹那にすべて平等でなければならなくなつて來るのです。人間の少しの學問だの、才智だの、富だの、門地だのといふことが、こゝでは言ひやうもなくくだらないものとなつてしまふのです。

こゝでは誰れも彼も正直に、大膽に働いてゐます。こゝでは働きさへすれば最も正直な收穫の報酬が與へられるのです。學校に行つて御覽なさい。官廳に行つて御覽なさい。會社に行つて御覽なさい。そこでは排擠と、自卑と、諂從と、陰謀のみが繰りかへされてゐます。かれ等は人間を對象として生きてゐます。それゆゑにかれ等は人間を恐れ、人間の前に戰々恟々としてゐます。

この濱の人々は海を生活の對象として生きてゐます。山を、畑を對手として生きてゐます。こゝの人々の恐るゝところは神であります。自然であります。

人を恐れずして、自然を恐れて生きる人々の大膽さと正直さと勤勉さほど氣持ちのいゝものはありません。

人々は太陽と共に起き、太陽と共に働き、思ひ、生き、太陽と共に眠ります。人々は太陽がいつも一つの軌道を走るやうに、いつも單調な生活の軌道を歩いてゐます。人々は太陽の如く大膽に、太陽の如く赤裸々に生きてゐます。

太陽の如く絶えず燃えてゐます。動いてゐます。そして太陽の如く深く夜と共に眠ります。

×

今夜は濱の人たちにぐ、ち釣りに誘はれました。ぐ、ちのほかにわか、さ、ごも濱ではとれます。久能まで絲と鈎を買ひに行つて日が暮れてから濱に出ました。私は東京の生活にはいつてから二十年、鈎といふものを忘れてゐました。

暮れてしまつた太洋に向つて力いつぱいに絲を投げます。白い波が膝の上までも襲つて來ます。指の先きに二十年來忘れてゐた釣の絲の感觸が目覺めて來ました。

空には星がまたゝき始めました。秋近い空には銀河が大海を橫切つて沖の涯までも流れてゐます。

夜の空と、無限なる海と、その悠久なるなかに投げられた一線の絲と、そして私の魂と。

絲を指頭に感じて海の中に佇立してゐる私は空に對し、海に對し、無限に對して永遠に解き難き或る不思議な謎を聽かうとしてゐることに氣付きます。

そこには社會もない、人類もない、憎しみもない、愛もない。たゞ私は波の中に佇立して　無限の扉に指を觸れてゐることを感じます。

もし私の生命がその刹那に波と共にこの世界から失はれたとしても、私はたゞ還りゆくところに還りついたといふ感じのほか、何ごとをも思はないかも知れません。人間の生や人間の死は無限に直面する時あまりに小ひさ過ぎます。

しかしながら私のこの超人的な考へは直ぐに打ち消されてしまひます。

白い波の帶に沿うて遠い岬の燭が二つ三つ四つと殖えてゆきます。私は今日島田から訪ねて來た友人八木氏のことを思ひます。

靜岡に買物に行つた留守に友人はあの岬の向うから訪ねて來てくれたのでした。久能に廻つて歸つて來たのと、ほ

んの少かの行きちがひで友人とは逢へなかつたのでした。私はかれのあとを追ひました。濱に沿うて松並木の間を走りました。一つの丘を越ゆれば、一つの松林を通りぬくれば、かれの俥を發見することができるであらうと思つたからでした。

私は日ざかりの遠い濱を一人で疲れて歸りました。

私は岬のかなたの友人のことを考へました。もし私たちの生活から親しい幾人かの友人を取り去つとしたら、私たちの世界はどんなにか寂しいことでせう。

私はひたすら故郷の父のこと、妻のこと、姉妹のこと、友人のこと、誰れかれのことを思ひます。それらのすべての人々から離れてたゞ一人旅立たなければならぬ日の寂しさを思ひます。

×

波が荒いせゐかこゝの沖では滅多に往き來する船を見ません。海は暗い雲を負うていつも憂鬱に沈んでゐます。晝日中、沖を通る船を見出してすら懷しさを感ずるほどにものさびしいこゝの濱邊では、夜たまに沖にたゞ一點の灯を發見した時には、私たちは灯が水平線の下に隱れてしまふまで飽かず眺めてゐます。それほどこゝでは私たちは灯といふものに飢ゑてゐます。日が暮れると共にほとんど燈一つ見出すことができません。濱を歩いてたま／＼遠い波の上に灯を見出し　刹那に、私たちは珍らしいものでも發見したやうなよろこびを感じて人を呼びます。

人間がこの世界に生きてゐるといふこと、そして夜になれば燈を點するといふことだけでも、それは立派な尊い仕事なんだといふ感じが湧いて來ます。燈臺守だけが燈を點して人々に喜びを與へるのではありません。岬の見も知らぬ人々の一つ／＼の窓の燈はどんなにか旅人の心を慰めを與へてくれるか知れません。

町の人々よ、濱の人々よ、世界中の人々よ、君等の窓の燈をできるだけ明るく、そしてできるだけ高くかゝげてくれ

給へ、夜の旅人の魂はそれによつてどれほど救はれるか知れない！　私は夜の濱を歩きながらこんなことを考へます。

×

裏の山ではよく瑠璃鳥が啼いてゐます。T氏の家では久能山の御堂の屋根に巢食うてゐた瑠璃鳥の雛を、三羽貰つたといつてT氏が時間をきめて摺り餌をやつてゐます。

瑠璃鳥も早く大きくなつてあのすが〳〵しい高鳴きをせよ。T氏も早く元氣になつてお子さんたちと一緒に東京で暮らすことができるやうになれ。

私たちが知つてゐるかぎりの人がみんな丈夫で幸福であることは何よりも望ましいことである。

×

夜になると寺のお住持さんと奥さんがやつて來て波の音を聽きながら縁端に腰を卸していろ〳〵な話に夜を更かします。蚊が多いので榧を焚いてゐます。

十幾年前にこゝの寺は燃えてしまつたのださうです。その少し前まではこゝの沖から網で曳き上げた一寸八分の黄金佛がありました。それを塗師がすりかへてしまつたのです。塗師は佛罰で失明してしまひました。寺の奥さんはよくそんな話をします。波の音が夜と共に高まつてゆきます。恰度嵐のやうに。

寺が燃えたについては劇的な話があります。隣り村の或る男が一人の女を戀してゐました。女は男から逃げてこゝの寺にかくれてゐました。寺には老僧の他に一人の若い僧がゐました。隣り村の男は、若い僧とその女との間を疑つたのです。男は怒つて寺に火をつけたといふのです。

もうその時の老僧は死んでしまひました。その若い僧にしても今ではかなりの年配になつてゐることでせう。若い娘はその後どうしましたか。

こゝいらでは夕方になると庭の眞ん中に野天の風呂を立てます。私は三十幾年振りでこのごろは毎晩野天の風呂にはいつてゐます。亡くなつた母に抱かれて、故鄕の母の里の野天の風呂にはいつて月を見た記憶がよみがへつて來ます。

子供のころ父や母に敎へられた天の川だの、牽牛星だの、織女星だのを每晩野天風呂につかりながら眺めてゐます。誰でもそのやうな場合には、人間の一生や、運命やについて考へるにちがひない。私にしても考へないではない。しかし諦めといふのでせうか私はそのやうなことを成るたけ考へないことにしてゐます。耐らなく苦しいからです。すべてのことあるがまゝにあるのだ、どんなに考へたところで、もがいたところで人間は人間の運命から一步も遁れることはできない。野天風呂のまはりで鳴いてゐる草の中の蟲と人間とがちがつた運命の下に置かれてあるやうに考へるのからして間違つてゐる。あの草叢の中の蟲が生き、すだき、やがて死んでゆくやうに、そして何の疑ひも抱かず自然そのものゝ懷にすべてを委ねてゆくやうに、私たちの生涯も自然そのものに委ねられないだらうか。悟道とはそんな心の境地ではないのか。私はよくこんなことを野天風呂の中で考へます。

亡くなつた母のことなどを考へながら野天風呂の中にはいつてゐると耐らなくなることがあります。しかし私はそのやうな時、草の中の蟲の運命を考へます。悲しいことも、嬉しいことも、すべてをあるがまゝに感じ、あるがまゝに忍んでゆく、それより他に生き方はない。悲しむことも靜かに、忍ぶことも靜かに。

×

凡夫であり、下根である自分の性をどれだけ押しすゝめて行つたところで、どこまで達せられるものでもないといふことが年と共にはつきり分つて來るやうな氣がします。淋しい氣にもなります。しかし下根は下根なりに進めてゆけば自ら一つの靜かな世界を、小ひさいながらも、見出すことが出來るのではないでせうか。

田舍を廻つてゐて不圖訪ね寄つた山寺の中や、在家などで思ひもよらぬ立派な人にめぐり逢ふことがあります。その人たちは色々な物を讀んでゐます。人生についても眞面目に考へてゐます。自分自身を顧みて恥づかしくなることがあります。

いつの時代でもさうであるやうに思はれますが、都會は決して思想を生かしてはゐない。ほんたうに思想が生きて底強く動いてゐるのは田園であるやうに思はれます。都會の學者や思想家たちが後から後からと流れて來る思想の外殼を捕へて左顧右眄しつゝ持ちあぐんでゐる間に、靜かな田園の人々はその單純な心境に一つ〳〵の思想を觀照しつつ、思想のうちに自分の生活を色づけ力づけつゝあるやうに思はれます。かれ等の受け容れ方は時として間違つてゐるかも知れない。けれども浮薄なところがありません。どこまでも眞劍に自分のすべてを投げ出してかゝつてゐます。それゆゑに恐ろしい底力を持つてゐます。馬鹿力とも思はれるかも知れませんが、それだけ鈍重な迫つた力をもつてゐます。

私たちは色々な哲學を敎へられました。しかし結句敎へられたものは再び敎へた者に還さなければならぬ。私たちは哲學を學ぶことによつて何等かの暗示を與へられるにちがひない。しかし暗示は、私たちの內に、暗示に應答するだけの力を把持してゐないかぎりは何の足しにもならない。

一番悲しいことは私たちの內の力を自分自身に見出すことのできぬ場合であると思ひます。私は信ずる。下根は下根なりにその力を私の內に持つてゐるにちがひない。私はその下根の力を見出さなければならぬ。下根の生活を見出さなければならぬ。下根の聲を見出さなければならぬ。

トルストイの聲を聽くこともいゝことにはちがひない。アシシのフランシスの生活を見ることもいゝことである。しかし「闇の力」のニキタの聲を聽くこと、「罪と罰」のラスコルニコフの罪悪苦を自分の內に、如實に、苦しみ喘ぐ

ことはさらに必要ではありませんか。

私たちの生活で一番恐ろしいことは立派な言葉を人に教へることである。立派な言葉を人に敎へる結果、自分自身を立派な完全なものゝやうに錯誤の上に價値づけることである。たゞしこゝにいふ立派な言葉とは、聖徒でなければ語つてはならぬ言葉を謂ふのであります。

しかし下根の人の生活にも立派な言葉はある。ニキタがニキタのあの恐ろしい罪の懺悔者として神の前に、戰慄すべき言葉を語る時、かれの言葉は最も美しい言葉である。下根の私が、下根の言葉を率直に語ることを得るならば、私の言葉はその時はじめて眞實の言葉でなければならぬ。しかし下根の私はまだほんたうな下根の言葉を語ることができません。

三十にして何の言葉をも見出し得ず、四十にして何の言葉をも見出し得ず、五十にして然り、六十にして然り、そして七十にして何の言葉をも見出し得ずして死なゝければならぬとしても、私は私の下根を、私の性の魯鈍を輕蔑しようとは思はぬ。私は私の下根をあはれむ。私の下根をいぢらしく思ふ。たゞ私の冀望としては下根らしく人生の尊さ、ありがたさ孤獨さを味ひ得んことであります。下根らしき言葉を自分自身に見出し得んことであります。最も深く、最も切に凡夫らしき悲しみと、喜びと、凡夫らしき言葉とを見出し得んことであります。

子供らと嬉戲した白隱や良寬、子供らの爲すところを見よと敎へた芭蕉、弟子の足を洗つたキリスト。あの人たちはほんたうに下根の性のうちに、凡夫の言葉のうちに美しい言葉を見出し得たのでありませう。

まつたく素朴な田園の人々の間にゐると、自分が一番怠惰者で、自惚家であることに氣付きます。

私が眠つてゐる間にもうあの人たちは草を刈つて山を下つて來る。私が長くなつて晝寢をしてゐる枕もとに鎌の音が聞える。私がぽつねんとして夜の空を眺めてゐる時、あの人たちは藁を打つて夜なべをしてゐる。しかもあの人た

ちは疑ふこともなく、訴ふることもなく默々として働いてゐる。

一日に數時間本を讀んだり、ペンを走らせたりして、たゞそれだけで自分の仕事は終つたやうに思つてゐる私自身の生活が恥づかしくなります。

×

二十六夜の月を待つ濱の女たちが宵から御堂に集まつてゐたが、今朝方の二時ごろであつたらうか。それまでお月さまを待つて、海から出たお月さまを拜んで濱の方へ山を下りて歸りました。

あの人たちこそほんたうに詩の心に生きてゐる！　私はさう思ひました。

信濃の旅

この夏京都の町を歩いてゐた日であつた。私は三條小橋の近くで一茶の傳記を店頭で買つた。麩屋町の柊家の一室にこもつてその夜すつかり讀んでしまつた。一茶の故郷柏原をたづねて見たいと思つたのはその時からであつた。三歳にして母を失ひ、十四歳以後ほとんど壯年期を旅から旅へと過さなければならなかつたし、五十幾歳にして初めて妻を迎へ一家の主となつたと思ふ喜びも束の間で、五人の子供は死ぬ、妻には別れなければならぬ、家は燒かれる、中風にはかゝるといつた風なかれの一生は、たしかに舊約ヨブの生涯そのものを如實に經驗したものであつた。

私はこの秋の初め木津川を溯つて大和から伊賀に入り、伊賀上野に芭蕉の故郷塚に詣で、蓑蟲庵を訪れた。そしてなほ一ヶ月經つか經たぬ間に信濃といつても越後境に近い柏原に一茶の故郷を訪ねることになつた。何となく不思議な因緣であるやうな氣もする。

私にとつては信濃は初めての旅である。東京から西は大分旅をした經驗もあるが、東、北といつてはまだほとんどどこも知らない。この夏荒川の畔に調べたいことがあつて舊いころの友人を訪ねて鴻の巣まで出かけたことがあつた。

桑畑や、櫟の林の上に秩父の連亙を眺めながら草いきれする草の道を俥に搖られて荒川の岸に出たことがあつたが、それが東京から北への初めての旅といへば旅であつた。

信濃の旅は私にとつてはまつたく未知の世界への旅でもあり、あこがれの旅でもあつた。

地震後初めて上野から汽車に乘つたが、バラック建ての假ステーションの中には團體の人たちが脚絆姿凜々しく旗を押し立てゝ身動きもならぬほどであつた。

雨が降つて來た。窓の外は眞つ暗であるが、電燈に照らされた窓を打つ點滴が硝子窓にかぼそい白線を描いて闇の中を滑つてゆく。

淺草から向島あたりの燭が雨の空に赤く映つてゐる。まだ燒け焦げたまゝの巨きな建物の雨に濡れた姿が周圍の電燈に浮き出されてゐるのもある。

去年の九月二日、三日……私は田端や飛鳥山の崖の上に立つて、汽車の屋根の上までも群がつて都會を落ちてゆく人々の姿を見つめてゐたことがあつた。

若い女たちがタンクや、石炭の上に腹這ひになつてゐるのもあつた。機關車にも、窓にも、屋根にも人々は獅嚙みついて恐ろしい姿の都會を捨てゝ行つた。

私が立つてゐた草の中には二人の女が燒けたゞれたトタン板を拾つて來て、方四尺にも足らぬほどの小屋を作つてゐた。その日も雨催ひの日であつた。最初は女であることすら氣付かなかつたほど、かの女等の顏も髮も土と煙に汚れてゐた。年かさの女の方は細帶一筋であつた。二人とも跣足であつた。

恐らく妻と子を火中に見失つた男であらう。淺草の見當の炎を見つめてゐたが、何かつぶやいては憂鬱そのものゝやうな顏をしたり、やがて笑つたりした。

誰も彼れも見失つた親や兄弟や子供たちを探してゐるのであつた。長靴を穿いて、たゞ一枚ちゞみのシヤツとズボンに、肩の水筒を頼りに、行方知れずなつた老人を探し歩いてゐる私自身の姿をその人たちの間に見出した時、私は草の上にしやがんでしまつた。

「淺草猿若町の××××」かういつた文字を書きつらねたボール紙や、白い布を竹棹にくゝりつけて呆然として歩き疲れてゐる人々を見るたんびに、幾度涙がこみ上げて來たことであらう。

誰も彼れもがあの時は、隣人のために泣くことができた。

夜の東京の明りが雨雲のなかに消えてゆく。

私は明日の朝、信濃の丸子といふ町の講演があるので、頭から外套を引つ冠つて眠ることにした。汽車が急に停つてがた／＼と揺れるたんびに、地震かと思つて眼をさましたことも二度や三度はあつた。まだ去年の地震のおびえが私の心にそれほど深く喰ひこんでゐるのであつた。

眞夜中であつた。汽車はどこかの寂しい停車場に止つてゐた。妙義山に登る人々の群がなだれを打つてプラットフォームを出て行つたのであつた。闇のなかに提灯が動き、喇叭が響いてゐた。

夜が明けかゝつてゐた。輕井澤といふ驛を聽いた。霧が板葺きの屋根をやはらかにつゝんでゐた。霧の下を飛び飛びに別莊風な家が草枯れの中に建てられてあつた。痩せた針葉樹が高原の涯を縁取つてゐた。薄い霜が廣いキヤベツ畑をほの白くつゝんでゐた。

沓掛、小諸、そんな名は私にとつてはかなり久しい間いろ／＼な聯想を抱かせてゐた。私は今眼のあたり沓掛を見、小諸を見た。淺間は雨雲につゝまれてしまつて裾野の秋すら見ることはできなかつた。

信濃は高原の國である。コスモスの國である。野菊の國である。高原であるせゐか、空氣が澄明であるせゐか、山が美しいせゐか、私は信濃で見たほど美しいコスモスを見たことがない。信濃で見たほど美しい野菊を見たことはない。

信濃で見たコスモスは可憐さのうちに山國の人のねばり強さを持つてゐる。山の小ひさな鐵道官舍の垣根や、農家の庭をかざつてゐるのは寶石のかゞやきを持つた高原のコスモスである。牛小舍のまはりにも、堆肥の蔭にも、石ころ道のほとりにも、小學校の窓の下にもコスモスがかゞやいてゐる。みがき上げられた青空と高い險しい山脈を背景として。

私はまた信濃の高原の野菊の美を忘れることはできない。草枯れの中に自らなる品位と可憐さと虔しさとを持つた野菊の美は、信濃の高原を旅する人々にどれほどフレッシュな慰めを與へるか知れない。二坪にも三坪にもあまるほどな白い雪のやうな野菊の群を、淡い霜に掩はれた草枯れの中に見出す。

沓掛、追分、小諸……高原の町々はコスモスと野菊につゝまれてゐた。

小諸の町といつても、停車場のプラットフォームから爪先上りになつた小諸の町を覗いたばかりである。汽車から下りてゆく人たちの後ろ姿も何となしに、山國の寂しさを聯想させる。

この夏四國に旅した時も、私は亡友Tがかつて父の死を悲しんだ海岸を見た。

この秋、私は信濃に來て再びTのことを懷はなければならなかつた。

Tと私が二人で武藏野の中の古い森につゝまれた寺の中に自炊生活をしてゐたころであつた。そのころは武藏野の中はまつたく寂しかつた。到るところに櫟や欅の林があり、家を見出すことすら滅多になかつた。思ひもよらぬところに水車小屋があつたりした。庭には夜になれば梟が鳴き、秋になれば終日鵯やかけすが鳴いてゐた。

Tは父を葬つた足で四國から東京へ歸つて來た。Tはそのころ或る役所の事務員に雇はれて、士官學校にはいる準備をしてゐた。

八月の末であつたか、九月の初めであつたか、Tは急に旅をするといひ出した。私はかれを一人で旅に出すことは不安でならなかつた。それはTの胸に數年來苦しい影を刻んでゐたかの女の結婚が決つて間もなくであつたからであつた。

Tと私はその日も武藏野を歩いてゐた。Tはたうとう一夜きりで歸るといふ誓ひを立てゝ郊外の汽車に、私から逃げるやうにして飛び乘つてしまつた。

幾日經つてもTは歸つて來なかつた。數日後であつた甲州石和から鉛筆で書いた葉書が一枚屆いた。かれは自殺の場所を探して歩いてゐたのであつた。

葡萄畑にしやがんで、亡くなつた父のことを思つて泣いたことを書いてあつた。

さらに數日後私は小諸からのかれのたよりを受け取つた。

私は今二十年前の小諸の町を眺めてゐる。柔かな雨が淺間をつゝんでしまつた。板庇の上の石を濡らしてしまつた。

Tは淺間で死ぬつもりであつた。しかし小諸の町の牧師さんに救はれて淺間を下つて來た。私はその牧師さんの教會の屋根でも見たいと思つたが、わからなかつた。

Tは乞丐のやうにやつれて私の家に歸つて來た。

父を持たず、生みの母を持たなかつたTはほんたうに氣の毒であつた。

淺間で救はれたかれはやつぱり一度は死なゝければならなかつた。それから十年後Tは千葉のあの懶いやうな曠野の中で自殺をしてしまつた。かれはかの女を忘れえないで死んだ。

Tも死んだ。或る男に嫁いで行つたかの女も數年前病んで死んだ。

Tもかの女も私も幼な友達であつた。そして私一人だけが生きのびてかれ等のことを考へながら旅をつゞけてゐる。

コスモスと野菊と向日葵と蓟とにかざられた淺間の裾をめぐつて汽車は走つてゐる。

×

信濃の高原を走つてゐる間に私はバアンズの詩に描かれてゐるスコットランドを聯想せずにはをれなかつた。

信濃はバアンズの歌ふハイランドである。そこには可憐なる野菊があり、朴々たる小作人のコッテーヂがある。柔畑の野鼠が棲んでゐる。

低迷する山腹の雨雲を分けて一臺の自動車が走つて來た　女の運轉手である。眞つ赤なジャケッを着て、黒ずんだ袴を穿いてゐる。赤いジャケッの色がいかにも高い山の色と美しい對照をなしてゐる。

信濃の空はまだ秋のせゐか想像してゐたよりはずつと明るい感じを與へた。けれども峥嶸として聳え重なり合つてゐる無氣味なほど高い山のけはしさは旅人をしてむしろ或る種の冷たさ嚴さを感じさせる。肌をあらはにした黝い岩山がつゞくせゐか、或ひはあまりに急峻なためか、そこには暗い孤獨さが漂うてゐる。

長野の町に着いたのは夕暮れであつた。東京を出る時、信濃は寒いといふ話を聽いてゐたので冬の外套を着て行つたが、東京の十一月末の寒さであつた。俥を走らせてゐると指先が冷たくなる。雨が降つてゐるせゐでもあらうが。

枝からもぎ取つたばかりの林檎が小山のやうに時雨の街の店頭に積みかさねられてある。

お座敷に呼ばれた妓であらう雨の中の甃石を横切つて、寺町の方へ小急ぎに急いでゆく。

夕暮れの善光寺の大伽藍の中はさすがに暗い。夢に見る世界のやうに廣い、暗い、高い御堂をめぐつて幾抱へもありさうな丸柱が奥へ奥へと並んでゐる。堂を埋めて香煙が漂うてゐる。そこには一つのランプも、電燈もない。蠟燭の燭のみである。大伽藍の闇をかすかにゆれながら燃えてゆく蠟燭の光りの中を蠢いてゐる人々の姿は、現世の物の影とも思はれぬまでに暗い。

善光寺の朝のお勤めは西洋の物語に讀む彌撒の勤めを聯想させる。

朝まだ暗いうちに宿の男に起されて、石疊みの街を仁王門の前の僧院へゆく。そこには日本中の國々からこの山の中の町に集まつて來た人々が御堂を埋めてゐる。夜がほの〴〵と明けて來る。

若い尼宮さまが朝のお勤めのために本堂まで二三町の甃石の道を歩かれる。後からは一人の男が日傘をさしかけてゐる。善男善女は霜の上にひざまづく。若い尼宮さまはひざまづいた善男善女の一人々々の頭を、その御珠數で撫で

てゆかれる。私たちは大伽藍の西の廊下にひざまづいて尼宮さまを待つた。

暗い大伽藍の中をかすかに照らす蠟燭の炎の下で朝のお勤めが一時間くらゐもつゞくであらうか。

西の廊下にたゝずんで尼宮さまの御出ましを待つてゐる間に、私は不圖いたましい鳩の死骸を見た。

大伽藍の壁、軒をめぐつて一面に網が張られてゐる。寺の鳩に汚されないためである。

たま／＼網の裂け目を見出して網の中に飛び込んだ一羽の鳩は終に出口を失つて、網にかゝつたまゝ死んでしまつたのであらう。

高い御堂の軒の網に引つかゝつたまゝ飢死してゐる鳩の姿を眺めてゐる間に私はウオルター・ペーターの作品の中に描かれた一羽の鳥の話を思ひ出さずにはをれなかつた。

彌撒のお勤めからの歸るさに、畫工アントニイ・ワツトウに別れた女が、高い御寺の屋根を見ながら抱いたのは「もしあの高い窓から一羽の鳥が御堂の中へ飛び込んだとしたら、そして出てゆく道を失つたとしたら、はたして誰がその鳥を救ふことができやう？」といふ疑であつた。

私は今眼のあたり不運な鳩の死を見た。

鳩ははたしてかのアングロ・サクソンの祖先たちが傳說として持つてゐた闇の中の鳥のやうに、御堂の光りにあこがれて飛びこんで來たのであらうか。王の華やかな饗宴の燭を眼がけて飛びこんで來たのであらうか。

或ひは恐らくさうでないかも知れない。單に塒をもとめるために軒の下に近づいたのかも知れない。しかしいづれにしてもかれは何ものかをもとめんがために軒の下に近づいて來たにちがひない。かれはそのもとむるものゝために生命を捨てゝしまつた。

うすれゆく法燈の光りを浴びながら死んでゐる鳩の柔毛を、朝まだきの山風が、かすかに搖がせてゐるのもあはれ

である。

朝のお勤めをすまして再び甃石の上を三人の若い尼僧にまもられながら僧庵へ歸らるゝ尼宮さまを送つて、仁王門に出た時、私はさらにそこに淡い霜の上に干からびて死んでゐる一羽の鳩を見た。

×

雨が小止みなく降つてゐた。

直江津行きの汽車には遠足の子供たちが雨に濡れて頤へながら窓の外を眺めてゐた。

雨に濡れた嶮しい山が遠ざかり、信濃川に沿うた高原の平野が展けて來た。山は雨雲に深くとざされてゐた。

長野から越後境に近づくにつれて家の形も面白く、屋根の勾配、屋根の形も一層美しい感じを抱かせる。雪崩を防ぐために屋根の上にしつらへられた雪よけを見るだけでも雪國に來た感じが湧いて來る。大和で見た屋根は急な勾配をしてゐてゴシック風な建築の美と落ちつきを想はせたが、こゝの屋根はそれにくらぶればもつとゆるやかな勾配で、さらにゆつたりとして、軒先きがかなり長い。大まかで、いつたいの屋根、壁、門、庇、煙出しといふものゝ線がシンプルであり、明るい均齊を持つてゐる。雨に濡れた黒い屋根と白い壁の色のコントラストもきはめて繪畫的である。山に沿うた農家の庭にはコスモスや、向日葵や、ダリヤが殊に美しい色を見せてゐる。草の中には月見草と野菊が。

中二階の窓に十も二十もの黄色な或ひは眞つ赤な南瓜が並べられた家もある。

丘から丘へとつゞく林檎畑を見るのも私にとつては初めての經驗であり、嬉しかつた。林檎が、伊豆あたりの乙女椿を想はせるほどに眞つ紅に、枝もたわゝに實つてゐた。私は山の林檎畑が近づいて來るごとに窓を明けて見た。

アカシヤの並樹には三羽の鴉が雨にそぼ濡れてゐた。山といふ山は櫨や白膠木の紅葉につゝまれてゐた。紅葉の山をかすめて雲が飛んで行つた。

一茶が父に送られて江戸に出た時、一茶の父は柏原から牟禮の三本松まで送つて行つたと傳へられてゐる。牟禮の町も雨に降りこめられてゐた。ステーションには山から運ばれた薪の小山が、すでに冬の準備を急ぐ山國の人々の心を描かせてゐた。

柏原の驛に下りて、直ぐ前の旅籠屋で蕎麥をあつらへて休むことにした。疊二枚ばかりを仕切つた爐にはもう炭火が注がれてゐた。土間にはいつて來た旅人は爐の中に草鞋穿きの足を投げ入れた。黑姫山登山口と記された道しるべには三頭の馬がつながれて雨に濡れてゐた。戸隱山講中の奉納手拭などが軒の風に吹かれてゐるのが、遠い旅心を打つ。

柏原の町は北國街道に沿うた小ひさな宿場である。爪先上りの舊街道が町の眞ん中を南から北へ走つてゐる。道の傍にはやさしい菊が咲きこぼれてゐるところもあつた。

雨の中を一茶の家を訪ねてゆくことにした。

一茶の家もこの北國街道に沿うた農家とも商家ともつかぬ煤けた家である。暗い土間にはいつて行つた時、三人の老媼と一人の若い女と、作男らしい若い男と、赤ん坊がくづれかゝつた壁の前に坐つて食事をしてゐたのを見た。豆腐を作る石臼だの、豆腐を容るゝ手桶だのが暗い土間の眞ん中に置かれてあつた。蠅が眞夏のやうに元氣よくしとしとつた部屋中を飛んでゐた。

豆腐を作る土間の隅に馬小屋が仕切られてあつて、小ひさな馬が路地の方へ首を出してゐた。路地に沿うて馬小屋の前を背戸の方へ少しばかり歩いたところに、一茶が晩年を送つたといふ籾倉が一軒菜畑の中に立つてゐた。

異母弟の仙六と爭つた母屋はすでに一茶の生存中に燒けてしまつたので、今殘つてゐるのは小ひさなその籾倉だけ

である。籾だの、蠶のかごだの、馬秣だのが籾倉の中に積み重ねられてあつた。一茶が生きてゐたころは北の方の壁に窓がつけてあり、土間には板が敷いてあつたといふことである。

籾倉の裏は一町ばかりの桑畑や、蕎麥畑をへだてゝなだらかな山になつてゐる。そこにはかれの恩人であつた柏原の本陣の中村家の墓がある。こんもりと茂つた森につゝまれて。

「不思議なり生まれた家で今日の月
露の世は露の世ながらさりながら
名月や膳へ這ひ寄る子があらば
小言いふ相手もあらば今日の月
故郷やよるもさはるも茨の花
ともかくもあなたまかせの年の暮」

一つ〳〵が凡人らしい凡人の腸を絞つた句である。一茶の生涯を見る時、私たちは運命の冷たさについて人ごとならず考へさせられる。

五十二にしてはじめて曲りなりにも一軒の主となり得たかれの凡人らしい喜び、子を失つた凡人らしい親としてのなげき、あきらめ、すべてがそこの桑畑の中の三間幾尺のあはれな倉の中の世界でうたはれたのだと思ふと、何といふ人生の偉い苦しい記念碑であらう。

私は郷社諏訪神社にも行つて見た。恐らくそこではかれは旅から來た角力を見たり、野芝居を見たりしたことであらう。

畑の中のぬかるみの道を横切つて一茶の墓に詣でた。丘の上の深い木立の中の一茶の墓のまはりには白い小菊が咲

いてゐた。
誰の試みであらう？ 高い、結構過ぎるほどの碑が一茶の古びた小ひさな塚の後ろに立てられてゐた。さらにその傍には新しい標木さへ樹てられてゐた。
墓はたゞ南無阿彌陀佛と刻んだあの小ひさな墓一つでいゝ。それでこそ尊い。
私は野菊の咲きみだれた丘の上に立つて暮れてゆく柏原の小ひさな町を見た。幾つかの鬱々とそゝり立つた木立の間を繞うて廢墟のやうな町が黒く寒い雨の底を流れてゐる。
寺の屋根が見え、秋の色につゝまれたなでへが見える。
一茶がまゝつ子としてさげすまれつゝ泣いた道、軒端。一茶が里に歸つた妻を待ちあぐんで立ちつくしたであらう小山、失つた幼兒を葬りに行つたであらう草路、みな昔のまゝである。
黒姫山も、妙高山もこの小ひさな破驛を脅かすかのやうに黝い巨人の影を夕暮れの空に聳え立てゝゐる。
柏原の町を黄昏の野尻湖の方へ歸つて行く馱馬の群には、すでに越後近い冬の寒さが迫つてゐる。

心より心へ

自序

未來といふものに對して、私は色々の疑を持つてゐる。未來は私の心には決して明るいものとしては映つて來ない。薄明の底に一人一人が低頭れつゝ無限の時を歩いて行くやうな氣がしてならぬ。

未來に對してはつきりした信仰を持つことのできぬ私には、現在の世界ほど尊く、懷かしく、靈しきものはない。

しかも人は餘りに早く死ぬ。私たちの死の幕が卸されぬ間に、私たちは貪るほどの心で、生けることのよろこびと感謝と苦惱とを味はゝなければならぬ。

一葉の落ちることにも限りなき驚異を覺ゆる私の魂は、今生きつゝあることに對して淚ぐましきほどの嬉しさを感じてゐる。

驚異に生き、驚異にわなゝく貧しき魂の寂しい、弱い、しかしながら嬰兒のやうな心をもつて、生くることのよろこびと、やがて訣れ行くことの儚さとを私はうたひたいと思ふ。

大正七年十二月九日

著者識

ア、サア・シモンズ

民衆または人類の名によりて立てる藝術、愛または正義の標號の下に絶叫せる藝術、人生を以て最も嚴肅な生命の祭壇としようとする藝術……このやうな種類の藝術は今日世界の思想界の最も力強い主潮をなしてゐる。そしてこれ等の藝術の中心には何時も愛、正義、善、永遠、不死といふ觀念が色濃く織り込まれてゐる。男性的な藝術である。今日の日本の文藝界の主潮をなしてゐるものも、この種の藝術觀であると見て差し支へはあるまい。

けれども私たちの僞らない心を切り開いて見たならば、存外私たち自身の心の奥底には、あの騒々しい巷の叫び聲に不滿を感じてゐる何ものかゞあるのではあるまいか。巷に出て民衆のために角笛を吹くものは吹け。しかし私たちのうちには、少くとも薄暗い祭壇の前に跪いて自分一人のために先づ惑ひ、先づ疑ひ、先づ恐れ、先づ祈らんとする敬虔な人々がゐないであらうか。私はその一人としてア、サア・シモンズの詩を面白いと思ふ。

×

シモンズを讀むで直ぐ聯想さるゝのはオスカア・ワイルドである。しかし齊しく快樂を中心とし、美を中心としてはゐるが、その生活方法の主張または肯定する力といふやうな方面から見てシモンズは甚だ女性的である。かれは肉の生活をたゝへる。けれどもかれには「肉は靈を救ふ」といふやうなオスカア・ワイルドの大膽さはない。尤もかれは靈の生活に對してどこまでもたゞれたやうな肉の生活を主張する。けれどもそこには哀願的な調子がある。靈は肉に向つて「罪深き肉體よ、今悔いよ、肉體よ、汝が死なぬうちに悔いよ」と命ずる。肉は靈に向つて答へて「苦い、やかましやの靈よ、肉がこのやうな生き方をするのを赦せ、(The Dial gue of the Soul and Body) と言つてゐる。シモンズの

肉は靈を支配するには餘りに弱い。けれどもかれが殆んど戀愛を中心として生きつゝしかもドリアン・グレイほどの白熱的な戀愛に生きることもできず、接吻の香にあこがれつゝも、「遊蕩兒」のロード・ヘンリイほどな道德に對する强い反抗を持つことのできないところに、却つて一層複雜な氣の弱い、そして頭(ブレーン)の支配を逭れることの出來ぬ現代の耽美主義者の一面をば私たちは窺ふことができるのである。

そはともあれワイルドにせよ、シモンズにせよ、更に溯つてウォルター・ペーターにせよ、これ等の美を中心として生きてゆく人々が、その晩年に於いて極めて聖僧的な、寛やかな愛につゝまれた生活、または人類的悲哀を中心とした生活にはいつて行くといふやうな傾向を持つてゐることは興味のある問題である。更にかれ等が最も博い愛、――それは人類をも、自然をも含んだ愛！　を以て最も完全な自己完成であり、唯一の生活法であるとするに至つたといふことはまた興味ある問題である。しかもその愛は空疎なかの人類愛の主張者たちのそれに比べて極めて純一な、實感味の豐かたものである。

×

殊にシモンズの詩を讀むで愛――戀愛とは別な――といふ言葉が何の僞善もなく、衒ひもなく、少しの無理といふ感じもなく受け容れらるゝことは私にとつてうれしいことであつた。かれの愛には世の說敎者たちが叫ぶやうな理窟つぽい、不自然なところは一つもない。かれの思想が何時も灰色の霧のなかゝら洩れて來る蠟燭の火のやうな感じを抱かせるやうに、かれの愛は何となしに溫かい、極めて自然的な感じを起させる。何故かれの愛はそのやうに自然的なものであらうか。私はこの短い論文で主としてかれの自然的な纖美な愛が生まれて來たプロセスに就いて考へて見たいと思ふのである。

一と口に言ふならばかれの愛は悲しみから生まれた愛である。寂しみから生まれた愛である。頭(ブレーン)から割り出された

愛でなくて、心から流れ出た愛である。大嵐の夜、羊欄のなかに顫へてゐる小羊たちの心には、暗い力に對する恐怖や不安があるばかりであらう。そのやうな時かれ等の心には何の惱みもない。たゞ寒さに耐へて生きようとする一念のみがある。かれ等はひた抱きに抱き合つて顫へてゐる。やがてかれ等お互の肉體の快い溫味が感ぜられるであらう。シモンズの愛はその嵐の夜の羊と羊との間に通ふ溫味である。

夜を泣き明かしたものでなければ朝のよろこびを感謝しつゝ受け容るゝことはできないやうに、眞實に人間、自然、すべてのものを懷かしむ心、いたはる心は最も深い人生の暗さと儚さとを知つたものでなければ抱くことはできない。この意味で十九世紀後半からの耽美主義者のうちに、却つて私たちは人間らしい人間の自然的な愛の實感者を見出すことができる。

×

「刹那々々に美なるもの、生けるもの、光被せらるゝものを……靜かに味到する時人生は生くるの價値があり、人生それ自身で滿足すべきものである。」これはシモンズがウオルター・ペーターを批評した文中の言葉であるが、恐らくこの人生の見方はシモンズ自身の人生の見方であらう。そしてかれは更に「ウオルター・ペーターは老年になるにつれて、嚴密なエピキュリアンの教義に更に義務といふストイック風な意味をば快樂に對して附け加へてゐる」と言つてゐるが、シモンズ自身、廣い意味の愛といふものを取り容れて、かれの美生活を廣くし、深くしようとしてゐる。更にかれが舊教の寺院に行つたり、または聖アウガスティンやブラウニング等に興味を持つてゐるといふやうなことも面白い暗示を與へてゐる。「過ぎ行く時の刹那々々に最高質を與へる」といふことが、かれの生活に對する出發點であつた。この刹那の現實生活の主張はいふまでもなく過去に對しても、未來に對しても光りを見出すことのできない頽唐的、厭世的な思想と、現實生活に對する餘りにデリケートな官能とから生まれてゐる。かれは普通の人々に幾倍

した詩人らしい鋭い官能を持つてゐる。刹那々々にかれのデリケートな「靈の手」が觸れる現實の面は餘りに美しく、餘りに溫かく、餘りに輝いてゐる。脚光の前の舞姬、街の歌ひ手、阿片の煙、薔薇、接吻、灰色、綠色、靑色の黃昏、白い夜、柔かな手、牧場、明け方の雨の紗、街の光、後朝の黑髮の香、暗と金色の巴里の夜、霧の底の倫敦、涙に濡れた戀の夢、すべての刹那的な現實はかれの魂を溶かす魅惑である。しかも現實刹那の歡喜を直感することの鋭いだけ、かれはまた現實の餘りに過ぎ易きことを感ずる悲哀も人一倍である。「女の美、かの女の接吻の甘味」もかれにとりては死の「永遠の殘忍」に脅かされてゐる。女の豐麗な肉體の美には何時も「墓場の蛆蟲」が豫覺せられてゐる」

「この世界には確かなるもの一もなし
戀を恐るゝな。
世界の水は變るべし。
世界の山は頽るべし……。
時は強く戀は弱し……」(A Song of Love and Time.)

餘りに鋭く流轉し易き現實を見ることができ、そして未來に對して希望を抱くことのできぬかれにとりては、生きて行くたゞ一つの道は、現實の短い時の間に出來るだけ多くの生活面に觸れることである。本能的に賦へられた刹那の人間力を燃燒せしめることにある。燃燒せしめさへすれば宜い。かれの人生には目的はない。

「神は惡しきものを造り、善きものを造る、
神は惡と善とを造る、何の注意をも拂ふことなく……
人間よ、この世界を汝自身の創造たらしめよ、努力せよ……
躊躇なしに働け、よろこびつゝ、されど問ふなかれ

事の善惡を、人間はたゞ一事をなすべし。
かれが爲し能ふ一事を……」(Hymn to Energy.)

神は最初から目的なき盲目的な創造をつゞけてゐる。神には善惡の差別はない。「神が造つた大空の星は必ずしも神が造つた蛇の衣より美しくはない。人間は空の色を人間の手によりて染め直さなければならぬ。」かくして人間自身世界の藝術家となり、創造主となれ、この外に生くる道はない。

×

刹那的な生活の最高な、最も強い緊張と純一性とを保つものは戀愛である。かれにとりて最も端的な實感の生活は戀愛である。

「唇も何かせむ。もし口つけせらるゝことなくば？
眼も何かせむ。もしたゝへらるゝことなくば？
指の美しきも何かせむ？
腰の細きも何かせむ？
髮の柔きも何かせむ
もし戀の絡むことなくば？」(Violet. IV. Song)

かれにとりて人生は戀の他にない。脚光の前の衣摺れの音、紅寶石の盃に盛つた夢の酒にのみ生命の歡喜がある。眼まぐるしいまでに戀へ、踊へ、抱け。

「戀せよ、我が心。今はたゞ戀せんのみ。
他に何ものをもとむる勿れ、たゞ一つのねがひにて足れり

一刹那、汝のうちに溶けなば。
一刹那を堅く握れ、世に永刧の命あるなし。
過去もさなりき、未來もさならん。
噫、心よ、現在を堅く握れ。」(An Epilogue to Love.)
永遠の心靈の生活を信ずる人々にとりては、私たちの人生は更により光りある次の世界のための準備と見られてゐる。メエテルリンクは死こそ生命の解放であると見、トルストイは現實界の生活は永遠の心靈の殿堂を築かんとする神の大業の一階段に過ぎないと見た。トルストイにとりては肉は心靈の殿堂を築くべき足場に過ぎないものであつた。かれ等は個的生命の無限なる生長を信じてゐる。かれ等は幸福な人々である。
肉の生活、しかもそれは刹那にして滅び行く幻影である。このやうな肉の上に築かれた生活の肯定者にとりては、未來は餘りに暗いものであり、望みなきものである。現實にのみ即せんとする心の强ければ强いほどかれの未來は光りなき虛無の世界となる。かれの詩 "The Fool of the World" は豐麗な肉の耽美者の死の見方をよく現はしてゐる。
即ちかれによれば人生は死の祭壇である。しかも人間は死に面して死とは何ぞやといふ疑問の聲を發することもできない。死は問ふだに餘りに恐ろしい事實である。それならば生は何うであるか。生は幸福ではない、生は終りを持つてゐる。生は弱きものであり、無智なものであり、盲目な苦痛である。しかもこのありがたからぬ現實の生活すら實は死の支配と制限の下に僅に充たされてゐるのである。結局はこの少時の光榮も喜びも草の花のやうに散つて行かなければならぬ。そして滅び行くすべてのものがやがて受け容れらるゝ處は死の、、、無智な暗い掌である。死こそ人間が必ず持たなければならぬ唯一の友人である。
それならば死そのものゝ本體は何であろか。シモンズは私たちと同じやうに死そのものについては何も知つてゐな

い。かれの心象に映つた死は人間のために平和な寢床を拵へてくれる鍬と、棺と、美姬ヘレンの肉體を貪る蛆蟲のみである。死の女神は七つの鈴を持つてゐる無智な女性に過ぎない。かの女自らを世界の馬鹿だと呼んでゐる。そしてかの女自身何故に鈴を振らなければならないかをすら知つてゐない。しかもかの女の鈴の音が一つ鳴るごとに世界の人間がかの女の掌に飛び込んで行くのである。かの女はほんたうに世界の馬鹿である。

シモンズにとりては生も死も免るゝことのできぬ運命である。

そして生も死も何れも不幸なものである。たゞ生には光りがある。死には闇がある。生には不安がある。死には休息がある。二つの世界の幸福を秤にかけて見てもどちらともつかぬやうにおもはれる。この詩のなかに三人の男が出て來るが、靑年で死んだ男はたゞ生きてゐた日の光りだけが忘れられない、それが悲しくもあり、苦しくもあると言つてゐる。中年で死んだ男は嬉しくもない、悲しくもないと言つてゐる。老年で死んだ男は死の方がなつかしいと言つてゐる。この三人の死者の言葉を考へて見ると、そこにまた耽美主義者の生活の肯定が「五月の朝の薔薇」とも見るべき靑春の上にのみ置かれてあることに氣付く。中年者の理智的な生活は無意義である。老年者の戀愛なき生活は死よりも劣つてゐる。

×

詩人バアンズは冬の日に巢を追はれた野の鼠を悲しむだ。けれども同時にかれは歎ふてゐる。

「されど我に比して汝は一層幸福なり！
汝にあるものはたゞ現在のみなり。
されど噫！　我は後を顧る
そこに陰慘な光景を見る！

さらに前方を見あたはざれど
我は豫想しつゝ怖る！」

バアンズには過去も苦しかつた、現在も苦しく、そして人間の想像力によりて推し量る未來も暗いものであつた。しかもバアンズはその三つの苦痛を荷ふことが人間の運命であると思つた。「人間は悲しむべく作られた。」かれはいたましくもかくして運命の敬虔な使徒たらんとした。けれどもシモンズにはその過去の苦痛を顧ることは餘りに苦しいことであつた。かれの餘りにデリケートな心はその重荷を負ふに耐へない。かれは戀愛のよろこびの刹那にその戀人を捨てゝ更に第二第三の戀を見出さうとしてゐる。かれにとりては刹那の戀愛を間もなく過去のうちに見出さなければならぬことは耐へがたい苦痛であつた。それ故にかれは刹那の心の振蕩のうちにすべての宿命的な悲哀を忘れようと試みた。

かくしてかれは未來からも過去からも遁れようとしてゐる。

現在を摑めば宜い。戀人は現在にのみ醉へば宜い。人間に賦へられた唯一つの生命實感の刹那、または人間が所有し能ふ唯一つの時は現在の他にはない。

然らば現在とは何であるか。悲しむべし人間には實はその現在すらも與へられてゐないのである。現在は幻影に過ぎないのである。戀れるやうな戀愛は實は將來せんとするものに對する憧憬であり、戀愛後の吐息は旣に過去のものとなつてゐるのである。

「未だ生まれざる希望、
遠い過去に滅びしもの」

これが人生に於ける戀愛であり、現在と想像せられてゐるすべての歡喜である。かやうに考へて來ると人生には一

の現實といふものもない。シモンズにとりてはすべては幻影に過ぎない。それはなやましきほどに心靈の底を搖り動かす大歡喜の幻影である。生活とは夢の花に過ぎない。藝術とは「心靈の夢」の香に過ぎない。人生は到底夢の連續に過ぎない。苦い涙を忘れ、苦い過去や未來を忘れてひたすら現實の夢にのみ心靈のすべてを投げこむことがたゞ一つの生き方である。卽ちかれの現實生活は現實の夢に陶醉することである。かれは自ら「夢の牢獄」をたづねて、そこをかれ自身の隱れ家としてすべての苦痛や悲哀を忘れようとしてゐる。

「我が心眠りて、夢は醒さめず、
我が千々の思ひは風に吹かるゝ煙の如く搔きみだされつゝ顫きつゝ、
我が心傷むべきに我が心傷まず、その何故なるを知らず。

何故に我れ泣きしや、我れ酒を飮みしや、我れは忘れたり。
家の燈は點されたり。窓掛は引かれたり
我は鳥の泣きしを、また梢の搖げるを忘れたり。

思ふなかれ、我が心よ、これ等のものを忘れよ、かれ等は空し。
ひとたび夢みられたる夢の再び夢みらるべきや?
我等の心にとりて眠りつゝ、苦しみを忘るゝことより幸福なるものありや?」
(Regret)

眠りつゝ、夢みつゝ、すべての人間の悲しい運命を忘るゝより善き生活はない。この刹那のみが眞の人生である。過

ぎ去りし幻影を追ふて心を傷むるは、愚なことである。

「たゞ少時戀するは宜し、戀せらるゝは宜し、
やがて忘るゝは宜し、忘らるゝは宜し……
明日？…… 明日、さようなら、さようなら。
涙なくて別れむ、逢ひし日の微笑もて。
遊戯の時は過ぎぬ。」(Love in Spring)

かれは戀のコスモポリタンである。かれは一人の戀人を守つて戀の自然的幻滅を待つには餘りに弱い心を持つてゐる。かれは餘りに早く戀愛の悲しい運命を見透してゐる。

砂丘の上に一枚の天幕が張られてゐる。そこにはジプシイの戀の國がある。雲雀はかの女の戀の夢を眼さます。戀人は終日、日の光りを吸ふ。戀人は家に束縛せらるゝことがない。かれ等は昨日の戀の屍を嘲笑しつゝ新しい戀の世界をもとめて歩く。かれ等は鳥のやうに自由に終日を輝かな太陽の光りに浸されつゝ流轉漂泊の戀を享樂する。

(Gypsy Song)

戀のコスモポリタンは「餘りに多くの女を愛した。」けれどもかれは一人の女に向つて言つたことがある、「私が捨てられて歸つて來るとき、お前はまた私を受け容れて呉れ。」

かれの戀愛には何の執着も嫉妬もないやうに見える。けれども私たちはかれがその戀人から離れ行く刹那にその笑顔のうちに、却つて涙にまさる人間的苦惱を推察することができる。かれは戀を得たる刹那に戀人と訣れようとする。けれどもかれは戀人に向つてまた何時かは「私を受け容れてくれ」といふ。かれの過去を忘れんとする心は諦めがたい諦めである。

×

かれの現實刹那に生きようとする心は戀愛の歡喜の他に更に自然界に對して、或ひは不運なる人生の道伴れに對して純一な愛となつて現はれた。

「微風だになし
最後の木の葉は梢にあり、
葉は梢より落ちたり、
我は樹下に坐しつゝ落葉を凝視す
細き蜘蛛の巣は空にかゝりてあり
小ひさき灰色の雲過ぎ行く、
靜寂の庭より言ひがたき幸福の
我がうちに偸ひ寄るを感ず。」（Autumn）

かれはまたその著 "Cities" の序にかう書いてゐる。

「私にとりて都市は人間のやうなものである、かれ等はそれ〴〵に靈を持ち、特質を持つてゐる。……そして人間の間では愛が——恐らく憎もさうであらうが——靈から靈へのみ示現するやうに、都市の靈はまた都市を愛する人にのみかれ等自身を示現する……」

脚光の前、酒場の人ごみのなかに最も人間的な享樂を追ふて歩いたシモンズは、また「素絹の空から織り出された秋の香のなかに浸されて、ものうき眼ざめのなかに」かれと萬有とが一如に溶け合つてゐることを感じてゐる。かの梢と灰色の雲と鳥の唄とかれ自身とが同じ血管の脈搏と、同じ友情のよろこびとを感じて居る。女より女へと靈の香

に醉うて歩いたシモンズは、また自然のなかに夢の香を見出して居る。こゝに自然の靈とかれの靈との愛の關係が生まれてゐる。「靈の門は靈の手で叩かなければならぬ。」自然の愛の心は人間の愛の心によりてのみ切り拓かれなければならぬ。

シモンズの戀愛、耽美の底に流れてゐる近代人的な絶望――未來にも現在にも過去にも希望を持ち得ぬ――そしてその絶望から生まれて來る回避的な享樂主義について、かれを見ると同時に、かれが人間や自然に對して感じてゐる愛の交渉を考へて見ることは、私たちにとりて最も大切なことである。しかもその愛は、かの聲の大きく、主張の堂々として、理窟つぽい割にはかす〳〵して眞實味の乏しい人道主義者たちの愛に比べて極めて自然的な純一なものである。ロマン・ロオランがミケランゼロ論の序に書いてゐるキリスト教と悲哀の關係とはシモンズの場合にも當てはめられる。キリスト教の悲哀がこの世界を美化したやうに、シモンズの悲哀はかれの純一な愛を生み、かれの耽美主義の上にやがて宗教的な博大な愛の影を投げかけてゐる。

暗い沼の面に一つの花が咲いてゐる。花は歡樂のすべての色をたゝへてゐる。けれども私たちはその花の香を忘れてはならぬ。香は人の靈を溶かす愛の心である。私たちはこの花の色と香との底に尺にも足らぬ根を想像してはならぬ。暗い沼を通して大地の底を貫く幾千里の暗黑から生まれ出た刹那の光りとよろこびを想像することなしには、眞實に花の靈の愛と美とを感ずることはできない。

幾千年に、或ひは永劫の時に、たゞ一度不可思議な運命の機緣によりて、幾千里の深い闇の底から沼の面に咲いた一日半時の可憐な花、それがシモンズの青春である、楚々として迫り來る刹那の香、それがかれの愛である。絶望と暗とから生まれた愛、それは聲の低い、乙女のやうに臆病な愛である。けれども靜かに心靈の底に滲透する明け方の青い雨の悲しみと懷しさとを持てるものである。そしてその愛はあらゆる悲しき人々の上にも自然の上にも灑がれてゐる。

夜が廣野を横切つて靜かな星を導くとき、冷たい石の上に過ぎし春宵の夢を追ふ尼僧の上にも、軒より軒へと飢と絶望とをくりかへす街の歌ひ手の上にも、または大地主のために生涯の勞力と幸福とをさゝげつゝ老いて飢ゑんとする老農の上にも、かれのいたましき愛はそゝがれてゐる。そしてかれの愛はこれ等の不運なる人々を悲しむでゐるが、しかし不合理な社會を憤るといふやうなかれは積極的、社會的愛の絶叫者ではない。かれは運命に對して反抗しつゝ不運なる人々を呪ふのではなくて、人々と共に相抱きつゝ人間の宿命的な不運を悲しむものである。

かれは漁夫の寡婦を歌ふ、小舟は冬空の下を漂ふ。雨と潮は風に白い。白い鷗は沖にうたふ。風に吹かるゝ雨の海は荒れてゐる、女は海面に見入る。

「かの女は白波に漂ふ破帆を見る。
廣い灰色の水平線の上を。
小舟は出てゝまた歸り來、
されどたゞ一つの小舟去れり。」(The Fisher, Widow.)

しかし泣くべきは漁夫の妻のみではない、泣かるべきは漁夫一人ではない。人間すべてがやがては歸り來ぬ小舟と同じ運命の旅路に立たねばならぬ。

かれはまた老いたる女をうたふ。けれどもそれはたゞ一人の女を悲しみいたむ心でなくて、やがて私たち自身がいやでも逢はねばならぬ悔恨と追憶と凋落の悲哀をいたむ心である。眠りを知らぬ都會の夢の彩と躁狂をめざます瓦斯の光りを浴びつゝ歩く黒いガウンの女、かの女の歩行の力なさ。かの女の眼は遠い青春の夢を思ひ出でゝ涙ぐむでゐる。かの女はやがて花やかな劇場の楽屋口に立つ、そしていふ

「妾も踊り子でしたよ。

あなたのお父さま方が若いゼントルマンでゐらしつたころは！」

シモンズには現實刹那の光りの底に湛へられてゐる闇や幻滅の姿が餘りに鋭く見透された。かれは何うしてこれ等の不運な現實の下にある人々を憎むことができやう。

かれは嘗て天使長の如く歡樂の王者として時と世界とをかれの前に跪かせようとした。けれどもそれは空しき兒戲に過ぎなかつた。今やかれは儚なき人生を見た。そしてかれは運命の寒さに堪へられなくなつた。かれは野の雜草の如く柔順にすべてのものゝ前に敬虔な心を持つて跪かうとしてゐる。かれはかれがやさしき愛を抱いて行く時、更にやさしき愛を抱いてかれに近づいて來る獸を知るやうになつた。草の如く謙虚なる心を持たば人間の絶望的悲哀が取り去らるゝことを知るやうになつた。かれは今や野の草に對してもかれの友たらんことを祈る心を持つやうになつた。

「われはあらゆるところに
心を傷むべきものゝ充てるを知れり。
われは眞夜中に親なき子羊の嬰兒の如く泣くを聽けり、
われいかで寢ねむや？……。
いたましき恐怖に、牛の泣くを聽けり、
恐ろしき人々は殘忍なる犬を連れて、
生きながら死の苛責の家に牛を曳き行く、
いかでわれ樹の下に坐り
うれしき、あだなる書に讀み耽りてかれ等を忘るべきや？」（The Brother of a Weed）

かれは今、殺されんとする牛の聲を聽いた。かれの心は歡樂を追ふには餘りに傷ましき人生を見た。かれは書を捨

て、総愛を捨て、運命の下に泣けるすべての同胞と共に相抱かうとしてゐる。かれは運命を呪はない、たゞ運命の下にある悲しき道伴れをいたはる心のみが融然として木をも小鳥をもつゝまうとしてゐる。

一年前であつた。空の鳥は狭い籠のなかに飼はれた。鳥は最初翅を叩いて飛び上らうとした。時が過ぎた。やがて鳥は羽搏つことを忘れた。同時にかれは狭い牢獄の籠を愛することを覚えた。鳥は一日主人によりて籠の外に出された。けれども鳥は既う翔ばうとはしなかつた。鳥は悲しげに主人を見た。希望もなく、されど恐れもなく。鳥は主人を憎みもしない。鳥の眼には静な愛し、我儘な主人をも懐かしむ悲しい涙が湛へられてあつた。(The Caged Bird.)

悲しい、盲目的な宿命の力を信じつゝ、つひにはその宿命をも、また同じ宿命の暗い影の下を歩いてゐる萬有をも愛しつゝ相抱かんとする宿命論者、耽美主義者の愛ほど傷ましいものがあらうか。

戀人よ我が盃を受けよ、嘗てそれは歡樂の甘い酒を盛れる盃であつた。今や我が盃は苦い涙を盛られてある。人間と、雑草と、小羊と、牝牛と、空の鳥と悲しき運命の下にあるすべての生けるもののために!

心靈のそよぎ

窓からは根岸一帶の初夏の新綠が見える。木瓜や山吹の花が日毎に散つて行く。蠢々とそゝり立つた欅の嫩葉が、飽くまでも新生のよろこびに顫へてゐるやうに想はれる。

私がこの家に移つて來たのは雪の日であつたが、既う窓からは蛙の倦怠い聲などが聞えるやうになつた。しかもこの短い時の間に私の家の周圍にはかなり色々な變化が人々の上に起つた。一人の老人はかりそめの病に死し、一人の老婦は二三日前たゞ一人で關西に立つて行つた。直ぐ前の小娘の家では雨のなかを何處かに引つ越して行つた。夕方になると覺束ない小娘の唄の聲などが聞えてゐたが、今日からはそれも聽かれなくなつた。

私とは何の交渉もない人々であつたので、私はその人々に對して嘗て何の愛憎の念をも抱いたことはなかつた。言葉一つかはしたこともなかつた。またその顏さへ殆んど覺えてゐない。それにもかゝはらず、その人々の一人一人が或ひは死に、或ひは遠い旅に立ち、或ひは何處かへ私の周圍から遠ざかつて行くことに對して、私は全然無關心であることはできない。私はこの心持ちを非常に神祕的なものであると思ふ。同時に懷しい貴いものであると思ふ。

何の交渉をも持たない人々の間に生まれて來る去りがたな寂しさの、殊に身に沁みて感じられるのは、古い驛路の夜などに多くの旅人が經驗するところである。

世間體、義理、打算などゝいふやうな人間の純情を僞る縛めからのがれた時、人は始めて自分の心の聲を聽くことができる。私の家の周圍の人々に對する別離の心は、かの旅路に感ずる旅人と旅人との愛別離苦の情である。朝夕に、私の周圍を去る人、また周圍に來る人々に對して感ずるともなく感ずる離れがたな人間的な純情を、私は限りもなく

尊いものゝやうに思ふ。

刹那々々に逢ひつゝ、別れつゝ、永遠に再び邂逅ふことなき人々の間に交感せらるゝ自然的な愛……それは何の目あてもなければ、義務もないところから湧き出る愛である。恰かも温かい春の光りに、暗い土を破つて、新しい草の芽生が出て來るやうに生まれ出ることそれ自身に深いよろこびを感ずるところの愛である。それは何の苦痛もなく、矛盾もなく、流れ出る泉の自然さを持つた純一な愛である。それは極めて仄かな聲を持てる愛である。それは疾風のやうな愛でなくて、葦の葉を戰がす微風のやうな愛である。粗笨な神經を持てる人には感じられることもない幽玄な純情のさゝやきである。

眼まぐるしい大都會の美に魂を奪はれた人々は、五月の武藏野の落日の姿を見ることをしないであらう。燃るばかりな雲の波の上に顫いてゐる落日の名殘りや、夢のやうな淡い雲の影に湛へられてゐる悠久の神秘を見る人は極めてすくない。

人間を目あてとした愛、社會を目あてとした宗教を叫ぶ人々は多い。けれども靜かな自分ひとりの胸に、日となく夜となく、飄然として來り、悠然として去る微かなしかし最も人間的な純情の動めきに氣付く人は極めてすくない。朝夕に私の前を往來する人々に對して、感ずるともなく感ずる微妙なる心から心への交感……私は涙ぐましいほどな感謝をもつてこのさゝやかな愛の聲を聽かなければならぬ。

×

生とは何？　死とは何？

この問題はかなり久しい間の私の疑である。恐らく人類すべての迷ひであり、疑であらう。哲學や宗教は私に色々な生の意味や死の意味を敎へてくれた。けれどもそれ等の知識は私の生活にどれほどの變化を齎し得たであらうか。

私の心の寂寞、宿命的な幽愁が少しでも取り去られたであらうか。少くとも私の偽りなき心の要求に對して、びつたりと合はぬギャップが取りのこされてありはしないか。

光りが觸れ得ない遠い闇の底に私の宿命的な幽愁が祕められてゐる。それは哲學の力も宗教の力も觸れることのできない闇である。光りは萬有を照らしてゐる。しかしながらそれは光りの世界のみに限られてゐる。たゞ一二寸の地の底に對しても光りは既に何の權威をも持つてゐない。宿命的な私の心の闇の底には知識は何の權威をも持つことはできない。

私は今も絶えず死と生の間をさ迷ふてゐる。しかし私は決して生そのものを呪ひはしない。生ほど懷しいものが何處にあらう。

私も昔の多く宗教家や、または現代の思想家たちが繰り返してゐるやうに、色々な思索的生活を營むことによりて生死の問題を決めようとしてゐる。恐らく一生を通じてこの問題のために苦しむことであらう。

しかし、また一日の間に、私はすべての思索をも書物をも捨てゝしまうことがある。そして私は靜かに私の心の囁きを聽かうとする。しかもその刹那ほど私の生活にとりて眞實感の豐かな時はない。

私は本を捨てる、知識を捨てる。そしてあてもなく窓から空を見、麥の平原を見る。

眞紅の夕陽が麥の平原の涯に落んとするその刹那に感ぜらるゝ偉大なる沈默の哀寂！　かくてまた生命の一日は終る！　永遠に聲なき神祕の世界は流轉す！　この端的な直感的な靜かな黄昏の生活を私は限りなく懷しきものと思ふ。

私はミレエの繪に描かれた素朴な農民たちのやうに、虔やかな心をもつて大地を抱かうと思ふ。一日のうち黄昏のこの刹那ほど尊い刹那はない。

雲は聲なくして漂ひ、鳥は聲なくして滅え、麥の平原は聲なくして暮れ、風は聲なくして流れ、太陽は聲なくして

沈む。その刹那ほど私の心に寞寂のリズムの靈しくも甦ることはない。

私がたゞ一人で、たゞ私一人のために自然に對するこの黄昏の刹那ほど強く、眞實の自然に觸れ得たりと感ずる刹那はない。

私は本をも、思索をも捨てる。そして五月の空に輝く新綠の樹立を見る。自殺した友人の俤が……やがてかれ自身の聲が……私の靈の空洞を充たす。そこには理智の働きもない、批評もない。たゞ底知れず動めく靈の宿命的な哀愁が湧くばかりである。

生でもない、死でもない刹那の境！　靈を搖らがし、靈をとろかす刹那の哀寂に浸されつゝ、思ふともなく思ふ愛執離苦の心！

私は窓によりて感ずるさゝやかな靈のリズムを限りなく尊く思ふ。

×

神の殿堂を築くことが人生の目的であると考へたのはトルストイであつた。人間の世界から天使の世界へ進まうとしてゐるのがカアペンタアの人生である。更に解放せられた靈の世界を目あてとしてゐるのがメエテルリンクの人生である。

かれ等は何時も明日を忘れなかつた。今日の苦痛は明日の收穫のためであつた。少くとも今日の生活は明日のための犧牲的奉仕であつた。すべての宗教の教へる人生もその背景として明日を持てるものであつた。そして何時も明日は明るい日であり、今日は暗い日であると考へられてゐる。

私もまた今日に比べて更に明日の光り多からんことを祈る。

けれども偽りなき私たちのさゝやかな聲を聽く時、私たちは恰度これと反對な直感を持ち得ないであらうか。

五月の空を見る時、水郷の夏に生くる時、殊に私は現在に生きつゝあることの喜びを感謝し、明日の死を恐るゝ心の却つて切なることを感ずる。

キリストは「今日は今日にて足れり」と言つた。

マグダラのマリアにナルダの油を灑がれたキリストは、最も大なる刹那主義者であつたとオスカア・ワイルドは評してゐる。ワイルドがキリストを刹那主義者と批評したのは正しい見方であるか否かは別問題として、兎も角キリストが明日を目あてとした生活にのみ囚はれず、また世の中の人々の打算的な倫理觀を超越してゐたといふことは面白いことである。

私が五月の窓で感じた刹那的な哀愁のリズム、または黄昏の廣野で感じた刹那的な大自然との瞑合！　このやうな刹那々々の心のリズムをばさながらに生かし得たる時、私の生活は始めて無理のない、僞りのない、のび〳〵した眞の生活となるのではあるまいか。

愛、宗教、道德といふやうな生活が、やゝもすれば窮屈なもののやうに思はれるのは、概念に囚はれた結果ではあるまいか。死んだ墓のなかに生きた人間の靈を投げ込まうとした結果ではあるまいか。

空の鳥は今日の生活のみを考へる。野の花も明日のことを想ふことをしない。

「嬰兒の如くあれ」と言つたキリストほど今日に生きて、しかも嬰兒のやうな自然的な生活をよろこむだ人は少ないであらう。

マグダラのマリヤは賤しい稼業の女ではなかつたか。しかも神の子と言はれたキリストはよろこむでかの女のナルダの油を足に塗つた。その刹那のキリストはルナンの所謂「愛以上の愛」によりて愛せられたのであつた。同時にマリヤの靈はその刹那に嘗て見出したことのない尊いかの女自身の姿を見出した。理窟もない、打算もない、たゞ偶發

的な刹那の心と心との交感に過ぎないこの刹那ほど、マリヤにとつて意味深い刹那はなかつたであらう。かの女はその刹那に最も美しき女として救はれた。

キリストが無頼の徒や、收税吏たちと一緒に大酒を飲んだといふことや、かれの弟子たちが安息日に麥の穗を盗むで食つたといふことや、またはキリスト自身が「空の鳥に巣あり、狐には穴あり」といつて、枕するところもない自分の境遇を悲しむだといふことは、如何にもキリストの人間らしい、しかも嬰兒のやうな無邪氣さを現はしてゐるではないか。

キリストの生活が極めて自然的な、人間的なものであつたといふことは、哲學者や宗教家に對する皮肉な諷刺のやうに思はれる。

宗教家たちはかれを神の子と稱へた。またかれは永生を信ずるものであると言つた。無論かれ自身も未來のより幸福な、より光りある世界を見てゐたであらう。けれどもかれはラザロの死を聞いて泣いたではないか。宗教家たちが信徒の柩の前で永生を説いて涙一つ落さないのとは非常なけぢめがあるではないか。私は人間らしいキリストの生活を限りなく好いもののやうに思ふ。

×

私は窓に凭つて五月の空を眺めてゐる。そして靜かに湧いて來る自然の愛の流れを想ふ。私は涯しなき旅路を歩く限りなき旅人を想ふ。その刹那の愛は私にとりて最も美しい僞なき愛のやうに想はれる。

旅人と旅人との愛！　人類の愛はこの不運なる人生の道づれをいたはる心から生まれ出る最も自然的なもののやうに思はれる。「明日は東に西に異つた道を取らなければならぬ、そして永遠に逢ふこともできない。」かう考へた時、ひとりでに湧き出て來る愛の心、これほど純な心持ちがあらうか。

無限な闇から、無限な闇につゞく人生の旅路にありてたゞ今宵だけは光りの下に同じ運命の道を歩いてゐる我ならぬ人の姿を見出す時、何うして同じ道づれの人々を愍まずに居れやう。

明日はまた死の幕が開かるれば、私たちは暗い道を辿つて、涯しもない旅路を歩かなければならぬ。

過去幾千萬年の間、私たちの心靈は恐らく暗い旅路を歩みつゞけて來たことであらう。今宵始めて私たちは同じ旅籠の燈の下に光りを見、よろこびを感じ、愛を感じ、いのちを感じてゐるのではないか。何うしてこの無二の機會がたとへ一刹那でもかりそめに思はれやう。光りあるこの夜の一刹那のうちに無限のよろこびを掬み、無限のいのちを感じなければならぬ。現實のいのちを貪らんとする私たちの生活欲は須臾にして無限の闇に滅び行く生命を慈しむ心から生まれ出るのではあるまいか。

幾千里といふ暗い大地の底を根として幾千萬年に一度、神祕的な機緣によりてさゝやかな野の花が咲いた。

道行く人々によりて心なく踏みにじらるゝさゝやかな野の花にも、盡無量な機緣の力と生命の香とがたゝへられてゐる。

花はできるだけ多くの光りを吸ふたが宜い。できるだけ多くの微風に吹かれたが宜い。現實刹那の生けりといふ意識を思ふ存分貪つたが宜い。

人間の個々の生命、それはさゝやかな野の花にも比すべき力なき、榮なきものであるかも知れぬ。けれども幾千萬年の苦痛と闇とから生み出されたこの刹那の光耀の世界にありて、現實に生きてありといふ意識のうちには限りなき貴さと、よろこびと感謝とがなければならぬ。私たちはその刹那的な貴さと、よろこびと、感謝とを心ゆくまで味ははなければならぬ。

天地の生命は長い、けれども人生の日は既う黄昏れかけてゐる。何うして私たちに隣人を怒り隣人を呪ふ遑があら

う。死の暗い幕が卸されぬ間に出來るだけ多くの人間の生活を味はひ、生くる事の悦びを貪つたが宜い。愛も、道徳も、宗教もこの心を措いて何處に求められやう。刹那の生命の光りの裡にできるだけ多く自己の姿を見、生命の香を嗅かんとする心靈の自然的な流露こそ愛であり、道徳であり、宗教である。

人類を目あてに愛を働かすことも宜い。永遠を通じての人類の發展のために、または神の殿堂を建設せんがために宗教や道徳を說くことも宜い。けれど僞らない私自身の心の聲を聽くならば、それは人類を目あてにするのでもなく、永遠を目あてとするのでもない。明日は別れなければならぬ旅人と旅人とが旅の一夜に感ずる離れがたな心の哀愁から湧いて來るところの人を慈しみ、人をいたむ心である。私はこのやうな心から生まれて來る愛の純一さと尊さとを忘れることはできない。よし千人萬人の人を愛することはできなくとも宜い。純一無雜な心でたゞ一人の道づれを眞實に愛することができれば宜い。そこから私のいのちの意識がはつきりと湧いて來るにちがひない。

「日蓮は明日佐渡國へまかるなり。今夜のさむきに付ても。ろうのうちのありさま思ひやられていたはしくこそ候へ……」

時の執權を罵り、天下の俗僧を呪ふた大知識の日蓮が一生の說教よりも、この獄裡の一弟子を思ふ日蓮の心こそたとへ方なく貴ひものではないか。

祭壇に獻物を供へる前に先づ兄弟と和がなければならぬことを敎へたのはキリストであつた。人類、民衆といふ名の前に立つ前に、私たちは自分の心の裡の純情から自然に流れて來るさゝやかな愛の心を、何處までも美しいまゝにはぐくむで行くことを忘れてはならぬ。

棗の葉

久し振りでこの二三日家に引きこもつて、ゆつたりとした氣分でゐることができるやうになつた。年中殆んど時間といふ觀念に脅かされつゞけてゐる私にとりて、このやうな落ち着いた數日を持つといふことは涙ぐましいほど嬉しいことである。

私は心ゆくまで夜の空を仰ぎ見た。天の川が霧のやうに流れてゐるのや、涯しもなく遠くかゝつてゐる星の群を見ながら、何思ふともなく夜を更かすこともある。無限から無限の闇に通ふ魂が、どこかで呼び合つてゐるやうな氣がしたり、亡くなつた友だちがどこかの世界でたゞひとりで寂しさうに闇の路を辿つてゐるやうな感じを抱いたりする。

あの星の先きは何處でせう？

まだあのやうな星の世界があるのさ。

そのまた星の世界の先きは何處でせう？

やつぱり星の世界さ。

そのまた先きは？

それから先きは解らぬ。

私たちは夜露に打たれながらこのやうなことを語ることもある。私たちには何も解らないといふことがしみじみと意識される。室をふりかへつて見ると、黄色な電燈の光りに照らされた書物などが疊の上に散らばつてゐる。私には一層人間の無智な、無力さが想ひ出される。私は電燈を消してしまつて、何時までも物干臺に立つて星を見てゐる。

死ぬること、生きてゐること、すべてが何の差別もないやうに思はれる。何處かの世界に私もやがて旅立たなければならないやうな氣がする。友人からも親しい人々からも訣れて。

朝まだ蚊帳を外したまゝで床の上に横たはつてゐると、秋のやうな高い青空に紗のやうな、煙のやうな、輕い雲が動くともなく動いてゐるのが軒を翳して見られる。梧桐の葉がかさこそと秋らしい聲を立てゝゐる。

何となしに自殺、死といふやうなことが想ひ出される。

「寂し過ぎるほど寂しい！」

既う私は何を考へることもできない。日は無限より無限へ、風は無極より無極へ聲もなく過ぎて行く。

人間だけがこの世界に、この土の上に取りのこされて、相愛し、相憎み、相恐れつゝ苦しまなければならぬ。

自殺したTの寫眞が本箱の上に飾られてある。じつとそれを見つめてゐると、じめじめした千葉の町外れ、農村の道や、黄色な南瓜の花の咲いた海岸の畑や、薄暮の火葬場の庭などがまざまざと浮かんで來る。

五六日前に四十九日を濟ましたばかりのK夫人の俤が心に泛かんで來る。Tが長い年月を狂人のやうに苦しむだ揚句に、自殺をした原因は、K夫人に對する初戀の結果であつた。夫人は他の人に嫁いで三人の子の母となつて死んだ。私はTのためにK夫人を憎むだこともあつた。しかし今になつて見ればTもK夫人も少か二年の間を置いて死んでしまつた。

誰を憎まなければならないのか、誰がより多く不幸であつたか、私には解らない。お互に憎むでは居られない、餘りに早く人間の一生は過ぎ去つてしまふ。

棗の葉や梧桐の葉がまた戰いては秋に似た風の聲を立てる。高く澄みちぎつた、秋のやうな空を見ながら私は二階の床の上に寢ころんでゐる。私の心は何時とはなしに嬰兒の心のやうになつて來る。私は生きてゐることを感謝せず

には居れなくなつて來る。涼しい朝の風と、初秋の聲と、白い紗のやうな雲と……もうそれだけで十分だ、私は生きてゐることを感謝せずには居れない。私は友だちを持たないことを悲しまない、戀人を持たないことを悲しまない。何となく生きてゐることの有り難さ、かたじけなさが身にしみる。頰に流れて來る生ぬるい涙を感じながら私は祈りたいやうな心になる。

階下ではこの我儘な男のために朝餐の菜をきざむ音が聞えてゐる。

×

人情といふ文字を當てはめて見ると、たとへば人類愛といふやうなことも極めて感傷的な、平凡なもののやうに思はれるかも知れぬが、すべての愛の源は人情である。人情ほどデリケートなものはない。今の多くの人道主義だの、人類愛だのと叫んでゐる人々の間には愛の優美性といふものが理解されず、また純一な愛といふものを持つてゐない人がかなり多くありはしないかと思ふ。殊にこの傾向は宗教家や社會改良家の間に著しく見出される。

トルストイのハヂ・ムラードを讀むだ時、馬の蹄に踏みにじられた野の青草をいたむ文字を見出した。私はトルストイの愛を非常に尊いと思つた。ところがかれの菜食論を讀むだ時は、かれの愛に對してかなり反抗心をいだかせられたことがある。といふのは、かれが肉食のために多くの可憐な獸を屠ることの殘忍さを說いてゐるのは宜いとして、肉食と性慾の關係とを論じてゐるのを見た時、私はトルストイが菜食論を唱へた動機の大部分は人間を本位として、人間自身のためであつたといふことを考へずには居れなかつたからである。トルストイの愛の幾部分に利己的な影が動いてゐることを感じない譯には行かなかつた。

しかし、それはそれとしてもトルストイがハヂ・ムラードのなかに、蹄に踏みにじられた野の草をいたむ心は限りなく尊いものではないか。その心こそ僞なきトルストイの人情であつた。デリケートな純情であつた。この自然の情が

あつたればこそトルストイの愛は生きてゐた。日本の人道主義の提唱者たちは何故に、尚少しデリケートな人情から湧き出て來るやうな菜食論を主張しないのであらうか。菜食論の主張とは限らないとしても、たとへば自然、草木、動物に對する思ひやりといふものが尚つと深くなつて行くのでなければ、かれ等の人道主義、人類愛は眞實のものではない。またそのやうな愛を感じない人であるならば、人類愛などといふやうなことを說く資格はない。藝術は天才でなければ生むことができないのと同じやうに、愛も天才でなければ生むことはできない。

基督教徒は食前の祈禱をさゝげる時、神に感謝してゐるが、私たちは寧ろ私たちのために尊い犧牲となつてくれる獸、鳥、植物そのものに對して感謝しなければならぬ。

×

私が住むでゐた或る裏町通りには幾軒か女ばかりの家が並んでゐた。それは大抵世間から捨てられたやうなお圍ひ者の家であつた。その女たちは一人か二人の子供を抱へては寂しく暮らしてゐた。そして月に幾度か世間を忍んで逢ひに來る旦那といふ男を持つてゐるのであつた。子供たちは「お父さんが歸つて來た」と言つては跳び上つてよろこむでゐた。それでも旦那といふ男は大抵は半夜か半日で人目を憚るやうにして行つてしまつた。格子戸の前に立つて、靜かに男を見送つてゐる色の蒼白い女や、その可憐な子供たちを私は幾度も夕暗のなかに見た。世間には存外このやうな不幸が潜むでゐるにちがひない。正しいとか正しくないとかいふやうな議論をしてゐるには、餘りに氣の毒なことが世間の裏には多い。

×

人間は何故生きてゐなければならないかと訊ねられたとしたら、私は色々な理由を並べるかも知れない。けれどもそれは議論であり、想像であつて、私の魂の底からの答ではない。私は何故に生きてゐなければならないかといふ理

由は知らない。これが僞りない返答である。

けれども何故お前は生きてゐるのだと訊ねられたとしたら、「死にたくないから」といふことの他に、尙一つ「親があるから、兄弟があるから」といふ答へを附け加へるにちがひない。「妻子があるから死ねない」といふことは何のやうな無智な男もいふ平凡な說明の仕方である。けれどもこれほど眞實な力强い聲はあるまい。

私が買つてやる貧しい玩具に、喜びの淚を流す弱い人間を持つてゐる間は私は死ねない。

初秋の光

太陽は今日も照つてゐる。一坪の庭さへ持たぬ私の家にも、夜の街から運ばれた二鉢三鉢の草花が窓際に置かれてある。隣家の廣い庭の立樹が、北に面した私の窓を掩ふやうにかぶさつてゐる。蔦の葉が輝き、柔かな葉に纏れて、黄色な王冠に似た小ひさな花が咲いてゐる。今朝は木槿の白い花も咲いた。俄に秋が近づいて來たやうな氣がする。この下町の家に移つて始めての秋である。想へて見ると私は殆んど故郷といふものを持たない。家といふものも持たない。轉々として一つの町から、一つの町へと歩いてゐる。夜、露臺に出て深更まで星を仰いでゐることもある。窓から青空を見て半日を過すこともある。人を訪ねようとも思はず、訪ねられようとも思はない。人は孤獨の悲哀といふかも知れない。けれども私にとつて孤獨ほど懷しいものはない。孤獨である時のみ私は偽らず、衒はず、恐れず、眞實な自分自身であり得るからである。できるならば私は何時も孤獨でありたい。

けれどもこの願ひは、私のやうな貧しい生活者にとりては、一生果されさうにもないことである。私たちは自分自身のため、または自分に賴つてゐる周圍の弱い姉妹や親兄弟たちのために、日々のパンをもとめて巷に出かけなければならぬ。そこでは魂をつゝむだ人間の堅い殼と殼とのみが打ち合つてゐる。人々の魂は大抵傷つけられてゐる。生まれながらの素直さを失つて、大抵はいぢけた魂となつてゐる。絶えず衝かれ、擊たれ、碎かれる[illegible]傷の老木のやうに、人々の魂は疑惑、不信といふやうな後天的な醜い厚い傷の痕で掩はれてゐる。私たちは日々のパンを得るために、一日一日と自分の魂のかけらを賣つてゐる。「お前たちは俺の藝術を亡ぼしてゐる」と言つてその弟たちを罵つたミケランゼロの心持ちは誰でも味はふことができるであらう。無心な妻子は日々その夫の魂を亡ぼしてゐる。自分の過多な財產

を捨つることに苦しむだトルストイは、かのいやでも妻子のために日々自分の魂を切り賣りしなければならぬ世間一般の貧しい人たちに比較して、何といふ幸福な人間であつたらう。

けれどもミケランゼロが酒飲みな、放蕩無頼な弟や、殊に強慾な父に金を送るために、水を飲み、パンを食つて三人の弟子と一緒にたゞ一臺のベッドに寢起きして働いたことを想ふと、かれの犧牲的な生活が尊く、光つて來る。人類を救ふために一家妻子を捨てるなどといふことを平氣で口にする人があるならば、その人に呪はれてあれ。それは憎むべき僞善者である、空想家である。象牙の塔のなかで、ソーファに凭りながら空想を描いてゐるやうな學者たちは、巷の人々を指して衆愚などと呼んでゐる。けれどもかれ等が一家　人々のために、この暑さと鬪ひ、更に苦痛ないぢけた魂と魂との競り合ひ、荒んだ感情と感情の縺れ合ひのなかに、僅かのパンを獲つゝあることを想へて見なければならぬ。「女は泣くために」生まれたとするならば、男は働くため、更に苦惱するがために生きてゐる。自分の腸を裂いてその雛鳥に喰はせたといふ伊太利の町の塘鵝の彫像は、日々自分の魂を傷つけつゝ、切り賣りしつゝ、可憐な周圍の人々を養ふ衆愚のいたましい、しかし尊い生活を暗示するものではないか。

かれ等は衆愚と呼ばれるほど、自分の聰明を失ひかゝつてゐる。かれ等は人の前では笑ひたくない時にも笑はなければならない。かれ等の行爲は媚、追從といふやうな惡い名をもつて呼ばれる。けれどもその刹那々々にかれ等が意識しつゝも妻子のパンを得んがために自己の魂を裏切り、傷つけつゝあることを想つてやつたが宜い。かれ等は滅多に未來といふことを考へない、哲學といふものを持たない、それがために或ひは俗物と呼ばれ、衆愚と呼ばれる。かれ等は夜半天を仰ぎ見て靜思するには餘りに一日の勞苦に疲れてゐる。かれ等の眼は終日その資本主の一顰一笑をも見逭すことはできない。かれ等の注意力のすべてはパンの上に注がれてゐる。かれ等は餘りに多く地に住まなければならぬやうに運命つけられてゐる。

考へて見ると私も衆愚の一人である。この數日私は久し振りで夜遅くまで星を仰ぎ微風の囁きを聽いて、靜觀瞑想の時を見出すことを得た。餘りに地をのみ見馴れてゐた私の眼は、涙なしには夜の空を見ることはできなかつた。私たちが呪ひつゝ、怒りつゝ、憎みつゝ、絶望しつゝ地をのみ見てゐる間も、天は永遠に青白き光りを湛へてゐた。そして頑にされた私の魂の眼にもその光りの扉を鎖さなかつた。牢獄の底に春の光りを感謝したワイルドの心持ちをもつて、私は夜の光りに感謝することができる。感謝しつゝ、私はまた自分の生活に就いて靜かに思ふ。

「生とは？　死とは？」恐らく私たちは現在に生きつゝありといふ悲しき、またありがたき、尊い意識の他に何ものをも見出すことを得ないかも知れない。私は今日までこの問題に就いて迷つて來た。けれども私は今日自分の生きてゐることが、周圍の幾人かの可憐な人々にとりて慰藉であり、力であることを想へただけでも私の生活が無意義でたいことを思ふ。たとへはつきりとした哲學は摑み得ないとしても、私はそれだけの意味でも生きてゐなければならないと思ふ。永劫の時を通じてこの一刹那のみ相凭り、相扶け合ふことのできる、また感じ合ふことのできる、人間の魂と人間の魂との觸れ合ひ、吐息を除いてどこに生活があらう。

「めでたさも中くらゐなり俺が春」と言つた俳人の心の底には、かなり皮肉な意味があるかも知れないが、私は時には僅かの本を讀み、或る時は草原のなかに仰臥して秋の空を見上げることのできる今の自分の生活を心から幸福だと思ふ。終日炎天の下に働いた人のみが葡萄棚の下の涼しさを味はふことができると言ふが、日々パンのために魂を賣りつゝある衆愚の生活者なればこそ、半日半夜の孤獨も靜想も羨ぐましいほど尊く思はれる。私は畑をも、家をも持つてゐないことを感謝しなければならぬ。私は鳥が自由に梢を選ぶやうに、今日にでもまた町を替へることができる。欲する町に、欲する家に眠ることのできるボヘミアンの生活を尊く思ふ。何ものをも持たない私は、すべてのものを與へられたやうな氣がする。窓から見る隣家の木槿の白い花も、無限から無限へ武藏野の空を走る白い雲も、私に與

へられてある。富める人々が財寶の鎖に縛められ、權勢ある人々が權勢の罠に押し込められてゐる時、私は心から私に頼つてゐる幾人かの弱い人々、魂を養つてゐる。そして秋の聲を聽き、自然の懷に母の愛撫を見出してゐる。私は何ものをも持たぬ幸福を感謝する。

藝術家と祈りの心

昔の役者は素顔を人に見せることを恥ぢたといふ話を聽いたことがあるが、時としては作家などいふ名で呼ばれなければならぬやうな生活をしてゐる私は、つく〴〵昔の役者の心がけを懷しく思ふことがある。

私は二年ばかり玄海の中の孤島の生活をしたことがあつた。そこでは夏になると、克く夕方五六羽づゝもかたまつて飛んで行く郭公を見たことがあつた。郭公の姿を見るといふことは最初私には新しい興味を感じさしたが、しかし郭公はやはり皐月闇のなかで聲ばかり聽いた方が興が深いやうにおもはれる。

作家といふ立場から未見の人に接しなければならぬやうな時、私はいつも昔の役者や島の郭公のことなどを考へさせられる。成らうことならば餘り人とは語りもせず、逢ひもしないですましたい。

「著者に逢つて見ると、本を讀むで想像してゐたのとはちがつた心持ちを起させる人があるかも知れぬが、兎も角本で讀んだ以上の新しいものを見出すことができる」といふやうな意味のことを言つた西洋の思想家もあつた。私はそのやうな事を言へる思想家や作家を羨しく思ふ。

或る時私がまだ田舍の或る教會に通つてゐたころであつた。教會内の若い人々の一團は一人の牧師を排斥した。私もその一團の一人となつて彈劾の演說をやつたことがあつた、不幸な牧師は怒つて教會を辭した。それから間もなくであつた、その牧師から一枚の葉書が來た。それには「……××を書いた作家のあなたまでもが何の同情をも私に持つことができなかつたとは……」といふことが書いてあつた。私は深く自分の心に恥ぢた。

私がその頃書いた××といふ作品は、寬容な愛をもつた主人公を題材としたものであつた。その牧師が私を責めた

のは、私をばその××といふ作品の主人公そのものゝやうな寛大な心の所有者でなければならぬと考へてゐたからであつた。私はたゞ自ら恥づるより他に方法はなかつた。更にその牧師を追ひ出さうとした企ては、一部の人々の私怨から生まれたのであつて、熱し易い私はその人々の手段に使はれてゐたことが分つた時、私は一層自分の不明と僞善とを呪はずには居れなかつた。

作品のなかに盛られた思想に對して、作家ができるだけの責任を持たなければならぬことは明であるが、我儘で疑ひ深く、神經質な、利己的な、そして人を憎む心の強い私自身にとりては、これは困難な問題である。作品と作家といふ問題を考へる毎に、私はドストエフスキイがシベリヤの牢獄で「罠の中の狼」と呼ばれるほど陰鬱な顔をしてゐたことを想ひ出す。そして私自身の矛盾多い生活に幾らかの希望をつないでゐる。

私はまたつひこの頃或る先輩から「文學者なんていふものは本を讀むで新しい知識は持つてゐるが、ちッとも人間ができてゐないぢやないかッ」といふ非難を聽かせられたことがあつた。この先輩の言葉も私に自らを責むることを敎へた。

しかし私自身としては幾らかの本を讀み、幾らかの貧しい作品でも作り出したといふことは決して無意義ではなかつたと思ふ。私が本を讀まず、作品を作らなかつたなら私は、倘つと惡い人間であつたかも知れぬ。少くとも自らを批判し、自らを責め、自らを悔ゆることに於いては、私は作家生活の無意義でないことを信ずることができる。

キリストは弟子が、七度人を免すべきやと訊ねた時、更に「七十倍せよ」と言つた。作家の生活の矛盾に對して世の人々はこれだけの寛容な心を與へるであらうか。

×

「戀愛は飢である」といふ言葉は或る場合には藝術生活の上にも言ふことができる。寛容を說く作家は自分のうちに

寛容を持たないからである。愛を說く作家は自分のうちに愛の足りないことを苦しむでゐる。トルストイの一面には僞善的であり、利己的なところがあつたから、あのやうに强い愛や信仰の主義が生まれて來たのだとも考へられないことはない。飢じいから叫ぶのであるとも考へられる。

無論このやうな事實が作家の生活の矛盾を是認する理由とはならないが、世間はそれだけの道理は辨へて藝術品を見る必要がある。

しかし立ち場を變へて作家自身の方から見れば、愛を說く作家は乞丐になるだけの覺悟はしなければならぬのであらう。自分よりも貧しい人間が世間にある間はまだ作家自身の生活は眞實なものではないやうに思はれる。無論これは甚だ困難な仕事である。私自身では時々このやうな事を考へて見るが、さて、私の僅かな收入に賴つてゐる周圍の老人や弱い人々を見ると、自分が考へてゐることが正しいのであるか否かといふことも分らなくなつて來ることがある。貧しい收入の幾分を割いて玩具のやうなものを買つてやつても、老人や弱い人々は心から喜んでくれる。私はやつぱり月々の收入を貰つてこの人々のために働いて行かなければならぬ。僞善者になつても宜い、この可憐な人々に玩具を買つてやるために私は無理な仕事もしなければならぬ。私は到底徹底的な愛の實行者にはなれさうもない。悲しいことである。

×

私は或る社に勤めてゐた日、私を裏切つて行つた男を憎むだことがあつた。けれどもその男のことを考へるごとに、その男が繼母に育てられ、父にも早く死に別れたことを想ひ出す。また私たちの周圍に色々な不快な追憶をのこして行つた病的な小娘を憎むだこともあつた。けれども私はその小娘が宿命的に負ふて來た代々の呪はれた忌まはしい遺傳や不幸な家庭を考へては、その小娘の明日の生活に幸福あれと祈るやうな心になることもある。何處にさ迷ふてゐ

るか知れなくなつた病的な小娘のことを寂しい夜などは殊に氣の毒に思ふやうなこともある。何時であつたか、私の周圍の一人が何處かでその小娘に逢つたと言つて歸つて來た時のことである。「君はあの小娘のことを氣の毒がつてるが、先方では君の名さへ一度も話さなかつた、先方では君を仇敵のやうに憎むでるよ」と言つてくれた事があつた。私はその小娘の忘恩的な仕打ちを憎むだ。それでも次の刹那には私はまた比較的靜かな心で、その小娘の不幸な遺傳のことを考へずには居られなかつた。私は利己的な私の心の隅の何處かに、少かに芽生えやうとしてゐる寛容な心をよし一時でも持つことのできたことを心から嬉しく思ふ。そしてこのやうな人生の見方を私に敎へてくれたものは色色な作品、殊にドストエフスキイの「虐げられし人々」のやうな作品であつたと思ふ。

私は人を愛することはできぬ。眞劍な生活をすることはできぬ。けれども長い月日の間の極一小時間だけは時として尊い心のひらめきを見ることがあるやうな氣がする。

立派な作品を讀むでゐる間、貧しい作品でも作り上げやうとしてゐる間だけは、ほんたうな人間らしいひらめきが折々感じられるやうに思ふ。その時だけは善人らしい心になつてゐることがあるやうに思ふ。

ハムレットは叔父が祈つてゐるのを見出したが、その時には殺さなかつた。祈つてゐる間は惡人も善人になつてゐるからであつた。

作家が眞劍に思索し苦惱してゐる間は、かれが藝術的衝動に醉ふてゐる間は、少くともかれは惡人でも、僞善者でもない。或ひは道德家たちが見る以上の美しい人間的な世界を見てゐることもある。その刹那だけはハムレットの劍もかれを殺すことはできない。

かれが机に向つて惱んでゐる間はかれは善人の祈りを祈つてゐるからである。

秋の町より

私は二十年近くを旅で過ごしてゐる。夜半などに不圖眼をさまして、旅だといふ考へを起した時ほど寂しいものはない。壁一つ隣は見知らぬ人である。自分一人で世界のなかに放り出されてゐるやうな寂しさがしてならぬ。曉の冷たい風が吹いて來る時私は起き上る、そして「自分はこの廣い都會に一人の友をも持たない」ことを考へる。初秋の風が私の涙を喚びさますやうに魂の面を撫でゝ、無限へと音もなく過ぎ行く。

一人で生まれ、一人で生き、そして一人で死んで行く、それが人生のすべてゞなければならぬ。この諦め方は寂しい、けれども涙ぐましいほど眞實感を持ち、尊さを持つてゐる。星は永遠に星と語らない。戀人は永遠に戀人から分れてゐなければならぬ。妻は永遠に夫から別れなければならぬ。1+1=2……これは動かすことのできぬ眞理である。

今朝も兩足を失つた老乞丐は地に這ふやうにして街に出て行く。朝の青物市場には母子の乞丐が腐れかゝつた瓜を拾つて喰べてゐる。しかし私は何うすることもできぬ。

囚人馬車が通る！　百日紅が咲き、紅蜀葵が咲き、向日葵が輝いてゐるのに、野は秋の收穫に輝いてゐるのに、白い雲が動いてゐるのに。

黑い鐵の扉に鎖されて、太陽も拜まない、不運な人たちが行く。しかし私はどうすることもできない。

球磨川の畔のI先生、關ヶ原を夜汽車で一緒になつたM氏、私たちは恐らく一生逢ふこともなしに一人で寂しく死んで行くのでせうか。

湖の水を想はせるやうな風が音もなく室の內に流れて來る。秋たといふ感じが沁々と味はゝれる。沈靜した空氣の

底に鳩の聲が聞える。武藏野の涯から涯を一緒に歩いたTが、生きてゐたらなどと、自殺した友のことを想ふ。秋の武藏野！　それは想へただけでも私たちの胸を顫かすものであつた。葉鷄頭の咲いた村、欅の列樹、芒の土堤、丘阜の涯の水車小屋、疲れた馬の通ふ埃道、黍の畑、野原の隅に忘れられたやうな村落の安泊、水郷の燭……それは二人のために造られたもの丶やうに想はれた。二人の笑聲が二子の渡しにも、池上の雜木林のなかにも、井の頭の池の畔にも、今日までまだ殘つてゐるやうに想はれてならぬ。深い過去の印象を刻みつけてゐるだけに、今では私には武藏野を歩くことも苦痛になつた。私はかれの遺稿を何うかしなければならぬと思ひながら、かれの死後三年の今日までそのまゝにしてゐる。甲斐に行つた折、葡萄畑の傍で葡萄が好きであつた亡父のことを思ひ出して地に突つ臥して泣いたかれや、乙女峠で笛を失くしてぼんやりしてゐたかれの俤がひし〳〵と胸に泛かんで來る。かれは軍人に似合はぬやさしい男であつた。一人の孫娘の婿になつてくれと言つてかれを困らした淺間の山腹の素樸な老農も、シベリヤから歸つて來てゐた水郷の妓も、飯坂溫泉の不幸な女も、小諸の牧師さんも、かれはまだ世界の何處にか生きてゐると思つてゐるであらう。

　私はかれの夢のやうな美しい、詩に生き、詩になやみ、詩に死んで行つた記錄を纏めて本にした上で……殊にかれの悲しみの芽を培ふたK夫人に遺稿を捧げたいと思つてゐた。もし私の力で、小ひさな大理石の墓がかれのために、武藏野の一隅に建てられることかできたなら、せめて一度だけはK夫人を案内しようと思つてゐた。しかしK夫人も死んだ。人間は餘り早く死ぬ。

　傷つける魂の記錄のみが、私の手許にのこされてゐる。

下町住まひ

寒い冬の日であつた、本郷の高臺から三臺の荷車を扈つてこの家に引越して來たのは。寛永寺坂を下つた鐵道線路を踏み切つたころは、何だか見知らぬ世界に來たやうな寂しさを感じないでもなかつた。が、知つた人もない、まるでちがつた世界に住むといふことは心の底から自由をあたへられたやうな氣易さをも感じさした。

荷を卸すころからちら〳〵雪が降り出して來た。

「まあ宜いときお引つ越しになりました……」

手傳の女たちは雪を見てはさう言つた。

雪のなかを隣り近所に挨拶に廻るのも私には億劫であつた。人間の集まりから遠ざかりたいため、人と人との交渉を恐るればこそ、町外れから町外れへと引つ越して歩いてゐる私にとつて、また新しい知り合ひを作り出さねばならぬといふことは心苦しいことであつた。

雪の日が二三日續いた。

雪の晴れ間を待つて私は家の近所を歩いた。笹の雪だの呉竹橋だのお行の松だの懷しい思ひ出を湧かす名も、今では建て込むだ穢ない家につゝまれてしまつてゐるのは、物足りないやうであつたが、私はこの町に移つて來たことを後悔はしなかつた。

この家には門もなければ、塀もない。格子を明けるとそこは裏町の狹い通りになつてゐる。門がないといふだけでも町の人々の一人になり得たといふやうな氣易い、のび〳〵した感じを湧かさせる。小學の子供たちを除いては袴な

どはいた男は殆んど見當らない。大抵は店の通ひ番頭か職人といつた風な人々である。一寸戸外に出ても黒繻子の衿をかけた女たちが目につく。フロックを着た男や、劍をさげた男たちはちつとも見られない。それだけでものび〳〵した氣分になれる。

雪が解け初めるころになつて最初にものを言ひだしたのは直ぐ向ふの家のお婆さんであつた。私の家の玄關の格子をがら〳〵と明けると、そのお婆さんと私とは一間あまりの道を置いて顏を合せることになつてゐる。私の獨りで居ようとする頑な心が先づこの話好きなお婆さんによつて破られた。櫻が咲くころには右隣の若い彫刻師とも、左隣の內職をしてる家の人々とも、靑物屋の主人とも、心置なく朝夕の挨拶をすることができるやうになつた。

お婆さんの娘の旦那といふのが一週に一度くらゐお婆さんの家にやつて來ることや、その娘の兄が兵隊に行つてゐて、高い所から落ちて病院にはいつてゐることや、筋向ふの家々にはどの二階にも大抵色の白い一人住まひの女たちがゐることなども、誰の口からともなく聽いた。

私が書齋の窓から空を眺めて「何故人間は生きてゐなければならぬのか？」などといふ哲學めいた思想の絲をたどつてゐる時、窓の下では靑物屋の氣作な主人は小僧對手に野菜を車から卸してゐることもあれば、道一つ隔てた筋向ふの二階では三味線の音がしてゐることもある。けれども私が二階から下りて街に出れば靑物屋の主人もお婆さんも二階住まひの女たちも一樣に「お早う」となり、「今晩は」となり隔てのない挨拶を取りかはす。私にはそれが少しも不自然とは思はれなくなつて來た。そしてこの人々はお互が生きて行くこと、喰うて行くことより他には何も考へてゐない。

自動車に乘ること、社會的な地位を得ること、名譽を得ること……このやうなことは嘗てこの周圍の人々によりて考へられたことはない。月に一度淺草の芝居を見るかせめて二長町を覗くことができれば、何よりの幸福であると考

へてゐる人々である。慾の小ひさな、始めから悟り切つた裏町の人々である。見榮もなければ、自分一人を豪がらせようとする心もない。誰も彼れもが高い笑の底に、同じ寂しい日蔭者のやうな心を抱いて接し合つてゐる。

夜遲くそッと戸を叩いて、夜が明け切れないうちに人目を忍び〳〵歸つて行く旦那といふ男を見ても周圍の人たちは見知らぬ振りをしてゐる。そして色の白い二階住まひの女たちと顏を合はせては隔てなく語つてゐる。こゝでは人間生活を色々な習慣、道徳の範疇の中に入れて、人間をさま〴〵に區別するやうなことは行はれない。同じくらゐの豪くない人々である。みんなが浮草のやうに儚い生活の一面を持つた氣の弱い、不仕合な善人たちである。

しかしこの裏町にも世間並な太陽と、世間並な悲劇はある。私の書齋の窓から見える二階の女は東京近在の藝妓であつたが、落籍されて今では日本橋あたりの男の思ひものとなつてゐるのだといふことである。しかし「お前に氣に入つた男でもあつたら何時でも暇を上げるから……」と言つて旦那といふ男が、女と訣れようとしてゐる。けれども女は男と離れたながつてゐるといふ話なども聽いた。その女の寂しさうな白い顏が私の窓から一日に幾度も見られた。その女の弟といふのがまた克く私の家の前で近所の子供たちと遊んでゐた。その子を見るたびに私は弟を連れて裏町から裏町へと儚い一生を送つて行かなければならぬ女たちの寂しい生活を想像することもあつた。私は「貧しき人人」のバルバラや、「白痴」のナスタシアといふやうな女を何時も頭に泛かべながら、このやうな二階の女たちを見てゐた。

夏が來て書齋の窓には棗の葉が輝かに繁つたので、私の窓からは既うその女たちの顏を見ることは出來なくなつた。恐らく同じやうな小ひさなよろこびや、儚い運命がかれ等の上にくりかへされてゐるのであらう。

夏の祭りが來て軒には花や提灯を飾るやうになつた。

「時の鐘を聽きにまゐりました。」

月に一度づゝ上野の鐘樓守は時の鐘の喜捨金を集めに來る。

新内語りの女が宵の街に立つては蘭蝶だの明烏だのを語つて行く。

夜が明けると私は二階の窓から靑々と繁つた寺町通りの木立を見る。梧桐や葉櫻や枇杷の若葉が繁つて何處かに京の町を偲ばせるやうな靜寂の底から鶯の聲や鳩の聲などが聞える。墓場からは稀に香の煙などが立つこともある。物干臺から屋根の上に洗ひ流しの米を撒いてやると、鳩と雀とが毎朝のやうに屋根の上に來て待つてゐる。鳩は物干臺の上に立つてゐても逃げなくなつた。

シベリヤ出兵などといふ問題がまた燃え出して來たので、前の家のお婆さんは、人の顏を見るごとに「ほんとに戰爭があるのでせうか？」と訊ねては、兵隊になつてゐる男の子のことを案じてゐる。二言目には「あの子もまだゆつくり病院にはいつてゐた方が宜いかも知れぬ！」と言つてゐる。そして四五日置には娘と二人で衞戍病院に通つてゐる。

五六軒先きの女の家ではそぼ降る雨の中を何處かへ引つ越して行つた。いつもうたつてゐた小娘の三味線の音も聞えなくなつた。

前の家のお婆さんは私にさう言つて聞かしてくれた。成るほど今度引つ越して來た人の二階には金文字入りの書物などが並べられてゐる。

「今度來なすつたのは中學校の先生さんです……」

一日増しに暑くなるので、近所の障子などが取りはらはれる。左隣の內職の家では主人と息子とが交る〴〵短い破れかゝつたソーフアのやうなものに仰向きに凭りかゝつては卷煙草など喫んでゐる。そして低い、暗い屋根の下から夏の空を眺めてゐる。右隣りの若い彫刻家の鑿の音が靑葉越しに倦怠さうに聞えて來ることもある。

角の五色揚が何時の間にか心太や蜜豆の店となつた。その店の前で私は例のお婆さんと中學校の先生とが挨拶してゐるのを見た。先生は屈託のなさゝうな顔をして笑つてゐた。
「今度引つ越して來た人も善い人らしい……」
私はさう思ひながら時々先生の二階を覗いてゐる。
夜は時鳥が啼いて通るやうになつた。

强く生きんがために

「イヴアン・イルイッチの死」のなかにイルイッチの死を悼みに來た人々の心持ちが描かれてゐる。
「かれは死んだ……俺も死なゝければならぬ……しかし俺は死なぬ……」
或る一人の男の感想はかうであつた。
「すべての人間は死ぬ、かれは人間である、故にかれは死ぬ。」この三段論法を誰れが否定するものがあらう。しかも私たちは往々「しかし俺は死なぬ」と考へることがある――よし一刹那であるとしても。トルストイが説明してゐるやうにイヴアン・イルイッチ自身も嘗てはしか感じたことがあつた。しかし死は必然の現實であつた。人間は恐ろしいこの運命に對して何うする力も持つてゐない。
如何にして死を免るべきか。これこそ常に生きんとする一念にのみ執してゐる人間が一刹那も忘れることのできない重大問題である。
「俺は俺の花園を愛する、書物を愛する、子供の面倒を見る事を愛する。死ねばこれ等のすべてを失はなければならぬ、だから俺は死ぬのはいやだ、俺は死ぬのは恐ろしい。」
トルストイのこの言葉は私たちのすべてが持つてゐる死に對する恐怖であり、悲しみである。トルストイは廣い邸を持ち、農園を持ち、豐かな金錢を持つてゐた。少くともかれは一般の人よりはより幸福な肉體上の生活を味はふことができた。隨つてかれがその幸福な生活の破壞者であるところの死を恐るゝことの强かつたのは、無理もない話である。しかし世間にはトルストイのやうな物質上の生活の豐かな人間は極めて稀である。大部分の人は日々のパンに

すら苦しむでゐる。トルストイには愛すべき妻もあり、多くの子供たちもゐた。しかし世間には全く孤獨賴るなき人人もある。しかもこれ等の不幸なる人々も亦トルストイに劣らないほど死に對しては臆病である。

キリストは「明日のことを思ひわづらふなかれ」と言つた。けれども餘りに苦しい今日をのみ持つてゐる人々は、明日の未知境にせめてもの希望や慰めやをかけてゐるのである。しかも死は明日のこの希望をも奪ひ去つてしまふのである。

富める者も死を恐れ、貧しい者も死を恐れる。生ほどなつかしいものがどこにあらう。しかし私たちはこの懷しい生を捨てようとする人々の餘りに多いことを日毎に目撃してゐる。これは私たちの大問題である。私はその人々の心理を幾度か考へて見た。

「死ねばそのやうな苦痛からはのがれる。」

死を選ぶ人のいつも考へることはこれである。けれどもたとへ死を選ぶ人であつても、少くともその最後の刹那まで「もし生きてゐたら明日は何うにかなるのではあるまいか」といふ考へを持ち得るにちがひない。しかも過去のかれ等の生活は餘りに多く「暗い、絶望的な明日」をのみかれ等に與へたのであつた。かれ等が死を選ぶのは「明日の欺かれたる絶望」を繰り返さんことを恐るゝからである。氣の毒な弱い人々！

漠然として生活をつゞけて行く樂天家に對して自ら生活を拒否せんとする人の如何に愛すべく、如何に尊むべきかは私も知つてゐる。ニイチエもトルストイもミケランゼロもベートーヹンも嘗て幾度か生活の拒否を想へたであらう。けれどもかれ等は最後まで生き、最後まで苦鬪しつゞけた。私は弱い人々に對して尙一歩かれ等が生活のために雄々しく道を切り開くだけの勇氣を持たんことを希望する。

死を恐るゝといふことは人生の悲しい運命の一つである。しかし自ら死を選ばなければならぬやうな苦痛を味はひ

つつある人々は、さらに悲しむべく、同情すべき境遇にあると言はなければならぬ。

けれども私たちは考へて見なければならぬ。同情と正しい事とは混同せしむべきものではない。私たちは善良なる人々が終に自ら生命を拒否する多くの場合を知つてゐる。私たちは同情する。けれどもそれは正しい道であつたらうか。社會や、民衆の壓迫に耐へ切れないが故に、そのやうな方法を取つたとするならば殊に私はその人々の死のために悲しまなければならぬ。それ等の死は要するに、九仞の功を一簣に缺いたものではあるまいか。

無論壓迫、貧困、孤獨のなかに生きて行くことは苦しい。死こそかれ等の最善の避難所であるかも知れない。けれども死は急がずとも必ず一度は誰が上にも來なければならぬ運命 ある。しかし私たちの生命の一日は一度失はれんか永遠に見出すことはできない。生命の尊さはそこにある。永遠の時を通じてたゞこの刹那にのみ與へらるゝ生命を置いてどこに尊いものがあらう。私たちはこの刹那に永劫を通じて唯一つの刹那といふ黄金の杯を與へられてゐる。私たちはこの刹那の杯に盛られるだけ多くの生活の酒を盛らなければならぬ。そして刹那の杯に盛らるべき酒は必ずしも甘きもの、幸福なるものに限られてはならぬ。鞭をも、涙をも、苦惱をもよろこむで盛らなければならぬ。苦い酒、暗い酒を盛ることを恐るゝが故に刹那の杯を壞る者は、終に永遠の神の生命の酒を盛ることはできない。

「生きて苦しめ、苦しむで死ね。」

私たちはかく叫ぶ他はない。これが天才の生涯である。殉教者の生涯である。

×

古來多くの思想家、宗教家たちは靈肉の問題を論ずる時、い も靈は永遠のものであつて、肉は刹那的なものであるとしてゐる。

靈は永遠の殿堂であつて、肉は殿堂を築かんがための足場であるとするのはトルストイの見方である。

かやうに考へることによつてトルストイは死を恐るゝことから免れようとした。しかしこれはトルストイに限らない、殆んどすべての宗教家たちは肉を以て、靈表現のための手段に過ぎないとするのである。

肉は樂器である。靈は風である。肉の樂器は滅びても靈の風は永遠に變らないで次から次へと生まれて來る樂器に樂音の韻律を與へるものであるといふ見方はダ・ギンチも持ち、印度の思想家たちも持つてゐた。

しかしこれ等の見方は餘りに靈をのみ見ることに急にして、肉の偉大さを見ることに於いて缺けてゐるやうにおもはれる。

生死の問題をばこのやうな靈肉の見方から解釋するならば、それはさして悲しい、苦しい問題とはなつて來ない。生死の問題が既に久しい以前に解決せられたやうで、しかもなほ解きがたい所以はかれ等がやゝもすれば輕々しく看過してゐる肉の一面にもつと辣い何ものかゞ潜むでゐるからではあるまいか。

多くの人間は最後には或ひはトルストイやダ・ギンチのやうな、靈の世界をのみ見るやうになるかも知れない。けれども私たち自身にとりてこの見解はまだ實感としは湧いて來ない。私たちが生きんとする意欲の殆んど全部は如何にしてこの肉體を生かすべきかゝら生まれて來てゐる。無論そのうちに精神的生活が含まれてゐることはいふまでもない。更に角この肉體に郎けるところの精神生活を如何にすべきかゞ日々の問題である。靈をも含みたる肉體を如何に生かすべきかゞ問題であつて、靈の奴隷としての肉體を如何にすべきかゞ問題ではない。

このやうに說いて來ると私は靈を捨てゝ肉のみに生きようとしてゐるかのやうに思はれるかも知れないが、私の考へはさうではない。私は靈肉といふ二つの區別を持ちたくないのである。私が思考し、意欲するすべてを私はそのまゝに私一己として生きて行きたいのである。悲しむこと、喜ぶことを知れるこの個我のすべてをはちきれるほど生かして行きたいのが私のねがひである。しかしてこの個我のうちには永遠の生命といふやうなものが潜むでゐるか何うか

といふことを考へる遑を持つてはゐない。私はトルストイにもダ・ギンチにもなれない。しかし私はそれを悲しいことであるとは思はない。

私はトルストイやその他の多くの宗教家たちのやうに次の世界といふやうな思想を持つ人々を羨ましいとはおもはぬ。「死は生の解放なり」といふ神祕主義者の思想は現在の私にも全然ないわけではないが、しかし實感としては湧いて來ない。

私に與へられてゐる生命實感のすべてはこの刹那のそれのみである。私はこの刹那の生命實感をできるだけ力强く意識して行きたいと思ふ。それ以外にまで考へようとはおもはぬ。

私はキリストの生活を想ふ。しかもそれはガリレアの湖畔をさ迷ふたキリストであり、ゲッセマネの園に獨り祈れるキリストであり、マグダラのマリヤに愛せられたるキリストであつて、決して天上のキリストではない。

「もし人生が現世だけのものであるとするならば餘りに儚いことではないか？」

多くの人々はかく言ふ。然り、人生は餘りに儚い。しかしそこに言ひがたき懷しい現實生活の尊さがあるではないか。

流れに指を突つ込むで見給へ。今私たちの指に觸るゝ水はこの刹那に於いてそれが最初にして最終の接觸を持つたのではないか。その刹那の水は永遠に二度と私たちと接することはない。それは儚い邂逅である。しかし儚ければこそ刹那の實感に斷ちがたき懷しさと尊さとが潜むでゐるのではないか。

私たちにとりて現在の生活は苦しくとも、悲しくとも、この生活は永劫に亙りてたゞこの刹那にのみ與へらるゝ實感である。これほど懷しいものがあらうか、尊いものがあらうか。

生命を拒否せんとする人々よ、この刹那の尊い實感の生活を捨てゝ何處により眞實な生活があらう。鞭打たるゝの

苦痛も、さげすまるゝの苦痛も、生きてあればこそ味はゝるゝのではないか。

夜をこめて涙のうちに泣き明かしたる人のみ曉の光りを感謝することができる。鞭打たれつゝ苦しめる人のみ刹那的人生の限りもなき生命の尊さと懷しさとを實感することができる。

私たちはどこまでも現實のこの肉を持てる生活に生きなければならぬ。次の世界の心靈を思ふ必要はない。來べきものならば次の世界は必ず來なければならぬ。しかしこの刹那の肉を持てる人間の生活は二度とは歸つて來ない。

現實の生活そのものが目的であつて、決して次の世界の準備のための手段ではない。

悲しむ妻をいたはれ、弱き戀人をいたはれ、病める子をいたはれ、そしてどこまでも人間として生きよ。

「苦しい、しかし生きなければならぬ。」

生きてあればこそ涙の味もあぢはゝれる。

キリストは人間であつた、そして人間として生きた。最も強い人間としての生活を苦しむことの他に藝術もない。哲學もない。

心の弱い青年に

君のお手紙も原稿も讀みました。

君がまだ世間の苦痛といふものをば、美しいものゝやうに夢みて居られる可憐なお心をもかなり知ることができました。

君が始めて僕の家に訪ねて來られた晩は、僕がこの下町の家に引つ越してから二三日經つたばかりのところでした。平常でさへいら〳〵しい神經になやまされてゐる僕は、土地に馴れなかつたり、引つ越し騷ぎの疲勞やらで神經を昂ぶらせてゐました。

實際君が見えられた刹那、全く見知らない君を見るといふことは、僕にとつて苦痛なことだと思はれたのでした。だから僕は大分君に冷たい風を見せたことを今に氣の毒に思つてゐます。

僕は君がトランクのなかゝら原稿紙に書いたものを出された時、君もまた普通の文學好きの靑年であることを知りました。同時に多少不快な感じを抱きました。僕は僕自身が幾らか文學好きの靑年であつたゝめに、今日意志の弱い人間になつてゐるやうな氣がしてならないのです。涙もろい、意志の弱い學生時代の自分を振りかへつて見て僕は恥づかしくてならないのです。だから文學好きの靑年を見る毎に僕は氣の毒なやうな、そしてまた同時に僕自身の弱點を新しく眼の前に見せつけられるやうな不快な感じを抱かずには居れないのです。

果して君も氣の弱い人間であつた。君は日光に行つて瀧壺をのぞきながら「死」といふ問題を考へられたやうであつた。あの君の文章を讀むと君はやつぱり死といふものをば、永遠の眠りであるとして讃美してゐられるやうであつ

た。

僕にもそのやうな時代はありました。今も時としてそのやうな氣になることもあります。けれども考へて見たまへ。たとへ死が美しい眠りであらうと、永遠の休息であらうと、それは放つて置いても早晩一度は來なければならぬ運命ではありませんか。死は善いものにせよ、惡いものにせよ、いやでも一度は生けるもののすべてが背負はなければならぬ約束です、こつちから行かなくとも先方から必ず迎へに來るのです。

×

それより前に僕等は考へて見なければならぬ事、成さなければならぬ多くの仕事を持つてゐるのではありませんか。

君は生きるといふことを意味のないことのやうに考へられて居られるやうだ。それが第一の誤りであると思ふ。成るほど考へて見ると人間の想像力に泛かんで來る理想といふやうなものに比較して、四千年の人生が成就し得たところの事實が餘りに見すぼらしいもののやうにおもはれるかも知れない。しかし千の理想よりは、たゞ一つの事實の方が僕等にどれほど多く生きてゐるといふ強い實感を與へるかを經驗して見たならば、君の人生無價値論は空想であつたといふことがお分りになりませう。君は街に出て見知らぬ旅人と一度で宜いから心から握手して見たまへ。

僕等はペンを捨てゝ見なければならぬ。そして畑の土を撃つて見たが宜い。そこから春が生まれて來る。自然は、時は、芽生えは、葉は、花は……すべては默しつゝ生まれて來る。君はこの無言の成長、創造に對して驚歎されたことがないだらうか。君は獨歩が「牛肉と馬鈴薯」のなかに「びつくりして見たい、驚いて見たい」といふやうなことを書いてゐるのを讀まれたことがあるでせう。僕等の眼を尙少し開いて見るならばこの世界ほど不可思議なものはない。ソロモンの榮華だに野の百合に及ばないと言つたキリストの言葉は、いかにかれが沈默せる自然の底を流れてゐる大なる驚異を感じてゐたかを證明してゐるのではないだらうか。

盲人は終日罌粟の畑を歩いても何のよろこびをも感じないであらう。僕等の心眼はやゝもすれば自然の驚異に對して、餘りに盲目的なことが多いのではないでせうか。

×

「春が來た！」僕は今朝新聞を讀むでゐて、何でもないやうなこの文字を見出した刹那に、全身の血がよろこびに顫へ上るやうに感じました。

君の寄宿舍の窓にも春が來たでせう。板橋あたりから出て來る荷馬車の上に靑い春の光りが積まれてゐるでせう。あの高い、黑い塀に添うて竝んだ欅の葉が芽生えて來たでせう。裏の門からだらだらと下りた丘あたりには牛が放れてゐるでせう。波狀を描いた耕地の起伏からは麥の靑い春が動いて來たでせう。白い雲が喬木の梢をかざして蒼い空に見えるでせう。君はこの美しい春を捨てゝ何處に生くべき世界があると思はれるのですか。

君は社會は餘りに冷たいと言つた。しかし社會のすべてが悲しむでゐるのではありませんか。社會のすべてが何物かを與へられんことを待つてゐるのではありませんか。君は社會の人々に對して何ものかを與へなければならない、決して君自身が社會から貰はうとしてはならぬ。僕等は貰はんがために生まれて來たのではない、與へんがために生まれて來たのである。愛せられんがために生まれて來たのではない。愛せんがために生まれて來たのである。

若い母を見たまへ、母はその愛を與ふる嬰兒があればこそ幸福を感じ、光りを感ずるのではありませんか。君は故鄉に一人の母親を持つてゐられることを感謝しなければならぬ。君は君の愛を待つ兄弟を持つてゐられることを感謝しなければならぬ。世には愛すべき人さへも持つてゐない不幸な人々がある。

×

更に考へなければならぬことは僕等は人生といふものをば樂しい遊園地でゞもあるかのやうに想像してゐることで

ある。人生は樂しみのために生まれて來たのではない。苦しみのために生まれて來たのであるといふことをはつきり胸に刻み込むで置かなければならない。佛教では業といふ言葉があるやうですが、人生はこの業を果すために生まれて來たのであるといふ信念を失つてはならぬ。悲しみが多くなれば多くなるほど、苦しみが多ければ多いほど人生は讃ふべきものではありますまいか。

ベートーヱンは聾になつた。かれは舞臺に立つても歌ひ手の聲が聞えなくなつた。かれは或る時は自殺を想ふた。けれどもかれは考へた、自分が生きてゐることによりて幾人かの貧しい人々が救はれると。

僕等が生きてゐることによりて僕等の周圍の幾人かゞ救はれるのであつたら、旣うそれだけで十分ではありませんか、僕等が生きてゐる價値があるのではないでせうか。

自分の妻を愛することのできない人に何うして人類を愛することができやう。自分の親を、兄弟を愛することのできぬ人に何うして他人を愛することができませう。

君は幸福です。愛することのできる方々を持つてゐられるのだから。君は死生の問題を考へる前に、これ等の人々を心ゆくまで愛して御覽なさい。

春が來ました。君の寄宿舍の窓から見えるあの欅の森と、青い丘と、白い雲とに、思ふ存分驚異の眼を瞪つて御覽なさい。しばらくペンを捨てたまへ。原稿紙を裂いてしまひたまへ。先づ君は苦しむことゝ愛することに成功しなければなりませぬ。僕自身が毎日この二つに失敗しつゞけてゐるのです。

このやうな手紙を書くことは實は僕自身恥づかしいのです。

小糠雨の日

紀元千八百年の初夏ナポレオンはアルプスを越えた。四萬の佛蘭西兵の肩にはエポーレットが輝いてゐた。雲も鷲も遥にかれ等の足の下に動いてゐた。

佛蘭西兵の頭は伊太利の輝いた平原と戰勝と戀の唄とでいつぱいになされてゐた。

長い隊の最後に騾馬に跨つた背の低い男があつた。かれは何の飾りもない軍服の上に灰色のマントを着てゐた。かれはいつも低頭れがちに、そして沈默がちに雪の中を進むで行つた。それはナポレオンであつた。

かれの傍には一人の素樸な道案内の靑年が隨いてゐた。靑年はナポレオンを普通の兵卒と區別することはできなかつた。靑年はかれ自身のローマンスを語つた。

靑年はアルプスの麓に一人の可憐な娘を戀してゐた。けれども靑年は貧しかつた。かれは一枚の畑も、一軒の家も持たなかつたので、その戀は遂げられさうにもなかつた。

アルプスを越えて間もなく伊太利の平原が見えた。野は新綠に輝き、丘は薔薇の香に滿ちてゐた。

靑年は過分な報酬の他に、ナポレオン自身が鉛筆で走り書きした手紙を貰つて鄕里に歸つて行つた。

靑年はやがて佛蘭西政府から田地と家とを與へられた。靑年は可憐な娘を家に迎へた。

劇的なナポレオンのアルプス越えよりも、更により劇的なこの場面を想へると、赤裸々な人間的なナポレオンが目の前に泛かんで來る。

私は人間的なナポレオンが好きだ。

ニイチエが或る日一人の青年と道を歩いてゐた。かれは途中で小娘に逢つた。小娘は長く前髮を垂れてゐた。ニイチェは小娘に近づいて行つて、小娘の前髪を上げてやつた。小娘はニイチエを見てほゝ笑むだ。

「無邪氣な綺だ！」

ニイチエはかう言つてほゝ笑むだ。

憎みを說いたニイチエ、戰を唱へたニイチエ、キリスト敎の敵のやうに思はれたニイチエの半面にはこのやうな美しい插話がある。

ロシヤ生まれの若い女サロメの前で泣いたニイチエは、決して强い人間ではなかつた。

ニイチエの人間的なところは、愛を說いたトルストイよりももつと人間的であつたかも知れない。

人間的なニイチエ！　私はかれを愛する。

×

最後の睿知に達するといふことがマアカス・アウレリアスの理想であつた。そしてその理想を實現せんがためにはあらゆる人間の愛慾の念をば斷たなければならないとかれは思つた。かれが哲學の第一の修養として唱へたものは死の恐怖から遁れるといふことであつた。かれはその一身を全く自然そのものゝ流轉に委ぬることによりて、死の恐怖を超越することができると信じてゐた。

「吾々が生けるこの靈しき時の間、吾々は自然と調和しつゝ生きて行かなければならぬ。時來れば吾々は謙虛な心をもつて我が生を終らなければならぬ、恰かも熟せる橄欖がその養ひ母たる地を祝福しつゝ、またかれが嘗て實りし木に對して感謝しつゝ、落ちて行くやうに……」

マアカス・アウレリアスの死に對する考へは橄欖の實が地にかへり行くやうに自然的な、平靜なものであつた。更にかれはストイック風な次のやうな祈りを祈つたことがあつた。
「神よ、私にとりては私の子供等が死なうとも、生きやうとも、無關心であらしめたまへ……」
かれは哲人の冷かな絶對智の上に萬有の流轉を靜觀しようとした。それが哲人としてのかれであつた。けれども私たちはその娘の病床に見出す人間的なマアカス・アウレリアスを見のがしてはならぬ。患める小娘の熱い額に手をあてゝ夜もすがら眠ることのできなかつたアウレリアスを忘れてはならぬ。
「間歇熱は除れた。しかし娘は苦しむでゐる、そしてまだ咳をしてゐる。」さう言つてかれは父としての苦悶に泣いた。人間的な弱い心を捨てゝしまつた哲人のマアカス・アウレリアス、國境の蠻族と戰つてローマ帝國を泰山の安きに置いた皇帝の半面には、病床の可憐なファウステイナの悲しみに心を奪はれてしまつた平凡な人間的なマアカス・アウレリアスがあつた。
私は人間的なマアカス・アウレリアスを愛する。

×

小糠雨のそぼ降る日の朝、私は上野の櫻の下に立つてゐた。その下をいろ／＼な人が通るのが私には面白かつたので、いつまでも立ちつくしたまゝで通り行く人々を見てゐた。誰も彼れも花に醉つたといふのであらう、人々の目は幸福に輝いてゐた。人々の足は幸福と驚歎とに踊つてゐた。池の傍を葬ひの列が谷中の方に通つて行つたが振りかへるものもなかつた。人々は死を考へるには餘りに現在の幸福に醉ふてゐた。
小糠雨は小止みなく降つてゐた。幾臺もの自動車が町の方から走つて來ては大佛の下で止つた。中からは幸福に輝いた男や女たちが出た。

櫻の下を歩いてゐた女たちが、自動車から下り立つた人々を見た。櫻の下の女たちの眼には羨み、嫉妬の炎が仄かに燃えてゐた。
「かれ等は幸福のうちにも不安を持つてゐる！」
私はかう思つて姑く可憐な女たちを見てゐた。
花やかな貴婦人や紳士たちは幸福を誇るやうに自動車を捨てゝ花の中にかくれた。
堅パンを嚙じりながら二人の兵隊が枯れ樹の根つこに腰を卸してゐた。小ひさな犬にうばくるまを曳かせた男の子が通つた。車のなかには嬰兒が眠つてゐた。
花をつゝむで鐘樓の鐘が響いた。鐘は無限の寂寞と、萬有の流轉とを悲しむやうに響いた。
しかし花は咲きこぼれてゐた、人々は餘りに幸福に醉ふてゐた。人々の目は光りに滿ちてゐた。
私はいつまでも幸福に醉へる人々を見た、花の下を通る葬ひの列を見た。
小糠雨はなほ降つてゐた。私は博物館の後ろから家の方に歸つて行つた。
生と死の間に恐れつゝ、まどひつゝ、笑ふこともできぬ自分自身を悲しみながら花の下を歸つて行つた。
小糠雨は降りつゞいてゐた。
人を幸福ならしむべく花は與へられた。
人々は笑はなければならぬ。人々は幸福を感じなければならぬ。
たゞ一人呪はれた男が笑ひもしないで花の下に立つてゐた。

×

色々なことを想ふ日がつゞく。

一坪の庭も持たない下町の二階の窓から、雨に暮れて行く大都會の町外れを見ながら色々な事を想ふ日がつゞく。たゞ一度逢つたきりで、今何處にゐるのか、生きてゐるのか、死んだのか、それさへ分らない人のことを想ひ出すこともある。

屋根の波を越して遠く〵に欅の新芽が見える。王子あたりの煙が長く曳いてゐる。蛙がものうげに鳴いてゐる。亡くなつた男のことや、肺を病むだ女や、それからそれと忘れられぬ人々の俤が胸に泛かんで來る。

人々は花に醉つてゐる。人々は春の野を走つてゐる。私は二階の窓から薄曇りの空をながめながら過ぎ去つた日の夢をくりかへしてゐる。

人々は醉つてゐる。私は覺めてゐる。疼くやうな過去と、涙ぐましい現實の前に目覺めてゐる。

心靈の扉を

或る不正直な男が或る慈善家の馬を盜むために、乞丐の態をして道傍に寢てゐた。慈善家は馬に乘つてそこへやつて來た。

「急に體の具合が惡くなつて歩けないから、その馬に乘せて下さい。」

乞丐は悲しい聲を絞つて慈善家に懇願した。慈善家は馬から下りて、その馬を乞丐に與へた。乞丐は馬に跨つて一鞭を加へてから言つた。

「俺は乞丐でないが、君の馬が欲しかつたから乞丐の態をして來たのだ。」

慈善家はそれに對して次のやうなことを言つた。

「馬は君にやる。しかし乞丐にたつて私から馬を詐取したことだけは人に語つてくれるな。でないと眞個な乞丐を惠む人が世間にゐなくなるから――」

此の物語りは色々なことを私に考へさせた。殊に私はこの馬の持主の心をこの上もなく尊いものと思ふ。トルストイの無抵抗主義もドストイエフスキイの人間的な愛もこの主人公の寛容な心持ちを目あてとして進むでゐたのであつた。

欺かれても尙ほ人を憎むことのできぬ主人公の心持ちはドストイエフスキイの小說を讀むで何時も私たちが限りもなくゆかしく感ずるものである。「貧しき人々」の主人公も「虐げられし人々」の主人公も皆一樣にこの欺かれ、裏切られた人々であつた。しかもかれ等は自分を裏切つて行つた若い女たちのために神の祝福を祈ることを忘れなかつた。

僞られても尙その人を憎まないといふことの困難なことは、眞面目に人を信じ、または人を愛せんとした者の何時も經驗する苦痛である。信愛の念が强ければ强いほど裏切られた苦痛や絕望は激しい。しかもその燃えるやうな絕望や憤怒に打ち勝つて、平靜な心を抱いて自分を僞つた者のために悲しみ、またかれのために祝福を祈るといふことは何といふ美しい英雄的な行爲であらう。

けれども實際日々の生活に於いて、このやうな英雄的行爲は容易に實行せられ得るものではない。ドストイエフスキイのシベリアに於ける生活は決して、かれの作中の主人公のそれのやうに寛大なものではなかつた。「良の中の狼」とさへ言はれたほどかれは氣むづかしい顏をしてゐたこともあつた。この點はロシヤの聖者とまで一部の人々にたゝへられてゐるトルストイの場合も同一である。かれがモスクワの大學を捨てゝ田舍に歸つてから握つた農民の手は、かれの空想を壞るほどがさつなものであつた。しかしかれの空想を破つたものは農民の手のみではなかつた。殊にかれの博大な愛の生活を裏切つたものは僞り多い農民の心であつた。かれ等は與ふれば怠り與へなければ盜むと言つた風で何時もトルストイの心を裏切つた。トルストイが金錢を與ふることを惜しむだといはれる原因の一つは、トルストイ自身よりは寧ろかれの愛を裏切つた農民自身にあつた。兎も角トルストイすら人を愛する困難には一生を苦しめて居た。

けれどもトルストイは愛の實行といふ點では幸福であつた。かれは死の刹那までも「俺一人の心配をしてくれるな世界には幾百萬の苦しめる人々がある」と言明するほどの愛し貰かうとする心を持つてゐた。かれのこの强い愛の一念は恐らくかれの深い愛と强い意志の力とから生まれてゐるのであらう。

世間にはトルストイほどな愛の深さも、意志の强さも持たない人々がある。このやうな人々の心に愛が芽生えて來た時、それをはぐくむで行くためには、餘ほど順當な環境がなければならぬ。で、ないと、折角萠え出た愛の芽もむ

ざむざと凋まされてしまう。「ばかばかしい」だの「他人は他人だ」のといふやうな投げやりな言葉の底には、如何にかれ等の純な愛情が嘗て裏切られ、嘗て僞られたかといふ暗示が潜むでゐる。

人は年を老るにつれて思慮深くなると言はれてゐる。そして思慮深いといふこと、又は分別があるといふことは要するに人に僞られないといふことであり、馬鹿を見ないやうにするといふことである。昔から人間が如何に僞られ、裏切らるゝことを恐れ警戒するやうになつてゐるかといふことが察せられる。

主家を失つた犬の臆病なことは誰れも知つてゐる。かれは誰をも疑ふ。かれは誰に向つても警戒を怠らない。裏切られ、僞られた人々が年々と疑ひ深く、頑な心になつて行くといふのは悲しい氣の毒なことである。私たちは臆病な冷たい老人の疑ひ深い心を憎む前に、かれ等をしてかくならしめた周圍について考へなければならぬ。

乞丐の態をして馬を盗む男は私たちの周圍にずゐぶん多い。私たちはこの假面を冠つた乞丐を憎まずには居れない。大抵の馬の持主は、あの物語りの主人公のやうに寛大な人々ではない。随つて馬を盗まれることが度重なるにつれて、かれ等の心は誰れをも疑ふやうになる。そして最後には眞個のあはれな乞丐をすら惠むことをしないほど冷たいものとなる。私たちは頑な心になつた馬の持主を責める前に、人を僞つたかの男を責めなければならぬ。

人を僞る男は人の心を壞る罪人である。馬を詐取する男は大抵の場合、馬の所有主の靈をも奪ふものである。失はれた馬の損害は償ふことができる。けれども失はれた靈の損失は永遠に償ふことはできぬ。

トルストイの愛が矛盾を持ち、ドストイエフスキイの眼が狼のやうな疑ひと警戒とを持つてゐたのも、その多くの罪はかれ等を僞つた農民や社會の人々にあつた。卽ちかれ等はトルストイの靈に疑ひ深い影を投げ、ドストイエフスキイの靈の處女性を奪つたのであつた。靈の盗人ほど恐ろしい、憎むべき罪人があらうか。

無論私たちはたとへ裏切られやうとも、僞られやうとも自分の靈を壞つてはならぬ、奪はれてはたらぬ。けれども

あの物語りの主人公ほど寛大な心を持つてゐない私たち自身は、ともすれば日一日と人を恐れ、人を遠ざからうとしてゐる。恰かも中年の男が夢中になつて人を戀することのできないやうに、私たちは自分のすべてを投げ出して人を信愛する心が一日一日と薄らいで行くやうに思はれてならぬ。それは私たちにとつて寂しいことであり、悲しいことである。

でなくとも、もと／＼利己的であつた人間の心は年一年と年をとるにつれて自分一人のなかに生活して行かうとする傾きがある。しかしこれは非常に危險なことである。馬を盗まれたがために、私たちの靈の扉まで鎖してはならぬ。僞られても僞られても私たちの世界にはまだ私たちが救つてやらなければならぬ幾百萬の苦しめる者があることを忘れてはならぬ。

私たちは過去に於いて比較的純な愛と純な涙とをもつて人を信愛することができた。私たちの靈の扉は、悉く開かれて、直ちに他人の靈と相抱くことができた。けれども私たちの扉を叩いた幾多の僞れる闖入者があつた。私たちは幾度か絶望し、幾度か怒つた。私たちの靈の扉は日一日と鎖されて行つた。そして今では私たちの靈の扉を叩くものがあつても容易に扉を開かうとはしない。かれ等は扉を叩き疲れて終に私たちの扉の前を空しく去つてしまつた。或る者は私たちの鎖された扉の前に飢と寒さとの爲に斃れてしまつた。私たちは扉を開いた刹那に自分の冷たい心を責めずには居れない。私たちは僞れる闖入者を恐れたがために、眞實の友を殺してしまつた。

僞られても、裏切られても私たちの靈の扉を鎖してはならぬ。僞るものゝために祝福を祈れ。自分が僞られたことを神に感謝せよ。そして嬰兒のやうに人を信愛する心を持て。僞られつゝ尚ほ一生兄弟たちのために靈の扉を開いてゐる者は幸である。

秋の感謝

栗の葉が輝き、花が咲いたと思ふ間もなく、隣の邸には毎日植木屋の鋏の音が聞えた。植木一つ植ゑる土も持たぬ私の借家住まひでは、北に面した二階の窓から見る隣邸の栗の葉は、何れだけ私の慰めであつたか知れないに、たゞ少かばかりの梢をのこして刈られてしまつた。栗の下には一本の枇杷の樹があつた。五月雨のころには黄色の實が厚い葉のなかに抱かれるやうにして熟れてゐた。そのころは毎日のやうに隣邸の主人や娘たちが、梯子や長い竿を持ち出しては、枇杷の樹の下に集まつてゐた。私はなるたけ窓から顏を出すことを控へてゐた。枇杷の實が取りつくされてしまつてからはこの庭の一隅は全く忘れられてしまつた。栗の花には蜜蜂が來て輝かな眞夏の光りを浴びつゝ囁いてゐた。私は何の遠慮もなしに北向の窓から顏を出して、栗の花を見た。冬枯のころ、この窓から見た秩父あたりの山脈は見られなくなつたが、青い空を白い雲が動くともなく動く影や、荒川の方へ翔んで行く白い水鳥の群などを見ながら、私は一日、半日を怠惰に暮らすこともあつた。

少かに刈りのこされた栗の梢には、可憐な栗の實が日一日と大きくなつて行つた。夕立が來て時折琥珀色の栗の實に小ひさな露をのこして行つた。それが光線の關係で色々な形の寶石のやうに、或る時は星のやうに見えた。私は窓から飽かず眺め入ることもあつた。

前の家の籬には白い木槿が咲くやうになつた。朝開いて、夕方にはしぼんで行く淸楚な花を見ながら、秋の近づいて來たことを心から感ずるやうになつた。

私の窓からはまた、若い彫刻家の屋根を越して、百日紅の花が見えるやうになつた。私はこの花に對しても親しみ

を持つてゐた。ペンを擱き、本を捨てゝは、私は窓に凭つて棗を見、木槿を見、百日紅を見てゐた。私は一坪の土地をも持たないことを悲しまない。棗も百日紅も白い木槿も、更に空の雲も自由に私に與へらるゝから。

"The east and the west are mine, and the north and the south are mine."

私の小ひさな窓から棗を、百日紅を、木槿を、そして更に郊外の樹立を見、平原を掩ふ白い雲を見る時、風の蹤を聽く時私は詩人ホイットマンが東西南北の空間と自然とを自己の所有であると想へた心をば察することができる。

佛を刻む若い彫刻家よ、君は何故に軒の秋風を聽かうとはしないか。私は散らんとする百日紅を見てはさう思ふ。

「小ひさな水甕を持てる者は、自ら水甕の重きに患む、小ひさな水甕を捨てゝ大海そのものゝなかに飛び込め、大海は汝のものである。」印度の哲人は昔からこのやうな言葉を幾度もくりかへしてゐる。私は最初から一つの水甕を、與へられなかつたことを感謝しなければならぬ。

老乞丐

黄昏のころ街を歩いてゐて、このごろ一人の不思議な男と識るやうになつた。六十ばかりの腰の曲つた、背の低い老人であるが、その男は何時も小ひさな手押車を持つてゐる。車のなかは炭俵の屑だの、古下駄だので大抵いつぱいになつてゐる。その男は洋服とも和服ともつかない妙な着物を着て地に這ふやうにして歩いてゐる。幾年と櫛を入れたことも洗つたこともないやうな髮は胸のあたりまで垂れてゐる。恐らく一生笑つたこともあるまいと思はれるやうな凄い眼つきをして、人を睨めつけるやうにして、車を押して行くかれの姿は、とても日本人だとは思へない、ロシヤあたりの小說のなかにでも出て來さうな不思議な人物のやうに思はれる。私は最初何うしてもその男を眞正面に見ることはできなかつた。空家に火を放けたり、明巢をねらつたりする男は、このやうな男かも知れないと思つた。私はその老人を憎いとさへ思つた。

或る雨　日の暮れ方であつた。泥濘の道に、私はかれがづぶ濡れになつて、例のやうに、手押車を押してゐるのを見た。私はかれの車のなかを覗いて見た。車のなかには古い板の破れたのが一枚はいつてゐるばかりで、他には何にもはいつてゐなかつた。私は何の考へもなしに白銅を一枚老人に投げるやうにしてやつた。老人は泥濘のなかに跪かんばかりにして、私の後を見送つた。

それから後、夕方の街で私を見るごとにかれは頭を垂れて行くやうになつた。凄いやうなかれの眼が、私には疲れ切つた不運な男の眼のやうに思はれるやうになつて來た。

私はかれが誰で、何處に住むで何をしてゐるかも知らない。かれも亦私について何も知らない。けれども私たちの

魂は夕暮れの街で逢ふごとに語り合つてゐる。

私は近いうちにこの町から、何處かの町へ家を引つ越す考へでゐる。かの老人と逢ふこともあるまい。かれはまた幾多の人に憎まれ、呪はれつゝ夕暮れの街を手押車を押して行くことであらう。恐らくかれが死ぬ日まで。

人が人をさばく

一人の女が三人の子を馬橇に乗せてロシヤの雪の大森林を走つてゐた。月がぼんやりと雪の上を照らしてゐた。恐ろしい嵐が時折梢を鳴らして過ぎた。やがて雪の上を黒い雲が這うて來た。凄じい嵐の聲が聞えた。それは狼の群であつた。狼はやがて馬橇を取り卷いてしまつた。「誰か一人……さうすると他の者は助かるかも知れぬ。」女はさう考へた。女は一人の子を狼の群に投げてやつた。馬橇は走つた。間もなく狼の群はまた橇を取り卷いた。女は更に一人の子を雪のなかに投げた。馬橇は走つた。狼は更に馬橇の後を追うた。女は最後に抱いてゐた嬰兒を雪のなかに投げた。

冬の朝早くであつた。イヴァン・イヴァノギッチは手斧を掴んで松の樹を削つてゐた。雪のなかに鈴の音が聞えて、間もなく一頭の馬が血みどろになつて橇を曳きながら走つて來た。橇のなかには氣絶した女が横たはつてゐた。人々は女を更生へらした。女は森のなかの出來事を語つた。女の物語が終つた刹那、イヴァン・イヴァノギッチは手斧を揮つて女の首を切り落してしまつた。「神がかく命じ給うた」と言つたきりで、かれは家に歸つて扉を鎖してしまつた。

寺の廣場では老僧を取りかこむで評議會が開かれた。イヴァンは罪人であるか、罪人でないかといふ問題がかなり長いこと論ぜられたが、結局イヴァンの行爲は神の命令によれる正しいことであるとされた。人々はイヴァンを喜ばせるためにかれの家に馳けつけた。家の扉は鎖されてしまつてゐた。人々は扉を排してはいつて行つた。そこに人々は五人の子供に取り卷かれながら、モスクワのクレムリンの塔のモデルなどを持ち出して、遊んでゐるイヴァンを見た。

「お前は無罪だ。」と村の人々が言つた。

「當り前だ！」イヴァンはさう言つたきりで、子供を對手にして、村の人々を見向きもしなかつた。

ブラウニングの詩に描かれたイヴァン・イヴァノヸッチの物語は、善惡、正、不正に對して氣持ちの宜いほどはつきりした判斷を與へてゐる。

手斧を揮つて女の首を切り落したイヴァン、「當り前だ」と言ひ切つてしまつたイヴァンの善惡の判斷は、鋭い刃物で物を斷つたやうな氣持ちがする。

しかしキリストでさへも昔、「汝等のうち罪なき者先づ石にて女を撃て」と言つたではないか。イヴァンは「罪なき者」であつたかも知れぬ。けれども私たちの間に誰が躊躇なくしてイヴァンの手斧を揮ひ得るものがあらうか。

私はこのごろ、或る學校を卒業したばかりの青年が、金額にしては恐らく一圓にも足らぬことから罪に問はれ、宣告が下つて十五分も經たない間に、裁判所の一室で自殺をしたことを聞いた。

その靑年は時折常識を逸したやうな態度を示すことがあつた。たしかにかれは生まれながらにして精神上に缺けたるところがあつた。その缺けたる一點がかれをして罪を犯さしめたのであつたらう。その缺點は遺傳的なものであつて、かれは不幸にして呪ふべき遺傳を與へられたのであつた。罪を犯させた力は遺傳であつて、罪を恥ぢて自殺をはかつたのはかれの汚されぬ良心であつた。美しい良心と恐ろしい遺傳とが結びついた性格ほど悲劇的なものはない。自殺した靑年はたしかにこの種の悲劇の主人公であつた。

「人が人をさばくちからを持つてゐるか」といふ疑は誰も持つてゐることである。有體にいふならば、「人が人をさばく」といふことは全然人間の世界から取去られなければならぬことであるかも知れない。けれどもこれは今日のところでは架空論であつて實行せられ得べきことではない。私たちは恐れつゝも「人が人をさばく」方法を取らなければならぬ。しかも悲しむべきは「さばかるゝ人」でなくて「さばく人」であることを知らなければならぬ。そしてさば

くことがやがてさばく人をも、さばかるゝ人をも救ふ道であるやうにしなければならぬ。

親が子を鞭打つ時には親は涙をもつて鞭打つて居る。涙に浄められた鞭は子を救ふと同時に親をも救ふ。

法律といふ死物によりて罪人をさばく人があるならば、それは罪人を殺すばかりでなく、さばく人かれ自身をも殺すことになる。

「人をさばく時には兄弟の心をもつてさばけ」と言つたゴーゴルの心は涙をもつて人をさばく心である。涙をもつて人をさばく時、私たちは始めて「人が人をさばく」の罪から救はれることができるであらう。

私たちが正しいイヴァンであり得ない限り、しかも私たちが手斧を握らなければならない限り、私たちはその手斧に心から涙を灑がなければならぬ。

囚人馬車を驅る男と、囚人と、それを傍観してゐる人々と、誰が眞つ先きにイヴァンの斧を受けなければならないのであらうか。

迷ひ子

「ばかやらう、なぐるぞ。」
二三軒先きの長屋の子供は、人の顔を見るとさう言つた。やつと、危ふげに歩き出したばかりの子供は、その言葉が何の意味であるか知らう筈はないが、それはかれが生まれてから最初に發表し得た一つの纒つた言葉であつた。
かれは白い木槿の下の道でも逢ふ人ごとに「ばかやらう、なぐるぞ」と言つた。人々は頭を撫でながら通り過ぎた。
朝から子供の聲が私の窓に洩れて來た。私は笑ひながら初秋の空を見てゐた。
五六日子供の聲を聽かなかつたと思つてゐたが、或る朝長屋から、白い布につゝまれた小箱が、たゞ一人の男に擔がれて行くのを見た。子供が死んだのであつた。
三河島あたりの田圃のなかを、たゞ二人の男に擔がれながら行く子供の、可憐な屍を想像しながら、私は秋の空を見てゐた。
「ばかやらう、なぐるぞ。」
私は口のなかで言つて見た。私は噴き出して笑ひたくなつた。同時に子供が死んだことに氣付いた。
「あの子は死んだのだ。」
さう思つて私は白い木槿の下を見た。そこには誰もゐなかつた。
世界から可憐な一人の子供が、迷ひ子になつてどこかに去つてしまつたやうな氣がしてならぬ。

落葉の詩

日の暮れて間もなくであつた。

どこから來たとも知れぬ Cosmopolitan はだんまりこむで歩いてゐた。冬近い町はづれの道を。

櫟の落葉が力なきかれの靴に踏まれるごとにかさ〳〵と靜かな音を立てた。Cosmopolitan はだんまりこむで歩いて行つた。冬近い野の道を。

櫟の實が落葉の上にはたと落ちることもあつた。野鼠が道を横切つて草のなかにかくれた。Cosmopolitan はだんまりこむで歩いて行つた。冬近い丘の上を。

青い星が出た、北風が吹いた。黍のうら葉ががさ〳〵とそよいだ。Cosmopolitan はだんまりこむで歩いた。冬近い耕作地の道を。

かれの頭には酒場の紅い燭がいつぱいに燃えてゐた。

紅い燭の酒場はむせかへるほど人いきれしてゐた。皿の打つ突かる音、フオークのきしる音、幸福な眼の輝き……

しかしそこでも Cosmopolitan はだんまりこむでゐた。

かれの頭には町はづれの櫟の葉摺れの音が聞えてゐた。

秋は過ぎ行く

鏡の前に立つ女、秋は過ぎ行く
白い夢の昨日は滅えて冬の夜は近い
しかすがになつかしまるゝ若き日の夢
みだるゝには餘りに寂し、うとましき黒髪
櫛の歯に秋の夜は過ぎ行く、寂し黒髪
人生は餘りに短かい
乙女の夢は更に儚い

死の歩みが

絲を噛む女、かちといふ絲切り齒の音の寂しさ
さら〳〵と友禪の華やかな彩のをどれり、針を持つ女の寂しさ
埋み火のやうに思ひ出すこともない思ひ出がかの女の胸に湧く
悲しくもなく懷しくもなく、うれしくもなき過去を持てるかの女にも時折りは不思議な思ひ出の影が射す
針を持つ手の白さ、針をはこぶ秋の夜の冷たさ、白い夢は音もなく永遠の時に流れ行く
思ひ出なきかの女の思ひ出
女よ秋は老け行く
世界には幸福もない、不幸もない
あるものは思ひ出なき思ひ出のみ
友禪の華かな彩が顫へる
秋の夜は冷たい
どこかで死の歩みが聞える

何も望まない日

何も望まない日がある
たゞ快い秋の空氣と、小春日の光りとを吸うて街を歩く日ほど樂しい日はない
食ふといふことも着るといふことも忘れて、たゞ渡り鳥のやうにあてもなく街を歩く日がある
時間といふものを知らないで、あてもなく歩く日がある
私の血管には遊牧時代の祖先の血が流れてゐる

怠け者

怠け者ほど賢い人間はない
怠け者ほど幸福なものはない
太陽と野の風は何時も野の怠け者の友達である
學者の友達には本がある
怠け者の友達には大自然がある
學者は何時も人間の言葉を語る
怠け者は何時も神の言葉を語る

夜道を歩いてゐる時

夜道を歩いてゐる時空の星を仰いで色々なことを想へた時代があつた。今にも折々にはそのやうなこともあるが先ほどではない。

人間は星の世界からだん／＼地の世界へ墮ちて行くのであらう。腰が曲つて地をのみ見るころは、大抵人間は天のことを忘れて地のことをのみ思ひわづらうてゐる。

やがてかれ等は墓穴の底を覗かなければならぬやうになる。

私は若い日のつゞくかぎり星を見てゐたい。

毎日朝から晩まであくせくとパンのために追はれてゐる私にも、夜更けてから不圖星を仰ぐやうな機會もあり、またそのやうな氣分も湧くことがある。その夜の一刹那こそ私の生活にとりては最も尊い、惠まれた刹那である。

私はその刹那にこそ自分をも家をも社會をも忘れて、たゞ一つのあこがれの魂となつて永遠の寂光のなかに溶けこまうとしてゐる。

私はその刹那こそ永遠の寂寞を知る靑年であり得る。

星は毎夜輝いてゐる。しかも私の靈も星を仰ぐことが日一日と稀になつて行く。

私たちの頭を上げろ、星は何時でも輝いてゐる。

黄色な壁に

黄色な壁に蟋蟀がとまつてゐる
ストーブの火はあか〳〵と燃えてゐる
若い男女たちは楽しいクリスマスの相談をしてゐる
蟋蟀は如何にして生くべきかを考へてゐる

兄弟の話

トルストイの物語りにこんなのがある。
兄弟の信仰深い男が道に出た。そして黃金が捨てられてあるのを見出した。
兄は顧みもしないで山にかへつて一人で神に仕へてゐた。
弟はその黃金を拾うて、養育院や敎會を建てたり、色々な慈善事業をした。そしてかれは幾千の人に幸福を齎した。
かれは善い事をしたと確信した。かれは得意な心を持つて兄の家に急いだ。けれどもかれは途にエンゼルに出逢つた。エンゼルはかれの行爲を決してたゝへなかつた。
かれは兄の家に行つた。兄はたつた一人で山のなかに祈りと沈默の生活をつゞけてゐた。
エンゼルは兄の生活を正しいと言つた。

上野の森のあたりを

一人で上野の森のあたりを歩いてゐる夕暮れ、疲れたといふのではないが、落葉に埋められてゐる石の上に腰を下してゐると、また新しい落葉がかすかな音を立てゝ落ちる。

落葉のなかを歩いて來る男は大抵私自身に似た寂しい男のやうにおもはれる。或る男はわざと落葉を蹴つて歩いてゐる。

しかしどの男も秋の疎林のなかに滅えて行つてしまふ。

夕暮れのなかを白い柩が靜かに運ばれて行く。編笠の男たちの白い草履が寂しく落葉を踏むで行く。

私は靜かにその後を見送つてゐる。

夕暮れのなかを花やかな馬車や自動車が走つて行く。花嫁を待つ美しい人々が西洋館の前に立つてゐる。

私は靜かにかれ等が笑ひ、かれ等が踊るのを見てゐる。

人は嫁いで行く、人は生まれる、人は死ぬ。

私は何時も落葉の上からそれを傍觀してゐる。

父

秋になつた爲か、古い時代の田舍の事が懷しく想ひ出される。酒を飮まなければ豪傑になれないと言つて父に强ひられて、十幾杯の酒を飮むで三日ばかり學校を休むだのは尋常二三年の頃であつた。

二里ばかりの山路を隔てた海岸の親戚の家に行つて茶碗で濁酒を飮まされたことがあつた。歸る途中で芋畑の中の橙子樹の下に寢轉むで、眼を醒ました時は夕月が出てゐた。家では狐につれられたのだといつて大騷ぎをしてゐた。

何でも尋常科の頃であつた。私が「酒を飮まされたので……」と言つたら、父は笑つて居て、叱らなかつた。父は士族の商法で酒屋を開いて、三年續けて酒を腐らして、一文なしになつたが、私には酒を飮むことを進めた。父の自慢は、昔箱根の關所で土佐の侍と酒の飮みくらをして勝つたことゝ、九つの時、二十になる町人を切つた事であつた。亂暴な父は克く薪などで私を擲りつけたものであつた。しかし、今では八十に近い父は私が葉書一枚欲しいと言つても自分で飛び出して買つて來てやらうとする。私が東京に發つ時は眼を濕ましてゐる。何故父は昔のやうに私を薪で打つてくれないだらう？　故鄕に歸る每に私はさう思ふ。父は馬鹿親である、それだけに私は父が懷かしい。

秋の朝

今朝であつた。何處からやつて來たか、髪の眞白になつた年取つた女狂人が、包みを背負つたまゝ百日紅の下に坐つては「こんなに草を生やしては家が腐れる」と言つて草を挘つた。色の白い女は格子扉から出て來て狂女に錢を與へた。

「二三萬本も草を挘つて、たつた五錢貰つた」。

老狂女は大きな聲でさう言つて恥づかしさうに口のあたりに手を上げて笑つた。狂女の笑顔は恰度梅幸の老婆のやうに氣高かつた。

色の白い女も淋し氣に笑つた。

秋の朝の光りは傷つけられたる女たちの魂を祝福するやうに輝いた。

祝福さるべき罪人

雨の日であつた。
今にも雪になりさうな寒い雨の日であつた。
寛永寺に近い小學校では七つ八つの子供たちが文房具店や煙草店の軒下に雨を避けて顫へながら立つてゐた。
中にはお下げにした眼の大きい色のくつきりと白い可愛いゝ女の子も交つてゐた。
子供たちは交る〲硝子窓を通しては店の柱時計をのぞいて見た。
時計は七時で釘付けられてゐるやうにおもはれた。
女の子も時計をのぞいては引きさがつた。
可憐な指先きがちく〱と刺されるやうに疼いた。
「まだなの？」
紅いリボンの子がたづねた。
「まだ五分進むだばかり……」
弟らしいむく〱と肥つた子がこたへた。
雨は霙になつた。
學校の門は七時三十分でなければ開かれぬことになつてゐた。それでも小雀のやうな子供たちは一時間も、もつと前から門の前につめかけてゐた。

學校には一人の老小使がゐた。かれは愚鈍な男であつたが何時も子供たちから愛されてゐた。
校庭の眞んなかに餘り大きくない一本の銀杏樹があつた。秋になると銀杏樹は黄葉して落ちた。子供たちは銀杏樹の落葉を本の栞に挿むだ。
老小使は朝ごとに黄金色の落葉を拾つて置いては子供たちに與へた。
寒い朝や、雨の日など老小使は時間前に門を明けて子供たちを校舍に入れた。そして「そつとしてるんだよ、校長先生に見つかると叱られるから……宜いかい……七時半が來たら騷いでも良い」と言つて小使部屋の方へ行つた。
それでも小雀のやうな子供たちはぢきに小使の言葉を忘れて騷ぎ出した、
校長の家は學校の直ぐ近くにあつた。校長はまだ夜具にくるまつてゐた。校長は床のなかで子供たちの騷ぐ聲を聞いた。そのやうな時は老小使は屹度教員室に呼ばれた。
「學校の規律を亂してしまふ。お前は學校から出て行け。」
校長は何時もかう言つて老小使を叱つた。或る時は校長は懲罰に用ひられたことのある鞭で老小使を擲つたこともあつた。そして次のやうな言葉をつけ加へることを忘れなかつた。
「今度こんなことがあつたら屹度追ひ出すからさう思へ。」
今朝もまだ校長は眠つてゐた。
子供たちは霙に濡れて顫へてゐた。
銀杏樹の葉は落ちつくしてゐた。
老小使は玄關から往來を眺めた。
子供たちは文房具屋の時計を覗いては學校の腐れかゝつた門を見た。

老小使は二三度玄關と門の間を傘もさゝないで往き來した。かれは校長の恐ろしい眼と言葉とをはつきり意識した。かれは躊躇した。

「小使さあん！」

紅いリボンの、眼の大きい、一等可愛らしい娘の子が叫んだ。

老小使の手は何の躊躇もなしに古びた閂を握つてゐた。尙一度店の時計を覗いて見た子供もあつた。子供たちは可憐な鬨の聲をあげながらはいつて行つた。

「靜かに……」

老小使は子供たちに叱るやうに言つた。

「靜かに……」

「しいつ……」

年かさの子供たちの聲と一緒に老小使の聲がきこえた。

戸外の霙は刻々にはげしくなつて來た。

文房具屋の時計は七時十分を指してゐた。

可憐な罪人たちの上に祝福あれ。

木槿の家

「せめて自分の家だけは持つて居なければ落ちつかない。」と云ふ人がある。しかし持たなければ持たないで却つて、その落ち着きのない所に何時も旅人が感ずるやうな儚い懷かしさを感ずるものである。此世そのものを一つの旅路であると考へて居る私は、「日々旅にして旅を住家とす」と云ふ心持ちを豐に味はふことのできる今の生活を貴く思ふ。二臺の荷車さへあれば今日にも、何處の町にでも移り住むことの出來る氣易さは自分の家を持たぬ者でなければ感じ得ないことである。鳥が梢から梢に、野から野へ翔り行く心である。そして移り行く先々の新しい町では新しい町の空氣や氣分を味はふことができる。

山の手から下町に移つて來た私は殊にさう思つて居る。お互に玄關の格子扉を明くれば顏と顏とを突き合せなければならぬ横町の人々は、引越して來て直に親しい間柄のやうになつてしまふ。誰も彼れもが何の肩書もない本當の有りの儘な人間として觸れ合つて居る。美しい所も、醜い所もむき出しにして、眞晝になれば小學校の先生が水を撒いてくれることもあれば、彫刻師のお袋が掃いてくれることもあり、また相場師の女が、水を撒いてくれることもある。夜になれば八百屋の主人が涼み臺を出してくれるので、學校の先生も、彫刻師も、相場師も、顏の白い女たちも一緒に集まつて來て天の川を見上げたり、不安な顏をして、日に日に暴騰して行く米の話をして居る。

「白い木槿の花は、お腹の痛むのに宜いと云ふから少し下さい。」横町のお觸れ役になつて居るお人善しのお婆さんが相場師の女にさう言つた。それにつれて八百屋のおかみさんも、先生の家の下女もねだつた。翌の日から、色の白い女は庭の花がしぼみ出すと、木槿の花片を集めた。

こゝに居る人々もそれ〴〵見榮や祕密を持つて居るに違ひない。けれども山の手に住む中流階級の人々に比べると何れ程善人であるか知れない。子供のやうな無邪氣な心！　もし私たちの周圍に幾分でも嬰兒のやうな心があるとするなら、それは世の中から捨者のやうに思はれて居る人々の間に見出される。

敎會の慈善券を無理強ひに賣りに來たり、夜は十二時近くまで騷ぎ立てゝ、隣住まひの私たちの讀書の邪魔をして、途中で逢つても知らぬ顏をしたやうな、山の手の貴婦人たちより、自分から世を憚つて棲んでゐる不幸な女たちに何れ程尊敬すべき人間らしい所が多いか知れない。

やがて白い木槿が散つてしまつて、葉が落ちるころは人々は東に西に別れて行くことであらう。裏町の不幸な人たちほど流轉のはげしいものはない。そしてかれ等は永遠に逢ふことは恐らくあるまい。次の夏、白い木槿の下にはまた新しい不幸な人たちが集まつて語り合ふことであらう。

黄昏の空を

黄昏の空を鳥は雲に入る
曇り日なれば筑波も見えず
黄昏の野を人は野に入る
曇り日なれば秩父も見えず
永遠に人は生きつゝ、永遠に悲しみつゝ、やがて永遠の死に入る

五月雨の日

黒い被につゝまれた柩車が走る。
さみだれの日の正午
薔薇、矢車艸、カアネーション、睡蓮……いろ〳〵な色の、いろ〳〵な花が黒い柩車の上を一面に掩ふてゐる。
柩車のなかには柩はまだ入れられてない。
細い雨の絲が音もなく花の環にそゝいでゐる。
馬は雨のなかを走つてゐる。柩車は街から街を走つた。
世界の何處にその柩車に眠るにふさはしい人が居やう？
紗絹の雨を通して私の幻に立つ俤……さうだ、まだ生まれざる戀人のたましひ！
まだ見しことなき乙女のたましひ！

雲

雲、銀の雲、黄金の雲、波の雲、紅の雲……夕暮れをかざる夏の雲
黄昏ごとに雲を見る孤獨の生活のうれしさ
貧しければ、地に持てるものなければ、……戀人を持たざるがゆゑに、黄昏ごとに大空を見、夕暮の雲を見る
何物をも持たざるがゆゑに常に雲を見る心を神に感謝す
我が心何物をも持たず、我が心たゞ涙に滿てり、神の造り給へる萬有の影を湛ふべき

落日を見る時

落日を見る時、かれの俤の泛かぶ。
落日を見つゝ別れしかれを想ふ。
千葉の街(まち)の柩の通りしも落日のころであつた。
隻脚の少年、飯坂の女、淺間の娘たち、落日の悲しみを知つてゐるか。
君等がやさしと見、あはれと思つたかれは落日のころ異郷の病院で死んだ。
世界は私にとつて空虚になつた。
たゞ落日のころだけ、私の胸に悲しみが更にふかく湧いて來る。その時だけ、私のたゞ一つの世界がよみがへつて來るやうに思はれる。

麗春花

二鉢の花が貧しい私の家に買はれて來た。
ゼラニウムと麗春花は今日も石の上に、五月の陽に、紅い夢をつゝむでゐる。
何處の野からゼラニウムは？
何處の畑から麗春花は？
そして貧しい私の家でめぐり逢ふたか。
かれ等は語らない。笑ひもしない。けれども生きてゐる。樂しさうに生きてゐる。明日はまた私と一緒に何處の町へ移らなければならぬかも知らないで。

夢の墓場

旅人は……
薄暗の木立の下に波打ちし胸を想ひぬ。
人生はたゞ悲しき希望の脱け殻のみ。
若き日は美し、されど夢のみ。
悲しき夢の墓場守ることの苦しさに旅に出でたり。
されど旅は更に悲しかりき。悲しき心の泣きくづるべき墓場なければ。」
旅人はまた歸り來りぬ。
かれは夢の墓場を抱きつゝ今日も泣けり。

銀の壺

おぼろ夜の聲、おぼろ夜の眼、さながらに人を思ふ。
涙なき悲しみなれば拭くすべもなし。
人は永遠に別れて、永遠に逢ひがたし。
涙なき悲しみなれば永遠に乾くことなし。
稚き初夏の夜、夢みし心……
涙なき悲しみなれば名づくべき惱みなし。
何となく寂しき心、永遠に歸り來ぬ夢の夜――涙なき悲しみほど懷しく、苦しきはなし。

歎なけれど我が惱みの底に歎あり。
涙なけれど我が幸福の底に悲しみあり。
聲なき歎、涙なき悲しみ――かくて若き日は過ぎぬ。
美しき銀の壺に盛られたる歎の悲しさ。
黑き笑の跫音は顫けり。
失はれたるおもかげをなほも忘れず。

シネラリヤ

緣日で紅い色のシネラリヤを買つて來た。

二三日經つてからまた白のシネラリヤを買つて來た。あわたゞしい生活の朝夕に忘れないで水をやつてはそれを眺めてゐる。

下町の家には草花一つ植ゑる庭もないので、緣端にシネラリヤの鉢を出しては少かに眼を樂しませるより他に方法はない。

この日曜の午後始めて私はたゞ一人でゆつくり緣端に坐る怠惰の時間を持つことができた。

初夏の碧い空の下で、紅と白のシネラリヤに對して私は考へるともなく、瞑默するともなく、快い眞晝の光りを浴びた。

私は水を掬むで花の根にかけた。葉や花が五月の光りのなかに踊り始めた。

二つの花、それが私の持つてゐるすべての財産である。私の庭である！　私は幸福である。

充ち足れる心、何ものをも持たぬ心、神よこの心を感謝す。

シネラリヤは踊つてゐる。うたつてゐる。笑つてゐる。小ひさな塊の牢舍で。

怠惰な五月の日の午後、悲しみを忘れた男のやうに、私は可憐な女囚の舞踊を見てゐる。

踊れ、踊れ、シネラリヤ。

花瓣が散る！　葉がそよぐ！　碧い空の光りに。

明日からはまた私もあわたゞしいパンのための生活をせねばならぬ。
日曜の午後のシネラリヤ。明日からはまたゆつくりと語れさうもない。
踊れ、踊れ、シネラリヤ、碧い空の光りで。
私はまた水を掬むでやつた。
充ち足れる心、涙ぐましき心、悲しみを忘れた男のやうに怠惰な午後！　神よこの心を感謝す。

五月の夜

神樂坂を下つて來ると、坂の途中で筵を布いて一人の男が尺八を吹いてゐた。傍には十ばかりの男の子が俯伏せになつて眠つてゐた。
五月の夜は暗い。雨あがりの地はじめ〳〵してゐた。
眼をつむつた男は首を振つて尺八を吹いた。四五人の人が立ち止つてはやがて立ち去つて行つた。錢を投げる人もない。
私は荷車の蔭に立つて少時聽いてゐた。
學生時代の淡い夢がよみがへつて來た。私は尺八を吹く男に感謝しなければならぬ。けれども私はポケットに手を入れることさへしなかつた。筵の上に眠つてゐる男の子を見ながらも。
男は尺八を吹いた。人々は聽いては、すた〳〵と通り過ぎて行つた。
私はなほ闇のなかに立つてゐた。私は私の淡い過去の夢のみを考へてゐた。
筵の上に男の子が突つ伏して眠つてゐた。私も人々と同じやうに去つてしまつた。
貧しき心の所有者！

柳

たゞ四五本の柳が五月の柔かな風に吹かれてゐた。

纖細い處女を偲ばせるやうな白い幹が重さうに、しかし幸福にあふれたやうに綠の葉をさゝへてゐた。

早稻田の埋立地の一隅に忘れられたのか、たゞ四五本の柳がとりのこされてゐた。昔ながらの小ひさな川の流れが五六間ばかり埋めのこされて、鐵漿のやうな色の水溜りが柳の輝かな葉影を映してゐた。

トロッコの軌條が、新しい土の上を走つてゐた。塵埃車が後から後からと駒塚橋の方へ行つた。

廣い、がさつな早稻田の埋立地!

變壓所の赤い煉瓦家がそびえ、俄作りの工場が並ぶ時、柳の風が何處に吹かう。

忘れられてゐる柳は明日にも切り倒されるかも知れぬ。

私はしばらく柳を見てゐた。早稻田田圃の最後の名殘りを惜しむために。

次の夏、目白の丘や戸山の原に若いみどりが輝く時、柳の蔭を誰が憶えてゐやう。

柳! お前の下で私は摘み草に來た子供たちのナイフを拾ふたことがあつた。それは十年前のことである。私は久しい間ナイフの主を色々と想像しながらそのナイフを机の上に載せて置いた。

しかし幾度か家を移る間にナイフも失はれてしまつた。私が胸に描いてゐたナイフの持主の俤も忘れられてしまつた。

その後私は色々な人々を知つた。悲しい思ひもした。そして二度柳の下に立つた時は、私は昔の無邪氣な心は持つ

てゐなかつた。私は人を疑ふことを知つた。運命といふことを知り、諦めといふ世間の人にとつて都合の宜い、そして私自身にとつて苦しい經驗をしなければならなかつた。
私は三度柳の下に立つた。お前の周圍は壞られてしまつた。私の心も破られてしまつた。
お前は明日にも切られてしまうだらう。さよなら。
私はまだお前がこの世界に見えなくなつてもこの附近を通るたんびに柳の蔭を思ひ出すであらう。と同時に拾つたナイフのことや……色々な人々のことや……
私たちの夢の日は過ぎた。

夜と青空

蛙の鳴く夜であつた、二人が歩いたのは。
白い埃の道が流れに沿ふてつゞいてゐた。
私たちは何にも考へないで、何にも語らないで歩いて行つた。
若い心にはたゞそれだけで十分であつた。
遠くで蛙の聲が倦怠さうに聞えてゐた。
私たちの心が微かにさゝやき合つてゐた。けれども私たちはその聲を聽くことができなかつた。私たちの胸はあまりに波打つてゐたから。
世界は若い心のために作られてあつた。正しいことのために、美しき心と心とのために。詩のために。夢のために。
しかし夜が明けた時、若い人の心は眩まされてしまつた。世界は幸福のために作られてあつた。現實のために。
さよなら。夜と青空!
蛙の聲が聞える。悲しい思ひ出を喚びさまして。
私は蛙の聲を聽いてゐる……永遠に一人で……

旅人は北より

旅人は北より、風は南より……
夏の輝きは大空に顫けり
世界は今いのちに滿てり
たゞ一つたらはぬ悲しみのあり
忘れたる悲しみの快くもよみがへれり

カフエの窓

カフエの窓より見る街の列樹
六月の光りを吸ふて葉は懶げに眠れり
生温き珈琲の香を懐しむ寂しい心
人々のなかに混りて孤獨なる心
あてもなき戀人の顔を想ふ…………
光りあり窓下の列樹の蔭を
過ぎ行きし人の足の白さ
皿を滑るフオークの音の寂しさ

雨の音は悲し

神は宇宙を造り給へりといふ……
神とは？
疑ひつゝ信じつゝ今日も暮れたり
我が窓に雨の灑げり
暗き夜の青葉に悲しき雨のさゝやき
神を信ぜず、神を知らざる心にも雨の聲は悲し
暗き雨のさゝやきほど悲しきはなし
神を知らず、されど雨の音は悲し

青き朝

雨降る青き朝なり
モルヒネを飲みて自殺せし看護婦のあり
死ぬものゝたましひはめぐまれてあれ
雨はたましひのすゝり泣き
女は弱ければ死ねり
男等の笑ひ聲の聞ゆ
寂しき六月の雨の午後

冬の詩

海は和む！　海は荒ぶ！
海の一と色、水平線の夢の一と色、空の眠り！　音、波の音、風の音、永久に滅え、永久に響く海邊の音！
何故に喚く？　何故に泣く？　何故に眠る？
知らず。岸に立つ我が心のみ疼く。
滅え行くよ若き日の幻。滅え行くよ、若き人々のいのち。
碧色のなかに、空色のなかに、いやはての波のさけびに、滅えて行くすべての思ひ。

よみがへるすべての過去の面影。
若き日も、死ねるも、失へるも汀に立てばよみがへる。
はてしなき波のはてより、青空より、懷しき、悲しきすべての幻は歸り來。
失へる日もさながらに、失へる時も痛きまでに我が胸にかへり來。
なつかし、心傷るほどなつかし。このまゝに死ね。

黄昏れて行く波の音。
また明日の日もあり。

されど明日はたが悲しみをうたはむ。
我がいのちなし。
我が夢もなし。

ウラジオ更紗

ウラジオ更紗。花模樣、深みどり、鳶色、褐色、眞紅色
病室の隅に抛り出された異國の色
扉の外には闇が迫り、雪が降り、嵐が騒ぐ
病室の片隅に投げられた電燈の光りと更紗の彩
色々に絡ませて編む聯想の花
王者の舞踏室
シベリアの馬車の鈴
ペルシヤの王宮
ばか、ばか、ばか……
夜の九時の工場の汽笛が鳴る、地の底から呻くやうに
雪の夜に滅えた汽笛の行く衞！
勞働よ、鬪ひよ、別れよ、そして死よ

Tの墓

六月の暑さまさかり、雲雀の唄に我泣きつゝ歩めり。
瓜の黄色な花、麥の穂の光り、眼を開けば千葉の耕地は紫になごめり。
二日前死を思ひつゝTが歩きし丘の道、一歩一歩拾ひつゝ我は歩けり。
潮の香は涙を誘ふ、土の香は心狂ほし。
歩きしよ、歩きしよ、あてもなく稻毛の濱を。
Tが笑みて松原から、積藁の間から跳び出して來るやうに。

二度冬は過ぎて、また冬が來た。
生きし日に思ひもよらざりしこゝの墓場にTは眠れり。
小ひさき魂と、かれの血を吸ふた短刀と、靜かに地の冷たき夢を抱けり。

病みあがり

病みてありき、死を恐れぬ、死を決しぬ。
力なく歩み初めし日のうれしさ、生くることはわけもなくうれし。
葉は落ちて庭には雪白うなりぬ。
藥焚く爐に力なき我が影のうごめく。
生くることの嬉しさ、生くることの悲しさ。
暮れて行く窓に見る冬の寒空。

植木屋の死

二三年前私たちの庭に山茶花を植ゑてくれた植木屋があつた。若い、きさくな男であつた。

それが四五日前肺病で亡くなつたといふことを聞いた。

「家を持たなかつたので、池上の方に一人の親戚があつたものですから、駕籠で伴れて行つたのですが、途中で死にました。」

仲間の若い男が私の庭で植木をいぢりながら話した。

私は池上に行く途中の櫟の並木や大根畑などを想ひ出した。

植木屋はあの並木あたりで最後の呼吸をしたのであらう、何時でもそして何處でも人間は死ぬ。

星は飛ぶ

星が冬の空を切つて一つ飛んだ。
人間は醉つて踊つてゐる。
また次の星が靑い光りを引いて飛んだ。
人間は醉つて踊つてゐる。
哲學者だけが起きてそれを見てゐた。
人間は何にも知らないで死んで行つた。
哲學者は悲しみつゝ死んで行つた。

森を歩めば

森を歩めばさくさくとはかなきものゝ音。
丘を歩めばことことと遥かなる悲しみ……
この刹那人は戀し、人は生まれ、人は死に行く。我一人たゞ何時までも生きてある心地す。
憎み、呪ひ、愛、惡罵……すべて波のひと揺れ、小さき人間の惡戲。
大地は冷たく眠れり、
人間の心のみ或る時は炎の如くその上に踊る。
文明、戰爭、藝術、哲學、男女、殺生……然り太陽の火の如く燃ゆ。
されど黄昏は早し。すべては地の冷たき夢につゝまる。萬有の表現は刹那の惡戲。
森を歩めば淚流るゝ、
地を擊てば永遠の歎息。
我れ一人立ちて生きてあり。

十四の夏

私は何時も十四五歳のころ故郷の町から筑後川を渡つて熊本に行つた時のことを思ひ出す。それは眞夏のころで、平原を一直線に走つた國道には焦げつくやうな石がころがつてゐたり、煙のやうな埃がけだるさうに立つてゐるころであつた。國道に沿うた濠には白い菱の花が咲いてゐた。池の面からは絶えずパチ〱と小ひさな椎實でも嚙むやうな音が聞えてゐた。鮒が菱の實をつゝいてゐるのだと敎へて與れた子供もあつた。

濠の傍には大抵櫨の若葉が蔭を拵へてゐた。私はその木蔭に幾度もやすむだ。二三度は水のなかに飛び込むで泳いだりした。筑後川をわたつて柳川の町を通りぬけるころから矢部川行きの馬車と一緒になつたが無錢旅行同樣な私は馬車にも乘れないで、埃にまみれながら一人で歩いてゐた。矢部川に着いたのは日暮れ方であつたが、今にも山の高い所に見えてゐた寺の塔を忘れることはできない。矢部川から汽車に乘つたが、私は生まれて始めてその汽車のなかで大學生を見た。その大學生は兩眼鏡を持つてゐた。私は何だか非常な偉人に出逢つたやうな氣がしてならなかつた。

日が暮れるにつれて何だか心細くなつて來た。熊本城のうしろのステーションに着いたのは夜の十二時ころであつた。月の佳い晩であつた。巨きな樹立の繁つた暗い森蔭のやうなところやら、白い壁の竝んだ坂をのぼつて行つたが、既うどこの家も寢てしまつてゐたので、泣き出したくなつた。どこいらが町だかその見當もつかなかつた。ところが同じ汽車で一緒に着いた二十あまりの女の人がうしろから私に追ひ付いて親切にものを言つてくれたので非常に嬉しかつた。その女の人は東京の學校から歸つて來た人であつたが、三十町ばかりで私の友人の家であつたが、その女の人

はそこまで私を伴れて行つてくれた。

「今に大きくなつたら僕も東京に行きます。」

「東京においでになりましたら逢つて上げますよ。」

その女の人は何う言つても名を教へてくれないで何處かへ行つてしまつた。

それから十幾年になる。その後私の生活も大分かはつた。

その夜私がたづねて行つた友人は先月の末神戸で亡くなつた。

私は東京に來たが、その女の名も知らなければ顏もおぼえてゐない。

たゞ月に照らされた女の顏の白かつたことのみを覺えてゐる。

妙に私はその夜のことを忘れることができない。

世界は疲れた

落葉を踏んで森に入れば、ばさ〳〵と秋の聲が寂しい。
腐れたる梢、朽ちたる木の葉の底に靜かな秋の悲しみがまつはりついてゐる。
病葉は秋の陽をかざして靜かに顫いてゐる。
風もない。まだ渡り鳥の聲も聞えない。
私は立ち止る無限の靜寂は地の底から湧き、梢から流れ、空氣は永劫の沈默を懷いてゐる。
今私は生きてこの靜寂に浸されて、秋を懷しみつゝ、人生の神祕を想ふ。孤獨！　力なき生の歩み！　秋の森の如く。
しかし私は今生きてゐる。生きて感じつゝある、悲しみつゝある。生きてゐるといふ、たゞそれだけの感じで十分だ。私は生きてゐることを感謝する。
谿、流れ、曠野、牧場……すべて秋の光りに包まれたものゝ上には、たゞ流轉し行く自然の無限なる靜寂を見出すのみである。
谿の底には暗が迫つてゐる。
流れの水は淀みつゝ動いてゐる。
曠野には廢墟のやうな家が見える。
牧場には落葉した木立が、冷たい影を地に投げてゐる。

世界は餘りに長く生きた。世界は疲れた。

雲を見よ、汽笛の音を聽け、鴉の聲を……。

世界は疲れた。

世界は創造の始め若者のやうに力強く、獸のやうに捷に生きてゐた。乙女のやうにはしやいでゐた。けれども世界は今や餘りに老いた。

世界のよろこびの聲も、悲しみの聲も、深く深く地の底に埋められてしまつた。

世界は餘りに疲れた。耳を大地につけて聽いても、容易に世界の聲は聞えなくなつた。

地は永遠に默した。靜寂な秋の聲たけが、仄かに私の胸に響いてゐるやうに思はれる。

木は落葉する。人は死ぬ。靜寂のみが永遠に大地を包む。

光りは過去の

秋の雨の午後。鴉の單調な聲が聞える。梭の音が聞える。汽車の音が聞える。遠くから鐵を斷つ音が響いて來る。疲れたる世界の魂を腐らすやうに細い雨が降つてゐる。刹那にして滅えて行く色々な物の音を縫ひつゝ、雨は小止みなく降つてゐる。魂の底までが饐えてしまつたやうだ。

光り！　たゞひと條の光りが欲しい。

黑い瞳の光り！　可憐な唇の光り！

雨は小止みなく灰色の空をつゝんで灑ぐ。

私の生活に何の光りがあらう！

光りは過去の幻影であつた。私は幻影を追ふには餘りに疲れた。

雨、雨、雨のなかにじいつと眼を見開いて、灰色の空の靜寂の聲を聽かう。

靜かに涙の苦さを味はひ、靜かに失はれたる過去の悲しみを見まもることが、すべて醒めたる人々の唯一つの生き方である。

光りは若き日の幻影である。

雨は醒めたる日の現實である。

雨、秋の雨降れ　疲れた私の魂のために。

人生は嚴肅なり

「人生は嚴肅なり。」ロマン・ローランのこの言葉は所謂世紀末の灰色な、頽唐的な人々の心のうちに一脈の光りと、新しい力とを吹き込んだ叫びであつた。

個人に希望と絶望とが絶えず繰りかへされてゐるやうに、人類の思想の歴史もまた絶えず曙光より黄昏へ、薄明より黄昏へと明暗の境を徂徠してゐる。

「落日がなほ靜かに燃ける間に、のぼる月を見るはうれし。」詩人はかく歌ふた。けれども同時に隱れんとする淡月を見つゝ曉天を迎へることは、更に嬉しいことである。近代の多くの思想は曉天の潑剌たる新生のいのちを迎へようとしてゐる。「人生は嚴肅なり」といふ考へは將にこの新時代を象徴する第一聲であつた。

唯物論的な見地の上に築かれた過去の文明は、私たちの心靈の上に倦怠と凝滯の影を投げかけた。世界は心靈の呼吸を息つまらせるほど物質的な、習俗的な、空氣に充たされてゐた。私たちは靈的には餘りに墮落し過ぎてゐた、私たちは餘りに俗化し過ぎてゐた。

「人生は嚴肅なり」この叫びは或ひはトルストイによりて、或ひはロマン・ローランによりて繰り返されてゐる。物質文明の重荷の下に眠つてゐる人々を眼さまし、激勵し、鞭打つものはこの雄々しい人生肯定の叫び聲である。私たちは眠つてゐてはならぬ。怠けてゐてはならぬ。私たちは立つて心靈の窓を開かねばならぬ。そしてそこから新しい神の國の空氣を取り入れなければならぬ。

私たちは久しい間室のなかに閉ぢこもつてゐた。そして「生とは何ぞや？」「死とは何ぞや？」の哲學的問題を繰り

返してゐた。問題は永遠に解決を與へられさうにもなかつた。私たちは思索に飽いた。私たちは絶望した。私たちは久しい間眠つてゐた。

しかし夜が明けた。新しい世紀の風が吹いて來た。私たちは眠つてゐてはならぬ。扉を開け、そこからは生まれたまゝな人間世界の朝の風が吹いて來た。

夜の世界にある者は「光りとは何ぞやと？」訊ねたであらう。けれども朝のフレッシュな光りに照らされたものが、何で光りに對して同じ疑問を繰り返す必要があらう。

眼を開いて見るが宜い。扉の隙間から白い光りが射して來た。窓を開いたが宜い。朝の光りが一面に流れて來た。一刹那でも怠けてゐてはならぬ。出來るだけ私たちの胸をひろげて芳しい朝の空氣を吸へ。開かれるだけ眼を開いて生まれたまゝの光りに驚いた方が宜い。光りと空氣とは私たちの反問思索を允さない。それは唯一絶對の實在そのものである。物それ自身である。私たちは今それを與へられた。久しい暗黑と絶望の底に待つてゐた人類は、今その光りと空氣とを與へられた。私たちは現實の今それを摑めば宜い。握れば宜い。

しかし朝の時は短かい。私たちは一刹那でも怠けてはならぬ。短かい時の間に吸へるだけ多くの空氣を吸ひ、浸されるだけ多くの朝の光りに浸されなければならぬ。

朝の光りと朝の空氣とに浸される心ほど嚴肅なものがあらうか。そこには塵ほどな倦怠もない。私たちの心の隅から隅までが引きしめられてゐる。

×

引きしめた心は言ひ換ふれば良心の鋭い批判である。かれ等は先づ自己に對して、社會に對して鋭い解剖批判のメスを揮ふた。自然主義或ひは人道主義は一見全然相剋した人生の見方を持つてゐるやうに思はれてゐるが、引きしめ

た心といふ點に於いては二つとも同じ出發點から生まれてゐる。自然主義は最も鋭い、また大膽な、正直な解剖刀を揮つた。自然主義は餘りに大仕掛な解剖の手術に疲れ切つた傾きがあつた。かれ等は一度剖いてしまつた人間の醜い屍を如何に縫ひ合すべきかに迷つた。人道主義はその點に於いて近代人に解剖の後の成さねばならぬ作業を示したものであつた。人道主義は自然主義の當然の結果として近代人が見出さなければならぬ思想であつた。二つの主義をば異つた立ち場から生まれ出たやうに考へるのは誤りである。無論外面に現はれて來た結果から見れば、一は肉生活に沒頭し、一は靈生活のみを主張してゐるやうに見えるが、自然主義の作家が肉の生活にはいつて行つたのは、何處までも空想を排し、迷信を排し、事實そのものゝみに權威を認めようとした近代人の正直な心からである。畢竟かれ等が見出さうとしたものは眞實であつた。人道主義者が或ひは神、或ひは正義と呼ぶものゝ本體を見出さうとしたに過ぎない。一を惡魔の主義、一を神の主義であるかのやうに決めて、雜作もなく二つの範疇のなかに片付けてしまふのは、ばかばかしいほど正直であつた自然主義に對して餘りに同情なきやり方である。

兎も角近代人の眼ざめは自然人の大膽な自己解剖から生まれ、近代人が行かんとしつゝある將來は人道主義者が提示した嚴肅な生活肯定である。何れも引きしめた心の所産である。

引きしめた心を持つた近代人の生活に對する第一の要求は最も強く生きるといふことである。最も深く生きるといふことである。最も眞實に生きるといふことである。

このやうな生活法は人間の知識が複雜となつて來れば來るほど困難なことである。

「嬰兒の如くあれ」といふキリストの言葉がトルストイによつて繰り返されたのは畢竟この困難を切り拔けんがためであつた。

近代文明は今までにない複雜な知識の重荷を人類に擔はせた。人間は知識の重荷を背負ふことによりて文明人とし

ての矜持を持つてゐるかのやうに想像した。けれどもそれは頭をのみ支配する物質界の財産であつて、決して心を支配する靈的なものではなかつた。かれ等の心は物質的な知識の重荷のために刻々に壓迫せられて行つた。

「嬰兒の如くなれ、無智となれ。」と叫んだトルストイの言葉は心を救はうとする人道主義者の叫びであつた。

民衆或ひは民本といふやうな言葉は直ぐ凡人または一般人といふやうな意味を聯想させる。民衆主義といふことが凡人または一般人の幸福を基礎としたといふやうな意味であるならば、決してそれは新しい言葉でも、思想でもない。民衆思想の誤つた解釋の結果は世界をば再び俗化し、物質化しようとしてゐる。その適例は敎化を缺ける人々によりて支配せられんとしてゐる今日の多くの國々に見出さるゝ。

今の民衆主義ほど誤まられてゐるものはない。民衆主義のなかに含まるべき民衆とは決して農夫や勞働者のみではない。それは救はれた眞實の人間のすべてを含むべきである。それは貴族であつても宜い、乞丐であつても宜い。ただ正しい、生まれたまゝの心を持つたものでさへあれば宜い。

今の民衆主義者のうちには誤つた考へから出發してゐる者もかなり多い。そしてその結論は「かれ等により幸福な生活を與へよ」といふことになつてゐる。

無論幸福な生活を與へようとすることは宜いことである。農民に畑を與へることも勞働者に勞銀を增してやることも宜いことである。けれども私たちは次のやうな話を考へて見たい。

或る日トルストイがモスクワ(?)の街を歩いた。かれはポケットのなかに三十幾ルーブルかの金を持つてゐた。かれは貧しい人にそれを與へるつもりで歩いてゐた。けれどもかれは終日歩いたが、終に與へることができないで歸つてしまつた。

この話は一面から見るとトルストイが金に對して執着を持つてゐたかのやうにも考へられるが、私はさうは思ひた

くない。かれは盲目的に金を與へることの却つて、人を救ふ道でないことを知つてゐたからである。かれが與へようとしたものは決して一時的な幸福ではなかつたからである。

政治、宗教、社會救濟の事業が民衆に幸福を與へんがためのみの民本主義であるならば、それはトルストイと同じく尚一度考へ直して見なければならぬ必要がある。

キリストは言つたことがある「我が生まれたるは劍を出さんがためなり」と。キリストが生まれたのは人類に幸福や喜びを與へんがためではなかつた。それは妻をして夫に叛かせ、子をして親に背かせんがためであつた。更に自己をして自己に叛かせんがためであつた。

民衆主義者の第一の仕事は先づ自己をして自己に叛かしむることである。かれは人を救ふ前にかれ自身救はれなければならぬ。

かれは自分を民衆のレヱル以上に置いてはならぬ。かれ自身が最も眞率な、最も貧しい民衆それ自身でなければならぬ。

教師といふ仕事は何時も他人を指導するものであるかのやうに思はれてゐる。けれどもかれ自身常に自分自身を導く底の人でないならば、決してかれはほんたうな教育家ではない。自分自身のうちに絶えず自らを責め、自らを批判し、自からを改めんとする人のみ始めて教育家となる資格を持つてゐる。モンテーンの所謂智慧の木の實をついばんで口より口に傳へんとする親鳥のやうな教育家は存在の必要はない。

民衆主義を唱へる人々に對しても同樣なことが言へる。他人の學說を頭に憶え込むで口から口へと傳へる機械であつてはならぬ。かれ自身最も痛切に民衆たるの要求と自責と自覺とを感じなければならぬ。かれ自身が眞の民衆でなければならぬ。それならば民衆とは何であるか。これが第一の問題である。

民衆とは心の世界に眼さめたる人間の意味である。富、幸福、權威、知識を捨てた一個赤裸々な赤ん坊である。かれの生活の目的は眞率な心と、大膽な勇氣とをもつて刻々に人間生活を善と眞とに近づかしめようとする努力にあるかれは殉教者的人間でなければならぬ。かれの目的は幸福ではなくて、苦痛でなければならぬ。かれの生涯は笑ひではなくて悲しみでなければならぬ。しかもかれは苦痛をも涙をもよろこむで忍ぶだけの勇氣を持つてゐなければならぬ。かれは正直な自然人でなければならぬ。

×

昔は英雄と凡人との差別が際立つて見えてゐたやうに思はれる。けれども人間の知識が進むにつれて兩者のけぢめが漸次取り除かれて來た。それは英雄がつまらなくなつたからでなくて、むしろ凡人が英雄に近づきつゝあるからである。民衆主義の究竟の目的は世界中の人間を英雄のレヱルまで引き上げることになければならぬ。民衆主義者の第一に考へなければならぬことはこゝにある。民衆を騙つて、いやでも英雄の地位にまで引き上げてやるだけの親切がないならば、それは眞實に民衆を愛するものではない。

ロマン・ローランの英雄主義こそ民衆の行くべき道を指示してゐるものではないか。かれの言ふ英雄は殉教者であり、肉體的にも、精神的にも不運なる鐵砧の上に鍛練せられた苦痛の人であり、失意と逆境を通じて偉大なる人格を打ち建てた人間である。「俺は一人の友人も持たぬ、俺は一人で生きねばならぬ、……」この孤獨のうちにあつても尙ほ神を捨てないベートーヴエンの人格を持つものである。裏切られ、僞られても尙ほ人を憎むことのできぬトルストイである。

×

「人は二人の主に仕ふる能はず。」キリストはかくいふ。人間の懊惱はいつも二つの主に仕へやうとしたことから生ま

れてゐる。肉と靈とに仕へやうとした結果である。如何にして靈肉の二つを生かすべきか、これがいつも私たちの生活の悲しい矛盾となつて現はれてゐる。しかし問題は極めて簡單である。その一つを捨てよといふことである。しかしその實行は非常に困難である。トルストイが兎角の批難をされるのもこゝにある。けれども私たちは一度は思ひ切つて何うにかしなければならぬ。「全か然らずんば無」底の決斷は英雄主義者の必ずしなければならぬ必要條件である。この點に於いてトルストイは失敗した。ロマン・ローランはそれに對して極めて同情ある批評を下してゐる。「かれは弱かつた、かれは人間であつた……しかしかれが人間であればこそ吾々はかれを愛する」と言つてゐる。しかしトルストイの失敗は必ずしも、私たちの同じ失敗を是認するものではない。私たちはキリストを見、アシシのフランシスを見、佛陀を見るとき、古來の英雄が立派に二つの道の一つを捨てゝ、一つを選び得たことを知ることができる。「俺を眞似てはならぬ、キリストを見よ……」トルストイのこの言葉は、たしかに私たちが再びかれの失敗を繰り返さないことを警告してゐる。たとへロマン・ローランが同情を持つて批判したにせよ、私たちはトルストイの弱點をまで眞似る必要はない。私たちはキリストや佛陀に歸つて行く必要がある。

無論私たちの肉の生活を捨てゝ靈の生活のみに生きようとすることは、殆んど私たちにとつて不可能のことのやうに思はれる。日々の私たちの生活を顧ると大抵は、恰度その反對な生活を繰り返してゐることが多い。殊に人間の美現實界の美にのみ多くの價値を見出し易い私自身にとりては、キリストや佛陀の道を歩くといふことは、この上もなく苦痛なことである。私は絶えず絶望してゐる。その結果はメレジユコウスキイが考へたやうにトルストイの靈の柱と、ドストイエフスキイの肉の柱とを、一つの點に於いて結び付けようとする考へを抱くことが度々ある。しかしこれは決して英雄主義者の歩いてならぬ道ではあるまいか。日蓮が歩いた道、親鸞が歩いた道は何時もたゞ一條であつた。「竈下枯淡益々甚し、商家捨る所の敗醬を乞ふて日用に給す。」「松蔭に住してより既に十年、枯淡を甘ない、艱難を

喫して、專一に道の爲にし、誦諦禮樂に拘らず。夜は破轎の中に坐じ、兀然として且に達す、叉閉關室を方丈の後に構え、冷坐して世緣を忘る。」

これは白隱の生活であつたが、自分の肉を割いて惡魔に與へたといふ佛陀の傳說と共に、殊に現實の肉的生活に執することの强い私が忘れることのできぬ文字である。

×

藝術家と經濟といふやうな實際問題が、近ごろ色々な人々によつて論ぜられるやうになつたのは喜ばしいことである。たゞ一口に昔の人のやうに淸貧に甘んぜよといふやうなことで生くるか死ぬるかの重大問題をば、さう簡單に片付けてしまふことはできない。藝術家といへども人間である以上は人並の生活欲望は持つてゐる筈である。ましてや周圍には色々な系累がある以上は、これは誠に大事な硏究問題である。現に私たちの勢力の大部分は喰つて生きて行くといふ一事のために費されてゐる。藝術家と經濟といふ問題は當然考へられなければならぬ必要事件である。このやうな際に生活上の經濟問題或ひは周圍の可憐な系累をば眼中に置かない、殉敎者的な生活といふやうな大膽なことを言ふのは、自分としては恥づかしいやうな氣もしないではない。

けれども心の何處かの一隅には、たしかに自己の肉を割いて惡魔に與へた佛陀の行爲を讚美する悲壯な感じが潛んでゐるにちがひない。餘りに物質的な、餘りに人間的な生活にのみ追はれてゐる私たちのあわたゞしい心の一隅にはもつと暗い、もつと靜かな、もつと悲壯な、眞劍な生活を求むる念が動いてゐるやうに思はれてならぬ。

少くとも現實の生活をもつと嚴肅に考へて見るといふ點からしても、私たちは人生は決して幸福のために存在するのではなくて、民衆のために苦痛と悲哀とを分ち持つために生きてゐるのであるといふ感じを深く意識しなければならぬ。

今の學校教育の多くは良妻賢母のために、または將來の幸福のために費されてゐる。これは極端に淺薄な人生の幸福を目的としたやり方である。今の宗教も同じ批難を持つべきである。このやうな教育と宗教とからして何うして偉大な人間が生まれよう。

重ねて私は言ふ。人間は樂しむために生まれて來たのではない。苦しむために生まれて來たのである。悲しむために生まれて來たのである。そして悲しみにも、苦しみにもじつと眼を見ひらいて忍んでゐるとき深い人生の意義が發見せられる。人類の愛も忍苦のうちからのみ生まれて來る。

民衆主義を說く人々がもし幸福を土臺として出發するならば、かれ等は世界の人類をして俗化せしめ、退歩せしむる。

民衆のために苦しみ、民衆のために泣き、民衆のために謙虚な心を持つ殉教者となるとき始めて、人生に生きて行く價値を見出すことができる。

現實の超越、狹い自己の打破、そして永久に新しい生命の苦痛な創造の他何處にほんたうな人生があらう。

「人生は嚴肅である、」怠けてゐてはならぬ。人生は短い。短い時間に出來るだけ多くの苦痛と悲慘とに直面して、打ち勝たなければならぬ。逃避してはならぬ。

人類全體の苦痛と悲哀とを背負ふことのできたキリストと佛陀は最大の民衆主義者であつた。最大の英雄であつた。

弱き人トルストイ

この四五日殊に私は苦しかつた。私は多くの藝術家たちが何時も經驗しなければならぬ批評といふものゝ鞭の痛さも味はゝなければならなかつた。また二三日前に生活上の困難に耐へないで田舍から出て來た一人の靑年の事についても考へてやらなければならなかつた。靑年は若い妻と二人で毒を仰いで自殺をはからうとするほど苦痛な境遇にゐるのであつた。私はそれを何うにもすることが出來なかつた。また私は今朝同時に二通の手紙を受取つた。一つは病氣のため學校を止さなければならぬ靑年の苦痛を訴へた手紙であつた。尙一つは昨年高商を出て或る會社に勤めてゐる甥から來たのであつたが、同じ高商を出た連中の赤裸々な惡辣な手段に耐へ切れないで、他に何等かの新しい生活法を求めようとして私に訴へて來たのであつた。私はどの訴へに對しても何とか返事をしてやらなければならない。けれども私は何うすることもできない。無論私は精神上の慰安の言葉や、また私の適當であると信じた方法についてだけは答へて置いた。けれどもこれ等の人々には千の眞理よりも一つのパン、またはひときれの肉が必要なのである。私はたゞ言葉だけを與へてひときれの肉もパンも與へてはゐない。何といふ私は空想家であらう。何といふ僞善者であらう。

このやうな行きつまつた實際生活上の苦痛や矛盾が湧き出るごとに、何時も思想と實行との矛盾に惱まされ、攻擊せられてゐたトルストイの境遇を察することができるやうに思ふ。

人々はトルストイに對して餘りに多くの期待を持つて接してゐた。人々は餘りに多くトルストイに賴つて行つた。人々はトルストイ自身が他人の力を借りなければならぬ弱い人間であることを知らなかつた。

人々は常にかれを豫言者と見、指導者であると考へた。けれどもかれ自身が常に周圍の人々の助けを待つてゐたのではないか。

「彼の男は家に行くのだと言つて、溝に落ちた！……君等はかう言つて笑つてくれるな、俺を助けて呉れ、支へて呉れ！」

無論釋迦もキリストも最初から決して人を導かうと思つて立つたのではない。かれ等自身が最も痛切に自らの問題になやんだ結果あのやうな生活に入つたのであつた。トルストイの場合に於いて殊に私たちはかれが一生を自分一身の問題のために最後まで苦しみつゞけたといふことを考へずには居れない。

かれは「かく爲よ」と命ずるよりも、常に「かく爲ようではないか、かく爲ようと思ふ自分を助けて呉れ」といふ態度にあつたやうにおもはれる。かれは私たちよりも一段高いレヹルの上に立つて命令するのでなくて、私たちと同じレヹルの上に私たちと同じ苦痛や矛盾をくり返してゐた。ロマン・ローランが言つてゐるやうにかれは私たちの兄弟であつて、豫言者といふ意識は持たなかつた。

しかしながらかれは或ひは豫言者と目せられ、聖徒と見られた。これはトルストイ自身にとりては非常に心苦しいことであつたと思はれる。これはトルストイに限つたことではないが、少しでも何かの思想を發表する人は誰しも經驗しなければならぬ苦痛である。トルストイは神の忠實な僕となることをねがつた。それ故にかれは人間生活の究竟は神の忠僕となることであると告白した。また自分自身さうすることに努力した。世間の人々はトルストイを以て直ちに神の忠實な僕であると決めてしまつた。そしてさうであるべき筈だと思つた。かれは餘りに早く、餘りに容易に、餘りに偉大なるもの、餘りに聖なるべき筈の人格として考へられた。トルストイの苦痛はこゝにあつたのではあるまいか。

トルストイの言葉はトルストイの要求であり、トルストイが歩まんとした目標であつて、トルストイ自身が神の忠實な僕に成り終はしてゐるといふ意味ではなかつた。世間はかれの苦しい翹望の聲を聞いたのみで、直ちにかれ自身然かあるべき筈だと決めてしまつた。

「俺は聖徒ではない、またそんなことを言つたこともない、俺は弱い人間なのだ。」この言葉こそ僞らないかれの言葉であつたにちがひない。

トルストイは最も強い人間欲の所有者であつた。かれが酒を飲むこと、煙草を喫むこと、性慾に耽ること、または賭博や、怠惰を戒めたのはかれ自身最も強くこれ等の惡に誘惑せられ易いことを感じてゐたからであつた。かれは聖徒たらんことを祈つたところの最も粗野な人間であつた。かれは「生まれながらの異端者であつた」といふメレヂュコウスキイの批評は眞理を含んでゐる。

かれは罪惡の淵に沈んで行く自分を最も鋭く感ずることができた。かれはあらん限りの聲を絞つて救ひを求めた。その時同じく周圍に溺れんとしてゐた人々は、この最も大きな苦痛を叫んでゐる男を救ひ主だと決めてしまつて、かれの手足に纏いついた。けれどもかれは人々を救ふ人間ではなかつた。しかも人々はかれを罵つた。

×

私の頭は重いものに壓しつけられるやうに苦しかつた。私は今朝谷中の墓地を歩いてゐた。

「何うしたら宜いでせう、私の問題は？」

妻と二人で自殺をまで企てようとした靑年の聲が私の耳から離れない。その靑年は唯一つの活路をば東京にもとめたのであつた。妊娠中の若い妻を郷里の人々の冷笑のなかに遺しながら靑年は上京した。そして苦しい思ひをして持つて來たすべての金は上京後二三日目に電車のなかで掏り取られたのであつた。けれども私はそれを何うすることも

できないでゐる。

「私自身、何うすることもできないで藻掻いてゐるのです……」

私は靑年に斯う答へる他はなかつた。

川上音二郎の銅像だの、高い爵位を刻みつけた見上ろばかりの石碑の並んだ墓地に、墓守りの家の直ぐ後ろにかなり地域は廣いが、一向見榮えのしない墓標がある。日本正教會大主教ニコライ之墓(？)といふやうな十字架の墓を見出した時、私は直ぐに寫眞版で記憶してゐるあの疎な林のなかに見出さるゝトルストイの墓を想ひ出した。

トルストイ自身にも今現在私が感じてゐるやうな利己心がなかつたであらうか。

「かれの骨の髓までかれは自己本位の人間である。」

ツルゲニエーフはトルストイを斯く評した。

「かれの最大な缺點は精神的自由をもつてゐないことである。」

ツルゲニエーフは斯うも評してゐる。この批評は恐らくトルストイの一面を最も良く評し得たものであらう。農夫の子供に驢馬の子をせがまれて溝を飛び越えて逃げた七十歳のトルストイや、一生眞實に友人らしい友人を持つことのできなかつたかれの一生を見ると、私たちはかれが私たち以上に利己的であり、思想上の暴君であつたことを想はずには居れない。

「さうだ俺は何時でも、俺が口にしてはならぬことを口にしてゐる。」

トルストイ自身、かれが神の福音や愛や眞理を語ることのできない人間であることを知つてゐた。しかもかれは語らないでは居られないほどの苦痛を持つてゐた。

「俺は善い人間になりたい、俺は溝に落ちる、けれども笑つてくれるな。」トルストイはかく叫んだ。

「不幸な人たちはかれ等と同じやうな不幸な人々があらゆる障碍を排して、人間といふ名にふさはしいあらゆる事を成したといふことを知ることによつて慰められる……」

ロマン・ローランのこの言葉は私たちが利己的なトルストイの生涯を考へる時、利己的な私たち自身に勇氣を與へられることを教へてゐる。「俺を構ふな、そこに幾百萬の苦しんでゐる」人類があると言つて死んだトルストイが一面非常に矛盾の多い、利己的な人間であつたといふことを知る時、私たちは却つてこの利己的な私たち自身を更に善き者と成さんとする努力に對して希望を感ずる。

「この戰ひ(人類の善のための)に於いては人は一人で戰ふのではない。世界の暗黒は人類を導き行く英雄等の心靈の光りによつて明るくせらるゝのである。」

ロマン・ローランのこの言葉はベートーヴェンにもミケランゼロにもトルストイにも當てはめて考へることができると同時に、善き事のために、一生をさゝげんとするすべての人々の上に希望と責任とを自覺せしむるものである。トルストイは多くの缺點や多くの弱點を持つてゐた。しかもかれはローランの所謂近代の最も偉大なる英雄であつた。利己的な意志の弱い私たち自身も亦トルストイとなることを得るといふ希望を持つことができる。「かれは弱かつた、かれは人間であつたが故に私たちはかれを愛する」と言つたローランの言葉を言ひ換ふるならば、トルストイの矛盾、トルストイの缺點こそ私たちにとつて一道の光明と慰めとを與へるものである。

但し私たちはトルストイの缺點や弱點を許するだけの寛大さを持つとしても、私たち自身の缺點や寛大さを許してはならぬ。トルストイは自らを最も嚴しく責めた。私たち自身私たちの矛盾、不純に對して最も嚴肅な自己批判の鞭を加へなければならないことは言ふ迄もない。

このやうなことを考へて來ると、私はまた自分自身が餘りに空論家であつたことを悲しまなければならない。

私たち自身が何時の間にか「光り闇に輝く」の主人公ニコラス・イヴァノギッチと同じ非難と同じ責任とを感じなければならなくなつてゐる。

「何の愛！　何の高尚なキリスト教！　否、サリントキフさん、妾はだまされません！　すつかりあなたといふものが分りました。あなたは妾の子を殺したのです、それでゐて何とも思はないのです……」

自分の子を殺されようとしてゐる公爵夫人はかう言つて老牧師を罵つた。この罵詈はひとり老牧師やトルストイばかりでなく、私たちすべてが受けなければならぬ非難である。老牧師は自分の生命をさゝげることによつて始めてかれの思想に對する責任を全うすることができた。

「アンナ・カレニナ」の主人公、「暗の力」の主人公、「生ける屍」の主人公は皆な自分の生命をさゝぐることによりて自分の責任を全くした。

トルストイは何時も私たちに生命を捨てゝかゝらなければならぬことを教へてゐる。

×

トルストイの作の人物がその最後のシインをば死といふもので幕を下してゐることは興味ある問題である。自己の生命をさゝげるといふことはかれの最後のそして最善の美徳であつた。しかしかれがそれほど獻身的な死をたゝへた半面にはかれが如何に死を恐れた凡人であつたかといふことが想像せられる。

「俺は俺の花園を愛する、俺は書物を愛する、俺は子供の面倒を見ることを愛する。死ねばみんなこれらのものを失はなければならぬ、だから俺は死ぬのはいやだ、だから俺は死を恐れる。」

この死を恐るゝかれの心は凡人としての、または「生まれながらの異端者」としてのトルストイの心を赤裸々に語るものである。

しかしながらかれはこの恐怖に對して闘ふことを忘れなかつた。かれほど死を怖れた者も少なかつたであらう。けれどもかれほど眞面目に死の問題を解決しようと努めたものも少かつたであらう。「イヴァン・イルイッチの死」は恐らくトルストイ自身の死に對する恐怖と死の見方とを描いたものであらう。

「死は終つた！　既う死はない。」

イヴァン・イルイッチの最後のこの短い言葉はまたトルストイの死に對する最後の解釋であつた。イヴァン・イルイッチは死を恐れた。かれは死の床に呻きつゝ健かな妻や雲雀のやうな娘たちを見た。かれはかの女たちを怨んだ、嫉んだ。かれは一層死を恐るゝやうになつた。けれどもやがてかれの心から嫉みや怨みが取りのぞかれた。かれは自分のために苦しんでゐる妻や娘たちの不幸を感ずるやうになつた。かれの心には周圍の人々を愛しいたはるの念が湧いて來た。かれの死に對する想へは一變した。かれはかれ自身の死によりて周圍の人々が救はれ、またかれ自身が病の苦痛から逭れることを知つた。かれは死が一時間、または二時間の苦痛に過ぎない現象であることを知つた。かれは恐らく死の後に來る永遠の休息について直感する事ができたのであらう。「死は失せてそこには光りがあつた。「見ろ、今！」かれは急に聲高く叫んだ。かれは希望を抱いて死ぬことができた。

トルストイ自身の書翰の中に私たちはかれがイヴァン・イルイッチと同じやうな心をもつて死を觀察したことを窺ふことができる。然らばかれは如何にして死の恐怖を逭れたか。かれは死は身體上のことのみであつて、死は決して心靈の上に暗い影を投げかけることはできないと見たのであつた。かれはどこまでも靈肉の二元を立てゝ肉の超越が即ち心靈の自由な生活であると見たのである。

かれは私たちの實在の究竟をば唯一つの神に歸せしめたのである。

「俺は何處から來たか？」

「俺は何であるか？」

かれはこの二つの疑ひから出發した。その答へは次のやうであつた。

「俺は俺の母親から生まれた、母親は祖母から、祖母は祖々母から、しかしその第一番目のものは……誰れから生まれたか？　俺は神といふものに達しないわけには行かぬ。」

更にかれは言ふ。

「俺の脚は俺ではない、俺の腕は俺ではない、俺の頭は俺ではない、俺の感情は俺ではない、俺の思想さへ俺ではない。それたら俺は何だ？　俺は俺だ、俺は俺の心靈だ。……俺の思想、俺の理性の源は神である。俺の愛の源も亦神である。」

かれの一生はこの神に歸り行かんがために費された。神の意志を實現することがやがてかれ自身を最も完全に生かすことであつた。かれの藝術、かれの宗教は悉くこの一點を出發點として生まれて來た。

「科學の目的は人々に如何に生くべきかを示すにある。」

『藝術とは何ぞや』の中に於いてはかれは科學に對してこのやうた定義を下してゐる。かれにとりては科學と雖も經驗的、唯物論的な見地からのみ見るべきものでなくて、人間に眞實の生活、神の子としての生活、同胞的愛を啓示するものでなければならぬと考へられたのである。更に科學と同樣に藝術そのものも亦藝術のための藝術でなくて、眞生活のための藝術でなければならないものであつた。

「眞實の藝術の結果は人生の交りのなかに新しい情操を導き入れるものでなければならぬ、恰度妻の愛の結果が人生に新人の出生を齎すものであるやうに。」

かれが辿り着いた藝術そのものゝ存在意義或ひは目的はこの藝術觀を出でなかつた。

かれにとりて神はすべてゞあつた。藝術も科學も、人間の努力のすべてが神の國を目標として苦しい歩行をつゞけたのであつた。科學も藝術も畢竟第一義的な神の殿堂建設のための手段と見做された。人間の肉體すら第二義的のものとして考へられたのであつた。

「吾々はこの地上に吾々の眼前を徂徠するところの外部的、物質的生命は決して眞實の生命でないことに注意しなければならぬ。吾々の心靈の内部生命こそ眞實の生命である。眼に見える生命は畢竟心靈の足場たるに過ぎない――吾々の心靈の發達に對して必要なる補助たるに過ぎない。足場は要するに一時的な必要である。だから、足場として目的を果せば既に必要はない、却つて障碍とさへなる。」

この短い書翰の一片にも專念に靈の世界へのみ驀進せんとする老トルストイの意義が窺はれる。

かれのこの人生やまたは藝術の見方には無論多くの反對論者を見出すにちがひない。メレジュコウスキイの批評を待つまでもなく私たちはかれが靈のみに重きを置いて、肉體を顧ることの餘りに少かつたことを想はずには居られない。しかしそはとまれかれがすべて他を顧ることができないほどに心靈の一面をのみ見た結果はその作物をして思想の色彩を明かにし、力強くせしめた。無論ドグマチックな、限られた傾きはあるが。

×

かれが神の僕たらんがためにすべての人類を愛の一點に於いて結び附けようとしたのは、キリスト教の立場からして當然の成り行きであるが、かれの愛は單に人間相互の間にのみ止つてはゐない。「ハヂ・ムラアド」のなかに讀者が見出す「あゝ、人間は何といふ破壞的動物だらう。……人間は自分の生活を支へるために何んなに澤山な植物の生命を破壞するのだらう！」といふ言葉はまた、草木の上にまで押し擴げられたトルストイ自身の美しい愛であると考へることができよう。

しかしながら私はトルストイの愛——殊に動物に對する——のなかにはやゝもすれば、ダ・ギンチやバアンズが動物に對して抱いた愛に對してやゝ異つた複雜性が潜んでゐるやうに思ふ。

店頭の獸肉を見て「人間は他の動物の犧牲によりて生存してゐる」と言つたのはダ・ギンチであつた。踏み折られた野菊や、鍬の刃に巣を破壞せられた野の鼠のために同情の涙をそゝいだのは詩人バアンズであつた。かれ等はすべての動物や。植物の免るゝことのできない運命を悲しんだ。しかしながらかれ等はそれを如何ともすることはできなかつた。かれ等はたゞ咏歎した。たゞ悲しんだ。

トルストイの場合にありてはその矛盾や悲慘な光景はかれをしてたゞ客觀視し、または咏歎的態度にのみ止まらしむることはできなかつた。かれは『食物の倫理』のなかに於いて肉食を斷つべきことを私たちにすゝめてゐる。かれは悲慘な屠牛場の光景を描いて一層肉食の殘忍な惡習慣であることを證明してゐる。かくしてかれは積極的に動物に對する人類の暴虐を防がうとつとめた。但し『食物の倫理』のなでトルストイはその自制の第一歩として、飲酒、喫煙と同樣に肉食を禁じてゐるが、こゝにもかれは肉體を餘りに第二義的に見てゐる傾きがある。即ちかれは神の國に詣る第一歩として斷食をすゝめてゐる。斷食はやがて性慾のやうな不純なものを去る第一の方法である。それによりて私たちはより清き神の僕となることができるのであると考へてゐる。

要するにかれの宗教または生活法は極めて簡單である。神の國に詣らんとするものは先づ人のために己れを捨てなければならぬ。斷食しなければならぬ。人を愛せねばならぬ。無智でなければならぬ。自分の食ふものは自分の額に汗して作らなければならぬ。

かれは嬰兒の如くあれと敎へた。かれ自身の敎へは最も平易なものである。働け、肉體を捨てよ、神を信ぜよ、正しきことをなせよ、……かれの藝術も宗教も悉くこの簡單な思想から生まれて來てゐる。

かれの藝術も思想も往々餘りに平易過ぎるほど平易である。――兄弟を愛し、神の國に入れ。――しかもかれは熱狂的に生涯をこの平明な思想の宣傳のためにさゝげた。多くの世界の人々はかれの思想を容易に理解することができた。けれども未だ一人も滿足に實行することはできないでゐる。トルストイ自身この平明な眞理の實現に對して大なる失敗者であつた。

しかし私たちは絕望してはならぬ。第二第三のトルストイが生まれて、更に深い懊惱と更に大きな失敗に苦しむ每に私たちの人生は今日よりももつと眞實な、もつと善きものとなるにちがひない。

私たちの今日の悲しみはトルストイ以上の思想を持ち得ないことでなくて、トルストイ以上の苦鬪と忍耐とを持ち得ないことである。

藝術短論

サンタイヤナがエマアソンを評した言葉のなかにエマアソンは山から下つて來た天啓ではなくして、下界から生まれた反抗であるといふやうな意味のことがあつた。元來エマアソンは超科學的、超知識的な詩人であり、思想家であることは誰でも否むことはできない。サンタイヤナ自身もエマアソンを最も豐かな瞑想的詩人として評してゐる。

この最も豐かな imagination を持つてゐたエマアソンを、天の聲を語る詩人でなくて、人間界の革命的思想家であつたと評するサンタイヤナの言葉は興味ある暗示を與へる。

藝術、宗教、哲學のなかゝら imagination を除いたとしたならば、それは翅を失つた鳥のやうなものでなければならぬ。佛陀やキリストの宗教も、ミケランゼロの藝術も imagination の翅によりて、私たちの思想界に齎らされたのであつた。

自然主義の藝術は何時も現實に即した、そして何時も醒めたる理智によりて自然を觀、人生を靜察したやうに考へられてゐる。しかし現實のなかに飛び込んで行くあの冒險的な、全的な、思索生活は imagination なしに何うして實行せられやう。

過去の古い殼を破つた新しい文藝上の運動は、何時も imagination から生まれて來なければならぬ。

imagination は想像であると同時に、直感であり、反抗である。すべての新生は何時も imagination から生まれて來る筈である。imagination が實現せられたる刹那にそれは科學的知識となり、死せる公式となつて來る。直感と反抗の力を失つた刹那に imagination は平凡な死せる法則となり、藝術上のマンネリズムとなる。宗教上の形式となる。

キリストの生涯は一の imagination から他の imagination への絶えざる歩みであつた。

生涯を通じて絶えず自己の藝術に對して、眞實に不滿を感ずることのできる作家のみが、永遠に伸び展げられて行く imagination を持つことが出來る。

私がこゝで考へて見たいと思つたのは、imagination をば天上の神に向けないで、下界の人間の群のなかへ向けなければならないといふことであつた。

×

人間の心の世界は無限に開拓せらるべき筈である。永劫無邊際な時空のなかにつゝまれた人間の微妙なる心情のはたらき方、魂の動き方……そこには永遠に天才の imagination を待つべき幾多の神祕界が鎖されてゐる。現實に卽した文藝に若し潑剌たる生命を缺いてゐるとするならば、それは imagination が常識に墮してしまつたからである。

何處までも人間の刹那的な現實を尋め。しかし現實の底に徹せんとする私たちの imagination は絶えず新しき世界を地上に切り拓く。神の祭壇に走る前に、先づ兄弟の心の前に跪かなければならぬ。私たちの imagination は天翔るには餘りに多くの悲哀や、神祕や、尊さを地上の兄弟の心のうちに、宿命のうちに、見出すべき筈ではないか。

宿命を信ずることの強い私は imagination を創造する力と解するよりは、むしろ追ひ索めんとする力と解する。それは無のなかゝら空なものを想ひ描くことではない。

今日私は一人の友人を見た。私の imagination はかれの魂のうちに人間性の美しさを見、宿命の寂寞を見出すであらう。けれどもかれの全體は決してそれだけではない。

私は明日またかれを見るであらう。明日私の心に映るかれは、更に大なるもの、更に深きもの、更に永久的なものを

持てるものでなければならぬ。自然によりて造られたるすべてのものは定義するには餘りに偉大であり、把握せんには餘りに速に伸び展がりつゝある。しかも自然の偉大なる創造力の片鱗を直感することのできるものは imagination のみである。

×

理智の巣は無限の創造界を翔るには餘りに弱い翅を持つてゐる。渾然藝術家の imagination が見出す作品は新奇なものや、人間の小才を働かした獲物の綴り合せであつてはならぬ。それは決して imagination によりて造り上げられたものであつてはならぬ。それは imagination によりて直感し得られるまゝの共鳴樂でなければならぬ。かれの心から手細工的小利巧さが捨てられて、かれの魂そのものが全我的に、素つ裸な無智の嬰兒となつて、永久な或るものを追ひ索むる時、かれの imagination は浄めらるゝ。藝術は生きる。

超人論

大きな聲を出さないで、誇張した身振りをしないで、現實あるがまゝの人生をば說明しようとしたのが自然主義の行き方であつた。何處から何處までも地にくつ付いて歩かうとしたのが自然主義のやり方であつた。

この自然主義のやり方は今日やかましく唱へられてゐる民衆本位の主義と、似通つた一つの點を持つてゐる。それは凡人本位といふことである。

自然主義は排英雄的であつた。シイザアをもナポレオンをも高いレヹルの上から引き卸して來て、普通の平凡人と同じ低いレヹルの上に持つて來ようとしたのであつた。

明かな、冷かな、落ちついた解剖のメスを揮つて人生を解剖し、靜觀したことは自然主義の立派な事業であつたが、その半面に於いては人生の神祕的、或ひは形而上的方面を見遁してしまつた傾きがないでもない。

民衆を本位とする思想がもし經濟、政治、社會といふやうな形而下方面にのみ向けらるゝならば、私たちはやはり自然主義に對して抱いたと同じ不滿を見出さなければならない。

いふまでもなく自然主義が現實に卽して人生を觀照した根柢には、無論現實より出發して永遠に詣らんとし、肉身より出發して、靈性に達せんとする無意識的な要求があつたにちがひない。しかしかれ等は餘りに肉身、現實にのみ卽して、靈界への飛躍を忘れてしまつたのであつた。そこに自然主義に對する私等の不滿があつた。

民衆を本位とする思想の根柢にも亦必ず究竟目的として、すべての民衆を驅りて靈的生活に入らしめるといふ形而上的な要求がなければならぬ筈である。もしこの第一義の目的が忘れられてゐるならば民衆本位の思想は俗人主義に

喚してしまはなければならぬ。

×

エドワード・カアペンタアは『戀愛と死の戲曲』のなかに次のやうなことを言つてゐる。

生物進化の徑路を科學的に研究して見ると、獸類、人類、天使といふ順序になつてゐる。この三つの區別は言語を持つてゐるかゐないかといふことではつきり境界を定めることができる。獸類は言葉を持たず、人類は言葉を持ち、天使はその言葉を捨てる。獸類は何故に言葉を持たないかと言へば獸類の思想が言葉を必要とするほどまでに、未だ發達してゐないからである。人類は今恰かも言葉を必要とする程度にまで發達してゐるのである。更に人類が發達して天使となれば言語を不必要とするやうになる。卽ち天使の世界に於いては言語は天使の思想を傳へるのには到底不十分なものとなるからである。

カアペンタアの言語を超越した天使の世界はメエテルリンクやエマアソンが說く沈默の刹那に於いて、その一部分は既に私たちの世界に實現せられてゐると見ることができる。

「脣が緘さるれば靈が動き出す」といふメエテルリンクの言葉は實際に私たちの世界に刹那的ではあるが、言葉を絕した天使の世界が現はれてゐることを說明したものである。

神祕主義者が日常として進むでゐる沈默の世界は、カアペンタアがいふところの天使の世界に他ならない。

民衆を本位とする思想の究竟の目的もまた神祕主義者の所謂沈默裡の世界、心より心へ、または靈より靈への交通を實感することの出來る世界でなければならぬ。この形而上的な目的を背景としない政治、經濟、社會運動は、俗人主義たるに過ぎない。

民衆を驅りて天使の世界へ押上げて行くだけの根本要求を持たぬ民衆主義は存在の必要を認めることはできない。

×

カアペンタアの同じ著書のなかに尚一つの面白い說がある。それは性及び戀愛に關することである。細胞の第一期に於いては性及び戀愛といふものはない。それが第二期の動物時代になつて始めて男女といふ性の區別が出來、戀愛關係が生まれるのであるが、更に進んで第三期の天使時代に入れば再び性及び戀愛の關係が消えてしまうといふことである。

戀愛の淨化といふやうな思想のうちにはたしかに、カアペンタアのいふ第三期の天使時代を暗示してゐるものがある。

ルナンが言つてゐるやうにキリストには殆んど男女の區別がなかつた。かれは何の女にも愛せられた。嫉妬や性的欲望を伴ふやうな戀愛に比較して、聖愛とも言ふべき愛を以て愛せられたのであつた。この點は限られた愛を捨てゝ無限な愛に生き得た佛陀に於いても同じである。

何のやうな思想、主義であつても宜いが、それ等のものは、兎も角性的戀愛を超越した第三期の世界を目やすとして進むところの形而上的な背景を持つてゐなければならぬ。

×

更にカアペンタアは次のやうなことを言つてゐる。戀愛は飢渴である。しかも戀愛は將來する生命のための犧牲であると。

この見方はローランが次の時代の人々に對して、我が肩を越えて新しい世界に進んで行けといふのと同一である。人生をば永遠に通ずる一脈の無限な創造とするならば私たちの日々の生活は無限の殿堂を築く一枚一枚の煉瓦石でなければならぬ。犧牲でなければならぬ。生きて行くことの意義がそこにある。しかしながら人類が築き上げようと

してゐる殿堂は靈的なものであるからして、一枚一枚の煉瓦石も亦靈的なものでなければならぬ。私たちの生活が靈により て淨化せらるゝでなければ、私たちの生活は人類の靈的な無限な大事業に貢獻することはできない。

トルストイが肉の生活を捨てゝ、ひたすらに靈の生活に入れと言つたのは、永遠の靈の殿堂を建設せんがためであつた。

しかしながら肉の生活を捨てるといふことは私たちにとりて殆んど生命を捨てよといふことである。非常に困難なことである。キリストも釋迦もその困難を知つてゐた。さればこそ、かれ等は、民衆に對して絕對に禁慾生活を强ふることはしなかつた。また幾多の思想家たちは靈肉の二つをば調和すべきことに惱まされた。私たちの日々の生活の殆んどすべてはこの二つを如何に調和すべきかに苦しめられてゐる。

「狹き門より入れよ。」キリストはかく命じた。キリストが辿つた途はたゞ一つであつた。佛陀もキリストと共に狹き門をくゞつた。

凡人と偉人との差は狹き門をくゞると、廣き門を選ぶとの差から生まれて來る。

私たちは二つの門前に立つて躊躇してゐてはならぬ。必ずその一つを選ばなければならぬ。眞理は達するには困難である。けれども眞理は何時も明かである。眞理は私たちに向つて狹き門を選ぶことを命ずる。民衆のすべてが狹き門をくゞる時、この地上には天使の世界が生まれる。民衆を本とする思想はこの世界を目あてとして進まなければならぬ。

×

ニイチエは希臘人の生活の究竟の目的をば天才を生むことであつたと批評してゐる。この言葉は單に希臘人と限らない。世界の人類のすべての生活の究竟目的は天才を生むことになければならぬ。但し私がいふ天才は狹き門から進

み行く眞人間の意味である。

民衆を本とする思想が一日一日と形而下の世界にのみ傾かうとしてゐる今日、私達は切に天才を生むことの必要を感ずる。

天才の出現を以て希臘人の生活の第一目的としたニイチエは、また必然的にその奴隷の存在を意味あることゝした。奴隷は天才を作り出す手段として、或ひは踏み臺となるべきものとして必要であつた。

近代の民衆主義の第一の仕事は久しい間一部の階級の人々のために、踏み臺となつてゐた人類をばその束縛から解放することにあつた。私たちはツルゲネーフの『獵人日記』のすべての頁が、かれの温かい民本主義的な涙にうるほされてあるのを見出すことができる。ドストイエフスキイの作品も、トルストイの作品も、齊しくこの踏みにじられた奴隷解放のために書かれたものであつた。

今日、ロシヤの民衆は解放せられやうとしてゐる。かれ等は今後自由に生活の道を選ぶことができる筈である。かれ等の前には狹き門と、廣き門とが横たはつてゐる。かれ等は何れの門を選ぶであらうか。民衆を本位とする思想が生きるか死ぬるかの分岐點は今最も著しくロシヤ人の生活のなかに見出される。

トルストイは民衆に向つて言つた「神の殿堂に行け！」と。

民衆は解放せられた。かれ等は果して神の殿堂に行かうとしてゐるのであらうか。

奴隷は解放せられた。しかしながら奴隷がいつまでも奴隷であるならば、解放は何の意味をもなさない。すべての奴隷が天才となり得たる曉にのみ解放の意義がある。

×

ニイチエは少數の天才或ひは超人のための多數の奴隷を認めた。けれども多數の凡人のために天才自身が奴隷とな

ることは更に美しいことではないか。キリストが弟子の足を洗つたといふ傳説は最も美しい天才の犧牲を表はしたものである。

私はどこまでも天才、超人の出現を待つ。人類すべてを神の殿堂に引き上げるためには一人のキリスト、一人の佛陀を生むことが、萬人の民衆を解放することよりも更に大切なことである。

民衆本位の時代は畢竟散文的時代である。成るほど理論の上から見れば民衆の解放といふことは理想的なことであり、美しいことである。しかし實際に解放せられたといふ民衆に接して見るが宜い。かれ等は眼に見ゆる形而下的束縛からは解放せられたであらう。けれどもかれ等の心靈は解放せられてゐない。人生を押し進めて行く第一の仕事は心靈の解放でなければならぬ。しかもこの大事業にはトルストイすらも失敗した。

私たちは第二、或ひは第三のトルストイやツルゲネーフを産まなければならぬ。民衆本位の思想を唱へる人が第一に考へなければならぬことはこゝにある。

民衆の問題を考へる前に先づ私たち自身が天才とならなければならぬ。超人とならなければならぬ。

×

トルストイが死ぬ日まで自分を責めたといふことは民衆を救はんとする人々が忘れてならないことである。更に佛陀やキリストが孤獨のうちに祈つたといふことは、民衆の前に立つ人の忘れてならぬことである。

オスカア・ワイルドの言葉を借りて言へば、キリストは最大の個人主義者であつた。かれが全人類を愛せよと言つたのは、全人類をば自己一身のうちに取り容れんがためであつた。言ひ換ふれば全世界を――過去、現在、未來を通じて――一身のうちに、實感し、體現せんとするにあつた。

兎も角　私たち自身が最も完全な自己を築き上げる炎のやうな欣求の念を持つてゐないならば、人類愛も民衆の愛

もそれは僞善者の言葉であるに過ぎない。最も完全な自己を築き上げるために嬰兒のやうになつて神の前にひれ伏す謙虚な心の所有者となることが、第一の仕事でなくてはならぬ。

自己を捨てよ、家を捨てよ、畑を捨てよ、すべてを捨てゝ無一物の境から出發する時、靈界の天才が生まれる。眞實の個人が生まれる。民衆の前に立つことのできる人間はこの種の個人でなければならぬ。

×

マアカス・アウレリアスは私たちに書籍を捨てゝ、つぶやくことなく神を感謝せよと教へた。アシシのフランシスは衣までも脱いでしまつて赤裸々な自然の生活に歸つて行つた。

自然に歸るといふこと、嬰兒の如く單純な心をもつて蕘地に萬有を抱き入れるといふこと、これが私たちが第一にしなければならぬ仕事である。

「朝起きることが苦痛であるなら、次のやうなことを考へたが宜い――俺は人類の事業のために起き上るのだ。」

マアカス・アウレリアスの簡易生活の究竟の目的は人類の事業にあつた。かれは肉體上のすべての生活を簡易にすることによつて、ひたすらに靈の生活をのみ目あてとして進むだ。その一生は苦行、克己の一生であつた。最も貧しき者、最も悲しめる者の生活であつた。

しかし、そのやうな生活法はアウレリアスのみのものではない。佛陀の生活も、キリストの生活もすべて人間の幸福を捨てた生活であつた。しかもかれ等はそこに言ふべからざる永遠のよろこびを感じ、希望を持つてゐた。

戀を捨てよ。「キリストは戀以上の戀をもつて多くの男女に戀せられた」とルナンは言ふ。

私たちの持てるすべてを捨つるとき、私たちは世界のすべてを抱き容れることができる。私たちは形而下の世界にのみ生きようとする民衆に對して、殊に靈界の天才の出現を待ち、靈界の超人生活を主張しなければならぬ。

誤られたる民衆本位の思想はいやが上にも淺薄な散文的時代の色彩を濃くしようとしてゐる。

人生の目的は幸福でもない、怠惰でもない。苦痛、悲哀、犧牲それが人生のすべてゞある。この苦痛と悲哀と犧牲とを甘受して不平なき人間、それが眞の天才である。

「苦痛のなかの法悦！」ベートーヴエンの苦しい一生はこの一語で盡きてゐる。苦しみつゝ笑ふ、それがまたマアカス・アウレリアスの一生であつた。

民衆を本位とした思想、それは美しい名の思想である。けれどもそれは民衆に怠惰と快樂とを與へるものであつてはならぬ。民衆の食を奪ひ、衣を剝ぎ、民衆の肉を鞭打つものでなければならぬ。そしてその鞭を握り得る者はかれ自身先づ自己を捨て、肉の生活を捨てた赤裸々な自然人でなければならぬ。常に人類の宿命的悲哀を悲しむ哲人、絶えず自己の生活に對して鋭い批判と更改とを怠らない良心の所有者となるといふことが私たちの第一の仕事である。

最も苦痛な、そして最も大きな自己革命の個人主義者でなければ民衆の前に立つてはならぬ。

種子は地に播かれた

作家の實際生活と作物に現はれてゐる思想との間にはかなり遠い隔りがあるやうに思はれることがある。作家が描かうとしてゐる理想が高いものであればあるほどその矛盾は甚だしいものゝやうにおもはれて來る。トルストイの場合に殊に多くの人々が著しくその矛盾を感ずるであらうと思ふ。しかしながらこの讀者の不滿はトルストイ自身にとりても亦終生の苦惱であつて、かれの崇拜家が感じた以上にかれ自身は最も強くその矛盾を意識してゐたであらう。要するにかれの一生の努力はかれが抱いてゐた理想とかれ自身の實際生活の間に横たはつてゐた溝を埋めようとすることにあつた。

偉大なる人間を偶像化することは決して眞實に偉大なる人間を知る所以ではない。トルストイが說いた眞理そのものをもつて直ちにトルストイの實際生活を批評しようとするのは、眞理卽ちトルストイでなければならぬかのやうにトルストイを偶像化せんとする結果から生まれて來る。かれは一生を通じて悲慘な眞理の追求者であつて、眞理の實行者ではない。かれは神の子たらんとしたのであつて、決して神とならうとしたのではない。

何時までも人々の心に親しみを感じさせるのは決して理想家としてのかれ自身でなくして、平凡人としてのかれ自身である。

「かれは弱かつた。かれは人間であつた。だから私たちはかれを愛するのだ。」ロマン・ローランのこの言葉はトルストイを愛する者の批評として正しい見方であると言はなければならぬ。「レオ・トルストイ、汝は汝が主張する主義に隨つて生きつゝあるか？」かれは自身に問ふた。かれは常にかれ自身の生活がかれの理想から遠ざかつてゐることを

知つた。かれの主義を裏切りしつゝあることを知つた。けれどもかれは絶望しなかつた。かれはよしかれ自身の一生でかれの主義が實現せられないとしても來るべき時代に於いて必ずかれの眞實、平和、平等、幸福の世界が生まるべきことを信じてゐた。かれは人類相愛の大森林を描いてゐた。けれどもかれ自身の一生にその大森林を築き上げることはできないことを信じてゐた。

「私たちは種子が萠え、嫩枝が伸び、木の葉が芽生え、幹が生長して木となるまで待たなければならぬ。」

かれは理想の世界の建設が一朝一夕に果し得らるべき事業でないことを確信してゐた。しかもかれは歩一歩、より善きかれ自身を築き上げることによりて神の國に近づかんことを努めた。ロマン・ローランがトルストイ評傳のなかに引用してゐるトルストイの書簡は良くこの間の消息を窺ふことができる。

「俺は慚死しなければならぬ、俺は罪人だ、俺は賤しむべき男だ……しかし俺の前の生活と今の生活とを比べてくれ。俺が神の律法に隨つて生きて行かうと努めてゐることは君にもわかるだらう。」かれはかれ自身決して善人であるとは思はなかつた。かれは自分を罪人であると信じたればこそ善人たらんことを努めた。しかもかれは幾度も失敗した。しかし失敗してもかれは決して自分が選んでゐる道が誤つてゐるとは思はなかつた。

「俺を責めて與れ、それでも俺がとつてゐる道を責めてくれるな。」かれはかれの家に歸るべき道を知つてゐた。けれどかれは醉ひどれの如く屢々溝に落ちた。人々は手を叩いて笑つた。「笑つてくれるな、俺を助けてくれ、俺を支へてくれ！」かれはどこまでも自ら忠實なる神の僕たらんことを欲してゐた。「俺は聖徒ではない、俺はさう言つたことはない。」かれは決して世の人々が考へてゐたやうに自身を偉大なるものであるとは信じなかつた。たゞかれは世間の人以上に自分自身の缺點を知つてゐた。そしてそれ等の缺點を取り去つてまつしぐらに神の僕たらんことに一生を努力した。

無論かれが神の忠實な僕たらんがために歩いて行つた生涯の道は最初から同じ色合や水準の上に置かれたのではなかつた。

「俺はこんな男のことを想像する、その男は革命團のなかで育てられ、最初革命家となり、それから共産主義者となり、社會主義者となり、無神論者となり、善良な家長となり、最後にドコーボル宗派(兵役を拒みたる露國非國教派)の人となつたのである。かれは何んな事でもやり始めるが、どれも皆な捨てゝしまふ。かれ何事も成就しないので世間の人はかれを嘲笑した。かれは世間に忘れられながら或る救貧院で死んでしまふ。死ぬる時、かれはかれの生活を勞費したと考へるであらう。だがしかしかれは聖徒である。」

このかれの想像に描かれた或る男の一生こそトルストイ自身の變化多い生涯の行程を暗示するものであつた。かれは色々な生活法を考へ、色々な主義や思想を考へて見た。けれどもかれは何れの場合にも神の善良なる僕とならんがためであることを忘れなかつた。神の善良なる僕たらんとする一念を所有することに於いてはかれ自身常に聖徒の心を持つてゐた。

私はこゝでは全生涯を通じてのかれの生活や思想について論ずるつもりではない。晩年に近づくにつれて殊に極めて單純な愛と信仰との下に生きんとした老人トルストイの心境について述べて見るつもりである。

×

老年のトルストイにはかれが描いてゐた或る男のやうな革命家、共產主義者、無神論者といふやうな反抗、革命を驀地に眞正面から振りかざして行くやうな風はなかつた。かれの老年の顏には柔和と溫情とが溢れてゐた。と同時に絕望悲哀の影が動いてゐた。老年のトルストイの生活を想ふ每に私達は舊約の中のヨブの物語を聯想せずには居れない。ヨブは男子七人、女子三人を持ち、更に羊七千、駱駝三千五百耦、牝驢馬五百、その他多くの奴僕を持つた長者であ

つたが、そのすべての子と家畜とを失つた時、かれは外衣を裂き髮を斬り地に伏して神を拜して言つた。
「我裸にて母の胎を出たり、又裸にて彼處に歸らん、エホバ與へ、エホバ取りたまふなり、エホバの御名は讃べきかな」（約百記第一章）

この飽くまでも神が與ふる所の苦痛に對して敬虔にして忍從なヨブの生活は、またトルストイが晩年を通じて――或ひは一生を通じて――もとめてゐたところの生活法ではなかつたか。殊に極端に原始的なキリスト教の教義に隨つて生活しようとしたトルストイは極めて東洋風な俤を豐かに持つてゐる。かれがどれほど單純な生活を要求してゐたかといふことは、かれが一八八〇年頃から一八九六年頃に亙つて作つた人情的な宗教的な小ひさな物語のなかによくうかゞはれる。これ等の物語は主として小作人たちのために書かれたものであつて、かれは金錢を以てかれ等に慰めを與へる代りに、物語をもつてかれ等の心の渇を癒さうとしたのであつた。これ等の物語の中にはかれが追ひ求めてゐた生活法が明かに察せられる。

トルストイが晩年にいたつて子供のやうな心を持つことができなかつたことを批難する人もあるが、これは實際同情を缺いた見方であると言はなければならない。かれの老年期の物語……それは主として無智な子供や農民のために書かれたものであるが…… を讀むだ時、誰がトルストイの嬰兒のやうな心を疑ふ者があらう。トルストイ自身ではどこまでもその嬰兒の心を失ふまいとしてゐたのであつた。餘りに苦しい人生の戰を眞劍に戰ひつゞけて來たかれの面は餘りに戰ひの疲勞に充ちてゐた。かれの顏からは七八歲ころの嬰兒の紅い無邪氣な頰の色は奪はれてあつた。けれどもあらゆる悲しみと絕望とを嘗めつくしたやうな老偉人の瞳の輝きの底には嬰兒にかへらんとする淸淨なほゝ笑みがあつた。

かれはどこまでも「嬰兒の如くならざれば天國に入ることのできない」ことを信じてゐた。

『子供等は老人より賢い』のなかに見るやうな可憐な子供たちの無邪氣な平和な世界はトルストイが何時も追ひ求めてゐた天國であつた。

嬰兒に次いでかれが考へたことは金錢といふ問題であつた。このことについてもメレジュコウスキイはドストイエフスキイとトルストイとを比べて論じてゐる。ドストイエフスキイは無け無しの金でも財布をはたいて路傍の貧しき人に與ふることができた。トルストイは三十ルーブルの金をポケットに入れて終日街を歩きながらも終に與ふることができないで歸つて來た。こゝに二つの偉大なる人物の性格の異つた點がうかゞはれる。ドストイエフスキイの愛を母の愛とするならば、トルストイの愛は父の愛であると見ることができよう。一は仲間の愛であり、一は指導者の愛である。私たちはその何れの愛を選ばなければならぬかといふことは興味ある問題であるが、こゝにはそれは措くとして兎に角トルストイは愛そのものに對して與ふる人が當然負はなければならぬ責任といふことについても眞面目に考へなければならなかつたのであつた。愛することは善いことである。しかし萬一その愛が悲慘な結果を齎すことがあるとするならばその責任は當然愛を與ふるかれ自身が豫め覺悟しなければならないものである。トルストイはこの考へからして金錢を以て自分の愛の心を充たすといふことは惡いことであると信じた。『二人の兄弟と黄金』のなかにこの考へが明に現はされてある。近代のキリスト教は色々な社會的の事業を成した。だがかれ等はむしろ神の國そのものを忘れてゐる。キリスト教そのものは慈善事業以外にもつと根本的なものを持つてゐなければならぬ。トルストイは黄金の力を以て成さるゝ現代のキリスト教團の仕事以上のものをキリスト教に求めてゐた。『二人の兄弟と黄金』は近代のキリスト教會に對して最も原始的なキリスト教の靈的生命を吹き込まんとするトルストイの宣傳である。

金錢と關聯してトルストイの單純な生活法は富を捨てん事を主張する。何物をも所有しない者の生活の幸福である。

『エリアス』のなかに描かれてゐたエリアス老夫婦の物語はトルストイ自身が望んでゐた貧者の生活である。更に私たちは『イヴンの馬鹿』を讀めば金錢といふものに何の價値をも認めて居ないイヴンの王國の愚人たちの生活が、やがてトルストイが行かんとしてゐた平和な理想の國であることを考へずには居れない。そこでは人はたゞ勞働と收穫と平和と無智の間にのみ生活してゐるのである。自分が食ふだけのものは國王から人民に至るまで皆自分で畑に出て作らなければならないのである。そこでは決して頭を働かしてはならない。そこでは土にまみれた硬い手を持つた人々が最も尊敬せられるのである。手の柔かな怠け者は食卓のあまり物を食つてゐなければならないのである。

晩年に近づくにつれてかれは富を捨て、知識を捨て、ひたすら純朴な農民の生活と無智な子供の心とを欲してゐたことは明かである。が、かれはほんたうの貧しい農民にも、無智な子供にもなれないで死んだ。生活の矛盾から生まるゝ苦惱のなかにかれは死んで行つた。

かれは『イヴンの馬鹿』のなかに描かれたイヴンの王國のやうな無抵抗の世界を理想とした。また徵兵に對して反抗した。かれの信徒たちはかれに隨つて或ひは徵兵に反抗し、或ひは無抵抗の生活を實行しようとした。その結果は悲慘なものであつた。人々はトルストイに救ひをもとめた。トルストイは最後まで忍べと敎へた。けれども最後まで忍ぶことは弱い人々にとりては耐へ得られぬことであつた。トルストイ自身にとりてすら終には耐へ忍ぶことは餘りに苦しいこと〻なつた。かれは目前に辱しめらる〻女を見、牢獄に殺さる〻男を見た。かれは正しきことのために忍ぶ事の辛いことを知つてゐた。けれども亦忍ぶ事の如何に苦しいかを知つた。かれは最後まで忍び得たか。

私はかれが幾度か或ひは自殺を思ひ、或ひは世を遁る〻ことを決心したであらうことを疑はない。『光り闇に輝く』の主人公ヴシリー・ニコノロギッチはかれの說を信じて軍隊生活に反抗したボリスを救ふことはできなかつた。

「俺は一體善い事をしたんだらうか。俺は何一つ成就しなかつた。……」ニコノロギッチのこの言葉はまたトルストイ

自身の言葉であつた。

ニコノロギッチはボリスの母チェレムシャノフ公爵夫人のためにピストルで撃たれた。しかし人々が驚いて集まつて來た時ニコノロギッチは自分が誤つて自分を撃つたのだと言つてゐる。そしてかれは始めて人生の意義を解したといつて喜んで死んだ。

一九一〇年の冬の朝「この世界には苦しんでゐる幾百萬の人々がゐる。何故お前たちは俺のことだけを心配するのだ」と言つて死んだトルストイは『光り闇に輝く』のニコノロギッチの死を遂げたのではないか。

×

私は最後にトルストイの死に見出すことのできる偉大なる人格の悲劇的死について一言して置きたい。ニコノロギッチの死が悲劇的であつたやうに、その作者トルストイの死も悲劇的であつた。『光り闇に輝く』の主人公は誰れ一人眞實にかれを理解することのできる友を見出すことはできなかつた。トルストイもその家庭に於いてすらかれを理解するものは一二の娘と一人の醫師があつたくらゐで、かれは精神的に最後まで孤獨者であつた。

古來偉大な先覺者は多くの場合孤獨者であつた。ベートーヴェンも「俺はこの世界に一人の友をも持たぬ」と言つた。ミケランゼロも「俺はいつも一人である」と言つた。トルストイ自身も寂しい生涯を終つた。たゞかれ等をして最後まで生かしめ、戰はしめたものは或ひは藝術であり、或ひは大自然であり、神であつた。トルストイは最後まで神を見失はないでより善き自分を作り出すために戰ひつゞけた。しかも或る場合にはかれは『光り闇に輝く』の主人公と共に「たしか明に神は俺をかれの僕(しもべ)としようとは望まないのだ。神はまだ他に多くの僕(しもべ)を持つてゐる――神は俺がなくともかれの意志を成就(じやうじゆ)することができる……」と叫んでは神に對してすら絶望を感ずることもあつたであらう。こゝに於いてかれは尙ほ一度かれが歩いて來た長い生活の徑路に就いて省みなければならなかつた。再び省みた時かれはその

歩いて來た道がまちがつてゐたとは何うしても思ふことはできなかつた。けれども實際の生活に於いてはかれはその主義の信徒たちを死や侮辱や絶望から救ひ出すことはできなかつた。ニコノロギッチは生命をさゝぐることによりて人生の意義を見出した。トルストイは家を捨つることによりて、妻子を捨つることによりて、富を捨つることによりてかれの眞生活を見出すことができるであらうと想つた。

「長い間、私は私の信仰と生活との矛盾に苦しんでゐた。私はお前にお前の生活や習慣を變へるやうに強ふることはできない。……けれども私は年來の生活をつゞけて行くことはできない……私は長い間爲しようとねがつてゐたことを爲ようと決心した。遁れて行かうと……恰度印度の人たちが、六十歳になれば森のなかに遁れて行くやうに私は私の全力を盡して平和と孤獨とを欲する……私は冀ふ、私の行爲がよしお前を何のやうに悲しませようとも私を免さんことを。……私を行かしてくれ……」かれの死後發見せられたといふかれの夫人へのこの手紙のなかにあらはれてゐるトルストイの心は僞っないかれの弱い心の告白である。かれは強き人たらんことを欲した。しかもかれは弱い人間であつた。かれは人類救濟のために家を捨てようと決心した。しかもつひにかれは家を捨つることはできなかつた。かれはどこまでも人間的な情愛の羈絆に打ち勝つことのできぬ最も偉大なる平凡人であつた。

しかしこの偉大なる平凡人の末路は不安と絶望とで掩はれた。かれは神と人間とに奉仕せんとする最大の僕であつた。しかもかれは神にも人間にもまだ果されない約束をのこして死んで行つた。

かれは幾多の誓ひを神と人類との前にさゝげた。けれどもかれはまだ充たさねばならぬ幾多の誓言を持つてゐた。かれは違約の嘲りをうけつゝ死んだ。かれの約束は餘りに大きく、餘りに困難であつた。

忠實なる神の僕はすべての正しきこと、善きことを知つてゐた。しかもかれは事毎に失敗した。かれは大なる平凡人であつた、大なる罪人であつた。

種子は地に播かれた。木は芽生えしなければならぬ。トルストイは破れた。絶望した。けれどもかれは叫んだ。「幾百萬の不幸な人々がゐる」と。かれは尙ほ希望を「日に遺しつゝ死んだ。

トルストイによりて播かれた種子の收穫を刈る者は誰であるか。私たちの未來は苦しい。けれども希望がある。

わが詩わが旅

自序

出來ることならばわたくしは一生旅から旅をめぐつてゐたい。雲のごとく、鳥のごとく、執するところなく、凝滞するところなく、悠々自適の天地をもとめて生きてゐたい。

かういつたわたくし自身の性癖からわたくしは旅をつゞけることばかりを考へて來た。古人は「旅の魔に憑かれて」といふ。旅を愛するものはやがて旅の魔に憑かれなければならぬ。たまく家に還り來つて落ちつく間もなく、檐端の靑空に白雲をながめては遙かに芳野の春を思ひ、平泉の秋を懷ふ。曾遊の山河、未踏の地、すべて我が魂を喚ぶ。わたくしはふたゝび山霞をもとめて旅に出る。

自然この數年來書きあつめた文章は旅に關するものが多い。とりわけて旅に關するものをこゝに選んだわけではなかつたが、結果に於いてはそんな傾向になつてしまつた。なかにはやゝ評論めきたるものも加へては置いたが、できるだけ旅人の氣分にふさはしきものを取ることにした。

こゝには詩といふ形式で書かれたものはほとんどない。しかし詩はむしろ形でなく、その意、その感に在ると信ずる立場からして、旅人の詩情に訴へ來りしそのをりくの記錄をそのまゝに書きとめることにして置いた。

わたくしの魂はいつも一所不住である、雲のごとく、風のごとく。

旅人の步むところそこに詩あるべく、そこに旅人の悲しみあり、よろこびあり、寂然たる相あらば、旅

人の願ひ足れりである。

昭和三年秋

著者識

水と草と白い道

行けども行けども一條の眞つ直ぐな白い國道がものうげに靑い稻田のなかを走つてゐる。まつたくものうげな一直線の國道である。

何處から起り何處に終るともない遠い遙かな國道である。

見わたせど見わたせど盡きせぬ一眸千里の稻田である。或る時は白い雲が、或る時は靑い遠山が、煙のごとく地平線の上につらなつてゐる。

筑紫の平原の夏の故鄕を懷へばわたくしの胸は今もなほ少年時のごとく疼く。

筑前から長崎へ通なる道！　わたくしたちは、平原の眞中を貫いてゐる一筋の國道に對して、いつもたゞそれだけのきはめて單純な考へだけを抱いてゐた。しかし、そこには、いろ〳〵な聯想が少年の頭のなかに描かれてゐた。まだ見ぬ異國風な長崎の港へ通ふ道！　といふことを考へるだけでも、その單調な白い道は尊く思はれた。

筑紫の平原の單調な風物……たしかにモノトナスな風景である。山は遠く、農村は竹藪と木立とに隱れ、見るものはたゞ悠々たる白雲と坦々たる萬頃の稻田のみである。このモノトナスな風景のうちにあつて、たゞ一條の國道は少年の頭に描かるゝいろ〳〵な風物詩の焦點を形作るものであつた。

そこには白い國道に沿うて柳の並木があり、電柱があり、馬があり、旅人があり、琵琶法師があつた。

少年はいつも國道を橫切る流れを見ながら土橋の欄干によりかゝつてゐた。土橋のところだけがやゝ小高くなつてゐたので、白い國道の遙かな涯までも見通すことができた。最初は一つの黑點がぽつりと白い國道の涯に動き初める。

動くがごとく、停滯したるがごとく、蠢爾たる姿である。やがて旅人は土橋をわたり、少年の前を默したるまゝに通り過ぎる。歩一歩遠ざかりつゝ、やがてふたゝび一つの黒點となり、地平線のかなたに消えてゆく。

故郷のモノトナスな白い國道はわたくしの少年時の生活の核心であつた。少年の夢の世界そのものであつた。

わたくしの故郷には非常に水が多い。稻田と稻田を結びつけるものは堀の水である。堀はいろ／＼な形に紆餘曲折して陸を浸してゐる。だから稻田の畦道を眞つ直ぐに歩いてゐると、突然深い堀の水に邂逅つて引きかへさなければならぬことになつてしまふ。堀の岸には、かならず大きな黑い株の水楊が繁つてゐる。堀には菱の白い花が咲いてゐる。夏になれば堀の面を吹いて來る風にもかすかに菱の花の香が漂ふ。

南國の夏はいかにも暖い。文字通りに太陽はすべてのものを焦きつくすほどに赫として燃えてゐる。稻田の水も、堀の水も沸く。

午後の二時三時頃、稻田を吹く風さへも燒けるほどの日の中を、おうおうと鳴きながら堀の緣の竹藪から水を横切つて飛ぶ水鳥がある。いかにも間伸びたる鳴き方であり、いかにも怠惰な飛び方である。大きさは鳩よりもやゝ小ひさい。いかにも痩せこけた鳥である。わたくしはその鳥の名さへ忘れてしまつたが、故郷を思ふ時、一番に思ひ出さるゝ鳥である。

「田の草を取りに行つてゐた花嫁があまり空腹になつたので、田から上らう上らうといつても姑はきゝいれなかつた。花嫁はたうとう鳥になつてしまつた。あの鳥は田から上らう上らうといつて鳴いてるんです。」かういつた話を亡くなつた母から聽かされたのはすでに三十年も前のことである。母も死んだ。しかし、けふもなほ故郷の堀や稻田のほとりには、あのあはれた鳥が鳴いてゐることであらう。

水鷄もまた故郷を思ふ時わたくしの心頭に動くあはれなる水禽である。

漫々たる堀の水をくゞり、くゞりては浮かびつゝ鳴く。雨の日、堀の面の煙る日など、殊に鷿鷈の聲は纏綿として人の胸を打つ。

黒い二つ三つの點景が、雨に煙る水の上を走りつゝ鳴きつゝかすかなる水の輪を描く。黒い點景は合しては別れ、別れては合しつゝ水の面を滑り、鳴く。水を裂き、水をくゞり、忽然として水の面を走りては鳴く。

雨の日わたくしはまた古城のほとりに立ちて鷿鷈の鳴くを聽きては少年の夢を描いた。そこには三抱へもありさうな樟樹が頽れかゝつた石垣をつゝんで靜かに懷古の思ひをこめてゐた。

古城にはたゞ燒けのこつた一棟の建物と櫓門とがとりのこされてゐるばかりで、濠をめぐつて薮が茂り、夕方になれば狐が鳴いてゐたりした。

廣い古城のなかには島があり、美しい流れがあり、森があり、麥畑があり、菜畑があつた。今もなほ眼をつむつて故郷の山川を懷へば死のごとき古城の靜寂がよみがへつて來る。

魚狗もまた平原の中の少年たちには忘れがたきものである。沼のあるところ、堀のあるところ、水のほとりにはいつもあの翡翠のやうに青い翅の魚狗がつくねんとして水の面を見守つてゐた。聲は絲の如く細く、銀のやうに澄んでゐた。

わたくしたちは學校の行きかへりによく堀のほとりで魚狗を見出した。午前に魚狗を見れば運が善い、午後に見れば惡い！　といふやうなことを言つてゐた。

魚狗の鳴く堀のなかには烏貝がゐた。學校から歸つては、わたくしたちは風呂敷包みの本を投げ出して堀の方へ飛んで行つた。たいてい肩あたりまで水にはいつて足の先で烏貝を探つた。

土堤の下に源六といふ貧しい男がゐた。源六は親切な男であつた。源六の二人の子供たちはよくわたくしを誘つては畑のなかの烏貝を取りに行つた。

源六の子供たちはまた夏の初めになれば土堤の竹藪に筍をさがしに行つた。わたくしは源六の子供たちと一緒に竹藪のなかにもはいつて行つた。そこには野苺の花が白く咲いてゐた。小鳥の巣を見出すこともあつた。行々子が喧しく鳴いてゐた。

行々子はいかにも騒がしい、能のない鳥である。けれども、夏の初めの沼のほとりの葦の間に行々子を聴き、白雲の悠々たるを眺むるのも捨てがたき田園の情趣である。

筑紫の平野、見渡すかぎり稻田の青嵐につゝまれるころになれば、家々の馬は遠い山地の農家にあづけられることになる。その頃になると毎日暗いうちから草鞋を穿いた馬が國道を通りすぎて山地の方へ行くのを見る。馬は秋になつて涼風の立つころ、ふたゝび山を下つて平原の農村にかへつて來る。

七夕祭は今もなほ故郷の子供たちは夏の樂しい行事としてたのしんでゐることであらう。三日も四日も前からわたくしたちはいろいろな色紙に歌を書く。紙を折つては網を作る。女たちは襲ねの衣を裁つ。六日の朝は殊にはやく起きて蓮の葉や稻の葉の露をあつめて來ては墨をすつて七夕の文字を書く。笹つきの大きな竹を戸口に立てゝ日の暮るゝのを待つ。そのころになるとわたくしたちは天の河を敎へられ、天の河の兩岸にまたゝいてゐる牽牛星や織女星を敎へられる。煙突一つない田園の夜空はすでに秋のごとく澄んでゐる。銀河は地平線から地平線へと煙のごとくつらなつてゐる。一つ一つの星がまたゝいてゐる。少年の心にも宇宙といふものゝ偉大さ、不思議さが鏤みつけられる。

わたくしは筑紫の平原に生まれたことをありがたく思ふ。遮るものなき草と水の中に生まれたることをありがたく思ふ。わたくしはそこに夜の空を仰ぎ、星を見るすべを敎へられたることを感謝しないではをれない。

母は死んだ。父も死んだ。しかしながら秋近く銀河が流るゝ時、織女星や牽牛星がまたゝきはじむる時、わたくしの耳にはやさしい母の聲がきこえる。父の聲が響く。

「あれがたなばたさまだ!」

ちやうど眞南の空にあたつて三つの星の群がある。中央の星は赤く、左右の星は靑い。「眞ん中の星は收穫の神さまだ。收穫の神は左右の星を擔うてござる。だから秋になれば收穫が重くなるので收穫の神さまの顏はます〳〵赤くなる。」父はよくかういつてわたくしにその星を指さしてくれた。わたくしは今もなほ秋になれば赤く燃えた南の空の星を見出す。そして父を思ひ、母を思ふ。

温泉嶽が有明の海をへだてゝ蒼然たる水煙につゝまれてゐる。遠い山を眺むるといふことは平原の人たちにとつていかにもわびしいことである。人をしていとゞ孤獨の感を催させるものである。秋から冬にかけては、ともすれば阿蘇の煙を見ることもあるが、阿蘇はあまりに遠い。

筑後川の流れもまた忘るゝことのできぬ故鄕の思ひ出である。わたくしの故鄕は川口に近く、水は濁つてゐる。しかし、筑紫二郎の名に背かず、いかにも汪々として流れてゐる。川一つ向うは筑後である。

いづこの川もしんみりと人の心を惹きつけるものであるが、荒涼たる筑後川の岸邊に立てば一しほの哀愁を覺えないではをれなかつた。白雲低く垂れて、長塘の柳も稀に、行人の影さらに遠く、水をへだてゝ行々子の聲を聽くばかりであつた。

岸は葦につゝまれてゐた。濁り江の間から辛うじて頭をもたげたばかりの葦の新芽を見るのはうれしいものであつた。少年の心にもしみ〴〵と夏の近づいたことを感じさせた。

有明の海から川をさかのぼる船、有明の海へ下つて行く船！　それすらが少年の心にはなつかしきものであつた。帆を揚ぐるのせみの音が高い帆檣の上に水鳥の聲のごとくあはれに聞えた。

葦の間には蟹が多かつた。

城下の町へ通ふ國道は川の土堤に沿うて桑畑の間を走つてゐた。そこは昔の處刑場であつた。處刑場の手前には別れの松があつた。刑場へ引かれてゆく囚人たちは、そこの松の下でゆかりの人たちと別れを惜しんだとつたへられてゐる。今もなほ一本の松は水のかたはらにとりのこされてゐる。

眞夏の青い稻田につゝまれた筑紫の平原を懷へば今もなほわたくしの胸は疼く。そこはきはめて平凡な水、平凡な稻田、平凡な列樹の連續にすぎない。あまりに單調な平原の自然である。けれどもわたくしにとつて忘るゝことのできない故郷の山であり、水であり、土である。

わたくしは地平線の上の白い雲を思ふ。萬頃の稻田を想ふ。水鳥の聲を懷ふ。一筋の白き國道を惟ふ。

かつてそこに住み、かつてそこに惱みつゝあつた人々の多くは、すでに故郷の靜かな土の下に眠つてゐることであらう。わたくしの四人の姉妹たちの小ひさな魂も亦故郷の樹の下にしづかに眠つてゐる。

けれども今日も亦あの白い雲がもく／＼と地平線の上にものうげに湧いて來つゝあることであらう。

永劫にわたくしの故郷は地平線の上の白い雲をながめつゝ、水と稻田につゝまれて、憂鬱な一筋の白い國道を中心として夜明けつゝ、日暮れつゝあることであらう。

もう沼には白い菱の花が咲く頃である。やがて菱の實がみのり始むれば、故郷の若い娘たちは赤い襷をかけて半切り（小舟代用の盥）に乘つて、水を掻きつゝ靜かな藻草を分けて、菱の果をもぎはじめる。

白い雲が水の上に映る。

孤獨なゝ菱狩り女たちはしづかに歌ふ。
小雨降れば柘榴の窓に故鄕の女たちは機を織りつゝ、國道を步む旅人らをながめつゝあるであらう。
旅人らの影もやがて消ゆればすべてがモノトナスな平原の自然に還る。
故鄕の若き女たちは雨の窓に孤獨な歌をうたふ。

朝まだ眠つてゐた間に靜かな雨が降つてゐた。久し振りの雨であつた。日ごと吹きつゞけてゐたはげしい風が止んで、しつとりと濡れた梢を見れば、いかにも山の湯らしい氣分をしみじみ感じさせられるのであつた。しばらく聽かなかつた小鳥の聲さへ、けさは軒ちかく落ちついてゐる。近くの柴山には淡い霧が漂うてゐる。何となしに春が來たやうなあたゝかさである。

山を戀ふ

わたくしは不圖天城を見た。そこには眞つ白な雪が谿を埋めてゐた。けさの雨が天城では雪になつたのであつた。木の深いところだけが黑くとりのこされて、木の淺いところや、草山になつてゐるあたりはすつかり雪に被はれてしまつた。里ちかくなるにつれて草山を登つてゐる道のみがはつきりと白く雪をあらはしてゐるところもある。雪につゝまれた天城は昨日とは見ちがへるほどに尊くも、寂しくも、高くも思はれる。たしかに雪をいたゞく山を見れば、わたくし自身の魂までが遙かな世界に還つてゆくやうな氣がする。神冷え氣澄むといつた感じである。

子供時代に山に降つた初雪をながめて、手を拍つてよろこんだことなどが夢のやうに泛かんで來る。

わたくしは山を愛する。遙かなる山を愛する。山はわたくしたちの魂をいつも遙かなる世界に誘ふ。悠々の世界に伴ふ。山が雪につゝまるゝ時、山はさらに遙かなる世界にわたくしたちの魂を眼覺めさせる。雪につゝまれた山はお伽噺の世界を聯想させる。あまりに現實的なわたくしたちの生活に於いて、遠い雪の山はあまりに夢幻的な美しい誘惑を感じさせる。

雪はやがて消え失せなければならぬといふこと、いさゝかの汚れもないといふこと、近づき難いといふこと、天空

にそびえてゐるといふこと、いろ〳〵な聯想が結びついてそのやう夢幻的の感じをわたくしたちに抱かせるのであらうが、ともかく雪の山は現實の存在であつて、半ばわたくしたちにとつては非現實であり、夢である。そこに言ひ知れぬ蠱惑を持つてゐる。

わたくしは夢を愛する。春の雨も夢であり、せゝらぎの音も夢であり、夕焼けの空も夢である。太陽の光りも夢である。なかんづく美しき夢は山である。

わたくしがいつも東京から大阪や京都に旅して羨ましく思ふのは、大阪や京都が直ぐ町のうしろに大きな山を持つてゐるといふことである。大阪はいかにも煤煙につゝまれた都會である。ちよつと息苦しさうな感じもする。けれども不圖街を歩いてゐて町の屋根越しに蒼然たる生駒の姿を見たる刹那に、煤煙からあたへられる息苦しい感じも何も失はれてしまう。いかにも頼るべきものをもつた都會といふ感じが浮かぶ。鞍馬、比叡などの山々にとりかこまれてゐる京都に至つてはなほさらこの感が深い。そこに行くと東京は寂しい。富士があり、秩父があり、甲武の山々が見えるが、山が少し遠過ぎる。さすがに秋から冬にかけて武藏野に出れば雪をいたゞいた山々を望むことができるが、いかにも遠過ぎる。東京は所詮山に凭るといふにはあまりに山から離れ過ぎてゐる。それでも昔の江戸人がいかに筑波なり、富士なりを眺むることによつて慰められてゐたかといふことは、殘されてゐる歌なり、山に因んだ町や坂の名なり、そんな記錄なりからして想像することはできる。繪師が日本橋を描くとする、かならず西の一方には富士が靑空の上に聳えてゐる。隅田川を描く場合には北に筑波を取り容れることだけは忘れられずにゐる。寒い冬にとぢこめられてゐた都の人たちが上野の花を見、御臺場沖に潮干狩をするやうな春になつて先づ第一に筑波を見、富士を見ていかに暢然たる感慨に浸されたであらうかといふことは、今日なほ想像することができる。そのころは煤煙もなく、空は今日とは比較できないほど澄んでゐたにちがひない。したがつて山をながむる心持ちも、今日の東京とはまるで

異つてゐたであらう。二十年ばかり以前わたくしはよく道灌山に立つて筑波をながめたことがあつた。あのころは道灌山の直ぐ下から一物の遮るものなき水田であつた。楊柳の並木がわづかに荒川の水のところ〴〵に陰翳をつくてゐるくらゐのもので、葛飾の野から直ちに筑波の峯まで漫々としてつらなつてゐた。あのころはまだ遠くても東京と筑波との間にはあたゝかなつながりがあつた。今日では東京といふ都會と山とのつながりがほとんど失はれてしまつてゐる。これは東京に住む人々にとつてまことに寂しいことでなければならぬ。

山と町との關係はまた山と村、山と勞働、山と耕作、山と狩獵といつた風にあらゆる人間の生活と最も深い交渉を持つてゐる。

五六月のころ、北國の山々にはまだ雪が殘つてゐる。里には桐の花が咲き、接骨木が紅く柴山をいろどつてゐる。雪から雪の間の近い北國では、野良の人々は日の光りを惜しみながら、日が落ちつくしてもなほ土をたがやし、水を引いてゐる。

富山あたりでは丁度早苗とるころであつたが、若い娘たちがあの附近の土地の習慣で、時にそのために拵へたといふ見るからに花やかな衣裳をつけて五人十人と稻田に並んで苗を植ゑてゐるのを見た。千鳥が群をなして直ぐその上を飛んでゐた。さらにそのうしろにはなほ白皚々たる北アルプスの峯々がそびえてゐた。わたくしはその刹那に、ふたゝび見るべき山を持つた人々の生活の幸福を想はずにはをれなかつた。

低い雪雲に掩はれた北の國の人々の生活にとつてたゞ一つの慰めは、あの雪をいたゞいた立山であり、白山であるやうにさへ思はるゝのであつた。北の國の人々の生活からあのけだかい雪の山々をとりのぞいたら、どんなにか頼りないものであらう。落莫たるものであらう。

富山あたりでは男が二十歳（？）になるまでにはかならずあの雪のお山に登るといふ古い習慣さへ遺つてゐるやうに聽いたことを覺えてゐる。まことにいゝことである。
山はあまりに現實的なわたくしたちの生活に於いて唯一の理想であり、夢であり、神祕である。
わたくしたちは山を愛せなければならぬ。山を尊敬することを知らなければならぬ。山は永劫の詩であり、宗教であり、魂の故郷である。

汽車が近江の湖水に沿うて走るころ、或ひは近江から美濃に入り、尾張に入るころ、わたくしたちは沈默そのものゝやうな姿で黒い土を耕してゐる野良の人々を見ることがある。田の畔には枯れ枯れの柳があり、櫟がある。道は遙かに山につらなつて杳然として夢のごとく消えてゐる。
わたくしはいつもあの平原を通るたんびに北方の高い山々を眺めては、そこに働いてゐる人々と、雪をいたゞいた山々とを結びつけて考へる。東北からさらに北海道に旅する人々は岩手山や、駒ヶ嶽や、羊蹄山とそこに働いてゐる野良の人たちを結びつけて考へずにはをれないであらう。
赤い、または黄色な頭巾を冠つた東北や北海道あたりの女たちが林檎畑や玉蜀黍畑に働いてゐる姿を見る時、旅人たちは、本然的にかの女等のうしろに聳えてゐる津輕富士や蝦夷富士を結びつけて考へる。

わたくしたちは土の尊さを知る。同時に山の尊さを忘れることはできない。土に即したる生活よめぐまれてあれ。山を拜することを忘れえぬ生活よめぐまれてあれ。
土はわたくしの憂鬱な魂の巣である。

山はわたしの憂鬱な魂の墓場である。
われ笑ふ時、土よ、われをして汝を抱かしめよ。
われ泣かん時、土よ、われをして汝の柔かき草に寢ねしめよ。
われ思ふ時、山よ、われをして汝のその靜かなる思ひに入らしめよ。
われ悲しまん時、山よ、われをして汝のその遥かなる思ひに入らしめよ。

夜明け前のかくろき山
夜明けころのかすかなる山
日の光りに照らされたる紫の山、蒼き山
雲はわき、むらがり、散り、雲はためらふ。
その刹那々々の山の色、山の光り、山のたゝずまひ
山こそ地にあるもの丶たゞ一つの慰めである。
晴れたる山、曇りたる山、煙れる山、時雨れたる山、雪降れる山
山こそ地に働くものゝたゞ一つの慰めである。
永遠に嚴かに
刹那々々に變りつゝ
なほ永劫に變らず
高く、貸く、靜かなる。

わたくしはこのころ午後の日課の一つとして、かならず伊豆の草山を歩いて富士をながめてゐる。そして日ごと同じ富士、そして異なる富士をながめてゐる。

眺めても眺めても眺め盡せぬ山を眺めつゝ野にあり、山にあり、町にある人たちの幸福を思ふ。

惑はず、恐れず、凝滯せず、偏依せず、眞善美そのものゝごとく、神のごとく靜かにして永劫なる富士の姿を見るたんびに、わたくしは人間の心が富士のごとくならんことを冀ふ。

このやうな願ひは夢想であるにちがひない。しかしながら富士の端麗無比なる姿を見るたんびにかく思はざるをえない。

富士を見るごとにわたくしは歌人業平を思ひ、西行を思ひ、聖僧白隱を思ふ。

靜かなる雲は尊くも富士をめぐり、わき、むらがり、消ゆ。

日は暮れ、星はさゝやく。

富士はなほ靜かに薄暗の空に尊く。

雑木林を歩みて

冬枯れの伊豆の草山を歩きながらわたくしは天城と富士を毎日のやうにながめてゐる。

午後の三時ころになれば赤松山のなかには、きつと頬白の群が梢から梢をつたうてさゝやくがごとく鳴きつれつゝあわたゞしげに飛び來り飛び去る。わたくしは毎日午後になればそのころの時間を見はからつて松山へのぼつてゆく。山の小鳥たちにも日々同じやうな比較的規則正しい自然の生活法がくりかへされてゐるやうに思ふ。

二三年前はよく同じ赤松山で午後になると啄木鳥を聽いたものであつたが、この冬はまだ一度も啄木鳥の木を啄く音を聽かない。啄木鳥の聲は山の深さをさらに深くし、靜けさをさらに靜けくするものである。啄木鳥を聽くごとにわたくしはたゞひとり伊豆の山をさ迷ふわたくし自身の寂然たる姿をあはれにもおもひ、うれしくも思ふ。

わたくしは草山の上に佇んで暮れてゆく天城と富士の刹那々々に變りゆく雲の色をながめ、山の色をながむる。靜かにうつりゆく富士と天城の山の色、雲の色の美しさは、夕暮れごとにわたくしを草山の上に誘惑する。「もしすべての人間の心が暮れてゆく富士のごとく、天城のごとく靜かであり、自然であり、寧からば……」などと夕暮れの草山に立つごとに思ふ。

けふもわたくしは暮れてゆく天城を見、富士を見ながら草山を下りて行つた。徑は櫟や稚松の間をなだらかに繞うてゐた。わたくしは一人の男が炭燒竈を作つてゐるのを見出した。日暮れ方の山には小鳥の聲も聞えなかつた。あたりには家もなかつた。かれは冬枯れの空山にたゞ一人とりのこされて、しきりに炭燒竈の土を叩いてゐた。土を叩く單調な音のみが雑木林に谺してゐた。夕霧が淡く漂ひはじめてゐた。

わたくしはかれの傍へ近づいて行つた。
炭燒竈は火が入れられたばかりで、奧の方からは黃ばみがかつた烟がわづかばかり立ち初めてゐた。
「竈は幾時間くらゐ焚くんです？」
「さうですねえ……××時間くらゐ焚きますよ。」
「この山を伐つてしまふまではこの一つ竈で間に合ふのですか？」
「まあそんなものですよ。」
「お邪魔しました御大事に。」
「はいありがたう。」
わたくしは簡單な挨拶をして谷の方へ下つて行つた。徑はかすかに夕暗のなかに走つてゐた。
わたくしは突然谷をへだてゝ炭燒の男が雜木林のなかで唄ひ出したのを聽いた。わたくしは驚異にちかい感じを見出した。
冬枯れの天城の奧。日は暮れてしまつて、小鳥の聲すら聽くことのできぬ靜寂のなかに、たつた一人の男は何の屈託もなささうに、美しい聲で唄をうたひながら、炭燒竈の新らしい土を叩いてゐる。
人間の住むところかならず生活のわづらひがあり、憂ひがある。しかしながら同時に人間の住むところかならず生活のよろこびがある。
わたくしはいつまでも雜木林のなかに佇んで谷をへだてゝ聞ゆる炭燒き男の唄を聽いてゐた。
孤獨なる炭燒き男よ。

お前は雑木林の夕闇のなかに潜んで富士の夕燒も見ないのか、天城も見ないのか。
孤獨なる炭燒き男よ。ばた〳〵と土を打つ音はわたくしに松山の啄木鳥を思ひ出させる。
山のなかの孤獨なる男よ、お前の土を打つ音は啄木鳥のそれのごとく單調であり、寂しくもある。
けれどもお前はたゞ一人うたふ。お前はかの啄木鳥よりは幸福を知つてゐる。お前は生活のよろこびを知つてゐる。
お前は天城の山にをりてたゞ一人うたふ。
誰れに聽かせんためでもない。たゞお前一人のために、お前一人の魂のために。
お前は妻を持たず、子を持たず、友達を持たないかも知れない。
けれどもお前はお前の唄を持つてゐる。
世界中の人たちがお前を捨てゝもお前は天城の山のなかにお前自身の魂のためにうたふべき唄を持つてゐる。
お前が生きてゐる間お前は唄をうたふであらう。そしてお前自身の魂をなぐさめるであらう。どのやうな山のなかにはいつても。
お前は、啄木鳥のごとく孤獨ではない。
お前は唄を持つてゐる。
お前は、お前の唄を聽きつゝ草山を下りる人よりどれほど幸福であるか知れない。
山の孤獨なる男よ。わたくしはもう久しい以前に唄を失つてしまつた。

わたくしは草山を下りて行つた。
人間の住むところ悲しみあるとともに、よろこびがある。

闇あるとともに光りがある。
わたくしは旅をつゞけるであらう。
そして到るところに冬の山を眺むるであらう。
落莫たる冬の山を眺めてわたくしの心は疼くであらう。しかしながらわたくしはその刹那に天城の山の孤獨なる炭燒きの唄を思ひ出だすであらう。
蕭條たる冬枯れの山のなかにも、もし人間が住んでゐるかぎりは山はめぐまれてあれ。
人は啄木鳥よりも幸福である。かれはうたふことを知つてゐるがゆゑに。
神よ、人間は苦し。されど神よ、人間はよろこびを持つてゐる。生くるすべを知つてゐる。

靜かな雨が

わたくしはまだ眠つてゐた。
軒を打つ靜かな雨が降つてゐた。半ばまどろみながらわたくしは涓滴の音を聽いてゐた。
靜かにわたくしの魂を撫でてゆく雨の音をなつかしみつゝわたくしはふたゝび眠り、ふたゝび覺めた。
涓滴は板塀を撃ち、地を撃ち、わたくしの魂を撃つた。
人々は無心の雨といふであらう。
わたくしは菩提心を喚びさますといふ印度の托鉢僧の托鉢の音を想ひ出した。
托鉢の音は塵埃の街に響く。
梵天を忘れた人々の心に梵天を想はしめ、永遠を懷はしめつゝ。
涓滴の音はわたくしにとつて印度の行脚僧らの托鉢の聲であつた。
まどろんでゐたわたくしの魂に亡き母の聲を思ひ出させ、うれしき生について、わびしき死について靜かなさゝやきを聽かせてくれた。
雨の音のうれしさ。
雨の音のわびしさ。
忘れられてゐたわたくしの魂の面をじつと見守ることを教へてくれるのは雨の音である。
わたくしは子供のころから靜かな雨の夜が好きであつた。

わたくしの父の家は貧しい板葺の小舍であつた。
だから雨が降る夜は、夜つぴて夢うつゝのなかに雨を聽いた。
田舍の子供たちに一番恐ろしいものは夜の盜人であつた。
三尺ばかりの靑い竹切れや、まだ皮のついたまゝの樫の枝などが、背戸や、表の戸の突つかい棒につかはれてゐた。
父や母が三尺ほどの突つかい棒を戸にあてゝゐるのを見ると、私達はやつと安心して眠つたものであつた。
盜人だつて屹度雨の夜を恐れて、雨の夜には戸外を步かないにちがひない。だから雨さへ降つてゐれば盜人は來ないにちがひない。
雨の夜は何となく子供心には恐ろしかつた。超人間の叫びが聞えた。だから雨の夜は恐ろしかつたが、雨の夜が好きであつた。
夜の雨はわたくしの幼い魂を愛撫する搖籃の歌であつた。
そのころの雨の音が、そのころの夜の雨のなつかしさが、今もなほわたくしの頭に鏤みつけられてゐる。
雨の音よ、なつかしき、わびしき。
雨の音はわたくしの魂を撫でる。

雨の音よ。
夜は靜かである。
雨の音よ、高い空をどこから落ちて來て、そしてどこに消えてゆくのだ。
わたくしはお前の影を見ない。

わたくしはたゞお前の跫音をのみ聽く。
第一のお前の跫音。
そして第二のお前の跫音。
二つの跫音の間に、幾人の人が生まれ、幾人の人が死ぬであらう。
二つの跫音の間に、わたくしは故鄉を思ふ。故鄉の松山の中の父と母の墓を思ふ。
松山も雨に濡れてゐるであらう。諸士の道は夜が更けたであらう。父と母の墓が夜霧に包まれたであらう。
そこに冷たい父と母の墓が。
かつてはわたくしを抱いて泣いた母が。
かつてはわたくしを肩馬に乘せた父が。
一つの雨音
さらに一つの雨音
三百里の故鄉の墓のほとりへわたくしの魂はかける。

姉よ
故鄉の姉よ
山陰道の姉よ
大阪の姉よ
雨は故鄉にも降り

山陰道にも降り
大阪にも降つてゐるであらう。
午前二時である。わたくしは起きて榾火(ほだび)を見つめてゐる。
わたくしは姉たちを思ふ。
かの女らの魂の上にかすかなる雨の音の愛撫あれ。
姉よ
雨の音を夢のなかに聽かばわたくしを思へ。
姉よ
われら父もなし、母もなし
巢なき小鳥を思ふ。
かつて父の家に小鳥のごとくせりあつまつては、霜燒けの手を並べて榾火にあつた五人のきやうだいたちが。
遠い山を越えて、はなれ〴〵に雨を聽くわびしさを思はないか。
わたくしたちの魂が
はなれ〴〵に山を越え、國を越えて雨の中に眠るわびしさを思はないか。
雨が降る
雨は魂の愛撫
雨は魂のすゝり泣き

雨の音

藁を打ちし夜なべの母を懐ふ

一番鶏(いちばんどり)の聲を聴くころなほ母は藁を打つてゐた。
縄に刺した青錢一筋を得るためには、わたくしの母は幾夜藁を打たなければならなかつたことであらう。
暗く、すゝけたランプがたツた一つ土間の梁からつるされてあつた。
雨の音がランプの心に滲(し)みこむほどにわびしく夜をこめて降つてゐた。
とすつ、とすつと、地の底に滅入(めい)るやうな藁を打つ音がわたくしの頭にまだ刻みつけられてゐる。
母はランプの下に青錢を並べては算(かぞ)へてゐた。
わたくしは眼をさましては夜なべの母を見た。青錢を疊の上に並べてゐる母を見た。
わたくしは母を悲しんだ。
わたくしの眼に映つた人生はあまりに寂しかつた。
母は一生一度だつて大きな聲を出して笑つたことはなかつた。
一度だつて絹の着物を着たこともなかつた。
一度だつて芝居を見たこともなかつた。
わたくしは母が死ぬまで蓄音機一つ買つてやることができなかつたことを後悔してゐる。
雨が降る。
藁を打ちし母の姿が
青錢を算へてゐた母のやさしい顔が。

ランプの心は燃えつくしてゆく。
墓のなかの母よ
人生とは……

青葉の旅

北の國の山はなほ雪の下に眠つてゐる。
青葉かくれに杳然たる雪の遠山をながめつゝわたくしは幾日かの旅をつゞけてゐた。高田の町でも直江津の町でも雪の日のために長く往來に突き出された家々の簷をくゞつて歩くのも北國の旅らしい感じであつた。低い軒のあたりにはなほ幾月かの長い沈鬱な雪の日のわびしさがかすかな影をたゝへてゐるやうにさへ想はれた。
わたくしは直江津の大通りを北へ北へと歩いて行つた。日本海の岸に出て波の音を聽いて見たいと思つたからであつた。波の音さへもが北の國では暗かつた。
長岡の町の郊外では桐の花が水のほとりの丘をこめて咲いてゐた。眺めても眺めてもかゞやかな青葉につゝまれて桐の花がすが／＼しいこゝろに咲いてゐた。
彌彥山、出雲崎などの名をくりかへしては青葉につゝまれた越の國の山々をながめた。
新潟の町は北國の旅のあはれさを盡くす。信濃川はこゝに到りて漫々として北の海に入る。そこには北の海の航海に疲れた汽船が森の若葉の間にもやはれてゐる。幾百間とも見ゆる信濃川の長橋をわたりて町に入るのもあはれである。美しい女たちの町と聽けどこゝも雪國の軒暗く奧深くして、旅人はたゞ水に沿ひ並木に緣りて古都のごとき、廢墟のごとき靜かなる街路をたどる。
町はづれの砂丘に立てば波はむせび、佐渡ヶ島は指呼の間に横たはる。

右に出羽の山であらうか、左に能登の岬であらうか、たゞ雲のごとき山々を見る。

新潟の町は水の都であり、柳の都である。青葉若葉北國のあはれさをこめて港の町を抱く。麗人の夢も青かるべしと思ふ。

ふたゝび直江津に引きかへし糸魚川に向ふ。山には郭公啼き接骨木の花がさかりである。糸魚川に相馬御風氏を訪ねたわたくしは、氏の書齋の窓にひよろ〳〵と庇のあたりまで伸びてゐる若葉の木を見た。

「雪の日はこの木なんかすつかり埋つてしまふのですよ。」

伸びよ伸びよ。そして今のうちに思ふ存分太陽の光りを吸へ！

若葉のころ北の國を旅する人々は心からかく思ふであらう。その可憐なる若葉を見る時。

水のほとりにはアカシヤが雪のごとく白く咲いてゐた。北日本アルプスの雪は糸魚川の上にのしかゝるやうに高く嚴かにかゞやいてゐた。

わたくしは偶然にもそこのステーションで、三十年以前別れたきりの子供のころの友達と邂逅つた。

親知らずのトンネルを出て間もなく市振の關がある。海に沿ひ山を負ひ、北陸街道の一古驛である。山藤咲き桐の花散りかゝり、千鳥啼きて見るからに寂しいところである。芭蕉が奥の細道の行脚に、旅の遊女と一つ家に泊り合はせたといふゆかり深い宿場である。

これより富山までは北に日本海、南に雪の山をいたゞき、若き女たちは祭りの夜のやうな美しい衣を着かざつて苗代田に立つてゐる。殊に花嫁たちは遠目にもそれと見えるほど美しく飾つて稻田に出る習慣といふことで、五人十人と並んで稻田に苗を植ゑてゐる若い女たちを見れば、古い時代にでも還つたやうなすが〳〵しい氣がする。

加賀の金澤はいゝ町である。二度も三度も重ねて訪ねて見たい町である。靑葉が下の兼六公園は菖蒲のさかりであ

つた。近く日本海の波に洗はるゝ砂丘をながめ、遠く雪の山に對して半日旅の午睡を貪る。

あかくと日はつれなくも秋の風（芭　蕉）

の句牌は、紅葉の下に古りて見ゆ。北の國のあはれさをこの一基の碑に盡してゐる。

さとりきれぬ人間の心

菊が咲き、山茶花が咲く。秋になれば日本に生まれたことをうれしく思ふ。
西洋にはどんないゝ花があるか知らぬが西洋の花ではやはり薔薇がいゝやうに思ふ。東京は寒さがつよいので、いい薔薇を育てることはなかく困難であるが、わたくしの生まれた南方の國では、家のまはりに抛りつぱなしにして植ゑて置いても、四季を通じて見事な花がいかにもゆかしい薫りをたゝへて咲きほこつてゐた。しかしどうしてもわたくしたち日本人には菊ほどつよくぴつたり胸にこたへないやうに思ふ。
菊は作られた大輪や懸崖もよく、小菊もいゝ。籬のほとりや、道のはたに捨てられたまゝの自然の菊もいゝ。
氣澄み骨冷ゆる晩秋の青空の下に草紅葉を踏みながら、霜にすがれゆく菊を見れば、年の瀬のわびしさの近づいて來たことも思ひやられる。
靜かに咲き、靜かに枯れてゆく菊は、どうしても日本の花でなくてはならぬ。御佛の前に供ゆべき花でなくてはならぬ。靜かに人生を考ふる人々の花でなくてはならぬ。
年の瀬に近く靜かに菊の花を見ることのできるわたくしたちの自然はめぐまれてゐると思ふ。
年は逝く！　から考へただけでもいひやうもない寂しさが胸にわく。早く年の逝くことを願うたのは十四五歳までのことで、そのころの心持ちをかへり見ると、人生のうちで一番幸福であつたやうに思ふ。恐らくすべての人がさうであらうと思ふ。
獨樂一つ買つてもらつても、凧一枚もらつても眠れぬほどうれしかつたのは十歳ころのことであつた。貧しい父に

ねだつてブリツキの喇叭を一つ買つてもらつたことがあつた。眞鍮に見せるために黄色な繪具で塗つてあつて、赤い紐がついてゐた。朝暗いうちに起きて前の池のまはりを吹いて歩いたものであつた。夜が明けるのが待ち遠しくて幾度か床のなかゝら頭をもたげたものであつた。

池のまはりには眞つ白に霜が降りてゐた。鶺鴒が飛んでゐた。池の面には氷が張つてゐた。石を投げると、ころころと氷の上を滑つて行つた。

そのころわたくしはまた父に獨樂を買つてもらつた。獨樂の紐は麻で、それには赤く染めたふさがついてゐた。寒いので獨樂にふさを卷きつけたまゝ懷に入れてかじかみながら寺の塀に北風をよけて日向ぼつこをしてゐたこともあつた。

あのころのことを思ひ出すと、まるで夢をへだてた世界の出來事のやうな氣がする。

このころ三株四株の菊の花を緣先に竝べて靜かな晩秋の日の光りをたのしみながら、とりとめもない思ひ出に耽ることが習慣のやうになつてしまつた。

逝く年を悲しむ心もさすがではあるが、風もないこのころの午後の日の光りをたのしむ心は何ものにもかへがたい。

「愚案ずるに冥土もかくや秋の暮」

芭蕉の句のこゝろもわかるやうな氣がする。

いかにも寂びはてた日の光りである。いかにも落ちついた空氣である。一枚一枚の木の葉の上にも靜かな日の光りが眠るやうに落ちついてゐる。一枚一枚の草の葉の上にも靜かな秋の氣がやすらうてゐる。じつとそれらの晩秋の氣にながめ入つてゐると、生きてゐることがありがたく思はれる。無關心に過ごしてしまうには尊とすぎる。

逝く年は逝かなければならぬ。

夕暮の鐘が鳴りひゞく。魂の底に喰ひ入るほどに逝く年のあはれさは身にしみる。

けふも鶯は庭に來て小暗い下蔭をつたうて笹鳴きをくりかへしてゐる。何の思ふこともなく、逝く年のあはれさも知らぬかのやうに。

いつ木の葉が散り、いつ霜が降り、いつ春が來るかも知らず鶯は下葉から下葉をつたうて飛んでゐる。何の憂ひもなく、何のかなしみも持たぬかのやうに。

木はその植ゑられた庭の隅に何の不平もなく白い花を咲かせてゐる。

燈心草はその置かれたるところに何の悲しみもなくすく〱と纖細い葉を伸ばしてゐる。

わたくしもまた何の不平もなく、悲しみもなきかのやうに近づいて來る冬の跫音を聽きつゝ坐つてゐる。

年は逝く。さとりきれぬ人間の心。

笹鳴きしつゝ下葉をくゞる鶯を尊く思ふ。

太陽は地に

十月のなかごろであつたらうか、わたくしは二鉢の懸崖作りの菊と、一鉢の大輪の菊とをもらつた。菊を見ては、この二ケ月ばかりの間日本に生まれた幸福を感じる日が多くつゞいた。

十二月もなかば過ぎたこのころでは、ながいことわたくしをたのしませてくれた三鉢の菊も日毎にすがれてゆく。朝ごとにかさ〳〵と音する菊の落葉を掃くのも年の瀬らしいわびしさを感じさせる。

昨日は亡母の命日であつた。父、母と月々一度づゝは廻つて來る命日であるが、十二月の命日は、ことしはこれかぎりだと思ふせゐか殊に寂しい思ひがする。朝起きて午後の二時半までに新聞の續き物を書き上げて、三時からの講演に駈けつけて夜になつて家に歸つて來たといふやうなあわたゞしさで、わたくしはすつかり命日をわすれてしまつてゐた。今朝になつてそれを思ひ出してまことにすまぬことをしたやうな氣がする。

母が亡くなつてから六年になる。父が亡くなつてから三年になる。しかしまだ父も母もいつもわたくしのちかくにゐるやうな氣がしてならぬ。わたくしは悲しいことには、父の死にも母の死にも間に合はなかつた。それを思ふと今日なほ泣かずにはをれない。腸をかきむしられるやうな氣がする。せめて自分が死んだなら、その時こそ故郷の父や母と同じ墓にしづかに眠りたいと思ふ。

母はいつも大晦日の黄昏ころになると門口で菊を焚いた。だからわたくしは今もなほ大晦日の夕暮れには、たいていは菊を焚くことにしてゐる。その時だけはしみ〴〵と母を思ふことができる。

わたくしも相當に生きのびて何か仕事をしたいと思つてゐる。死を恐るゝ。しかし死を恐るゝ心は、父や母を持つ

てゐた時ほど強くはない。父や母が世にある間は、自分は決して死んではならぬと思ふ心でいつぱいであつた。心に張りがあつた。

このころになつて、そのころのことを思ふとまことになつかしい。うらやましい。

父を持つた人、母を持つた人、わたくしはこのころでは心からその人たちをうらやましく思ふ。

しかし人間がもしいつまでも兩親を持ち、幸福に充たされてゐたら、死ぬことがいやでいやでならぬであらう。親を失つたり、悲しいことが多過ぎたりするので、人間は諦觀、悟入をあたへられることになるのであらう。わたくしはさうも思つて父もなく、母もない現在の境涯をあきらめてゐる。

年の暮になると、わたくしは毎年日本橋あたりを歩いて故郷の父と母へ反物などをもとめて送るのをたのしみの一つにしてゐた。父が酒をたしなんでゐたので、いつの年の正月であつたかわたくしは銀座の或る店で銀杯をもとめて故郷に送つたことがあつた。父はたゞ一つの銀杯を子供のやうになつてよろこんでくれた。

わたくしはこのころ或るところから銀杯六個を一組にしたセットを貰つた。父がゐてくれたら今年のお正月には父に送らうものを、父がどんなによろこんでくれたであらうになどと、お正月になつても人の子は人の子の愚痴を忘れることはできない。

父上を持つてをられる方、母上を持つてをられる方のお正月をわたくしは心から祝福したい。と同時にうらやむ心にもなる。

お正月！　何といふうれしい言葉であらう。わけもなしにうれしいありがたい言葉である。十二月といふ月は、ただうれしいお正月を迎へる準備のためのみに存在してゐるやうな氣がする。

わたくしは今夜久し振りで十軒店を歩いて見た。暮になれば十軒店を歩いて一軒々々と羽子板を見て歩くのが好き

である。地震後、上手な羽子板の職人がゐなくなつたのか、あまりいゝ羽子板を見ることができないのは寂しいが、それでも霜夜に下駄の音をきゝながら羽子板店をのぞいて歩くのはうれしいものである。花やかな、明るいお正月が直ぐそこまで近づいて來てゐるといふ感じがしみじみと迫る。生きてをればこそ年の瀬の寂しさも、春のうれしさもわく。

生きよ、生きよ、すべてのもの深く、靜かに、永遠に生きよ。逝く年のわびしさも、來ん春のよろこびも魂の底にきざみつけて、深く生きよ。

何でもない人生。年々再々相同じき人生。しかしその何でもない人生の味の靜けさ、影の深さ。それを感ずる人でなければ、眞實に生きたとはいはれない。

何でもない除夜の鐘の音、だけどじつと眞夜中に起きて除夜の鐘の音をきいてごらんなさい。そこには四千年以前の印度の深い哲學の響きもある。釋尊の御聲もこもつてゐる。父の聲もあり、母のやさしい俤も生きてゐる。そこには生きることの悲しみもあり、生きることのよろこびもある。

除夜の鐘はひゞく。
生きることの尊く。生きることのさびしく。生きることのありがたく。
新たなる春が生まれた。
何といふ明るい山であらう。
何といふかゞやかな空であらう。
何といふありがたい生存であらう。
父を思ひ、母を思ひ、さらに未來の人類を思ふ。

生きよ、生きよ、すべてのもの生きよ。
太陽は地にかゞやけり。

自然に親しむ心

去年伊豆の山の温泉場を訪ねたころは水のほとりに山査子が咲いてゐた。昨日わたくしはまた一年振りで山の温泉場へやつて來た。そしてふたゝび同じ水のほとりの山査子をながめた。雨に濡れつゝ山査子の花は咲いてゐた。考へて見ると一昨年もわたくしはこゝの温泉場に來て同じ山査子の花をながめた。偶然にもわたくしは年々山査子の花の咲くころに温泉場をたづねてゐるのであつた。わたくしが山査子の花の名を覺えたのはバアンズの詩「高原のメリイ」を讀んでからのことであつた。古城のほとり、山査子の花の下で戀人と訣れを惜しんだスコットランドの若い詩人のことが山査子の花を見るたんびにわたくしの胸によみがへつて來る。

今日もわたくしは雨に濡れた山査子の花をながめながらバアンズを思ひ、若くして死んだ高原の娘のことを懷うてゐる。

これも數年前のことであつた。わたくしは伊豆の山を歩きながらバイロンの百年祭の日を記念したことがあつた。四月下旬の天城にはまだうすら寒い風が吹いてゐた。めづらしくも天城には淡雪が積つてゐた。しかし草山のあたりには翡翠のごとく青い櫟の嫩葉が四月の太陽にかがやいてゐた。それ以來、わたくしは櫟の嫩葉を見るたんびにバイロンのことを思ふならはしとなつた。

山水癖或ひは旅の魔に憑かれるといふやうな古人の言葉を想ひ出すほどわたくしは山を訪ね旅を愛しつゝ旅を歩いてゐる。恐らくこの心は死ぬまで改めることはできないであらう。何故に旅を愛するか、何故に山を愛し、雲を愛す

るか。これに對しての答はわたくし自身にもわからない。わたくしはたゞ山が好きである。雪溪を眺め、這ひ松の香を嗅ぎ、深山の水を飲むことを愛するがゆゑにわたくしは山に登る。

悠然として雲をながめ、山嶺の孤松に魂をやることを愛するがゆゑにわたくしは旅をする。

何ゆゑに雲をながめ、何ゆゑに山をながむるのであらう？　曰く、たゞ悠久の世界に詣らんがためのみ。無何有の境に心を住せしめんがためのみ。有限の我を驅つて無限の世界に我を引き上げんためのみ。

自然はわたくしにとつて最も靜かなる魂の道場である。伽藍である。自然は言葉なき哲學である。言葉なき詩である。言葉を絶したる眞理である。いかなる哲學も詩も自然の前に置かれたる時、たゞ一介の貧しき乞食に過ぎないものとなる。すべての書物、すべての言葉が滅びた時、なほそこには自然の悠久さと深さとのみが遺る。

婦人を嫌ひ、婦人を憎み通したストリンドベルクがなほその一作中の死んでゆく主人公をしてつひに「乳母や、お前の膝を貸しておくれ！　お前の膝だけはいつも懷かしい」といつた意味の言葉を語らせてゐる。恐らくストリンドベルク自身實は憎んでも憎んでも、疑つても疑つても、忘るゝことのできない愛着を婦人に對して持つてゐたであらう。人生は相頼ることなしには生きてをれない。

ストリンドベルクの最後のこのやさしい、人懷つこい心はさらに自然に對するかれの言葉のなかに一層明かに見出すことができる。

死の床に仰臥したかれは胸の上に聖書を抱きつゝ眠つて行つた。しかもかれは山の上の木の下に自分を葬つてくれるやうにと靜かに語りながら眠つてしまつたとつたへられてゐる。

一生社會の虛僞を呪ひつゝ、憎みつゝ、疑ひつゝ、憤りつゝ終始したストリンドベルクにもやさしい母性へのあこがれがあり、さらに自然への歸依があつた。山の上の木の下に葬つてくれと頼んだストリンドベルクの最後の言葉は

わたくしをしてさらにモンテーヌの言葉を思ひ出させる。

「わたくしは人間よりも木を愛する！」と。

人を愛し、人を憎み、人を憤り、人を信じ、人に絶望する者の最後に還りゆくところは自然である。自然は人を憎まない。人を疑はない。自然はいつも人を拒まない。

自然はモンテーヌの魂をも、ストリンドベルクの魂をも靜かに受け容れた。いかなる懷疑者の魂をも、いかなる人生否定者の魂をも自然は靜かに相抱く。

空を飛ぶ鳥はやがて梢に還る。われ〳〵にとつても必ず最後に還らなければならぬ安住の地がなければならぬ。哲學の究竟、あらゆる思惟の歸趨は自然そのものでなければならぬ。

そも〳〵自然に親しみ、自然に懷かれて生きんとする心は、歪曲せられたる自分の魂を矯め直すことによつて素直なる人生の相を見んとするところから生まれて來るであらう。曇らされた自分の心眼に磨きをかけることによつて、あるがまゝの人生の相を觀んとする思念から生まれるであらう。

近代の機械文明、都市文明の生活は恐ろしく人間の判斷力や觀察力を歪にしてしまつた。素直なものを素直に觀、素直に表現することをもつて常套であるとすら考へるやうになつた。近代の都市文明のそも〳〵の構成要素に無理がある。不自然さがある。したがつて、その喧騒溷濁の裡に生長した魂はいたましいほどに捻ぢ曲げられてゐる。都市生活者が何等かの激しい刺戟から刺戟を求むることによりてのみ生存の意義を見出さうとしてゐるのはいかにも氣の毒なことである。

近代の刹那主義者にいはしむれば「人生は幻の連鎖である」。一つの幻から一つの幻へと結びつけられてゆくにすぎない。このあきらめにも似たる悲しき人生觀に依りてかれ等は辛うじて人生を肯定してゐる。かれ等の人生の觀方は

たしかにいたましくもへし曲げられた近代都市生活者のそれである。

歪に曲げられた魂を尙一度素直なものにあらためなければならぬ。素直な魂を持つて人生の眞の相を見るために。

すべての物の判斷は卽き過ぎることを避けなければならぬ。判斷する者と、判斷さるゝ物との間に適當なへだたりを置くことを忘れてはならぬ。都市人的人生の觀方はこの大切なへだたりを忘れてゐるがゆゑに、正しい人生の批判を摑むことが出來ない。われ／＼は時々、あわたゞしい世相から一歩離れて生きる必要がある。自然を通して人生を思惟する必要がある。

自然に親しむ心のうちには、ものゝ正しき觀方、正しき感じ方がいつも根諦となつて動いてゐる。わたくしたちが自然をあこがるゝ時、自然に還らんとする時、そこには必ず靜かなる反省が潜められてゐる。靜かにして正しき批判や感じ方が動いてゐる。物と批判者との間に適宜のへだたりが横たへられてゐる。哲人的な冷靜さ、透徹さが喚びさまされてゐる。

最も端的な生き方、最も刹那的な、耽美的な生活にあこがれたかのごとく想像せらるゝ近代耽美派の父ウオルターペータアの哲學の根柢は實は物の見分け（アップリシエーション）にあつた。正しき靜觀にあつた。その末社の徒輩のみが刺戟に生き、感覺に生きんことを欲したのであつて、ペータアかれ自身はいつも綠色のカアテン、綠色の壁紙、綠色の卓子掛につゝまれて靜かな瞑想の生活を送つた。

わたくしたちが深さに於いて生きんとすればするほど、わたくしたちは刹那的な刺戟や感覺を避けなければならぬ。人生についての正しい判斷を持ち、人生についての正しい感じ方を感ずるためにはわれ／＼は先づ人生を一度突つ離して見なければならぬ。わたくしたちは時折祈禱室へかけこむ必要がある。自然はわれ／＼に正しい判斷と正しい感

じ方をあたへてくれるところの祈禱室である。

自然に親しむ心は都市生活への反逆である。正しき批判である。正しき言葉の發見である。嬰兒の心の發見である。

いざ共に穂麥喰はんくさ枕（芭蕉）

一生旅から旅をへめぐり歩いた芭蕉のこの言葉はいつもわたくしたちにかれの子供らしさを思ひ出させる。何といふかざりのない言葉であらう。何といふ親しみのある言葉であらう。いかにも生活を享樂する自然人の言葉である。そこには社會的な何等の束縛も、見榮もない。空を飛ぶ鳥の生活の如く自然な生き方である。風の吹くがごとく自然な生き方である。春日の照るがごとく暢然たる生き方である。

わたくしたちの現在の生活はいかにも窒息しさうな生活である。これが眞實な生活法であるとは信ずることはできない。

子供たちは草に親ね、草の上に歌ふ。子供たちは土にまみれ、土に寢ねて、太陽を仰ぎ、微風に吹かれては踊る。草も、太陽も、微風も、地平線もすべて子供等のものである。

子供等はいつも大人よりは賢い。せめて白い雲を、遠い山脈を、青い空を、窓から吹いて來る微風をわたくしたちのものとして生きて行きたい。この息苦しい大都會の窓にも時として白い雲が飛び、星がまたゝき、遠い山の姿が蒼然として映る。われ〳〵はそれを樂しまうではないか。もし微風をも青空をも樂しむことができないといふ人があるならば、その人の魂はすでに歪曲してゐるのだ。

伊豆の山には時鳥が啼き、鶯が鳴いてゐる。七月の天城には白い雲がかゝつてゐる。
水戀といふ鳥は多く雨催ひの日に鳴くが、このごろの天城ではほとゝぎすよりもあはれに聽く。

春還れり

お正月が來る。かういつたばかりでも子供時代のことを思ひ出す。わたくしたちの子供時代からくらべると、このごろはすべてが略式になり、ぞんざいになつて來たが、それでもお正月といふ氣分は捨てられぬものである。何となしにうれしい。たゞそれだけの感じであるが、そこには掬みつくせぬほどのなつかしいものがある。若水を掬むといふ氣分。たゞそれだけの朝のいとなみだけでも、わたくしたちの魂をすつかり淨め、よみがへらせてくれる。

わたくしは除夜の鐘を聽くことが好きである。

一年のうち一番あわたゞしい筈の除夜に、靜かに打ち出される除夜の鐘を聽いてゐるといかにも佛教國に生まれたありがたさを思ふ。寒空を靜かに鳴りひゞく除夜の鐘を聽いてゐるとわたくしたち自身の魂までもが悠久の世界へ還つてゆくやうな氣がする。

除夜はたしかに聖夜である。靜かに思ふべき夜である。靜かに念ずべき夜である。一切の雜念を排して、神に額ずき處に居りて默默すべき夜である。

大きな過去の一年が永久に步みゆく嚴かな跫音を聽くべき夜である。

風が吹いてゐる。訴ふるがごとく、泣くがごとき餘韻をのこして空を吹いてゐる。

たしかに偉大なるものゝ去り行くわびしさである。すべての藝術、宗敎にも見出すことのできぬほどの偉大なる跫音を空に聽く。

死はいづれの場合にも悲しいものである。しかしながら偉大なる死の前にはわたくしたちは靜かに頭を下げなければならぬ。偉大なる死をして靜かに眠らせなければならぬ。

わたくしは除夜の靜けさと嚴肅さを愛する。そこには靜かに過ぎゆく偉大なるもの丶跫音が遠ざかりつ丶ある。と同時に靜かに近づき來る新たなるもの丶よろこびと光りと希望とが感じられる。

人生のすべてのものは明暗と生死の境を縫ひつ丶すゝんでゐる。除夜の嚴肅さは生死の二つの世界を最も端的に覺感するところにある。

過ぎゆくもの丶尊さ、新たに生まれ來るもの丶尊さ。わたくしたちは過ぎゆく偉大なる跫音に對して心からの惜別の情をさ丶げなければならぬ。同時に新たに生まれ來る偉大なるものに對して心からのよろこびをさ丶げなければならぬ。

春の心ほどほがらかなものはない。

山も川も、雲も空も新たに生まれた。

春なれや名もなき山の薄霞（芭蕉）

いかにも春といふ心に生きて見れば名もなき山も、新たなる光りにつ丶まれてゐるやうに思はれる。

面を吹く風までもが春の心にはなつかしく思はれる。

春が來たのだ！　たゞさう思つたゞけでも山もありがたく、川も尊く、波の音もうれしく心に映つて來る。

凧を揚げる子供等も羽子をつく娘等も尊きものに思はれる。

誰も彼れもが普段とはかはつて美しく、幸福さうに、善良さうに見える。たしかに人の顏はかゞやき、人は生くる

ことの幸福を感じ、人は嬰兒に還つて生きてゐる。

そこにはイヷンの國の生活がよみがへつてゐる。

人生とは何であるか。いつもわたくしたちの哲學的な或ひは藝術的な考への究竟はこゝを目あてとして歩いてゐる。わたくしたちの生活が深められるために、わたくしたちは絶えずこの哲學的な或ひは藝術的な考案を忘れてはならぬ。哲學或ひは藝術は人生について究竟の解釋を與へることはできないであらう。しかしながらわたくしたちは失望してはならぬ。わたくしたちが眞面目に人生について哲學的な、或ひは藝術的な思惟を怠らないならば、わたくしたちはかならず昨日よりも一層深い人生を直感することができる。

人生は無限である。無限の深さを持つてゐる。眞面目に人生の相について思惟する人々は一日一日と人生の深さに於いて生きることのありがたさを感ずる。

哲學或ひは藝術といへばはなはだむつかしい問題のやうに思はれる。たしかにむつかしい學問であるにちがひない。しかし哲學にしろ、藝術にしろその究竟の目的は人生についての眞面目な思惟である。それゆゑに絶えず人生について親切な考案を持つ人は立派な哲學者であり、藝術家でなければならぬ。

もし所謂哲學或ひは藝術研究者にして、眞面目に親切に人生を見ることをしないならば、かれ等は決して哲學者でも、藝術家でもない。

わたくしたちは人間であることのほこりを持たなければならぬ。眞に人間であることは哲學者であることよりも、藝術家であることよりも尊い事であり、第一義的な事である。

哲學といひ、宗教といひ、或ひは藝術といひ、要するに人生に徹して絶えず思惟することの機會をあたへるものでなくてはならぬ。人生についてさらに深く思惟すること、考ふること、それが哲學であり藝術である。すべては眞人

間であることが根本義である。利休がいつたやうに「茶とは茶を立てゝ飲むことなり。」それが茶道の奥義であるにちがひない。しかし茶をたてゝ飲むといふことは何でもないことのやうに思はれるが、その何でもないことが實はまことにむつかしいことである。茶の眞實の味を感じ、水の眞實の味を知るといふことはなか〳〵容易なことではない。そこには最も親切な心が動かねばならぬ。最も靜かな心が生きて來なければならぬ。最も深い心が眼をさまさねばならぬ。

人生とは生きてゆくことである。生きて笑ひ、怒り、泣き、苦しむことである。たゞそれだけのことであるが、眞實に人生の味に徹して生きるといふことは容易なことではない。しかしながらわたくしたちはともかく人生に徹して人生を思惟するだけの精進を持たなければならぬ。

淡々たる水にも味はへば味はふほど深い變化があり、醍醐味がある。淡々たる水を掬んでそのなかゝら醍醐味を感ずるのが茶道である。うまさではない。味である。寂である。無の味である。悠久の味である。悟りである。

人生を生きて、人生に徹して、わたくしたちは人生の味を感じなければならぬ。人生の寂である。深さである。悠久である。人生の醍醐味である。それが眞人間の生き方である。

人生を思惟する心はいつも澄んでゐなければならぬ。春の心のごとくほがらかでなければならぬ。

芭蕉は俳諧の奥義をたづねられた時「子供等のなすところを見よ。」と敎へた。

人生を思惟する心も亦子供等のそれでなければならぬ。そこには何の衒ひも、誇示も、自惚もあつてはならぬ。素つ裸な心で人生を考へなければならぬ。素直な心で人生を觀なければならぬ。

もしわたくしたちの魂が歪んでゐるならば、そこに映つて來る人生の姿もいびつでなければならぬ。

釋迦が九年も十年も雪山に入つて結跏趺坐の行を積まれたのも釋迦自身の魂を素つ裸にし、嬰兒のごとくするため

であつたであらう。苦行また苦行をかさねてつひに涅槃の域に達した釋迦が、たまたまかれの腕に巣喰うてゐた一羽の燕が還つて來なかつたのを案じ悲しんだといふ話は尊い釋尊の心をしのばせる。

一羽の燕が死なうと、還るまいと、そのやうなことには無關心なのがたいていの大人のすさび果てた心である。釋尊はたゞ一羽の燕をも悲しむほどのやさしい心をもつてをられた。その心こそ子供等の心でなければならぬ。子供らは小鳥を愛する。犬を愛する。そして小鳥が死に、犬が死ぬとき心から泣くことを知つてゐる。子供らの心はたゞちに涅槃の心である。

わたくしたちはいつまでも子供の心を失つてはならぬ。子供たちにとつては山の風もうれしく、日の光りも尊い。人は成長するにつれて山の風のうれしさを忘れ、日の光りのありがたさを忘れるやうになる。自然に對しても魂の感覺が痲痺して來る。

うるはしき自然につゝまれながらもうるはしき自然を感ずることができなくなる。かれは自ら日夜自分自身の魂を牢獄につなぎつゝある。

新たなる年が生まれる。たゞそれだけの聲を聽いたゞけでもわたくしたちの心はよみがへる。若水を掬むだけでもわたくしたちの心は嬰兒にかへる。わたくしたちの魂を神々しい朝風によみがへらせねばならぬ。

雪の山をながむればそこにも春はよみがへつてゐる。

名もなき雜木林を吹く風にも春は立ち還つて來た。

わたくしたちの心に、先づ嬰兒のごとき素直さをとりかへさねばならぬ。

けさは風も日の光りも雪もすべてが嬰兒の世界によみがへつてゐる。

詩の心

詩を持たぬ人の生活ほど膚淺なものはない。
詩とは文字の上にあらはされた或ひは文學上の所謂詩のみを指していふのではない。
詩とはすべての生活表現の根柢的要素を意味する。生活に於ける詩とは、生活の背景をなすところの最深所を指ざすのである。
詩はすべての表現の基調であり、生命であり、光りである。力である。
詩は無限そのものゝ端的な表現である。わたくしたちは悠久そのものゝ相については知ることができない。しかしながらわたくしたちは、或る機會に、或る機緣によつて刹那的に悠久そのものゝ相を觀ずることができる。その刹那的な觀照の世界に映つて來る實在の相を實感するものは詩である。
哲學にも散文にも詩がなければならぬ。言ひ換ゆれば哲學者も小說家も、美術家も詩人でなければならぬ。何故なれば詩はすべての人間の行爲の最深所に生きてゐるものだからである。
眞に生きんことを欲する人間はすべて詩人でなければならぬ。詩人はいつも最深所を目あてとして生きるものであるから。
詩は神の心である。最も淨化された人間の心である。詩を持たぬ人間は俗人である。
わたくしは詩を持たぬ哲學を憎む。詩を持たぬ文學を憎む。詩を持たぬ詩を憎む。詩を持たぬ俗人の生活を悲しむ。
學問をするといふことは大切なことである。しかし學問がたゞ單に功利的な考へにのみ支配されてゐるならば、その

學問は尊敬せられることはない。それは俗人の學問である。

醫學も法學も詩を持つてゐなければならぬ。でなければそれは俗人の學問に墮してしまふ。

勤勉な農夫の生活にも詩はある。否、勤勉な農夫こそ最も詩にめぐまれた生活を持つてゐる筈である。かれは誰よりも自由である。かれは誰よりも日の光りと微風と靑空と小鳥の囀とをめぐまれてゐる。かれは誰よりも大地そのものをめぐまれてゐる。

俗人にとつては日の光りや微風や靑空は何でもないであらう。それらのもの丶眞の價値を知る人にとつてはそれは高い塔や都會の美よりも、もつと深い本質的な美を持つてゐる筈である。

一莖の草の葉のゆらぎにも詩はある。嬰兒の微笑にも詩はある。

これらの不可思議な詩を見出すことのできないのは、その人の心が曇らされてゐるからである。

詩人は最も澄んだ心の所有者でなければならぬ。

詩人は嬰兒の魂を持つた者でなければならぬ。

詩人は樹の葉のそよぎに神の言葉を聽くことのできる者でなければならぬ。

最も澄んだ心を持ち、嬰兒の心を持つた人間でさへあるならば、かれは立派な詩人である。文字で表はされた詩を書きつゞるといふことは第二義的な仕事である。一番大切なことは詩人の心を持つといふことである。

たとひ一生たゞ一行の詩をも綴らぬ農夫の中にも立派な詩人はあるべき筈だ。

立派な哲學者、立派な學究、立派な工匠、立派な農夫はみな詩人である。

詩人はその生活に對して、或ひはかれをめぐつてゐる自然のすべての表現に對して最も親切な心を持つ人でなけれ

ばならぬ。

人生そのものに對する親切な心を措いて他に詩の心はない。

わたくしたちは偶然にも、一つの人生といふものを賦へられた。この無限絶對の人生についてわたくしたちは果してどれだけ思ひを潜めたことがあるか？

たとへば生まれるといふことについて、生きつゝあるといふことについて、或ひは死といふことについてどれだけ眞面目に人生を考へたか？

或ひは生活の上にあらはれ來る色々な生活の相について、たとへば友情といふことについて、愛といふことについて、憎みといふことについて、苦惱について、歡喜について、どれほどの深さにまで人生を考へたことがあるか？

或ひは親と子の間のいろ〳〵ないきさつについて、友と友との爭ひについて、社會生活の中に見出さるゝ矛盾について、不正について、不合理についてはたして、どれほど眞劍に考へたか？

或ひは今、現在に生きてゐることについて、生を享樂しつゝあることについて、若いといふことについて、日光の快適について、人情の美しさについて、人生のありがたさについて、苦しさについてどれほどまで徹底的に考察したことがあるか？

これらの生活上の諸相について眞劍に、根柢的に考へることのうちに詩がある。

これらのことについて眞劍に考へる人でなければ、人生に對して親切な人といふことはできない。

考へるといふことは苦痛であるにちがひない。しかしその苦痛の中にこそ一層かれを深くし、かれの生活を嚴肅化するところの詩がある。

學問をするといふことの第一の目的はわたくしたちの生活を深くするといふことでなければならぬ。わたくしたち

の生活を厳粛化するといふことでなければならぬ。

俗人と詩人との差は、わたくしたちに賦へられた人生そのものゝ價値を低く見つもるか、或ひは絶對的のものと見つもるかにある。

俗人にとつては、人生はたゞ一つの手段に過ぎない。

詩人にとつては、人生は絶對のものである。

キリストにとつては湖畔の漁夫も神の子であつた。釋迦にとつては一人の無知な人間も佛の化身であつた。

俗人はかれ自ら、自分の人生をきはめて廉價に見つもる。詩人は、全世界の寶にも優つて、かれの魂を高く見つもる。

俗人はかれ自らの人生を廉價に見つもるばかりでなく、宇宙そのものゝ價値をもきはめて低く見つもる。

詩人にとつてのみこの世界は神の國となつてあらはれる。

俗人は物慾と虚僞と排擠の中に生活を苦しみ、詩人は神と偕に呼吸し、神と共に欣ぶ。

詩を持たぬ人の生活は神を見失つてゐる。詩を持たぬ人は、實は、人間の生活を失つてゐるのだ。

人は神と偕に生きることを考へなければならぬ。いつも自分らの生存の最深所について考へなければならぬ。

わたくしたちは永劫の時を通じて、この刹那の生存をのみめぐまれてゐる。實際、人間にとつて、この人生は無限な自然のめぐみである。絶對の機縁である。絶對値の生存である。

この最上絶對の機縁を心ゆくまで感謝もし、實感もするのが詩の心である。

全身の血を躍り立たせるほどに、生きてゐることのありがたさを、感じようとするのが詩の心である。

これほどの突きつめた心で、自然的な思念で、生活に面する眞劍さが詩の心である。

いつも私たちは心を若々しく持つてゐなければならぬ。

嬰兒は木の葉を戰がせる微風にも驚異の眼を瞠る。

わたくしたちは生活の諸相に對して、自然の一つ一つのあらはれに對して、いつも嬰兒が感ずるやうな驚異を感じなければならぬ。

わたくしたちはいつも人生に對して燃ゆるやうな熱心さを持つてゐなければならぬ。生悟りであつてはならぬ。死ぬ日まで人生に對する眞劍な努力を失つてはならぬ。

人生に面するわたくしたちの心はいつも無邪氣な若者でなければならぬ。いつも處女でなければならぬ。

若者はよく笑ひ、よく泣き、よく憤り、よく躍る。

人生に對してわたくしたちはいつまでも正直に笑ひ、正直に泣き、正直に憤り、正直に躍らなければならぬ。

詩人の心はそこから生まれて來る。

人間は年をとるにつれて自然に魂の美しさを曇らされ易い。或る者は社會的空名に、或る者は富といふものに、或る者は權勢に、自分の魂の美しさを賣つてしまふ。

靑年のみがいつも人間の魂の美しさを保つてゐる。老いてもなほ靑年の魂の美しさを保つことのできるものは詩人である。

わたくしはこのごろ仕事の必要から西鄕南洲を少し研究した。西鄕はまつたく世界の史上にも稀な偉大な人であつた。かれの偉大さはどこにあつたか？　わたくしはその嬰兒のやうなかれの無邪淸淨な心であつたと思ふ。「名も欲しくない、命も欲しくない。」といふかれの一氣な心熱にあつたと思ふ。かれこそ立派な詩人であつた。

かれは詩人であつたがゆゑに、靑年の美しい魂を持つてゐたがゆゑに、一萬五千の靑年たちと共に美しく死ぬこと

ができた。

どれほど長く人生を生きのびたかといふことは第二、第三の問題である。どれほど美しく人生を生き得たかといふことが、第一義的な問題である。

秋ちかし

盂蘭盆が來れば子供のをりの習慣からかもう秋が來たやうな氣がしてならぬ。わたくしたちの子供のころは田舍ではあるし、何も彼も陰暦で營まれてゐたので、無論お盆になれば草山には萩だの女郞花だの桔梗だのといつた風な秋草が咲きみだれてゐた。夜になれば天の川がいかにも鵲のわたせる橋といふ古人の形容を裏切らぬほどに白く澄みわたつてゐた。

季節の變化はどうしても田舍にゐる人ほど强く感ずることができる。秋になつてもこのごろのやうな煙の多い東京ではほんたうな天の川を眺めることはできない。あの大地震の秋だけは地上のすべてのものが破壞されたので、東京の空もいつになく美しかつた。恐らく江戶時代にはあれ以上の美しい空をしてゐたであらう。廣重の繪に描かれた江戶の空を見るとほゞ當時の空の色が想像される。

いまに石炭を使用することがなくなつて全然電化される時代が來たら空の色はふたゝび澄んで來るかも知れないが、今のところ東京に住んでゐる人たちはほんたうな空の色を知ることはできない。不幸なことである。

秋がちかづいて來たことで尙一つ感じるのは風の觸りである。風の音である。

秋を知らせる風の觸りはまた格別である。この秋近きころの風の觸りだけは東京は特になつかしいやうに思ふ。武藏野といふものを控へてゐるせゐか、ともかく東京の秋風の感じは特別であるやうに思ふ。根岸、日暮里あたりの忘れられたやうな路地裏に木槿が咲き、向日葵がかゞやいてゐる。そこにも武藏野特有の秋の風が吹いてゐる。

二三年前の立秋の朝わたくしは京都の六條あたりを步いてゐたことがあつた。

建仁寺僧堂の托鉢僧たちがおうおうと經を誦みながら五條の大橋をわたつて來た。いかにも京の秋らしい感じであつた。いまでも忘れることができない。

わたくしはその日木津川をさかのぼり伊賀上野に芭蕉の故郷塚をたづねたことがあつた。木津川に沿うた大和伊賀境の山村はいかにも繪畫的な落ちつきを持つてゐる。他にあまり類のないほどな感じのいい村々が山を負ひ川に沿うてつらなつてゐる。國境の山には殊に桔梗が美しく咲いてゐた。

義虫庵の濡れ縁に腰を卸してじつと秋の聲を聽いた心持ちは恐らくいつまでもわたくしの胸に鏤みつけられてゐるであらう。秋風の吹くところでさへあればどこの山もどこの川もいゝ。

奈良もいゝ。高野もいゝ。信濃もいゝ。

月寒の大陸的な牧場の秋はさらにいゝ。牧草に埋もれて默々として羊を見まもつてゐる牧童の姿はすでに秋そのものである。とりわけてわたくしは武藏野の玉蜀黍畑の秋風を愛する。

谷中日暮里あたりの忘れられた路地裏のかすかな秋草と秋風とを愛する。

「笹の雪」がまだあの小ひさな流れに沿うて昔のまゝの店であつたころは毎朝のやうに喰べに行つたことがあつた。入谷の朝顔もまだのこつてゐた。あのころはわたくしはまた二三日置きに千住大橋まで出かけて行つて橋の上をわたつて來る草花賣りなどを眺めたものであつた。

千住大橋から眺めた葛飾の一面の葦の原は秋風のころは涙が出るほど好いものであつた。

あのあたりの葦の原も追々と失はれてゆく。さびしいことである。

だが白い雲だけは今でもなほ取りのこされた葦の原の上に悠々として漂うてゐる。

童心童眼

人間といふ自分自身の姿、自分の心の姿を靜かに見つめるといふことは、わたくしたちの生活にとつて最も大切なことである。たいていの人々は日々夜々のはげしい勤めのために自分自身の心の姿をじつと見つめる機會といふものをあまり持ち得ないやうである。またそのやうな機會を持たうと心がけてゐないやうである。

今日ではほとんど繪の上のコンヹンショナルな構圖になつてゐるが、古い傑れた作品のうちにわたくしたちはよく一羽の白鷺が水のほとりにつくねんと佇んで、自分の姿を水に映して眺め入つてゐるのを見る。繪畫上の單なる構圖としても面白い古雅な味のある形である。限りもなく廣い靜かな水の上には何一つさへぎるものもない。そこには何もない。空無の世界のみがひろげられてゐる。その何もない空無の世界の眞ん中にたゞ一羽の白鷺のみがじつと靜かに水の上の一點を凝視してゐる。絕對無の境に置かれた、たゞ考ふるところの一つの存在である。

から考へて來ると一羽の白鷺の圖もなかなか味のある聯想をあたへてくれる。われわれ個々の人間は一つの考へるところの存在である。絕對無の境に置かれた一羽の白鷺である。あのたゞ一羽の白鷺が水のほとりに佇んでゐる姿には何となしに尊い味がある。と、同樣にたゞ一人靜かに自分の心の姿を見つめてゐる人々の生活にも尊い味がある。歌を詠むこと、俳諧をたのしむこと、繪を書き、音樂を聽くこと、すべての藝術なり、哲學なりを味はふといふことも畢竟は靜かに自分の心の姿を見つめたいがためである。

たとへば一叢の蘭の葉を描くとする。墨の濃淡、筆の勢にもその刹那の自分自身の心の姿があらはれて來る。お茶を立てるとする。一碗の茶の味の中にも自分の心の影がはつきりと映つて來る。ピアノの前に腰を卸して鍵を打つ。

たゞ一つの音階にも自分の心臓の脈搏が傳はつて來る。自分の心が曇つてゐる際にはピアノの音が曇つて來る。
　わたくしたちの心には形はない。けれども心の内のひらめきはいろ〳〵な形となつて外部にあらはれて來る。その外部にあらはれて來たいろ〳〵な尊い形を通してわたくしたちは人間の心の尊さ、深さ、ありがたさを想像することができる。ベートーヴエンの音樂を聽く時、或ひは近松門左衛門の作品を讀む時わたくしたちはたしかに人間の心の深さについて、嚴肅さについて、高さについて、或ひは寂しさについて考へざるを得ない。そこにはわたくしたち自身の心の姿の深さも、嚴肅さも、あはれさも、尊さもそのまゝに映し出されてゐる。
　人間が生きてゐる意義を人類全體の幸福のためであるとか、神の攝理のためであるとか、かういつた風にきめてしまふ人がある。たしかにさうであるかも知れない。もしそれで滿足できる人はそれで滿足するがいゝ。けれどもこのやうな人生の見方はやゝもすればあまりに大ざつぱな摑み方に墮ち易い。疎雜である、あまりに頼りどころがない感じがする。偉大な人、偉大な宗教家といふやうな人にはそのやうなさとりもできるであらうが、もと〳〵凡夫下根の身にはそのやうなさとりはなか〳〵できさうもない。釋迦のやうなえらい方でも發菩提心の原因は老病死苦のなげきにあつた。老病死苦のなげきはつまりわたくしたち凡夫下根のなげきそのものである。何ゆゑに人は老い、人は病み人は死するかといふなげきはわたくしたちを驅つてしづかに人間の運命について考へさせる。人間の心の姿を見つめさせようとする。釋迦の結跏趺坐の苦行は要するにわたくしたちが靜かに自分の心の姿を見つめようとする努力に過ぎない。わたくしたちは山にこそはいらないが、日々夜々人間の病について、老いについて、死について考へ、恐れをのゝきつゝある。
　この老いを悲しみ、病を恐れ、死を恐れる心、これが人間の自然の心である。自分は老いも病も死も恐れないといふのは嘘である。わたくしは平氣でそのやうなことをいふやうな宗教や或る種類の修養法を輕蔑する。恐れるがゆゑ

に生について考へる。死について考へる。人間の運命を、人間の心の姿を見つめようとする。菩提の光りを求めようとする。無理に自分の心をかたくなにして病も恐れない、死も恐れないといふのはすでに心が堅い殼につゝまれてしまつてゐるからである。死を恐るゝがゆゑに、死を悲しむがゆゑにわたくしたちは生きてゐる現在のありがたさを心ゆくまで味はひたいと思ふ。

わたくしたちは生まれる時一文の値をも拂ふことなくして生まれて來た。

しかもわたくしたちはそこに値踏みすることのできないほど尊い人間の心をめぐまれて來た。そこにはまた一文の値を拂ふことなしに太陽をめぐまれ、微風を、鳥の聲を、雲の色をめぐまれ、青空をめぐまれてゐる。生きてゐる間に、わたくしたちは自然によつてめぐまれた太陽と、青空と微風と鳥の聲と波の音と夕燒の色とを貪りつくすほどの心で味はつて見たい。西行といひ芭蕉といひ一生を家もなく送つたのはそのためではなかつたか。かれ等は家をも土地をも持たなかつた。しかし吉野山の櫻も、石山の月も、鳴立澤も、象潟の合歡の花も日本國中の山も川も西行のものであり、芭蕉のものであつた。すべてのものを捨てゝ天地といふもののふところに一身を委ねてしまつたからである。

わたくしたちは芭蕉や西行のやうに家を捨てゝ自分ひとりで歩いてゐるわけにはゆかないかも知れぬ。しかし心持ちだけは眞似て見たい。殊に目まぐるしい近代の都會生活を送つてゐる人々にとつては一層この心がけは必要なことであると思ふ。

數年前である。わたくしは二ケ月ばかりいろ〳〵忙しい仕事のために夜も晝も追ひまはされてゐたことがあつた。或る秋の夜であつた。わたくしはそのころ勤めてゐた或る場所から夜ひとりで暗い夜更けの町を歩いて來た。わたくしは不圖空を見上げた。そこには無數の星が爛旰とささやいてゐるのであつた。

わたくしはその時、あゝ姿があつた、星があつたといふことを今更のやうに感じた。わたくしたちの都會生活はそれほどまでにわたくしたちの心を不具なものにしてゐる。

七八年も以前のことであつた。わたくしは一度大井の奥に友人をたづねたことがあつた。五月ごろで、さんざしの花が咲き、麥の穗が丘をうづめてゐた。その時不圖秋の時雨でも聽くやうな靜かた音を立てゝ雨がさつと降つて來た。わたくしはその時一枚一枚の葉の面を打つて行く雨の音を聽いた。何といふしづかなものわびしい音であらう。たしかにわたくしは十年以上もその雨の音をわすれてゐたのであつた。

わたくしたちのあわたゞしい都會生活はこのしづかな一枚一枚の木の葉の上に落ちてゆく雨の音を聽くことをすら忘れさせてしまつたのである。

わたくしたちの魂の上には二重にも三重にも殼が被せられてしまつてゐる。だからよほど強い人工的な刺戟でなければ大抵の場合感ずることができなくなつてゐる。一つの刺戟からさらに新らしい一の刺戟へと追ひ求めることによつて生きてゐるのが現在の都會生活である。

だから藝術にしても先づ官能に訴へるところの技巧の多いものが受け容れられ易い。魂に訴へるものを嚙みしめ味ふだけの落ちつきを持つてゐない。

しかし、神は靜かなるところにのみ來るといつた哲人があるが、神がわたくしたちに近づいて來る時はきはめて低いしづかな跫音でやつて來る。餘程心の面を平靜に保つて、一滴の露の落ちてゆく音にも、一枚の木の葉の落ちて行く聲にも氣をつけてゐなければ神の跫音を聽くことはできない。

夜明け方の湖の面を見つめてゐるとさゞ浪一つ立てゝはゐない。あの夜明け方の湖水の心が必要である。夜明け方の湖水は波一つ立てゝゐないがゆゑに東雲の美しい雲の色をも映し、姿なき微風の姿をも浪の上に感ずることができ

るのである。一葉落ちて天下の秋を知るといふが、一枚の木の葉の落ちる音にも、一片の花びらの落ちる聲にも、自分らの心をすまして聽いてゐるならば神の聲はある筈だと思ふ。

花を愛することのできない人間は俗人である。一株の木を愛することのできない人、小鳥の鳴く音に心をすますことのできない人も俗人である、あの黒い冷たい何のかざりもない塊の中から可憐な一莖の花が咲いて出るといふことたゞそれだけの事實のうちに驚嘆すべき或物があるのではないか。わたくしはどのやうな學者であらうと、宗教家であらうとも、もしその人が夜の空にあこがるゝことを知らず、一莖の草花に見入ることをせず、一枚の草の葉に驚きを感ずることをしなかつたとしたら、そんな人を尊敬しようとは思はぬ。この世界に親があり、子があり、妻があり、友人があり、さらに雲があり、草の花があり、靑い木の葉やさゝやかな雨の音があるといふだけで、もうわたくしたちの人生はめぐまれてゐるのではないか。死ぬことは悲しいが、わたくしたちはこのやうなめぐみをかつて持ち、現在持ちつゝありといふことを考へたゞけでも生まれたことを感謝しなければならぬ。

饒舌な人と半時語つてゐるのはずゐぶんつらいものである。そして何も得るところはない。緣日で買つて來た廉い一鉢の花とならば一日對坐してゐても飽きはしない。何ともいへぬ心のよろこびを見出す。芭蕉は俳談の他談ずべからずと言つた。わたくしたちはできるだけ沈默を守つてゐたいと思ふ。そしてもつと〳〵親切な眼で人生を、自然を、觀たいと思ふ。おしやべりをしてゐる間は、心は眠つてゐる。

哲學といひ、宗教といひ文藝といひつまり親切な眼で人生なり自然なりを觀るといふことに他ならぬ。人の悲しみに對しても、苦しみに對してもわたくしたちはやゝもすれば親切さが足りぬ。七十歳か八十歳で死んだ人の子に對しておめでたいといふやうなことを平氣でいふ、しかしその子になればまだ百までも百二十歳までも親を生かして置きたいのである。萬人の心を持つといふことはよほど親切な人でなければできないことである。

わたくしはこのごろ庭の山茶花が疲れて來たので郊外の麥畑へ植木屋に頼んで植ゑかへてもらつた。麥畑へ行つて山茶花を見ると驚いた。幹も葉も眞つ黑であることに氣付いた。今まで庭前に置いてゐる間は山茶花の幹が、自然の色を失つてゐることに氣付かなかつたのである。わたくしたち都會生活者の心もまたこの山茶花のやうに煤にけがされてゐるところがないか。わたくしたちの嗜好や趣味は不健全になつてはゐないか。

田舍に住んでゐる少年たちは山の水のうまさを知つてゐる。土の香のなつかしさを知つてゐる。わたくしたちは都會に住んでゐるがために人工的ないろ〳〵な刺戟は持つてゐるが、山の水のうまさも、土の香のなつかしさも、山の空氣の感觸も忘れてしまつてゐる。不具の生活に生きてゐるがゆゑに不具の刺戟をもとめてゐる。

わたくしは庭に雀のお宿を拵へてゐるが、今丁度子雀が巣立つたところなので、毎日米をたべに子雀が集まつて來る。大きな雀はどうも人を疑ふので、二三粒たべては飛んで行つてしまふから大きな雀だけではなか〳〵米は減らない。子雀はまだ人を疑ふことを知らないので米を入れた笊の中へ四五羽づゝはいりきりになつてたべてゐる。だから子雀が來るやうになつてから米の減りかたが倍以上である。しかし子雀の何ものをも疑ふことを知らぬ風を見てゐると實にいゝ心持ちである。

わたくしたちの世界にもかつてはあんな時代があつた筈である。あゝいつた世界がどうかわたくしたちの社會にもとりもどされなければならぬ。

わたくしたち自身の生活からあの童の素直な心をとりもどす必要がある。童のやうに悲しいことを悲しみ、うれしいことをうれしがり、憤ることを憤る人間が一番尊いのである。信じなければならぬものを信ずることが大事である。わたくしたちはこの心を一番多く失つてゐるやうに思ふ。

童の素直な心で人を思ひ、童の素直な眼でものを見るといふ事が、藝術にも凡ての人事にも一番大切であると思ふ。

靜かなる風

迎へ火、送り火、毎年のことではあるが、夕暮れの戸に立ちて苧殼を焚いて佛を迎へるといふ習慣はいろ〳〵な年中行事のうちでも一番情趣の深いものである。去年も十三日の夜は月があり、空が澄んで、風があつた。今年も月があり、空も澄み、風があつたので、千屈菜に水を浸して火の用心をしながら迎へ火を焚いた。今夜こそほんたうに亡くなつた父や母が遠い旅からかへつて來るやうな氣がする。

わたくしたちの生活が何の味もない早からびた功利一遍のものに墮してゆかうとしてゐるのに、このやうな尊い習慣がとりのこされてゐるといふことはいかにもうれしいことである。

草市の夜にませがきをもとめ、盆燈籠をともすころになれば佛教國に生まれたことをありがたいと思ふ。また生きてゐるといふことのあはれさと同時にうれしさをも思ふ。刹那のうちに永遠があるといふやうな哲學上のむつかしい思索は別としても、せめて一日のうちに千日の影を見出すくらゐの親切な、こまやかな心でわたくしたちの生活を味はふ程度のことはしなければならぬ。

動くことのみを知つて、思ふことを知らぬ生活は俗人の生活である。底に徹して自然を觀じ、人生を觀ずるだけの餘裕は持つてゐなければならぬ。動くことは必要である。しかし生活の根柢として靜觀を持たぬ動きは空疎であり、膚淺である。哲學を持たぬ働きは決してその人の生活に光りをあたへはしない。かれはたゞ一生働き、あせりにあせつて死ななければならぬ。

ソロウは一日働いて六日を讀書と瞑想にさゝげるために、できるだけ簡易な森林生活を送つた。一日どれだけの勞

銀を得たか知らぬが、ともかくかれが一日に得た報酬はきはめてわづかなものであつたにちがひない。かれはそのわづかな一日の賃銀を割いて六日の瞑想生活を補つて行つたのであつた。たしかに賢人の生活法である。
ソロウと同じ生活はゆるされないとしてもせめて七日に一日だけは自由な自分の時間と讀書と瞑想とを持ちたい。哲學といひ、文藝といふ。畢竟は人生についての靜かな思惟にすぎない。
人生を思惟することによりてわれ〳〵は何ものをも見出し得ないかも知れない。しかしながら思惟すること　そのことがすでに生活の最高最深の形式である。思惟卽最深の生活である。
神は靜かなる聲音をもつて思惟する者の魂に近づく。あたかも黎明の微風のごとく、黃昏の時雨のごとく。だから思惟するものはいつも靜觀の世界にかれ自身の魂の耳を置かなければならぬ。
天の星はいつもわたくしたちの頭上にまたゝいてゐる。
しかし一週のうち果して幾夜わたくしたちは立ちどまつて空を仰ぐことをするであらう。
椎の葉を吹く微風は夜明けごとに、夕暮れごとにさゝやいてゐる。
しかし一月のうち果して幾度、わたくしたちは朝の微風を、夕暮れの微風を聽くであらう。
わたくしたちは心から生きてゐることのわびしさに泣いたことがあるであらうか。
わたくしたちは心から生きてゐることのうれしさに泣いたことがあるであらうか。
思惟しても思惟しても究めつくすことのできぬ天と地と運命のなかにわたくしを生んだ神に對してわたくしたちは泣くべき多くのものを持つてゐる筈だ。感謝すべきさらに多くのものを持つてゐる筈だ。
わたくしたちははたして大地に跪いて哀訴しつゝ、感謝しつゝ淚をもつて地をうるほしたことがあるか。
秋の風が吹くに、人々は小ひさな暗い窓のなかで灰色の壁に面して坐つてゐる。

秋の雲は白きに、空を仰ぐ人もなく日は暮れてゆく。
「人々よ、もそつと靜かにしてくれ、わたくしは眠りたいのだ。」ミケランゼロはかくいふ。
わたくしたちも、もそつと靜かにして眼をとぢようではないか。
秋の空の靜けさ！
神の跫音の靜けさ！

アカシヤの花

三月の末に東京を立つて伊豆から京都、吉野とめぐり、四月の末にちよつと東京に立ちかへつて來た。そんな風で今年の春は東京の花は一つも見なかつた。旅の疲れをやすめる暇もなく五月の半ばからふたゝび京阪地方を歩いて東京にかへつたばかりで今度は信濃に出かけて行つた。

五月廿四日　沓掛に下りて落葉松のなかの星の温泉に一泊。山櫻がさかりで、八重はまだ蕾である。淺間には雪が殘つてゐる。

宿では炬燵に火を入れてくれた。

炬燵はきらひであるが、八ヶ嶽の雪を見ながら炬燵の馳走にあづかる。

落葉松の芽生えは美しいとは聽いてゐたがいかにも柔かな女性的な感じである。色は翡翠に似て翡翠よりは濕ひがある。

郭公が鳴きつれてゐる。

石楠花はまだ早い。

六里ヶ原に行つて見たいと思つたが石楠花はまだ雪の下にあるといふことを聽いたので止めにした。

去年の夏六里ヶ原に行つたころは可愛い仔馬が別去の茶屋に生まれてゐたが大方どこかに賣られて行つたであらう。

五月三十日　越後から加賀、越前をめぐりてふたゝび信濃を經て東京へかへる。妙高も、日本アルプスもまだ眞白な雪につゝまれてゐる。

白樺の若葉と、その柔かな眞白な幹は春の旅人にとりなつかしいものである。

加賀の日本海の砂丘で見たアカシヤの眞白な花、關や碓氷峠で見たアカシヤの花は忘れがたきものである。奈良の馬醉木の花に似てさらにやさしき花である。さらにわびしき花である。

秋の碓氷の紅葉にもまして、初夏の碓氷の新綠はなつかしいものである。

山藤の花も到るところの新綠の山に見出した。

たゞアカシヤのやさしき、わびしき姿のみが旅人の心に刻みつけられてゐる。

出來るならばいつも春のやうに明るい心を持ちたいと思ふ。往來を歩いてゐると子供たちはよくアスファルトのよを跳び上つてゐる。春の光りのなかに踊りつゝ街を歩いてゐる子供たちを見ると、たしかにこの世界にエンゼルが生きてゐることを否むことはできない。

靑年の憂鬱

子供たちは子供たちであるといふその一事だけで救はれてゐる。いかに太陽がうるはしくかれ等の可憐な瞳の前にかゞやきつゝあるかを見よ。いかに爽かに四月の風がかれ等の柔かな髮を撫でつゝあるかを。

子供たちはよく惡戯をする。しかしその惡戯そのものすらが尊いほどの笑ひと淚とを潜めてゐる。神のごとき無心と無我とを。

子供たちにとつては道ばたのたゞ一莖の雜草の花すらもがかれ等の魂をかきみだすほどの蠱惑をもつてゐる。

子供たちにとつては單調な柱時計のセコンドの音までが何ものかをさゝやいてゐる。

ブリッキで作つた喇叭（ラッパ）を買つてもらつた一夜、夢に喇叭を見、さめて枕頭の喇叭をながめては微笑んだ子供時代をかへりみたならば、誰でもかつては自分の魂のなかにもエンゼルの影が映つてゐたことを思ひ出すであらう。

かつてはたしかに明るいエンゼルの影がわたくしたちの魂に映つてゐた。靑年になるにつれて明るいエンゼルの影がいつとなしに暗くなされて行つた。

憂鬱な日が夜明ける。

ブリッキの喇叭は錆び、セコンドの音は絕えた。空も地も喘ぎはじめる。靑年の憂鬱な日が步み寄る。

かつて獨逸の哲學者ニイチエは靑年時代に伊太利を旅したことがあつた。たまたまアルプスの雪の嶺に立つて萬行流轉の哀感に擊たれて、ほとんど自殺を思つたほどの深い憂鬱に囚へられてしまつたといふことが傳へられてゐる。かの後年力の哲學を論じ、戰ひの哲學を論じたニイチエにしてなほ然りである。

憂鬱は靑年の日の無上の試練である。

四月の微風が吹く、連翹は芽生え、小鳥らは啼くに、何といふ靑年の憂鬱！

春の夜は明くるに、太陽は花の野をかゞやかすに、行々子は鳴くに何といふ靑年の憂鬱！

靑い草の上に倦怠いからだを投げて、空を仰げば白雲悠々。憂鬱はわが魂を蝕喰む。

笑ふ、笑ふ、笑ふ……しかし草の上を響いてゆく哄笑は憂鬱な魂のすゝり泣きではないか。

子供らは笑ふ。エンゼルの跫音が聞える。

靑い草の上に子供らの哄笑。

楡の葉はそよぎ、地はかゞやく。

そこに子供らのめぐまれたる四月の空と曠野が漂ふ。

靑い草の上に靑年らはたゝずむ。

楪の葉はそよぎ、草は薫るに。

靑年らのめぐまれたる四月の憂鬱さ。

かれ等は惑ひ、かれ等は疑ひ、しかもかれ等はなほ遙かなるものを翹望する。祈る。かすかなる吐息。

わたくしは子供たちの明るい心をたゝへる。しかしながらさらに靑年たちの憂鬱な眼をたゝへる。夜と晝のけぢめなく溜息する靑年たちの日を懷かしむ。

憂鬱と溜息はかれ等の貧い魂の試煉である。

かつて夜を徹して泣いたことのない人、かつて夜を徹して人生について思惟したことのない人　人生を悩んだことのない人、かつて人生の憂苦について考へたことのない人……もしそんな人があるとすればかれは俗人である。

わたくしは明るい春のやうな心を持つた子供たらんことを欲する。と同時に眞面目な青年の憂鬱さを欲する。

わたくしたちはあまりに人生について思惟することがすくない。一枚の木の葉の落ちるにすら詩人は宇宙の意味を見出す。わたくしたちの親しい友人が死んだ刹那、わたくしたちはどれほどの深さに於いて驚きと悲しみとを感じたか。どれほどの眞劍さに於いて人生を、死を、思惟したか。

青年のみが詩人たり得る。青年のみが哲人たり得る。かれ等は世間的な雜念から救はれてゐるがゆゑに。

青年よ、その憂鬱な日を悲しんではならぬ。憂鬱の中にこそ詩があり、哲學があるのだ。

心の眼を魂の底に向けなければならぬ。わたくしたちの魂は何を語りつゝあるか。

わたくしたちは靜かに心の世界を歩む魂の跫音を聽かなければならぬ。

憂鬱は弱い心の陰翳ではない。

憂鬱はさらに深く生きんとする強い心の凝念である。眞率な心をもちて人生を如實に感じ容れんとする靜觀である。

子供らの明るい心はたとへば春の草の上の讃榮である。

青年らの憂鬱はたとへば秋の落葉の上の祈願である。

青年よ二つの心を一つの魂にこめて強く生きよ。

春のごとく明るく、秋のごとく靜かに。

春のごとく明るく生き、秋のごとく靜かに人生について思惟しつゝありがたい人生を生きよ。

輪廻の聲

水戀といふ鳥の名は、はじめて伊豆の山で聽いた。他の地方では他の名で呼んでゐるのでもあらう。信濃の落葉松のなかで、わたくしはまた火戀といふ鳥の名を聽いた。

いづれも初夏の雨の日であつた。

水戀の姿を見なかつたので、何ともいふことはできないが、伊豆の山の人の話では胸毛の赤い美しい鳥であるとのことである。

信濃の落葉松のなかで見た火戀といふ鳥もまた胸毛の赤い美しい鳥であつた。啄木鳥と同じ恰好をして梢にとまりことく〳〵と木を啄いては鳴く。恐らく啄木鳥の一種であらう。

伊豆の山で見た水戀と、信濃の山で見た火戀とは、同じ種類の鳥であるか、または異つたものであるか、またわたくしは知らないが、ともかく靜かな雨の日にいかにも水を戀ひ、日の光りを戀ふて鳴くがごとき、纏綿たる餘情をこめた鳴き聲を聽く時、旅人は山に面して語なく、凝心諦觀するのみである。

伊豆の山の水戀、信濃の山の火戀、それが同じ鳥であるか、異つた鳥であるか、わたくしはそれを知らない。たゞ雨催ひの空に惻々として鳴く聲を聽く時、萬法一如、今さらのごとく輪廻する時を思ひ、人生を懷ふ。

去年わたくしは、伊豆の山に水戀を聽き、今年亦わたくしは、伊豆の山に水戀を聽いた。しかもわたくしは、今幾度伊豆の初夏に水戀を聽き得べきか。

去年信濃の山に火戀を聽き、今年また信濃の初夏に火戀を聽いた。

恐らくうたふところの水戀火戀そのものは絶えず滅びゆくであらう。
しかも水戀の聲、火戀の聲そのものは永遠に輪廻して絶ゆることがないであらう。

水戀の聲こそあはれである。
夏の夜明けころ谿をへだて、木立をへだて、扉を叩くがごとく、泣くがごとく、遠ざかりては葦を吹く風のごとく、草を撫つる微風のごとく、忽然として窓下に佇むがごとく、忽然として風に御して澤をへだて、谿をへだてゝ歔欷するがごとくも聽かれる。
黎明の星とともに默し、黄昏の日とともに谿に鳴き、草を走り、夜とともにふたゝび眠る。黎明のさゝやき、黄昏のかなしみ、寂然として明暗の界に生く。

輝かなる五月

かゞやかなる五月の渡し場に立ちて旅を思ふ。
楊柳(やなぎ)の柔らかな葉蔭に、
眞晝時の水のほとりのしゞまを守つて旅人らは憩(いこ)ふ。
白い雲は草の上に這ふ如く、
白い道は、草の中をたゆたふ如く。

かゞやかなる五月の渡し場に立ちて旅を思ふ。
水草は浮き、かすかなる花を、夢の如く守る。
白き夢。思ひなき夢。
雲の如く、微風の如く。
旅人らは山を見てあり。

かゞやかなる五月の渡し場に立ちて旅を思ふ。
生きてあり、けふもまた生きてあり。
かすかなる思ひ、うれたき思ひ

水の面に泛き消ゆるうたかたの如く水の面を覗き思ふ。
生きてあろことのうれしき。
生きてあることのわびしき。
旅人ら楊柳の蔭に眠りてあり。

かゞやかなる五月の渡し場に立ちて旅を思ふ。
水馬の影を追ふごとき、
人の世の思ひ、
人の世のよろこび、人の世のなげき、夢にあらず、現にあらず
老いぬるかた過去をのみ思ふ。
旅人ら五月の草の風に吹かれてあり。

五月のかゞやかたる渡し場に立ちて旅を思ふ。
かつて逢ひし人。かつて別れし人。
すべてわが胸にありて、五月の草の如く懐かし。
逢ふこともうれし。
別るゝこともうれし。
思ひ出の悲しみを抱きて、五月の草を歩めば。

五月のかゞやかなる渡し場に立ちて旅を思ふ。
すゝけたる屋根の一錢蒸汽よ。
間のぬけたやうな汽笛よ。
低い蓬窓よ。
お前は春雨の日にも寂しき旅人を送り、五月雨の日にもわびしき旅人を載せて行つた。
わたくしはお前を見るたびに、
世界の隅にとりのこされたわびしさを思ひ出す。
わびしきがゆゑに、わたしはお前を愛する。
濁つた大川を下る一錢蒸汽よ。

一

五月の窓をかざらん。
雛あり、野茨の花あり、葉櫻の光りあり。
燕來り、窓をかすめうたふ。
わが世よし。生くるものゝ上にめぐみ、太陽はほゝゑめり。
靑き風吹けり。旅人らわが窓を過ぐ。
かれ等みなわが友なり。
五月の微笑につゝまれて。

しとやかなる露あり。
草の徑の夜明けちかし。
野茨は眼さめたるらし。
われ五月の野茨の道をたどりて、わが妹と礦に下りしことありき。
その日より野茨はわれにとりて、うれしきものとなりき。
われ第五月の野茨の道をたどりて、母の御柩を山に送りしことありき。
その日より野茨はわれにとりて、かなしきものとなりき。

いつの年であつたか、
わたくしは大和の平原を歩いてゐた。
麥は熟れ、桑の實は落ちてゐた。
不圖わたくしは夢殿のほとりに、一本の白罌粟を見出した。
不思議にもわたくしは、その白罌粟を忘れることができない。あたかも美しい人にでも逢つたかのやうに。
わたくしはその翌年も、また法隆寺から、麥畑のなかを横切つて、同じ徑を歩いた。
しかしわたくしは、もう白罌粟を見出すことはできなかつた。

日本橋の交叉點で、わたくしは品のいゝ一人の老媼が、足袋はだしで、風呂敷包みを背負つて、泣いてゐるのを見

た。五月の太陽は、老媼の白髪の上にかゞやいてゐた。
「これが人生の相なのか？」
わたくしは、青い空を仰いだ。
憂鬱な午後の光りが、煙の中に溶けてゐた。五月の太陽よ。五月の微風よ。
わたくしの胸は、空虚なる殿堂のごとく寂しい。

抱月先生を思ふ

今でもじつと眼をつむつてゐると先生のあのスキートな靜かな聲がわたくしの耳に刻みつけられてゐる。ちよつと聽いたところではたしかに靜かな聲であり、弱々しい聲であつたが、實はその底に動かすことのできない信念の力強さが潜んでゐると思はれるものであつた。いかにも寂のある澄みきつた聲であつた。先生の頭が萬人に勝れて明晰であつたやうに、その聲は一點の曇りもないものであつた。

先生の聲とともに忘れることのできないものは先生の眼であつた。眼は大きい方ではなかつたが、いかにも山の湖を聯想させるやうな寂しい、親しみある眼であつた。じつと一つの點を靜かに凝視してゐるやうな眼であつた。たとへば秋の雨をみつめてゐるやうな落ちついた、思ひやりの深い眼であつた。

わたくしはその親しみのある、寂しい先生の眼を敎室で見た、先生の書齋で見た、文藝協會で見た、神樂坂の藝術座で見た。新富座の舞臺裏で見た。先生の聲とともにわたくしは生涯先生のあの寂しいあたゝかな眼を忘れることはできないであらう。

先生は才子多病のたとへに洩れず、あまり健康ではなかつたやうに感じられた。冬になると先生は長いこと櫛をあてたこともないやうな髮をして、(髮には油氣もなかつた)咽喉へは濕布を卷いて敎室にやつて來られた。

先生はたいてい時間に遲れて敎室へ來られた。二十分、三十分ぐらゐ遲れて來られることは珍しくなかつた。三十分過ぎても敎室へ來られないので、それをいゝことにしてわたくしたちは敎室から逃げ出さうとしてゐると、先生は寂しい笑顏をして寒い廊下を步いて來られた。

教室に於ける先生は決して世の一般の學究的プロフェッサアではなかつた。先生のレクチュアは決して大仕掛な、概念的な系統をたどつてゆくやうなものではなかつた。先生はどこまでも詩人であり、思索家であつた。先生の或る文中に「系統的に一つの學問を組立てゝゆく學究的な仕事は自分にもできないことはない。しかし自分はそれ以上の何事かをして見たい」といふやうな意味のことが書いてあつたことを讀んだことがある。先生はたしかに學者以上の或るものを求めた人であつた。先生は寂しい先驅者であつた。

わたくしたちは文科の三年の時先生から美學を教はつた。一年間のレクチュアはノートの頁數にしてわづか三四十頁ぐらゐのものであつた。一時間のレクチュアが一頁に充たない程度のものであつた。わたくしたちはそれでも先生のレクチュアを聽いてゐると靜かな快い思惟の世界へ惹き入れられて行つてしまふのであつた。

英國の月桂詩人スヰンバアンが死んだといふ外國電報が新聞に載つた時先生は美學の一時間をスヰンバアンの話に費された。「恐らくテニソン流の詩人の最後のものであらう。」といつた意味のことを語られた。

それからこれもやはり美學の時間であつたが、「身貧賤に生まれたゝめにわたくしは味覺といふ點は發達しなかつた。」といふやうなことを語られたこともあつた。わたくしたちはその時一種嚴肅な感じに打たれたことを覺えてゐる。

先生はまた學生時代から非常な勉强家であつたといふことである。小學時代にはあまりに秀才であつたために仲間の者たちに悄まれて或る時は道に邀したる惡童等のために袋叩きに逢はれたことがあつたといふことを聽いた。しかし先生はその時も何の抵抗もしないで靜かに打たれてをられたといふことであつた。

早稻田の專門學校時代にも「いつも普段の日は早稻田の圖書館に入りびたりになつてゐる靑白い顔の靑年があり、日曜にはその靑年が上野の圖書館に這入つてせつせと本を讀んでゐる。それが島村さんであつた。」といふ先輩の話を聽いたこともあつた。

島村先生が亡くなられてからわたくしたちは神樂坂の藝術座へ集まつて先生の追悼會を開いたことがあつた。その時これも故人になつた坂本紅蓮洞氏がこんな話をされたことがあつた。
「僕は島村君に逢つた時たづねたことがある。君のやうな正直な男が芝居者を對手にしてゐたらずゐぶんごまかされることが多いだらうと。ところが島村君かいふには、「いやさうでもない。こちらで正直にして行けば先方もまた正直にしてくれるものだよ。」と。
わたくしは今日なほ紅蓮洞氏と島村先生の會話を面白いと思つて記憶してゐる。先生はまことに正直な人であつた。嘘をいふことを知らぬ人であつた。
先生の聲と眼が美しかつたやうに先生の心はまことに美しいものであつた。
わたくしは或る日、十月末の薄ら寒い日であつたかと思ふ。早稻田大學からのかへりに、そのころ久し振りで田舍廻りの芝居興行から歸つて來られた先生を神樂坂の藝術座におたづねしたことがあつた。わたくしは、それが最終の訪問であつたと思ふが、神樂坂で水菓子の籠をもとめておたづねした。先生は藝術座の隅の一室にをられた。しばらくお話をうかゞつてゐる間に「君も學校と創作と兩方をやつてゆくのは骨が折れるだらう?」といはれた。いかにもやさしいお言葉であつた。
その時何ゆゑであつたか知らぬが、わたくしは先生のお顏を見てゐる間に涙が出て來て仕方がなかつた。わたくしはお暇をして神樂坂を下つて行つた。それから間もなくであつた、先生が急に亡くなられたのは。
先生は山茶花がお好きであつたかと思ふ。雜司ケ谷の先生のお墓の周圍にはたしか山茶花が植ゑられてあつたかと思ふ。
先生はまことに美しいやさしい寂人であつた。と同時に偉大なる孤獨な先驅者であつた。

愛する心愛せらるゝ心

かつて一つの存在であつたものが二つの存在に分たれた。それが男であり女である。この二つに分たれた存在は再び一つにならんことを欲して絶えず兩方からたがひに働きかけてゐる。この心の働きがすなはち愛である。

このやうな愛の見方は、ずつと古代からの考へであるが、愛がすべてのいかなる障碍をも排して直ちに對者と唯一無礙の絶對境に於いて結びつかんとする心燃を見ればこの譬喩は最も妥當なるものとしてうなづくことができる。

愛は人間の魂の最も自然なる流れであり、最も淨化せられたる生存欲である。

もし人間の世界に於いて神の生存の姿を如實に感じさせるものがあるとすればそれは愛でなければならぬ。

愛せんとする心は神の心であり、愛せられんとする心は神への祈念欣求である。

わたくしたちが生きてゐるといふ意識のうちにはかならず隣人の生存が動いてゐる。

わたくしが生きてゐると同時にわたくしの影が存在してゐるやうに、わたくしが生きてゐると同時にそこにはわたくしの愛を待つところの愛人があり、妻があり、子がある。

生くるといふことの究竟は愛の交通でなければならぬ。魂の抱擁でなければならぬ。

哲學的思索がもし概念のみのものであるならば眞の人生の相を見ることはできない。神學の中には決して神を見る力は潜んでゐない。

神を見る力は神を求むる憧憬であり、忘我であると同樣に、人間を見、人生を感ずる力は人間をもとむる忘我的な憧憬のうちになければならぬ。

エドワード・カアペンタアの說を藉るまでもなく、戀愛が人間の魂のみならず、その容貌をすら改めるほどの力を持つてゐるといふことは否定することのできない事實であらう。

印度の詩人は「愛は理解なり」といふ。愛することによつて智慧の眼が開かれる。愛せんとする心は自己を無にしてたゞちに對手の魂のうちにかれ自身を生かさんことを祈念する。

生きるといふことの意義は人間生活をその深さに於いて意識することでなければならぬ。或ひはその深さに於いて實感することでなければならぬ

たいていの場合、わたくしたちは幸福な平和な生活を求めてゐる。しかし、もしそれがたゞ單に事なかれ主義のイージー・ゴーイングな心持ちから生まれて來る平和であり幸福であるならば、そのやうな生活は決してわたくしたちにまことの人生の相を見せてはくれない。わたくしたちの魂を深くしてはくれない。

生きるといふことは全幅の末梢神經を顫動させつゝ人生に當面することでなければならぬ。詩人ウオーヅオースはつねに「驚く」といふ言葉をつかつた。その流れを掬んだわが國木田獨歩が驚（ワンダア）をもとめてゐたことはよく人の知るところである。

十八世紀末より十九世紀初頭にかけてのロマンチシズムの運動も實はあたらしき驚（ワンダア）をもとめんとする文藝上の憧憬であつたと見ることができる。

さらに一般的にいへば、すべての藝術はあたらしき驚（ワンダア）への憧憬であり、發見であるといふことができる。生くることそのことが實はさらにあらたなる驚（ワンダア）への冒險である。

ロマンナシズムの人々は好んで「蒼白き（ペール）」といふ文字を使つたが、そこには未知の世界があり、切り拓かるべきあこがれの天界が霧をへだてゝかれらの前に橫たはつてゐることを想像することができる。

生きるといふこと、さらに生きつゝありといふことは概念でなくて實感である。感激である。感激をのぞいては生きるといふことはない。驚(ワンダア)は端的な感激である。

わたくしたちがもとめてゐるものは人生の感激である。人生についての驚(ワンダア)である。

若き日といふことは人間の持つ最も尊い幸福でなければならぬ。しからば若き日とは何であるか。

若き人はよく物に感じ易い。驚き易い。

あるがまゝに物を感じる心、あるがまゝに人生を感激する心、それこそ若き日の特權でなければならぬ。

神を見る心は嬰兒の心である。神を見る心は若き日に於いて最も多くめぐまれてゐる。かれはよく感じ、よく感激するがゆゑである。

感激なき人生は死であり、墓場である。

感激はたとへば黎明の微風である。朝の光りを撒(ま)き、雲を散らし、湖の水を動かす。

感激はすべてのものを動かし、よみがへらせるところの力である。そこからあたらしき命が生まれ、あたらしき生の切斷面が生まれて來る。

愛する心は人生に感激を見出す魂の柔軟性(プラスティシティ)である。愛せられんとする心は若き日の素直さを失はぬ魂の吐息である。

人間の生活に於いて最も呪ふべきは魂の硬化である。魂の硬化は墮地獄である。煉獄に鎖づけられたる魂は人を愛することを知らず、人に愛せらるゝことを知らない。

愛する心はつねに同時に愛せられんことをもとむる。愛せんとする心のうちにはすでにその應答(リスポンス)をもとめてゐるも

のが潜んでゐる。それは決して利己的な考慮からではない。愛は與へることであり、同時に與へらるゝことでなければならぬ。愛せられんとする心のうちにもまたその應答として愛せんとする心が動いてゐなければその愛は利己的に墮する。

よく愛することを知る人にしてはじめてよく愛せらるゝことを知つてゐる。よく愛せらるゝ人にしてはじめてまたよく愛するの途を知つてゐる。

人間の魂の美しさに打たるゝ時人は愛を感ずる。愛せんことを思ふ。

人間の魂の美しさに觸るゝ時人は愛を感ずる。愛せられんことを思ふ。

魂の美しさを感ずるがゆゑに融然として相抱かれんことを思ふ。すなはち愛せんとする心であり、愛せられんとする心である。

わたくしたちの人生は決して幸福ばかりの場所ではない。むしろわづらはしいことや、悲しいことや、矛盾あることが多く、虚僞や排擠やさういつたもの丶ためにわたくしたちの生活はつねに憂鬱にされてゐる。

もし人生は幸福であると高い聲で叫ぶことのできる人があるとするならばわたくしはその人を羨む。しかしわたくしはその人と異つた人生の相をあまりに多く見せつけられてゐることを斷言しなければならぬ。

わたくしたちはあまりに憂鬱な人生を知つてゐる。あまりに儚い、あまりに暗い人生を知つてゐる。けれどもわたくしたちは人生に對するあこがれを捨てることはできない。人生の蠱惑を感じないわけにはゆかぬ。

絶望の底に於いてもなほ人生の何處かにかすかではあるがわたくしたちの魂を惹きつけんとする何ものかゞあることを感ずる。

愛せんとする心、愛せられんとする心のみがこのかすかなる人生の蠱惑を實感することができる。

暗い憂鬱な人生の裡になほ一條の光りを見出すものは愛せんとする心である。愛せられんとする若き心である。硬く冰ついた土の底深くなほかすかなる或るものゝ脈搏を感ずるものは愛せんとするものゝ心である。水楊の下に眠つてゐるオフイリヤの冷たい唇に魂の血をよみがへらせるものはハムレットの愛せんとする心であり、愛せられんとする心である。

愛は智慧の眼を閉くといふのは闇と憂鬱のなかゝら光りを見出すがゆゑである。絶望のなかになほ生きることのよろこびを感じさせるからである。

もしわたくしたちの生活から愛する心、愛せられんとする心を取り去つてしまつたら地上は氷より冷たく、土は鐵よりも硬くなつてしまふであらう。そこには一莖花咲かず、一鳥鳴かぬ落莫たる世界のみがとりのこされるであらう。もし人間の世界から愛せんとする男の心、愛せられんとする女の心が枯れはてたとしたらわたくしたちの地上は恐らく魂を窒息せしむるであらう。

アシシのフランシスの愛は天界をも掩うたといはれてゐる。たゞ一人の無知な男はたゞ一人の無知な女を愛する刹那に、愛を知らざる賢者以上の世界の美と光りとを見る。

一人の女を愛する無知な心は、無知な女のうちに神のごとき尊さを見、美しさを感ずる。その刹那にかれの世界はまつたく異つたる相をもつてかれの前にあらはれる。そこには闇を破つて光被せられたる世界がよみがへつて來る。

一人の女を愛することはやがてかの女をめぐつてゐる家を愛することであり、空を愛することであり、地上を愛することゝなる。一人の女のうちに見出されたる美と尊さはやがて人類すべてのうちに潜められた美と尊さの直感へとみちびく。だから、一人の女を愛せんとする男の心、一人の男に愛せられんとする女の心の究竟は神を愛せんとする心、神に愛せられんとする心に還らなければならぬ。

地上の醜い人間の魂にも天上の神のかすかな姿を見ることはできる。愛する心、愛せられんとする心は、醜い地上の人間のうちに天上の神を見出す。

愛は祈りである。人間の魂の最も美しき、最も厳粛なる相に於いて自己を表現せんとする祈りである。愛せんとする男は神のごとき姿に於いて女のうちに自己を生かす。愛せられんことを欲する女は天女のごとき姿に於いて男のうちにかの女自身を生かす。

祈る者が神を見るやうに、愛する者もまた神を見なければならぬ。愛は嬰兒のごとく、人間の自然のまゝの魂のあこがれであるがゆゑに。

愛は絶對を目標として歩むがゆゑに姑息妥協をゆるさない。愛の對象は生か然らずんば死である。全か然らずんば無である。

若き日の心は永遠に燃ゆる。愛する心に燃え、愛せられんとする心に燃ゆ。

愛せんとする心の潤るゝ時かれの死が來る。

愛せられんとする心の眠る時かの女の小ざかしき智慧が動きはじめる。

愛のうちにのみ神の世界が生き、人間の美しき尊き世界の窓が開かれてある。

時雨の夜

九月二十四日に日本アルプスに登りまして、信濃沓掛に數日滞在、一昨夜三ヶ月振りで東京へ歸つて來ました。そして今夜はもうすでに第一回の講演を或るところでしなければならぬことになりました。今その講演をすませて雨のなかを宅にかへつて參りました。

あまり久々で大きな集まりの前に立つたせゐか神經が妙に興奮してゐます。廂を打つ時雨のかすかな音がかへつてうれしく聽かれます。

いつも思ふことですが人の前に立つて講演をした後はいかにも寂しい、恥づかしいやうな氣分に囚へられてしまひます。聽衆が多くて、自分の聲を大きくしなければならなかつた時ほど、壇を下りてからは、暗い心が一層深くなつて參ります。もう二度と演壇に立つことはしまいと思ひながらも、また頼まれては否みがたく壇に立つ自分自身をあはれと思ふこともあります。

この三ヶ月といふものたいていは山の沈默につゝまれてゐたゞけに、一層今夜はさういつた暗い心持ちを多分に見出してゐます。

わたくしは纒りもつかなかつたやうな自分の講演のことを考へて目をつむつてゐます。

淺間の高原が泛かんで來ます。落葉松の林が、山鳩の聲が、白い雲が。

わたくしは終日草の原を歩いてゐました。そこではわたくしはたゞ考ふること、回想することのみに終日終夜を送つてゐました。

わたくしは決して膚淺な自分を人の前に提示する必要はありませんでした。わたくしはいつもたゞ受け身の生活をのみ繰りかへしてゐました。

夜明け方の美しい空をじつとわたくしの胸に受け容れました。わたくしはじつと山鳩の聲を聽きました。わたくしは終日山に對して坐つてゐました。山は絶えずわたくしに人間の智慧以上の深いものについて、高いものについて語つてくれました。わたくしは夜の高原を歩きました。天を仰ぎました。そこにもわたくしは無限なる天のさゝやきを聽きました。わたくしは夜も晝も自然の聲を聽きました。わたくしは決しておしやべりをする必要を持ちませんでした。

わたくしはいつも口をとぢてゐました。わたくしはほとんど言葉の必要を持ちませんでした。

日本アルプスの秋のいたゞきに立つた刹那、わたくしは遠く富士を見出しました。わたくしの魂は感激にわなゝきました。そこでは言葉の必要も、文字の必要もありませんでした。わたくしは直接自然に觸れることによつて言葉以上、文字以上の深いものに撃たれました。

夜が明けて朝の空を仰ぐ、太陽を拜する、落日に默禱する。たゞそれだけの簡單な生活、それが山に於けるわたくしの生活でありました。わたくしは東京に歸つて來てつくづく山の生活の餘さを思ひ泛かべてゐます。

言葉なしに生きられる生活、おしやべりをすることなしに生きられる生活、わたくしは山の生活の深さを忘れることができませぬ。

わたくしは終日山に對して坐りました。そしてかつて一度も山に飽いたことはありませんでした。偉大なる沈默！

わたくしは山のごとき沈默を欲します。山のごとき深き沈默を愛します。

わたくしは信濃の高原の沈默を思ひ出してゐます。沈默はわたくしの魂の影を映す深い靜かな淵であります。

沈默がやぶられた刹那わたくしはわたくし自身の魂を見失つてしまつてゐます。
今夜も山には音もなく落葉松は散つてゐるでありませう。わたくしは散つてゆく落葉松のなかに佇んで沈默の山を眺めた日を思ひ出してゐます。
八ヶ嶽も眠り、淺間も眠り、信濃の山といふ山が沈默の夜を守つてゐるでありませう。わたくしは小ざかしいおしやべりをした自分自身をあはれまずにはをれません。
時雨が廂を打つてゐます。
わたくしはじつと自分の魂を見つめてゐます。
沈默を破つた後の暗い心、羞恥の心、憂鬱な心！
わたくしは鞭打たるゝ囚人のやうなわびしい心で時雨の音を聽いてゐます。

不圖わたくしは眞夜中の庭の隅にこほろぎの聲を聽きました。
わたくしはふたゝび尊い沈默を見出しました。その刹那にかつて日本アルプスのいたゞきで見出した沈默にも似た尊い魂のわなゝきを感じました。
時雨は降つてゐます。
こほろぎは鳴いてゐます。
わたくしは一切の雜念を捨てゝ俯向かないではをれませんでした。
神はわたくしのおしやべりな魂をも靜かに撫で給ふ。

庭の隅

一昨年の冬、庭の隅に植ゑて置いた蕗の薹が、枯れもせずこの春も同じ場所に、敷松葉の下から頭をもたげて來た。いつとはなしにわたくしは、すつかり蕗のことはわすれてゐたに、時が來れば雪を割り、霜を凌いで靜かに土の上に可憐な姿を見せる。すべての生けるものゝ生きんとする意欲の强さを思ふと、淚ぐましいほどのけなげさを感ずる。たま〳〵人に踏まれ、折られてもなほ生きてゆかうとするけなげな努力を見ると、まつたく生そのものゝ必然的な深さ執念さに對して、頭を下げないではをれなくなる。

雪につゝまれた冬枯れの自然は眠つてゐるやうに想はれる。しかし雪を掻きのけて見れば、そこにはすでに新らしい春の芽生えが準備せられてゐる。否、新らしい生命のための花が、柔かな衣につゝまれて、三月の日の光りを待つてゐるのを見る。わたくしたちが想像してゐるよりも、幾倍か深く、幾十倍か執念く、すべてのものは生きることのために、靜かな、しかし懸命な努力をつゞけてゐる。

一莖の草の葉のなかにも、いかに豐かに神の意志が働いてゐるかといふことを想像するだけでも、わたくしたちは、自然の深さと尊さとを、感じないではをれない。

人間の世の價値といふことは、われ〳〵が生きてゆくために、第一に學ばなければならぬことである。人生をつまらないと考へる人にとつては、人生はたしかにつまらない。その人は眞に見なければならぬものを、人生に於いて見てゐないからである。眞に感じなければならぬものを、人生に於いて感じてゐないからである。

人生を尊いと見る人にとつては、たしかに人生はこの上もなく尊いものでなければならぬ。その人はたしかに人生

に於いて尊きものを見出してゐるからである。

ドストイエフスキイは、汚された女ソニヤの心に、神のごとき尊きものを見出した。かれにとつて人生は、決してくだらない場所ではなかつた。かれはたしかに罪人のなかに、汚されたる女のなかに、人間でなければ持つことのできない尊いものを見出したからである。

多くの人は、善惡といふやうな概念的な行爲によつて、人生を判斷し、人間を批判しようとする傾向がある。善惡は人間の作つた道德律のなかに於いてこそ生命があるが、神の世界に於いては生命を持たない。

人間がたしかに人間であるためには、かれは善惡以上のものでなければならぬ。人は善によつては救はれない。善以上のものを持たなければならぬ。善を持つたと思ふ刹那に、かれは墮落してゐる。悔ゆることを知らぬ人間に救ひはない。

恐らく釋迦もキリストも、自分自身に完全なる善を持ち得たとは思はなかつたであらう。さればこそかれらは祈りに祈つた。人間は善の梯子によつて天に昇ることはできない。人生をありがたく感ずることである。人生の尊さを感ずることである。身を地に投げて生くることのうれしさを、わびしさを感謝することである。そこから眞に人生を生きつゝありといふよろこびも、希望もわいて來るであらう。

わたくしの庭の隅の蕗の薹は、決して善を持つてゐるとはうぬぼれてゐないであらう。しかし可憐なる蕗の薹は、雪を割つて三月の日の光りを待つてゐる。善人であることよりは、先づ生きてゐることのありがたさを、心から深く感じなければならぬ。生きてゐることの尊さを、身にしみて感じなければならぬ。その心持ちこそ善である。太陽は庭の隅に忘れられた一莖の草にも、柔かなめぐみをわすれはしない。春の靜かな、雨は庭の木瓜の蕾をも忘れはしない。

山の中の灌佛會

去年わたくしは四月の旅を天城の奥の寂しい溫泉場で送つた。湯の宿といつてもたゞ古い旅籠屋が二軒あるだけで、日が落ちかゝると、天城の谿底にひとかたまりになつた二三十戸の家々は、墓場の石のやうな沈默を守つて暮れてゆくのであつた。

わたくしは村の出はづれまで行つてはよく箱根や十國峠あたりの黄昏れてゆく山を眺めた。山も谿も暮れて行くに夕暮の燭一つ見ることのできないのはたまらなく寂しいことであつた。

夜は夜もすがら谿川の音を聽いて、夜が明けるのを待ちかねて湯槽のなかに飛び込むのであつた。小鳥らは直ぐに軒近くまで來て囀つてゐた。

谿川の音、小鳥の聲、椿の花、たまに近づいて來るガタ馬車の中の見知らぬ人々……その他に何一つ旅人の心を惹きつけるものはなかつた。

わたくしは湯から上ると山蘭を取りにゆくか、萓山に早蕨狩りにゆくかして日を送つた。喫めもしない卷煙草を買つて來て喫んで見たりした。

このやうな單調な山の生活の中にわたくしは偶然にも二つの記念すべき日を迎へた。一つはバイロンの百年祭であり、一つは釋尊の降誕祭であつた。

山の中にたゞ一つのお寺があつた。

天城にはまだ雪がのこつてゐた。寺の庭には眞つ赤な八重椿が咲いてゐた。

若い坊さまがしきりに美しい椿の枝を鋸で切つてゐたのを通りがかりに見た。
その翌日が丁度四月八日だつたことを後で氣がついたほど山中の生活者にはまつたく暦日の必要はなかつた。
わたくしは幾年振り、或ひは恐らく三十年振りででもあらうか、子供たちと一緒にそのお寺に行つて釋尊の日を心ゆくばかりありがたく思つた。
昨日、若い坊さまが切つてゐた椿で花御堂の屋根が葺かれ、椿の花の間にれんげや、菜の花が埋められてあつた。
裸の御釋迦さまに甘茶を浴びせかけてゐると、繡眼兒だの、鷺だの四十雀だのが直ぐ頭の上の木で聲を張りあげて啼いてゐるのであつた。
何といふ平和な日であらう。
わたくしは御堂の前の椽先に落ちた春の日の光りを踏むのさへもつたいないやうな氣がした。御釋迦さまは少しも說教をなさらない。御釋迦さまは素つ裸で天と地へ二つの腕を差しのべておいでになる。地からは草の花が燃え、陽炎が立つてゐる。天からは春の日の光りがあふれ、白い雲がわき、小鳥の聲が流れてゐる。
涅槃さながらの日がよみがへつてゐた。
わたくしの眼には帝國ホテルで每年行はれるクリスマスの夜の花やかな豪奢な綺羅を盡した舞踏會の光景が浮かんで來た。人生の幸福に飽き足つた富める都會人たちの醜い夜の光景が映つて來るのであつた。
キリストは釋迦に比べて幸福ではなかつた。
わたくしは花御堂の中の素つ裸の像を見ながらさう思つた。
小鳥らと、花と、子供らにつゝまれ、祝はれつゝある山の中の御釋迦さまは世界で一番幸福な人であるやうに思はれた。

どの宗教でも同じことであるが、立派な伽藍が建つころは、その魂は死にかゝつてゐる。

ほんたうの宗教は本山では死んでしまつてゐる。ほんたうの宗教は名もない山の中の末寺に生きなければならない。或ひは名もないたゞ一人の信徒の胸の中に。

羅馬の法王廳の大伽藍が天に聳えたころはキリストの魂は羅馬にはなくて、ニウイングランドの移民たちの中に生きてゐた。

伊豆の山の、奥の奥の山の中のさゝやかなお寺で、花御堂の中に素つ裸の御釋迦さまがまつられてゐる間は釋尊の魂は亡びないであらう。

旅をしてゐればいつも感じることであるが、眞面目に人生を考へてゐる人は、どんな深い山の中にも一人や二人はあるものである。

そのやうな人は說教もしないが、たまたまそのやうな人に出會つたといふことだけで救はれたやうな氣がする。人生に對して明るさを見出しえたやうな氣がする。

都會の眞ん中に說敎めいたことをする自分自身を顧みる時、一番深い寂しさを感じる。

美しき夢

年の暮から、わたくしはたいてい伊豆でくらすことにしてゐる。暮からお正月のあわたゞしい生活を避けたいからである　旅にゐると、除夜も正月もない。東京のあわたゞしい生活を思ふだけに、山の生活の靜寂さが一層ありがたくも、うれしくもある。

伊豆の山はすつかりすがれて、たゞ蕭條たる風物のなかを一筋の下田街道が北から南へ天城の峽谷を漫々とし、走つてゐる。

わたくしは下田街道に沿ひ、狩野川の流れをながめつゝ旅人のごとく日もすがら悠々の懷ひを雲に寄せ、山に託してゐる　そこにはすでに椿の花が眞つ紅に咲いてゐる。冬枯れの桑畑を越えて富士の雪を仰ぐのも伊豆の旅には最もうれしいものゝ一つである。

このころでは自動車が天城を越ゆるので、ガタ馬車は幾分すくなくなつたやうだが、まだ伊豆にはかなりたくさんなガタ馬車が目につく。淺葱染などの幕をかけたガタ馬車が、椿の花の下を狩野川に沿うて走つてゐるのは、いかにもなつかしい野趣をこめて面白い。眞鍮の喇叭が冬の風よりもわびしく鳴りひゞく。

夕方芝山の徑を歩いてゐると富士の尊い雪の上を夕燒の雲の影が動くともなく動きつゝ、いつの間にか形をかへ、消えてゆく　夕燒が消え、雲が散つてゆく姿がこの上もなく靜かな心を喚び起す。

箱根から十國峠へと伊豆の山の肩にも雪が白くはろ〴〵と雲に入つてゐる。

物思ふこともなき人のごとくわたくしは山を見、雲を見る。

冬枯れの山にゐても春を思へばさすがに吹く風もうれしい。畑には二三寸に伸びた麥が風のまゝに春らしきそよぎを見せてゐる。

下田街道を走るガタ馬車もけふは新らしき裝にかざられてゐる。馬の腹帶も花やかに結ばれてゐる。天にも地にも春の光りがたゞようてゐる。氷てついた山蔭の道を猿曳も行き、萬歳も行く。

新たな年が生まれる。

たゞそれだけの感じから、山も生まれかはり、雲も、流れも、風の音も生まれかはつたといふ心にもなる。わが心までがのびやかに生まれかはる。

そこには憎みもない。惡もない。すべてが神代さながらに新らしくよみがへつてゐる。

わたくしはお正月の氣分を愛する。

お正月は山川草木すべてが生きてゐることをよろこび合ひ、壽き合ふ日である。一年のうちお正月ほど生きてゐることを心からうれしいと思ふ折はない。神への感謝、生命への感謝、雲も地も感謝に充たされてゐる。

日本國中がお互に正月だけは生きてゐることをよろこび合つてゐる。のどかな羽子の音、凧の風箏。悲にも曠野にもよろこびがあふれてゐる。

何の思念もない。何の憂ひもない。みんながたゞ嬰兒のごとく他愛もなく生きてゐることをよろこんでゐる　恐らくイヴンの馬鹿の王國ではいつも人々はお正月の氣分に醉つてゐるであらう。

靜かな伊豆の山が暮れてゆく。

春光の一日がかくて平和な幕を卸す。

三百六十五日の第一の祈りの鐘が天に響く。
若き人々の魂よ、靜かに祈れ、靜かに美しい夢を結べ。

草山の子

雨の中を歩いてゐる間に不圖或る家の垣根から往來をのぞいてゐる茱萸の葉を見た。厚くて、ちよつと卷き上つた、白い粉を吹いたやうな葉である。東京では割合にすくない。郊外の家にゐたころはそこの庭に大きな茱萸が二三本あつてよく寶石のやうな赤い實がなつたものである。その後久しく大きな茱萸を見なかつた。

茱萸の葉はいつもよくわたくしに故郷の山を聯想させる。

草山には小粒の茱萸が非常に多かつた。秋になれば三尺ぐらゐの脊丈の茱萸の木に大豆粒ぐらゐの赤い實が萩の花の中にまじつてかゞやいてゐた。わたくしたちはよく山へ登つては遠い海をながめながら茱萸の實を取つては喰べた。そのころはまた野葡萄の實が黑く熟して少年たちの食慾をそゝつた。

麥秋のころは野苺が畑の石垣や、山徑の草の間に赤い拇指頭大の實を聯珠のやうにかゞやかせては少年の眼をよろこばせた。

俵茱萸といふのがあつて、これは春山櫻のころ赤く熟した。かなり大きな茱萸である。たいていは松山や雜木林の中に見出される木で、わたくしたちは山櫻の散る下で俵茱萸を取つては喰べたものである。そこいら一面に蕗の柔かな芽が頭をもたげてゐた。

茱萸を見ればわたくしは故鄕の少年時代を思ひ出す

軍艦から上陸して來た水兵たちは茱萸の枝を切つて皮を剝いで、枝の心に針金を通してパイプを拵へたり、ステッ

キを拵へたりした。わたくしたちは水兵に眞似て山に入つて茱萸の枝を切つてはステッキを拵へたり、ペン軸を作つたりしたものである。茶碗のかけらなどで茱萸の枝の皮を剝ぎ、布でごし〳〵と擦つては艶を出した。

何の色もない微な茱萸の花の寂しさは子供心にも感じられたものである。

猿頰といふ木魚形の木の實を深い山徑をたどつて探しに行つたことがある。何といふ植物學上の名であるか、何といふ木であるか知らぬが、子供心にはなつかしいものであつた。やはり茱萸の枝をみがくのと同じやうに、茶碗のかけらなどで猿頰の皮を剝いでしまふと、そこには立派な木魚のやうなものが出來上るのであつた。中が空になつてゐて、輕く叩くと木魚に似た寂しい音を立てる。いかにも深山の響きである。

木魚にも似てゐるが、猿の顏にも似てゐる。

今日になつて猿頰のことを考へると、何だか生まれぬ前の世界の出來事のやうに思はれる。

錐のさきで小ひさな穴を明けて吹くと鶯のやうな聲を出すのであつた。

秋の草山は芒に蔽はれて少年の頭をも、影をも隱してしまふほど深かつた。日が暮れかゝつてゐる秋の野山の芒の中をほう〳〵とさみしい猿頰の實を吹き乍らわたくしたちは歸つて來た。

そのころの猿頰の聲が今もわたくしの鼓膜の底に刻みつけられてゐる。

秋の山の野葡萄を思ひ出すごとに、わたくしはガリラヤの野といふ言葉を聯想する。それは野葡萄の實の黑くて單純な色彩で野葡萄と同じやうな形で、犬葡萄といふものがやはり同じ野山にあつた。それは野葡萄の實の黑くて單純な色彩であるのに對して、いかにも毒々しい色彩を持つてゐた。死の世界を聯想させるやうな無氣味な神祕さを持つてゐた。

子供心にも野葡萄はよろこんで摘み取つたが、犬葡萄の實は手を觸れるのも恐ろしいやうな氣がした。

それでもいつ同じ山路を辿つて見ても、子供の手に取られないで、いつもそのまゝになつてゐるのを見ると犬葡萄

が可哀さうでもあつた。

草山には三四尺の枯木の枝にいつも四十雀がとまつてゐた。

都會

生活をその最深所に於て生きんとする意識、或ひは神經の尖端に於いて生きんとする意識が、いつも都會生活者の心に動いてゐる。

念々刻々せつぱ詰まつたほどな痛切な意識の上に生きんことを覓めてゐる。それが都會生活者の心理の根柢である。近代人の生活は刺戟の連續である。近代の都會生活は强烈な刺戟、極度の現實主義、白熱的な刹那思想が母體となつてゐる。無爲無感激にして百年生きんことよりも、寧ろかれ等は炎のやうな感激の絹頂に於いて刹那的に生きんことを冀ふ。生活の刹那々々に最高の質を與へんとする生き方、戀愛なき天國よりも寧ろ戀愛ある地獄を選ばんとする刹那主義者の思念はまた近代の都會人の思念に近い。

一口にいへば都會はさまぐな娛樂機關を持つてゐる。容易に生活の現實的幸福感を享樂させてくれる。かういつたことが自然人々を都會に誘惑することになる。しかし、そもく娛樂とは何であるか。生活の現實的幸福感とは何であるか。生き甲斐を感ずることでなければならぬ。わたくしたちは都會生活が與へるところのいろく な娛樂なり、事件なり、幸福なりによつて、ともかく生活の感激を見出すことができる。人生そのものをたのしむことができる。

田園にありてもわたくしたちは無論生活の感激を見出すことはできる。たゞ都會に於いてはそれがいかにも熾烈である。濃厚である。したがつて精神的よりもむしろ肉體的な傾向になり易い。そのやうな傾向が自然一般的な民衆の興味を都會へ惹きつけることになる。だから都會の生活意識、生活欲求の中心はいつも若い男であり、若い女である。都會そのものゝ潑剌たる脈搏はいつもたゞ若い人々によつてのみ保たれてゐる。都會はいつも若い人々の魂の巢であ

り、肉體の搖籃(えうらん)である。自然都會生活は氣分の生活である。一つのイデアを目あてとして生くるものでなくして、そのなりくのアトモスフイアに漂ひつゝ生きてゆくものである。現實の生存そのものが與ふる生活表現のすべてを善いとして受け容るゝところの生活法である。都會生活の長所と短所とはそこに潜んでゐる。

暗い雨の夜、武藏野を歩く人たちは、東京の赤い空を闇のなかに見出すであらう。その刹那にわたくしたちの胸に訴へて來る不可思議な一つの力がある。不可思議な都會の誘惑である。

かつてアングロ・サクソンの祖先が持つてゐたかの闇の夜をかける一羽の鳥の傳説は、また都會を戀ふる若い人々の心にもくらべることができる。

一羽の鳥は無限から無限へと闇の世界を翔つてゐた。たまく鳥は遠い闇のなかに一點の燈を見出した。かれはまつしぐらに燈をめがけて闇を横切つて飛んだ。燈は王城の窓から洩れてゐた。窓のなかでは花やかな晩餐會が開かれてゐた。かれははじめて光りを見た。華やかな大廣間を飛びに飛んだ。

やがてかれは飛び去るべき窓を忘れて、花やかなホールのなかで死んでしまつた。

武藏野を歩いてゐて、不圖夜の東京の赤く燃えた大空を見てはわたくしはこの傳説を思ひ出すことがある。

都會は無限の未知の世界である。都會が內包してゐるその未知の世界の正體は恐らく永遠に解くことのできない謎であるにちがひないが、ともかく都會は不可思議な未知の世界を內包してゐる。

一羽の鳥が闇のなかに燈をもとめて飛んで行つて、やがて燈の下に翔(かけ)りつゝ死んでしまつたやうに、若い人々は都會そのものが內包する未知の世界にあこがれては都會の渦卷の中に飛び込んで踊りつゝ、やがて都會そのものに抱かれて死ぬであらう。

わたくしは東京のあわたゞしい生活を避くるために東京を捨てゝ旅に出る。しかも一ヶ月二ヶ月と旅をつゞけてゐる間には東京を戀ふる心に敗けてしまふ。

二三年前わたくしは駿河の海岸に滯在してゐたことがあつた。或る晩わたくしは海に臨んだ緣端の柱によりかゝりながら東京のラヂオを聽いてゐた。眼をつむつて波の音とゝもにラウド・スピイカアから漂ふて來る唄を聽いてゐる間に惻々として迫り來る都戀しい心にすつかり囚へられてしまつたことがあつた。これと同じ經驗を去年の秋日本アルプスの或る溫泉地でくりかへしたこともあつた。

わたくしは東京へ歸つて來るたんびに、あまりにあわたゞしい人々の生活を見て、都會人の生活をさげすみたい氣にもなる。有樂町や、新橋あたりの省線電車を待ち合せてゐる夥しい人々の群を見るたんびに「いつたい人間はこんなにまでして一緒に集まつて棲まなければならぬものであらうか！」と疑ふこともある。しかも東京へ還つて來て十日二十日と經つ間には、わたくし自身平氣で人ごみを掻き分けて生活してゐる。そして何等の矛盾をも不思議さをも感じない。

何故であらう。都會生活者はたとへば阿片中毒者の如きものであらう。わたくしはたび〳〵さう思ふことがある。阿片中毒者が阿片を喫まないではをれぬやうに、一度都會生活の不思議な力に魅せられた若い人たちは、一時的にはこのあわたゞしい都會生活からのがれえても、容易に都會を忘れることはできない。あの窒息しさうな都會の空氣のなかに還り來ることによつてかへつてよみがへつた自分自身を見出す。近代人にとつて都會生活は一種の甘美な中毒作用である。陶醉である。

さらに都會生活の持つ魅力はそのボヘミヤン的な生活方法をゆるす寬大さにある。都會ほど個人の生活を自由に生

かしてくれるものはない。大きな都會に於いてはわたくしたちはほとんど自由に行きたきところに行き、うたひたきことをうたひ、思ひたきことを思ふことができる。官僚も、ブルジョーアも大學教授も自轉車乘りも煙突掃除も同じ地下室の食卓で何のへだてなく酒を飲むこともでき、パンを嚙じることもできる。そこではみんながたゞ赤裸々な一個の人間である。ボヘミヤンである。

わたくしは東京の街を步いてゐる時、不圖立ちどまつて、わたくしの前を過ぎてゆく無數の幸福な人たちをじつと見つめることがある。恐らくその人たちと、わたくしは一度逢つたきりで、永遠に逢ふことはないであらう。寂しいやうな氣もする。さらに強くわたくしの心に觸れるものは、「誰れもかれも自分とは異邦人である」といふ感じである。銀座を步いてゐる時、日本橋の上に立つてゐる時、わたくしは同じ孤獨の感に打たれる。それは伊豆や信濃の山のなかで感ずる孤獨の寂しさよりも、さらに深いわびしさである。この大きな都會の眞ん中を步いてゐる刹那ほど相侁るなき孤獨者の感じを深くさせられることはない。

わたくしはステーンドグラスの扉を排して白い大理石の食卓に着く。そこに並べられた銀のフォーク、整つた顏の若いウエイトレス、皿の上の赤い林檎、すべてがわたくしにとつては異邦人である。異邦人であるがゆゑにわたくしは氣易い。わたくしはボヘミヤンの靜かなわびしさを抱いてふたゝびアスファルトの道を步む。

アカシヤの並樹、そゝり立つ建物、水のほとりの柳、通りすがりの美しい女、すべてが春の微風のごとくわたくしにとつて異邦人である。わたくしはボヘミヤンのわびしさと氣易さとを感謝する。

わたくしはボヘミヤンなるがゆゑに都會を愛する。

ゴンチャロフが描いたオブローモフは「戀するならばほんのわづかばかり」といふ。運命論者の戀である。アーサー・シモンズの戀人たちは淡き戀をよろこぶ。「運命がやがてわたくしたちの戀をはなればなれにする前に、わたくしたちはさよならをしませう。」弱き宿命論者の戀である。

わたくしは宿命論者であるがゆゑに、つねに孤獨なる都會の生活を愛する。

旅と故郷

郷土を思ふ時わたくしの心は暗くされる。わたくしは生まれた土地とは三つか四つの時に別れてしまつたものですから、生まれた土地に對しての思ひ出ははなはだすくない。けれどもそこに、自分の父が生まれ母が生きてゐたといふことを思ひますと、その山河に對しては一脈の哀愁の情を感じないでもありせません。しかし今では、父も母も異郷で亡くなつてしまひましたから、わざ〳〵訪ねて行く機會もなくなりました。

故郷をもたないといふことは、心の宿を持たないやうな侘しさを感じさせますが、同時に又、本當のコスモポリタンの一所不住の寂しい快さを感じないでもありません。だがわたくしは既に父や母を失ひましたのでもし改めて故郷の山河に對しましたらたまらない寂寞を感じるかも知れません。

旅をするならばやはり、何んの關係もない自然、即ち、自分にとつては處女地的な町なり山なりを訪ねるのがいゝやうに思ひます。曾て人と共に遊んだやうな山河を訪ねてみると、たま〳〵一緒に歩いたその人たちが、既に地下に眠つてゐるといふやうな寂しい人生の事實にぶつつからなければならないことがあります。

或る年の初夏、長崎から東京へ歸つて來る途中汽車で、或る町の側を走つてゐたことがあります。そこはなだらかな山に沿うた小ひさな町でありましたが、柿の非常に多い町で、柿の若葉が寶石のやうに美しく輝いてをりました。わたくしはそこの町に住んでゐた若い早稻田の文科の學生のことを思ひ出しました。肺を病んだために、中途で早稻田をやめましたが、わたくしが長崎へ歸るたんびに、ステーションまでわたくしを送つてくれました。一度は、福岡ま

で私を送つてくれました。その翌年、靑年が亡くなつたといふ悲しい通知をうけとりました。
わたくしは、その靑葉につゝまれた町を眺めてゐる間に、その靑年の、白い氣高い顏や美しい眼を思ひ出しました。恐らくそこの柿若葉の下には、あの靑年が冷たい夢を見てゐることだらうと思ひました。わたくしは、その柿若葉の下の靑年の墳墓を、撫でゝやりたいやうな氣になりました。

柿若葉つめたき土を撫でてみむ

これがその時の、私の本當の心持ちでありました。今でも柿若葉が輝いて來ると、その靑年のことを思ひ出します。

わたくしは、ひまさへあれば旅に出たいと思ひますが、この頃のやうに宿屋が贅澤になつたり、泊り合せの客が無作法になつたりしますと、旅も決して快くはありません。宿屋を嫌つて、たま〱お寺のやうなところに泊めて貰つても、暫く滯在してゐると、不愉快な人間關係がそこでも起つてまゐります。

世間一般が、功利的打算的になつて來て、人情の美しさといふものが段々こぼたれて來たからかも知れません。もう少し氣持ちのいゝ旅のできるやうな世の中になつたならば……といつも思つてゐます。

本當の旅の味は、やはり、一蓑一笠の旅姿で歩かなければわからないだらうと思ひますが、幸か不幸か、今日の世の中では、なか〱實行のできないことになつてしまひました。

汽車に乘つてゐる間、よく本を讀み耽つてゐる人もありますが、わたくしは、どうしても本を讀むことが出來ません。それだけエナージイがないのかも知れませんが、しかしわたくしは、本を讀むより、やはり、ぼんやり自然を見てゐた方がいゝやうな氣がします。本はいつでも書齋で讀めるやうに思ひます。せめて旅をしてゐる間だけは、本を忘

れて、雲を見たり、空を見たり、自然を見たりしてゐる方がいゝやうな氣がいたします。

旅をします時には、二三册の外國の小說などを持つて行くこともありますが、やつぱりいつも讀まないでしまふといふことになります。「山家集」や「芭蕉全集」など持ち歩いて、斷片的に讀むのが一番面白いやうに思ひます。

旅では、出來るだけ暢氣な時間を持ちたいと思ひます。ですから、なるたけ人には會はないでゐるやうにしてゐます。昔の旅では、心からのホスピタリテイといふやうなものが味はゝれたでせうが、この頃のせはしい世の中では、人を訪ねるのも心苦しく思ひますので、自然、誰れにも會はないで歸つて來ることが多くなります。

芭蕉の句に

馬ほく〱我を繪に見る夏野かな

といふのがありますが、旅をしてゐる間は兎も角も、自分の生活なり、或ひは自分自身を、第三者として客觀視する餘裕を見出すことが大事であります。大きな自然の眞ン中に、素ッ裸な自分自身を投げ出し、生まれたまゝの何の衒ひもない自分自身の眞の姿を見出すことが出來る。――それが、旅の妙趣であるやうに思ひます。

旅の心は一種の宗教のやうな感じであります。

ホイットマンの記念日に

今年三月の二十六日はワルト・ホイットマンが死んでから三十回目の記念日になる。三月二十六日の午後四時半ころからいよ〳〵ワルトの臨終が近づいて來た。そしてその日の夕暮れころ恰度細い雨の音を聽きながらかれは死んだのであつた。

わたくしはこゝにかの民衆詩人、最も素人らしい、人間らしい詩人ワルト・ホイットマンの面影を忍ぶために、きはめて斷片的にかれについての日常生活を書いて見ることにした。

詩人ウォーヅオースとホイットマンには生活の上で似通つたところがあるやうに思ふ。詩の上でもさうであるが。ウォーヅオースは木の下などで、たいてい詩を書いたやうに聽いてゐるが、ワルトにもそんな傾向があつたやうである。

着物の好みなんかゝらいつてもきはめて自然のまゝであるといふ感じが兩者に通じてゐる。ワルトは大抵シャツやカラーなどもソフトを用ひてゐたやうである。

大きな白い手、だぶ〳〵の寛いだ農民らしい服、もじや〳〵の髯にかくれたやうな顏などを描き出して見たゞけでも、かれはアメリカ大陸の草の葉の中から生まれた自然兒であることが想像できる。

原稿を書くのにもテーブルの代りに膝を使ひ、ペンは鵞鳥の大きな羽根を用ひてゐたといふことである。

感興が湧いて來ると、そこにある紙を雜誌や新聞の紙であらうとまた書翰紙であらうと無差別に使つて詩を書いたといふことである。

青年時代にはかなりいろ〳〵な本を讀んだであらうが、生涯を通じての讀書家ではなかつた。いろ〳〵な新聞雜誌の切り拔きなどは非常にたくさん、かれの死後に發見されたといふことである。こゝいらから考へて見ても、かれがいつも生きた人間生活そのものゝ不斷の動きといふことに深い注意を拂つてゐたことがうかゞはれる。かれは何處までも生きた人間問題、生きた人間生活、生きた草の葉の詩人であつた。

本を讀むにしてもかれ一流の讀み方で讀むのであつて、幾册の本でも手あたり次第に讀むといふやりかたで、その數はあまりに多くなかつたといふことである。

本箱の中には三十册ばかりの本があつた。シエークスピヤ、聖書、ホーマー、ダンテの譯、ヲオルター・スコットの詩、ユーゴー、バアンズの詩、ルソーの「懺悔錄」ジョーヂ・サンドといふやうな。

新本を送つて貰つても、ちよつと覗いたばかりで床の上に投げ出して置くか、友人に與へるといふやり方であつた。カアライル、エマーソン、テニソンの物などはよく知つてゐたやうだが、イブセン、ラスキン、トルストイ、ブラウニングなどはあまりよく知らなかつたやうだといふことである。

ユーゴーの肖像畫がかれの部屋の窓に近く、黑い線の枠に入れて壁にかざられてゐたがユーゴーについてもたいした研究をしてゐたわけではない。

一八九〇年のかれの七十回の誕生祝はほとんどカムデンの市民全體によつて祝はれたものであつたがその翌年一八九一年の十二月十七日にかれは氣管支炎にかゝつた。それからひきつゞいてかれはいよ〳〵死のベッドにつき切りになつてしまつたのであつた。

十二月二十一日には臨終が近づいたと思はれたが、幸にも一時病は見直して來た。その頃はかれは病室にはたゞ一人の看護婦丈を置くやうにした。その後二三日半無意識の狀態であつたが、よほど苦しかつたと見えて病氣の苦痛か

らのがれるために、早く靜かに死ねるやうにしてくれといふやうなことを醫師にたのんだりした。

その年もともかく越すことが出來た。

一八九二年（七十二歲）一月二日辛うじて遺言狀の追加にサインをするだけのことができた。そのころのことであるが、頭を向きかへることができないのがつらいといふことを洩らした。

それから更に三箇月の間夜晝を通じて咳、胸の痛みが止むこともなかつた。その間にもかれは友人の手紙や、新聞を欲しがつた。

このころ最もかれをよろこばせた出來事の一つは、草の葉の十卷目の出版が出來上つたことであつた。かれはその百册だけを濃灰色の表紙にし、黃色な繪具で標題を書いてアメリカやヨーロッパの友人たちに「草の葉」出版についてのお禮のために贈つた。

一册一册にかれの手で筆を執ることができなかつたので、同文の手紙を附けて送つた。

その手紙はかれの最後の言葉であるが、ホイットマンの詩の全體を通してのみんな一緖にといふ心持ちをよくあらはしてゐる。

「一八九二年二月六日。

親愛なる友人諸君へ一言をさゝげます……私は目下床につき切りになつてをります、殆ど死ぬばかりに疲れて。けれども炎は絕えず輝かに燃えてゐます……偉大なる文學、政治學、社會學の見地からして、近代に於ける唯一の價値ある學說は、全世界の最善の人々が——婦人をも入れて——一緖に結びつかなければならぬといふことである。この道理がます〳〵明かになつて參りました……」

春の光り

わたくしは久し振りで數日床に就いてしまつた。自分が丈夫で働いてゐるころは、誰も病院のことなど考へぬが、さて病氣になると長いこと忘れてゐた病院生活のことを最初に思ひ出す。三年或ひは七年或ひは十二年の長い間病院の煤けた窓から、わづかに青空を眺めたまゝ仰臥してゐる不運な人たちのことが思ひ出される。健康な幸福な人たちにどうしてそのやうな不幸な病院生活の人たちの氣の毒な境遇が想像されようぞ。しかし事實は事實である。わたくしたちが歩いてゐるかゞやかな春の光りを浴びたこの大都會のアスファルトの上の高い窓を仰いで見るがいゝ。もしそれが病院の窓であつたら、屹度一鉢か二鉢のサイネリヤやヒヤシンスにわづかに生存の慰めを見出してゐる患者たちを見出すにちがひない。なかには一鉢の花すら持たないで、わづかに窓の外の煙によごれた庭木の新芽に還り來た春の日を思ひ出でては心を傷つける病人もあらう。

病んでも、病んでも人は生きんことを冀ふ。生に對する執着の强さを思ふといたましくもなる。

生くることの尊さ、生くることのわびしさ。

生くることのありがたさとわびしさの間に忍びつゝ生きてゆく心の眞劍さは病める人たちにのみあたへられた悲しさでもあり、めぐみでもあらう。

わたくしはいつもエマアソンの報償論を面白く思ふ。自然は比較的公平である。一方に於いて奪ふところあれば他の半面に於いて賦ふるところがある。近代人は豐かな交通機關をあたへられた。割合に樂な旅ができる。そのために自然を觀る眼がはなはだぞんざいになつてしまつた。白河の關を越えても、勿來の關を旅しても、昔の人たちが見

出しえたほどの深い靜かな觀照を持つことは不可能になつてしまつた。

人類はたえず合理的な生存權、一層自由な生活を求めてすゝんでゐる。同時に他の一面に於いて一層不合理な、一層不自由な生活法を作り上げつゝあることを忘れてゐる。

近代の都市生活はあらゆる意味に於いて、近代人が追ひ求めつゝある生活の光りと、幸福と自由とを内包してゐる。けれども同時に近代の都市生活ほど暗黒と束縛と人類の不幸とをかもしつゝある魔術師が他にありえやうか！

詩人ヴェル・アーレンはよく都市と農村との爭闘を描いた。ブルジョア對プロレタリアの爭闘が、やがては都市對農村の爭闘となる日が生まれて來ないであらうか。人類の魂を素直に成長せしむるためにもヴェル・アーレンの夢は現實の世界の出來事として歡迎せられなければならぬ時代が來るであらう。

わたくしは病み上りの疲れたからだを緣端に横たへて午後の日光を樂しんでゐる。

庭の隅の蕗の薹も黒い土の上に頭をもたげて來た。天城の松山のなかの少年がわたくしのために掘つて送つてくれた山躑躅も敷松葉の下から可憐な蕾を見せてゐる。わたくしは天城の松山のなかの少年を思ふ。數年前であつた、少年ははじめて伊豆を出て東京を見た。少年は疲れに疲れて天城の山にかへつて行つた。東京はどんなところだ？と山の人たちにたづねられた時少年の答はかうであつた。

「東京はごみの風が吹く。いやなところだ！」

少年は天城の松山のなかを小鳥のごとくかけまはつた。落日はかれにとつて都會人のいづれの幸福よりも、本質的な幸福であつた。かれは都會人の感覺から失はれた山の微風の幸福を見出してゐた。かれは自然そのものゝ美しさを知つてゐた。かれは青空を知り、白雲を知り、小鳥の聲を知つてゐた。

かれの言葉は短い。しかしながらかれの言葉のうちには儼乎たる眞理の聲が響いてゐる。かれの言葉はキリストのそれのごとく魂にひゞく。

わたくしはじつと庭の隅の山蘭の蕾を見つめてゐる。
天城の夕燒空をながめつゝ、けふもうたひつゝあるであらう少年の黒い瞳が泛かんで來る。

人は山に住むべきか、野に住むべきか、都市に生くべきか、子供たちのみが眞理を知つてゐる。
人はいかに生くべきか。子供たちのみが知つてゐる。
いかに生きることが一番正しい生き方であるか。子供たちにたづねて見るがいゝ。
芭蕉は俳諧の奧義をたづねられた時「子供等のなすところを見よ」と教へた。
すべての藝術は子供等の心から生まれて來なければならぬ。
すべての正しき生き方も亦子供らの心から。
わたくしたちの皮膚は老ゆ。わたくしたちの眼は衰ふ。しかしわたくしたちの魂にいつまでも夕燒空をうたふ子供らとともに夕燒空をながむるだけの素直さを生かして置かなければならぬ。

病める人たちの狭い窓にかけられた白いカアテンを春の風が吹きはじめた。
春の風の靜さを一番深く感ずることのできる者は病室の不幸なる人々と子供たちである。
春の光りのありがたさを一番強く感ずることのできる者は貧しい農夫と子供たちである。
春の土のあたゝかさを一番眞實に感ずることのできる者は貧しき旅人と、草の上に腹這つてゐる子供たちである。

七月の旅

半年振に東京を西へ立つた。

いつの旅でもさう思ふことだが、程ケ谷、戸塚、大磯あたりの松並木を見るたんびに廣重の筆に描き出された東海道の自然の美が、あの附近だけにはまだ〳〵昔のまゝに殘つてゐるのがうれしい。

いつも夏になつて箱根を越えるごとに眞つ白な百合の花と淡紅色の合歡の花をたのしみに眺めたものであつたが今年はまだ少し日が早かつたせゐか、一莖の百合も見なかつた。御殿場をさらに三島へ近く來たあたりで、わづかに咲きかけた合歡を一本見たのみであつた。

箱根の靑嵐に吹かれて西へ旅するごとにわたくしの頭にうつゝて來るものは西の故鄕の老親のことであつたが、もうわたくしには故鄕へ歸つても一人の親もない。それだのにわたくしは西へ西へと走つてゐる。父も母も新らしい墓の下へ眠つてゐるのに。

わたくしは汽車の窓の方を向いてそつと淚を拭いた。

東海道の旅の一番印象的なものは幾筋の川であらう、馬入川、安倍川、富士川、殊に雨の日の大井川のほとりは旅人の心を惹きつける。芭蕉の「さみだれ」の句なくとも、朝顏の傳說なくとも西に小夜の中山を控へ遠く松並木煙る島田と金谷の町を東西に分つた大井川の磧はあはれである。天龍川に西行を思ひ、富士川に芭蕉を思ふ。

岐阜に下りたるころはまだ日は鈴鹿山の上に殘つてゐた。白い砂の道が焦きつけられてゐて、町を行く人の影もき

はめて稀であつた。

宿に着いて涼を納れようとしてもたま〳〵吹いて來る風は燒くやうな白い砂の道と瓦の屋根をなでて來たものである。いかにも徹底した暑熱である。金華山の翠巒が軒に迫つてゐるのがせめてもの慰めである。

日が暮れるのを待つために長良川の橋の袂から船を出す。七日ごろの月が川下に傾きかゝつてゐる。

この前長良川に遊んだ時は小雨が降つてゐた。雨の中に船を行るのも興味深いものである。

船頭は水の中へはいつて船を川上へ押す。白い波が船首に碎けては散る。

橋の上には夕涼みの人たちが集まつてゐる。ちやうど精靈流しの夜だつたので、橋の上から長い絲を垂れ、それに精靈船をくゝりつけては靜かに川の面に船を流すのであつた。長い絲につるされた燭が徐々に流れの上へ卸される。船が流れへ達するとともに絲は斷たれる。燭をかゝげた精靈船は流れにつれて川下へ遠ざかつてゆく。かしこにも流れてゆく燭がある。亡くなつた人々の魂が遠い世界へ旅立ちするやうであはれである。

精靈送る灯もありて鵜飼かな

歌妓を擁した屋形船の燭と精靈船の灯が一つ闇の中に溶けて同じ流れの上を漂ふ。流れにつれ、浪につれて或る時は速く、或る時は緩く、或る時は高く、或る時は低く、川下へ川下へと月の下を遠ざかつてゆく、水の上二三寸の灯はやがていつとはなしに消えてしまふ。

金華山の黝い影を顧るかのやうに鵜飼見る船の燭は崖の下に集まつてゐる。うたふ者、醉ふ者、罵る者、笑ふ者、水は暗く絕壁の根を流れては消ゆる。

十八樓の跡はどこであらう。川上の闇を貫いて折々稻妻が走る。かすかな水鳥の鳴きわたる聲が聞える。

物賣る船が暗い水の面を絶えず隼のやうに上下してゐる。流れは急である。流れに影を投げて遠ざかつてゆく船の燭は旅人の魂を涯もなく誘ふ。

煙花を買へとすゝめられるまゝに買ふ。彼方でも此方でも美しい煙花が闇を縫ふてぱつと消える。

舷に凭つて水を掬む者、絃歌に醉ふ者、磧にしやがんで北斗を仰ぐ者の上にすでに秋近い風が吹いてゐる。

鵜飼の面白さは鵜飼を待つ間にある。煙花にも飽き、絃聲も絶え、月、山に落ちて星爛肝としてかゞやくころ、川上の暗い山のすそを焦がす篝火のあらはるゝ刹那、醉うたる男もさめ、うたゝ寢の女も艫に立つ。

鵜船は矢の如く流れを下つて來る。篝火は火の粉をちらして水をてらす。鵜は火の粉を浴びて水をくゞる。まさに凉味萬斛の戰ひである。

鵜船は矢の如く川下へ走る。篝火は遠ざかる。船の燭は消される。川の面には一隻の船も見えなくなる。暗い夜と、凉風と、銀河のみが川の面を支配してしまふ。

長良川に鵜飼を見た翌日わたくしは名古屋に立ち寄つた。

名古屋をめぐる郊外の蓮の花は忘れがたき夏の情趣である。

夏の祭りで、名古屋の町中が、酸漿提灯にかざられてゐた。御輿を擔ぎまはる人たちが一樣に綿を入れた赤い肩當てを背に負うてゐる姿が珍しくもあり、何となくほゝ笑まれる。

夜の最終の汽車で名古屋を立ち、逆に東海道を東へ東へと急ぐことにした。

むしあつい夜であつた。どうしても眠れない。うと〳〵とまどろむ暇もなくわたくしは夜明け前の沼津のステーシ

ヨンに下りなければならなかつた。
沼津から修善寺まで自動車を雇ふことにした。夜がまだ明けきらぬ沼津の町は眠つてゐた。
駿河、伊豆の海岸の村々の盆の習慣であらうか、家々の門口の軒下に竹で編んだ精靈棚がしつらへてある。ませかきも、茄子も瓜もすべてが戸外の棚にかざられてある。樒も線香も門口にそなへられてある。

この冬わたくしは伊豆の旅をした。その時はちやうど伊豆の里々では御火を見た。夜の闇の中に御火の火を見るのは何となくわびしかつた。

わたくしは今また同じ伊豆に來て精靈送りの朝の脱け殼のやうな濱の町を歩いてゐる。
濱には木槿が咲き、日向葵が露を浴びてゐる。伊豆の山には朝から杜鵑が啼いてゐる。
鶯が鳴いてゐる。
谿川には河鹿が鳴いてゐる。
わたくしは毎日山に登つては鶯を聽いてゐる。
今朝は霧が深かつた。
山鳩が直ぐ頭の上の高い松の木で鳴いてゐた。
朝霧が晴るゝころから瑠璃鳥が啼きはじめた。
瑠璃鳥は毎日同じ木立の中で鳴いてゐる。
日が暮れかゝつて、鶯が默りこんで、瑠璃鳥が鳴かずなればひとしきり蜩が涼しい聲を送つてくれる。
日が暮れてしまへば梟が鳴き、伊豆の山は燭一つ見えぬほどの靜寂をこめて更けてゆく。

わたくしは暗い川の縁で二人の山の女が淵を覗いてさゝやいてゐるのを見た。川のほとりに凪のまに〳〵光るものがあつた。
「ダイヤモンドだらうか！」
一人の女が低い聲でいつた。
二人の女はなか〳〵そこの淵からはなれなかつた。
闇の中を乘合馬車が來た。
カンテラの火に映つた旅の外國人はひどく疲れてゐるやうであつた。胸のあたりまで伸びた白い鬚が眼立つて見えた。カトリックの坊さまである。
河鹿の鳴いてゐる川をわたつてゆく黒衣の老人の胸の小ひさな十字架が不圖したはずみに螢のやうに光つた。

尊き傍

十四歳の春わたくしははじめて父の家を出て、十八里はなれた筑紫平原の眞ん中の或る小ひさい村の農家にあづけられた。菜の花のさかりのころであつた。その家のおかよさんといつた主婦はもと藩の士族の娘で、品のいゝ人であつた。もうそのころは五十にもちかゝつたであらうが、それでも色の白い田舍には珍らしい美しいおばあさんであつた。冬の朝でもたいてい四時に起きて、土間の竈に藁火を燃やしてわたくしのために御飯を炊いてくれた。わたくしもどんな冬の日でも五時には起きて、柘榴の下の流れで顔を洗つた。いつも青い星が頭の上にまたゝいてゐた。平原の中の眞つ直ぐな畦道をやがて半里歩いたあたりで夜が明け、そこからは城下の町になつてゐて、なほ一里半ばかり歩いて城のなかの學校へ着くのであつた。學校のかへりにはたいてい城下の町で燈がつき、畦道にかゝるころは幾千といふ鴨の群が薄暗のなかを羽音を立てゝ低く飛んで行つた。家にたどりついたころはすつかり日が暮れてゐた。庭の隅の厩では闇のなかで馬が秣をはんでゐる音がものういほどに聞えてゐた。

庭の眞ん中に風呂桶が据ゑられてあつた。雪が降る時は傘をさしかけたまゝ風呂の中へはいらなければならない野天風呂であつた。二里、三里の間燈一つ見ることもできない靜寂そのものゝやうな夜の平原の眞ん中に、しづかに降る雨の音をきゝながら野天風呂に浸つてゐる氣持ちは今でも忘れることができない。春も老い、散る花をじつと闇のなかにながめつゝ、ものうき蛙の音を聽くころになると、少年の心はたゞわけもなしに感傷の世界に惹きいれられてしまふ。そのやうな時、おかよさんはわたくしの傍をはなれず風呂の下を焚いてゐてくれた。たゞ默々として。

おかよさんはいつも默々としてわたくしのために働いてくれた。大雪の日にわたくしの箸を川に落したといつて

は、冷たい流れのなかに膝まではいつてさがしてゐたこともあつた。
春が來た。雪が解けはじめた。夜更けて本を讀んでゐると、解けてゆく雪の音がたまらなく人懷かしい心を喚びさます。おかよさんはその後長崎の造船工場に勤めてゐたたゞ一人の子を頼つて行つてしまつたといふ話を聽いたが、まだ生きのびてゐるのであらうか。わたくしはどうぞして尙一度おかよさんに逢つて見たいと思ふ。
もしすでにおかよさんが地下に眠つてゐるのであつたら、大地よ靜かにおかよさんの魂を抱いてくれ。

ストリンドベルクの「父」の主人公である大尉はつひに自分のたゞ一人娘ベルタを、眞實な自分の子として信ずることができない。大尉の哲學によれば世界中の父といふ父は實は一人として自分の子といふものを信ずることはできない。實際は他人の子であるかも知れない。それを知つてゐるのは母ばかりである。大尉は妻を信ずることができず、娘を信ずることができず、すべての女を憎みつゝ狂ひ死にをする。しかもかれは幼いころから家にゐた乳母の膝に突つ伏して泣かずにはをれなかつた。「ばあや、お前の膝を貸しておくれ。おゝ溫かな膝だ。お前の胸にさはりたいから、俯向いておくれ。あゝ女の胸によりかゝつて眠るのはいゝ心持ちだ。母親の胸でも、妻の胸でもな。だが母親の胸が一番いゝ心持ちだ。」大尉はかういつてゐる。
一生女を憎んでゐたストリンドベルクもなほ母のあたゝかな懷を忘れることはできなかつたであらう。どんなに女に裏切られた男でも、そしてどんなに女といふものを呪ふ男でも、幼い日の母の懷のなつかしさを忘れることはできない。
つひこなひだ本郷座で夏目漱石氏の「坊つちやん」が上演された時であつた。夢の場で誰かゞ美しい聲で子守唄をうたつた。わたくしは故郷を思ひ出した、亡くなつた母を思ひ出した。眼が熱くなつて來た。

子守唄よ。永久になつかしき母の懷よ。現實の世界にめぐまれたたゞ一つの美しい夢！

寒い日の夕暮れであつた。一人の若い巡査が一疋の可愛い仔犬の首に荒繩をかけて交番の方へ引つぱつて行きかけてゐた。仔犬は鳴きながら引かれまいとした。

「警察につれてつて殺されるんだな。可哀想に！」そこに立つてゐた人たちは、誰も仔犬をながめて溜息をついた。しかし誰もどうすることもできなかつた。

殺されるのを知つてゐるせゐか、仔犬は引き摺られても、蹴られても歩かうとはしなかつた。若い巡査は道に落ちてゐた針金を拾うて丸い輪をこしらへ、仔犬の首にひつかけた。そして前よりも一層手荒に仔犬を引つ張つて行つた。仔犬は死ぬほどに鳴いた。

小ひさな魂はおびえつゝ夜の街を歩一歩、死に近づいて行つた。可憐なる犬の鳴き聲よ。お前は何の罪もなくして人間に殺されるのだ！

人々は殘忍な街頭の出來事を見るに忍びなかつた。しかし誰もどうすることもできなかつた。仔犬は引き摺られつつ泣いた。

ちやうどその時であつた。赤ん坊を背負つた若いおかみさんが、若い巡査の前へ立ちどまつた。

「あたしにこの犬をくださいませんか？」

「ほんたうに飼ふのならあげます。」

「家でまちがひなく飼ひます。」

「ほんたうに飼つてやつてくださるのなら、この犬をつれておいでなさい！」

若いおかみさんは可憐な仔犬を抱いて路地へはいつて行つた。
「あゝ、僕もこれで助かつた。犬を殺すのは可哀想だからなあ！」
若い巡査は救はれたやうな顔をしてさう言つた。通りがかりの人々もまつたく救はれたやうに感じた。
赤ん坊を背負つて、仔犬を抱いてかへつて行つた若いおかみさんの姿は尊くさへ思はれた。いかにも美しかつた。
その夜だけは、この大きな都會すべてが救はれたやうにすら思はれた。

北見の友へ

光二様

東京も今年は春になつて雪が多く、山の手では、屋根にも木蔭にも二月からの雪が解けがてに白く殘つてゐます。去年の暮から九州にかへつてゐましたし、二月は伊豆の山で送りましたので幸ひ東京の意地惡い寒さにはあまり惱まされませんでしたが、それでもまだ一度や二度は忘れ雪の寒日に出つ會すにちがひないと覺悟はしてゐます。北見の雪の中で働いておいでになるあなたや堅三さんのことを考へますとこんな意氣地のないことは申されませんが。

このころは久しく大和の富本さんからもおたよりがありません。去年の夏法隆寺からのかへりに、富本さんの窯を、見せてもらひに行きました時一日を樂しく大和川の畔で遊ばせていたゞいたきりおたよりをいたゞきませぬ。

わたくしはあの歸りに奈良から、木津川をさかのぼつて伊賀上野に芭蕉の故郷塚や蓑虫庵をたづねて東京へかへりました。

去年の半分は旅で暮しました。春は大和めぐりをし、夏は大和から西國九州をめぐり、秋は伊賀からかへると間もなく信濃も越後境まで歩きました。

今年もできることなら成るたけ旅で過したいと思つてゐます。ぜひ一度は野付牛にも寄せていたゞきたいと思つてゐます。

またいゝ若い馬をおもとめになつたさうですね。よく走る馬ださうですね。廐をお拵へになるのが骨が折れませう。牛もまた子を產むといふお話ですね。馬たの牛だのがだん〱殖えて行つて　しまひには舊約のヨブのやうな生活

をなさるのではないかなどと妻ともお噂をしては冗談を言つてゐます。
緬羊はどうなさいました。去年、富本さんが東京へ出ておいでの時英吉利のリーチ氏から贈つて來たといふホームスパンの上衣を着ておいでゝした。古い手工時代のまゝの織機を作つて、それで織つたものださうです。どんなにもみくちやにしても皺一つできないものでした。
あなたの緬羊が早く殖えて、かねての御計畫通りに早くホームスパンの服地ができればいゝと思つてをります。
わたくしたちのすべての生活が今日のやうに機械化されて來たために、わたくしたちの魂までが硬化してしまつたやうに思はれてなりませぬ。硬化したるがゆゑに、もう今ではひたすらに強い刺戟にのみわづかに生活といふものゝ意識を見出してゆくやうになつてしまつたやうに思はれます。
ちよつと近代の都會生活が生んだ藝術を見てもわかります。素直な、生まれたまゝの人間の魂から溢れて來たものは受け容れられないで、歪にゆがめられた小惡魔的なものばかりがのさばつてゐます。
人間は上つ面の刺戟にのみ生きてゐて、魂の底に靜かに生を思ふこと、生を味はふこと、感謝すること、悲しむことを忘れてしまつてゐるやうに思はれます。
生きることが究竟の目的であつた筈ですが、生きることがたゞ一つの手段になつてしまつたやうです。
わたくしたちの生活をつゝむ尊い環境の一つとして心からのたゞ一つの壺を作つてくれるやうな工匠がだん〳〵少くなつてしまつて、機械油の香につゝまれた家具のみがわたくしたちの部屋に流れ込んで來るやうになりました。
文學はたしかに若い人たちの心を淨化する筈です。しかしながら誤つた近代の都會中心、刺戟中心の文學が今日農園の若い人たちの心をいかにも浮薄にしてゐるといふ悲しい事實をあまりに多く見せつけられます。
わたくしたちは正しい文學のために、いかに多くの農園の若い人たちが正しい苦しみを知り、悩みを知り、憤りを

歸りつゝあるかといふことをも見出します。そのたんびにわたくしたちは勇氣づけられます。しかしその半面に都會中心の文學によつて、文學を遊戲視しつゝある人々のすくなくないのを田園の間に見出す時、心の暗くされることを感じます。

都會の文學ほど動きの早いものはないでありませう。一つの波はさらに一つの波を誘うて、あわたゞしくもいろいろな小手先きの藝術論が頭を擡げてはやがて消えて行きます。

農園の底にはたゞ一つの力が眠つてゐる筈です。人生に對するたゞ一つの根深い疑ひや、苦しみや、よろこびが潜んでゐる筈です。「天路歷程」を書いたジョン・バンヤンの生涯の信仰が潜んでゐる筈です。都會文人のラテン語萬能を冷笑した田舍詩人ロバアト・バアンズの大膽さや熱情が流れてゐる筈です。

大和平原の眞ん中で、法隆寺だの、生駒だの、奈良だの、畝傍だのゝ山々を周圍に立てならべ、默々としてたゞ一人で土を捏ね、窯を焚いて渾身の力をたゞ一つの土くれの中に投げ込んでゐる富本氏の生活を羨ましく思ひます。

わたくしたちはたゞ一人で默々として働いてゆくより他に道はない筈だと思ひます。誰が藝術の至境を見出すことができませう。

たゞ一人で無器用な手で、まつしぐらに土を掘り、土を捏ねて見るより他に道はありますまい。

誤つた道を歩いたまゝ死ぬとしても愚痴は言ひますまい。お互に行きたい道を、自分一人の道として歩いて見るだけです。

芭蕉の道は芭蕉一人のみ歩きました。

西行の道は西行一人のみ歩きました。

イプセンの道をよしんばハウプトマンが歩かうとしても、或ひはガルズウォージーが歩かうとしても、それは無駄

なことです。

イブセンの道はイブセン一人が歩かなければなりません。

光二さん。

兄さんや堅三さんがあの地震の際思ひ切つて東京の生活を捨てゝ北見の雪の中に百姓生活をする決心をなさつた時わたくしたちはずゐぶんあやぶみました。

でも、あなたたちは自分で凍てついた土を掘り、小屋を建て、冬を忍んで、馬を驅り、土を耕して豆を作り、麥を作つてすでに二冬を雪の中に送つておしまひでした。

あなたは卒業論文の「ウヰリヤム・モリス」を書きかけたまゝ北見の農夫になつておしまひでしたね。あなたは詩人獨歩が夢みてゐたことを、實現しておしまひでした。あなたは獨歩より强うございました。

あなたが初めて自分でお作りになつた小豆と隱元を、爐の傍で選り分けて、袋に入れて送つて下すつた時は、わたくしも妻ももつたいないやうな氣がして瞼の裏がほてつてしまひました。

あの地震の數日後高木さんの庭で、一合の小豆をあなたと堅三さんとわたくしと妻と四人で喰べることになつた時のうれしかつたことは今にも忘れません。あの一合の小豆は瀧野川の人から貰つて來たのでしたが、わたくしたちはひもじいおなかをこらへて咽喉をぐびつかせながら一合の小豆の煮えるのを待つてゐましたね。しかも妻が土鍋を抱へたまゝ石に蹴つまづいたためにあなたも堅三さんも一粒の小豆も召し上ることはできませんでしたね。

あの時のあなた方のお氣の毒な顏。

光二さん。

今夜もわたくしはあなたが送つて下すつた小豆を鍋に入れて火鉢にかけてゐます。妻は風邪をひいて寢てゐます。

わたくしたちは大地震のをりのあの小豆の話をくりかへしてゐます。

わたくしはあなたのお手紙を妻に讀みきかせてゐます。

堅三さんは毎日雪の中を馬にプラウを附けて田を鋤く稽古をしておいでださうですね。そのお話を聽いたゞけでもあなた方の生活が尊く思はれてたりませぬ。あなた方は立派にあなた方の尊い生活の道を歩いておいでゝす。羨ましく思ひます。

あなたも馬がたいそう上手におなりになつたやうですね。

炭燒きの人や、その若い娘さんたちは山を捨てゝ北見を去つてしまつたさうですね。

實際あんな人たちの方がずつと人情があるやうですね。

北海道においでの中にはまたどこかでその親切な人たちともお逢ひになる日があるかも知れませんね。あなた方のためにその日を祈つてゐます。

長靴下を編んでお送りするお約束でしたが妻がこのごろ寢てばかりゐますので、少しあたゝかになりましたらお送りいたします。

いたゞきました光悅の傳記は大變うれしく拜見いたしました。

京都にはよくゆきますが鷹ヶ峯の跡はまだたづねたことはありません。そのうちぜひ一度たづねるつもりでをります。

光悅がこの世の人とも思へぬほど心の美しい人であつたといふ話を讀みますたんびに、わたくしはあなたのことを思ひます。

そちらではまだなかなか雪も深うございませう。

こちらではまだ雪は殘つてゐますが、さすがに二三日前から、木立の中に鶯が鳴いてゐます。
御大事に。
若い馬や緬羊たちの上にも。

旅

柿右衛門の家を出る時わたくしは庭に青い柿の實が幾顆となくたわゝに栞(な)つてゐるのを見た。初代柿右衛門がいつもその柿の下に立つて赤繪の工夫を凝らしたと傳へられてゐる老木である。

道は二十戸ばかりの谿間の軒並に沿うて下る。陶土を搗(つ)く水車の音が小川の畔にものうげに聞える。去年柿右衛門の家を訪ねたのは丁度七夕(たなばた)のころであつた。村の子供たちが露を帶びた笹を擔いで山を下つたりしてゐた。今日はもう七夕の笹も枯れてしまつてゐた。

立秋は過ぎてゐたが、まださすがに日中、草いきれの道をたどるのは苦しかつた。わたくしは草の路を歩みながら、數年前初めて柿右衛門を訪ねた秋、庭の柿の實を貰つて東京の郊外の家に持つて行つて、種子を播いたことを思ひ出した。

翌年の春になつて四株の柿の芽が出た。まだ春は淺かつた。そこにはよく小鳥が來ては鳴いてゐた。わたくしは杭を樹て、繩を結んで柿の芽を、人の足に踏まれないやうにして育て上げた。根にまつはる草を刈り、落葉した後には肥料をやりして三年の秋になつた。後にこゝに住む人の子供たちが、せめて名工の俤を偲ぶためにもと思ひながら、柿の木の大きく伸びてゆくのを樂しみに待つてゐた。

去年の夏鹿兒島、霧島の旅を終へて東京に歸つた時は柿はすでに一尺五六寸にも伸びてゐた。そして東京の郊外の家に歸つて半月經(た)つか經たぬうちにあの恐ろしい地震のために、わたくしは妻と二人でその小ひさな柿の木の傍にテントを張つて、幾夜をかしのがなければならなかつた。三日の夜は恐ろしい雨であつた。嵐であつた。四日、五日、

六日と夜も晝も生死の間にさ迷ふ心地で過した。
七日であつたらうか、八日であつたらうか。わたくしたちが家を追はれたのは。私たちはあの恐ろしい、殺伐な不安な東京の眞ん中へ新に家を探して歩かなければならなくなつた。雨が降つてゐた。簞笥も、本も、行李も雨ざらしになつてゐた。わたくしは石油を注いで燒き捨てた方がどんなにかせい〳〵するか知れないとすら思つた。
わたくしは風呂敷のなかに梨を五つと玉葱を少しばかり持つてゐた。妻は六本の蠟燭とマッチと角砂糖を少しばかり抱へてゐた。わたくしはシャツ一枚にズボンで、長靴を穿いてゐた。水筒を肩から懸けてゐた。
草の上には家を燒かれた人々が寢ころんでゐた。
大塚の終點で牛どんを喰べるために小一時間も待つたが、間に合はなかつたので、空腹を抱へて戒嚴令の町を歩いて行つた。どこにもこゝにもわたくしたちと同じやうに家のない人々が疲れ切つた眼をしばたゝきながらうづくまつて居た。
わたくしたちを追ひ出した人々のあさましい心を憤るよりも、むしろ草の上、地の上、石の上に眠つてゐる人々に對する同苦相憐の涙が肚胸を突いて來るのであつた。住むべき家を追はれ、風呂敷包み一つを抱へて、常もなく夜の道をさ迷ふ自分自身を顧みて、わたくしはむしろありがたい心を經驗することができた。住むべき家を持たぬ人々と共に夜の町をさ迷はなければならぬといふことは、涙ぐましい氣安さを感じさせた。
わたくしは草の路を歩きながら去年のその夜のことを思ひ、郊外に遺して來た柿右衛門の柿の木のことを思ひ出した。家を追はるゝことは詮ないことであつた。しかし柿右衛門の柿を遺して去ることは殘り惜しかつた。秋になつたら樂しまうと思つて柿の周圍に播いて置いた向日葵や、百日草や、夕顔も踏みにじられてしまつた。
わたくしは一年經つた今日なほ草いきれする田の中の道を歩きながら憤りを感じてゐる。悲しみを抱いてゐる。

わたくしはあの刹那の何物をも持たぬ者の心の悦びをこの上もなく尊く思つた。しかも一年後の今日、わたくしは柿右衛門の青磁の香爐を抱へながら停車場へ急いでゐるわたくし自身を見た。

田鶏笛を欲しがつた芭蕉の小ひさな欲念の尊さを思ふ。

柿右衛門の家を辭して停車場に着いてから長崎行きの汽車が來るまでには二時間餘の間があつた。川を隔てた名もない岩山に登つて暇をつぶすことにした。深い谿に沿うて家のあるところ必ず白い陶土が積まれ、窯の煙が立つてゐる。大河内、三河内、有田、南川原、幾十の谿の間悉く柔かな松の山を負うた陶工の家のみである。わたくしは不圖有田の町を抱く山と山との間を通じて北に十里餘を隔てた故郷の山を見出した。嶺は夕暮れの霧につゝまれてゐた。あすこには亡母の田舍があつた。白い蕎の花が咲いてゐた。よく酒を飲む人のいゝ若い巡査がゐた。かれは酒を斷つて熱心な傳道師になつた。逢ひたいと思ふ親切な老婆がゐた、不運な女であつたが。雨の降る日など柘榴の花の下の窓からぼんやり城下の方を眺めてゐる女だつたが。橋の上でよくわたくしを待つてゐた氣のやさしい與一もゐた。與一は人を斬つて監獄で死んだ。與一とわたくしはかいつぶりの鳴く澤で鮒を釣つた。

日が暮れてしまつてから長崎行きの汽車に乘つた。稻田を吹く夕風は肌寒いほどに思はれた。

東の空が遠い町の火事のやうに明るくなつて來た。黝い山の影がくつきりと明暗の輪廓を初秋の空に描き出した。砂丘を聯想させるほどの低い山の上に十五夜の月が出た。まつたく月に比べて山はあまりに低かつた。家の軒よりもわづか數尺のみ高いやうに思はれた。送り火を焚く家といふ家には幾十となく盆提灯が點された。山のあるところ、谿のあるところ、家のあるところ、滿月の光りを浴びた盆提灯が丘から丘へとつゞく。大村灣に沿うて二十里の間、滿月下の盆提灯に飾られた山と水を滿喫しつゝ旅人は初秋の風を浴びて長崎に入る。

あの山この浦すべて人は死に、人は生き、人は思ひつゝ旅をめぐる。月の下に白い雲が山をつゝんでゐる。秋の色はすでに水にも空にも調うてゐる。旅人の心は沈む。

七月に東京を立つたが、玉蜀黍の葉のうら枯れたのを旅で見るやうになつた。

今年は七月に讃岐、伊豫をめぐつたが、そのころから旱魃の聲を聽いた。一本の桔槔の綱に家中の男も女もかゝつて、割れた稻田に水を注ぐのを讃岐富士のあたり到るところで見た。京都に歸り、大和に入つても山の上の祈雨の炎を見た。中國では一人の赤ん坊だけを家に殘してほとんど夜つぴて家中の人々が田に水を運んでゐるのを見た。まだ夜霧が漂うてゐる朝の田の畔には夜つぴての水掬みに疲れ果てた若い男たちが、草の上にいぎたなく眠つてゐた。雨乞の火が幾百町歩の山を燒いたといふ話も聞いた。岡山附近では川に沿うた一村が燃えつゝあるのを見た。川には一滴の水もなかつた。人々は磧の砂を叩きつけて火を消してゐた。またある山沿ひの村では土瓶の水を一株々々の稻に注いでゐるのを見た。

伊賀上野に芭蕉の故郷塚を訪ねるために京都を立つた日は朝から秋らしい雨が霏々として、京の町のアカシヤの並樹にそゝいでゐた。八十日振りの雨だと叫ぶ人々の聲は更生の喜びの言葉であつた。

愛宕、比叡を徂徠する白い雲のさらに密ならんことを祈りながら奈良ゆきの汽車に乘つた。燒けた田の中に僅かにたゝへられた雨を見るだけでも嬉しかつた。百日紅が雨に打たれ、美しい木津川の磧が靜かな雨に濡れつゝあるのを見ただけでも救はれたやうな氣がした。四國や中國で見た野良の人々の喜びに滿ちた顏を想像する時、八十日振りの慈雨を見出しえたことは、他人ごとならぬ喜びであつた。雨に摧かれたる木を見ても頽れた土堤を見ても「もつと降れ、もつと降れ！　地が壞れるほど降れ！」わたくしはかう思つた。

自然の偉大な力の前に跪いた刹那に人間は始めて自分等の力の小ひさいことを知ると共に、隣人を相思ふ美しい心を見出す。去年の震災三四日の間にわたくしたちはそれを經驗した。今年またわたくしは稀有な旱魃の田園においてそれを經驗した。一様に大自然の前に苦しむ時ほどお互同士の心が浄められることはない。

自然の力を忘るゝ時、自然の深さを忘るゝ時、わたくしたちの都市生活も田園生活も利己と排擠の息づまりさうな空氣につゝまれてしまふ。人間の生活から潤ひが失はれてしまふ。

自然を思ふことを忘るゝ時、自然の恐ろしさ、自然の深さ、自然の無限を忘るゝ時、わたくしたちの生活は腐爛なものとなり、わたくしたちの藝術は汚される。自然を忘れたる時人は俗人となる。エゴイストとなる。旅人は風の聲を聞くがゆゑに救はれる。旅人は雲を見るがゆゑに救はれる。芭蕉もさうであつた。西行もさうであつた。

京都、四國、九州の旅から一ヶ月目にわたくしはふたゝび駿河灣の漁村に歸つて來た。さくさくと黍を刈る鎌の音が菩薩の耳に秋風のやうに響く。濱では二三日來近年にない鰯の大漁だといつて夜を徹して松明を點して、男も女も砂の上を馳けまはつてゐる。一里二里の波の上を海鳥の群が靜かに輪を描きながら飛んでゐる。聲は千鳥のやうにあはれである。濱には大漁の印に赤い幟が立てられる。地曳網を引く聲が朝まだ薄暗いころから海鳥の聲のやうに寂しく山に響いて來る。刈り殘された玉蜀黍や砂糖黍の葉摺れの音がかさ〳〵と秋の日を急ぐやうに裏山へ消える。旅の疲れにうと〳〵と眠りながら松山の瑠璃鳥の聲を聽き、椽の下のこほろぎの聲を聽く。東京にも歸りたくない。こゝの濱にもいつまでゐようとも思はぬ。旅にも疲れた。

七月から來て今日幾十日目にかはじめて水を隔てゝ伊豆半島を見る。夏の間は霧のせゐか山一つあるとも思はれなかつた海の上に戸田、土肥の濱が僅か二三里のへだたりを置いたくらゐに近く見える。天城にもすでに秋が來てゐ

る。夕方になれば天城の嶺に白い雲が下りる。虹が立つ。

夜、濱に出れば伊豆の海岸の町の燭が水を隔てゝ五つ六つ七つと見える。海を越えて伊豆の燭を算へながら眞暗な濱邊を歩いてゐると、妙な寂しい氣にもなる。銀河が中天から南の太平洋へ滑り落ちるやうに傾いてゐる。

人間の住むところ、何處にも劇的な氣の毒な記錄がある。

今夜は三保に二尺球の煙花(はなび)を打ち揚げるといふことである。濱の人に誘はれたが、遠い松原を歩くのも億劫なので、家に寢ころんで山越しに煙花の音だけを聽く。

去年の秋淸水のある老煙花師は火藥の爆發のため二人の子供を失つた。今年の春の煙花でかれはまた最後の一人の男の子を失つてしまつた。老煙花師は今たゞ一人でこの世に殘された。かれは何の樂しみもない世に一人殘るよりは煙花の犧牲になつて死ぬるが望みだといふので、今夜特に大仕掛の煙花を打ち揚げるといふことである。

九時十時になつても、波の音の間に、山を越して遠い煙花の音が夜の山に谺(こだま)して聞えて來る。十一時になつても時折遠い煙花の音が聞える。老煙花師のいたましい心を思ひながら谺する煙花の音を聽く。幽谷の嵐の如き寂しさが湧く。

久能つゞきの裏の松山では梟(ふくろ)が鳴いてゐる。

今朝濱には若い女の死體が流れついた。

午後老いさらばへた配達夫が濱から上つて來た。二三年前、澤に芋を洗ひに行つたかれの妻は誤つて溺れ死んだ。兩方の手に藻草を摑んだまゝ死んでゐたといふことである。老配達夫は、遺された五人の子供を抱へながら、淸水から三里の道を毎日往復してゐるのである。かれの愚直さうな、泣くにも泣かれないといつた風な眼を見てゐると、大

きた自然の前に、鐵の如く冷たい宿命の前に置かれた人間の小ひさゝと、あはれさを想はずにはをれない。

午後の一時ごろになると必ずかれのいたましい姿が、刈りのこされた黍畑の間に見える。靑い大濤を背景にして、かれは歩むともなく走るともなく草いきれの道を通つてゆく。聲をかけてやるとかれは泣くやうに笑ふ。腰には一足の穿き替への草鞋が結びつけられてゐる。子供のやうな海軍帽は却つて老配達夫の姿に傷々しさを增す。人間は生きてゐる間は働かねばならぬ。けれども働いても働いても心の寂しさと、窮乏の脅迫から遁れることのできない愚直なかれの運命はあまりに氣の毒である。「人は悲しむべく作られた」といふロバート・バアンズの歎きは、今日もなほ到る處の田園に見出される。

二人の濱の男が二尺足らずの小ひさな柩を引つ提げて來た。後からは濱で地曳網を引いてゐた男たちが八九人ぞろぞろと寺の門をくゞつて來た。

寺のおかみさんは庫裡の横に鰯を干してあつた二つの臺を持つて行つて小ひさな柩の臺にした。初めて私たちがここに住むやうになつた時、水甕の臺にといつて、おかみさんが持つて來てくれた臺も、棺の臺であつたことを今日初めて知つた。今日もまだ水甕の臺はそのまゝになつてゐる。私の窓の直ぐ下には古い塔婆が雨風にさらされたまゝ捨てられてある。水を運ぶバケツは閼伽桶である。

今日は久し振りで在家に法事があつたので住持は、藷畑の仕事を捨てゝ、法衣を風呂敷に包んで自轉車で町まで下りて行つた。

町から歸つて來て汗を拭く暇もなしに、住持は袈裟を引つかけて小ひさな柩の前で短い經を讀んだ。人々は柩を大松の下に運んだ。二三人の男が鍬を持つて來て、淺い穴を掘つた。ほんたうに雜作もなく十分ばかりで墓穴を掘つた。

恐らく少しひどい雨が砂を叩きつけたら、小ひさな柩はあらはに地の上に流れ出して來るにちがひない。住持が袈裟で犬黐の下に立つた時は、五六人の男たちが聲高く笑ひながら濱の方へ下りて行つた。

日が暮れた。伊豆の燈が波をへだてゝまたゝき初めた。薄暗い庫裡には住持が一人でちびりちびり酒を飮んでゐる。

住持は愛すべき禪僧である。わたくしはかつて住持が默坐してゐるのを見たこともない。須彌壇の前に讀經してゐるのを見たこともない。今朝は庫裡の繡眼兒籠の上に飛んで來た山の繡眼兒を追つかけてゐた。朝から莓畑の水を掬み、濱に出て砂を掻き、夕暮になれば野天の風呂の火を焚き、時としては淸水まで自轉車を走らせて濁酌を樂んで歸る。かれは濱の人と少しもちがはぬ生活をしてゐる。けれども好々爺然たるかれの風貌のうちには愛すべき飄逸さがある。莓畑の中に働かせて置いても、濱に坐らせて置いてもかれは百年前の禪門の徒である。今の世の理窟のみを並べる坊さまではない。

「枕經を讀むごとに、新佛の顏を見なければなりませぬが、何十年見てゐても死人の顏はいゝものぢやありませぬ。笑つたやうな顏をして死んでゐる佛もありますが、中にはずゐぶん恐ろしい顏をしてゐる佛もあります。氣味の惡いものですなあハツハツハツ……」緣に腰を卸しては星を見ながら住持はこんな話をする。

庫裡で唄をうたふ聲が聞える。濱の聲自慢の男である。醉へばうたふ。醉へば夜が更けるまで村中の家々を訪ねて自慢の唄をうたふ。日露戰爭の話をする。自分で自分の唄が面白くて眠れないのである。「日本にこのくらゐいゝ土地はない！」かれは二言目にはかく言ふ。そして酒を飮んでは唄をうたふ。

「おつさん、今日は葬ひが二つあつた。酒を一升おごれ。」聲自慢の男は住持と向ひ合つて、卓を圍んで夜が更けるまで飮んではうたふ。

犬黐の幹が、夜の目にもほの白く浮いて見える。

とにかくもあなた委せの年の暮

此の次は我身の上か鳴く烏

小言いふ相手もあらば今日の月

五十年踊る夜もなく過ぎにけり

露の世は露の世ながらさりながら（一茶）

東京を立つ時わたくしは芭蕉と一茶の句集を持つて來た。二人の句を讀んでゐると、やはりほんたうな句が生まれるのは四十五十だといふ感じがする。ほんたうな藝術が生まれるのはそのころだと思ふ。不惑といふが實は眞個の惑ひはそのころから漸ゝ深さに徹してゆくのであらう。四十年五十年の人生の苦惱疑惑がその波紋を狹くし、小ひさくし、淵を深くし、死生の境に人生を凝視するに至つてはじめて枯淡な藝術が生まれるにちがひない。衒はず、あせらざる人間の眞實な諦めの際が生まれて來るにちがひない。秋の風が草山を吹く如き自然な藝術、水の如く雲の如く自然な藝術は、一つの宗教的な悟りの後に築き上げられるにちがひない。

從安永六年。出舊里而漂泊三十六年也。日數一萬五千九百六十日。千辛萬苦。一日無心樂。不知已而成白頭翁（一茶）

一日も心樂無かりし五十年の一茶の生活の收穫が、かれの晩年の俳諧であつた。

故郷やよるもさわるも茨の花

凡そ俳諧史上の人々のうち一茶ほど家庭的に不運な人は稀であらう。非道なるかれの弟、かれの繼母！　かれは妻に對しても不運であつた。生まれた子は後から後からと死んでしまつた。恐らく一茶の不運は、ベートーヴェン以上

であつたであらう。ミレエ以上であつたであらう。かれの一生は舊約の約百にも似た一生であつたであらう。

わたくしは今夜濱を傳うて一里西の山寺に病めるS氏を訪ねた。

昨日まで四人の幼い子供達が東京からS氏のところに來てゐたのが、暑中休暇もおしまひになつたので二人は東京に、二人は信濃へと歸つてしまつた。急に子供たちが立つてしまつた後の寂しさを思ひやりながら、わたくしは三年餘も病んで海濱から海濱へと歩いてゐるS氏を訪ねた。子供たちを停車場に送つて歸つて來たS氏の奥さんは眼を赤くしてゐた。近ごろになくS氏も床の上に起きたまゝ興奮して語つた。今の世に珍しいほどの心の美しいS氏の一家にもかの一茶にも似た悲しみがあつた。

夜が更けてしまつた。私は眞つ暗な濱邊を歩いて歸つて來た。四人の子供たちを手離してしまつてぼんやり寢床の上に浪の音を聽いてゐるS氏や、眼を赤くしてゐたS氏の奥さんのことを考へながら。美しい夜空であつた。人と人とが相交渉するところには必ず茨の花がある。どこにも一茶の歎きはある。

強くなれ強くなれ！　S氏も強くなれ！　S氏の奥さんも！

わたくしはわたくしの心に向つてから叫んだ。

明日は二百十日である。海は荒模様である。

S氏の病氣のこと、島田から訪ねて來てくれて夕方歸つて行つたY氏のことなどを考へながらわたくしは時折立ちどまつては暗い海を見つめた。

仙石原

箱根仙石原の大日本聯合青年團夏期講習會に赴くため東京驛を立つたのは朝の七時であつた。立秋三日さすがに空は日本晴れの、白雲の悠々たるもすがすがしい。小田原驛には舊知の小田原小學校の校長S氏がわざ〳〵出迎へて下された。富士屋の新しい乘り心地のよい自動車の乘り初めをわたくしが試みたといふわけである。恐縮である。早川に沿うて自動車を驅る途中たま〳〵一隊の歩兵の行軍に出會ふ。通り過ぎるころ校長さんは「殿下だ！」といつてあわてゝ帽子を脫がれた。わたくしは通り過ぎて後しばらくしてからそれが秩父の宮さまであつたことに氣付いた。埃にまみれて行軍してをられる殿下の前を自動車で走るといふことはいかにも恐縮なことであつた。湯本、塔の澤と路はいよ〳〵迫り、流れはいよ〳〵急になつて來る。もし、初夏のころであつたら河鹿の鳴く音を聽くであらうなどと想像してゐる間に前山眉に迫り、後山霧に隱れ、しば〳〵老鶯の聲に魂を澄ます。

講習會場は仙石原の古刹である。本堂に詰め襟服の人、袴の人、いかにも若い日本を背負つて立たうといふ、健氣な人たちが暑氣にもめげず日本の涯から集まつてゐる。わたくしの前にT先生がお話をしてをられる。次の部屋で襖越しにお話を拜聽してゐるとさかんに老鶯が鳴く。山氣神に迫るの感がある。

青年團の人々の會合はわたくしにとつては初めての經驗だつたのでいろ〳〵な興味や、刺戟を見出すことができた。そこに集まつてゐる質實な若い人たちを見るだけでもわたくしは日本といふものゝ明るい明日を想像することができて愉快でならなかつた。

かの近代的な最も膚淺な都會病にとりつかれてゐる銀座通りの亡國的な喧噪蕪雜に對して何といふ靜寂であらう。

何といふ閒古であらう。何といふ底力であらう。
膚淺なるものは常に浮きざわめく。裡に頼む所あり、內に力を貯へたるものは靜かに生き、靜かに思惟しつゝある。わたくしたちは日本を愛する。日本の山川を愛する。日本の人々を愛する。そして決して絶望しない。靜かな雲の下に、靜かな草のなかにつねに靜かに人生を思惟しつゝある若い人々を見出すことのできる間は。
社會の表面に動いてゐる千人萬人の力は恐るべきものではない。最も恐るべきは社會の底に生きてゐるたゞ一人の心の力である。
外面にざわめいてゐる民衆の力よりもさらに强きものは靜かなたゞ一人の力である。
わたくしたちはたゞ一人の力の强さを知らなければならぬ。自己一人の力の强さを覺らなければならぬ。
仙石原の草の中に靜かに集まつてゐる四十、五十の個々の力はやがて日本中にその一つ一つの力を根强く押しひろげることであらう。そしてわたくしたちの日本をもつと住み心地のよいものとしてくれるであらう。
わたくしはそんなことを想像しながら二日間の講演をつゞけた。いかにも愉快なことであつた。

午後わたくしはT先生と仙石原を歩くことにした。
仙郷樓の欄干にもたれて仙石原の草をながめてゐる間に、わたくしはどうしてもじつとしてをれなくなつたからであつた。
仙石原はわたくしにとつては未知の懷かしい世界であつた。かつてわたくしの唯一の親友であつた田中獨笑がまだ士官學校の入學試驗準備時代に一管の笛を携へて富士の裾野から乙女峠を越え仙石原を横切つたことがあつた。かれは詩人であり、哲學者であつた。かれはたまく仙石原の草の中に愛笛を失つてしまつた。笛を失つたかれの悲しみ

は氣の毒なほどであつた。それ似來仙石原の名はわたくしの記憶に深く刻みつけられてしまつた。

しかも後十年、田中は千葉の歩兵學校時代に、長い間の心的生活の苦惱にたゝきのめされて自殺をしてしまつた。

今日も仙石原の草は青く、道は草を縫うて丘より丘へと旅人の心を暗くしてゐる。

かれが死んでちやうど十三年目にわたくしは仙石原をながめてゐる。じつと草のなかを見つめてゐるとそこには田中がまだ草を分けて笛を探してるやうな氣がしてならぬ。

生けるものは亡びなければならぬ。しかもけふも草はかゞやき、雲は漂ふ。

仙石原の草はいかにも美しい。いかにものび〳〵と繁つてゐる。光つてゐる。長い柄の鎌を提つては草を刈る人々の姿がのどかな點景を作つて青い空に投影してゐる。

眼に見ゆるかぎりは草の光りである。切々として小鳥の草のなかに鳴くのを聽く。何の鳥であるかを知らないが、その聲の惻々たるをわたくしはかつて天城の草原に聽き、雲仙嶽の草の中に聽いたことがあつた。

わたくしは草の中に立ちどまつては眼をつむつた。切々たる小鳥の聲のみがわたくしの暗い心を打つ。幾度草原のなかを見つめても友の面影を見出すすべもない。

牧童よ笛を吹いてわれに聽かせよ。亡き友を思ふ心の切なるをあはれみて。

わたくしはこんなことを考へて草の原を見た。人々は默々として牧草を刈つてゐた。足柄を越ゆる白い雲が影を草の上に落しつゝ走る。

わたくしたちは湖尻に出て、そこから箱根町行きの船に乘つた。

蘆の湖の水は降りつゞいた雨に水嵩を増してゐたので、蒼い波の底に白い梢の躍るのを見ることもある。山は雲にとざされて來た。さつと時雨のごとく靜かな雨が湖を横切つて消ゆることもある、富士がわづかに雲をへだてゝ見ゆ

る。湖心に富士の倒影を覔めようとしたが生憎の波に遮られてつひに影を見出すことができなかつた。箱根の關址はたゞわづかに湖に沿うて數段の石垣、數歩の甃石を遺すのみであるが、旅人をして徘徊去るあたはざらしむるものである。

幾度か輕雨老杉をかすめては山に入る。双子山は雨に濡れ、曾我兄弟虎御前の墓は路傍の草のなかに蕭條として秋をかこつがごとく思はるゝ。

箱根を越えてはじめて伊豆の海を見る時わたくしたちは今さらのごとく實朝の「箱根路をわがこえ來れば伊豆の海やおきの小島に波のよるみゆ」の歌を思ひ出さざるを得ない。伊豆の岸を洗ふ波はたえ〴〵に雲の下にたゆたふ。

「足柄の箱根の山に粟蒔きて實とはなれるを逢はなくも恠し」（萬葉集）

素朴な古人たちが粟を蒔きつゝ、人を思ひつゝ、ながめたであらう山は今もなほ草靑く雲白く閑古そのものゝごとく寂然として横たうてゐる。

夜は夜の集まりがあるといふので仙郷樓からふたゝびお寺の方へ行くことにした。M先生に國民體操を敎へていただいて、それがすむとT先生と三人で出かけた。どうも寒いといふのでT先生は浴衣を二枚襲ねてゆかれる。わたくしは浴衣の上に外套を引つかけた。T先生が提灯をさげて暗い道を案内してくださる。わたくしは何處を何う歩いてるのだかまつたく五里霧中である。仙石原の片隅にどこかの燭が明滅してゐた。蟲も鳴いてゐる。

雲が低く垂れて今にも雨が來さうである。

御堂のなかにはすでに若い人々が集まつてゐる。色々な質問が出る。座間を寺の小僧さんがビールの空瓶を抱へて歩いて、電燈にたかつて來るかなぶん〳〵を捕へては瓶のなかに抛り込む。いかにも山寺の生活らしい。座談會が終つ

たのは十時過ぎであつた。それから青年團の夜の行事が始まる。K先生の朗々たる讀誦につゞいて若い人たちが「心の力」を朗誦する。若い日本を背負つて立つ青年たちの靜かな夜の行事が嚴かに營まれてゐる。わたくしにとつて若い人たちの夜の行事は宗教革命をさへ聯想させた。

仙石原の夜の最後の數分間の默禱はさらに夜の行事をして一層嚴肅なものとならしめた。

「雨が降つて來ましたね！」

T先生は提灯をかざして草の上をながめられた。

空は地に接する程に黒い雲が低く漂うてゐた。高原特有の驟雨が風を喚んで草を搏ち、地を叩きつゝ走つて行つた。

蟲のみ秋草のなかに鳴く。

宿にたどりついた時わたくしたちは全身びしよ濡れになつてゐた。

二日目の講義をすましてからわたくしは御殿場行きの乘合自動車に乘つて長尾峠を越ゆることにした。

懷かしき仙石原！　わたくしは雲の下の仙石原をかへりみた。漫々たる草の原を撫でゝ白い雲の影が走つてゐた。

春淺く

いつ來ても伊豆の山はなつかしい。
今日は朝から春らしい追羽子の音を溫泉宿の廊下で聽いてゐる。
十幾年前の大晦日の午後であつた。小田原の町を通り過ぎて、早川口にかゝつたころは日は暮れて來るし、雪は降るし、それに扁桃腺は痛んで來るし、つく〴〵旅といふものゝ賴りなさを感じさせられた。それがわたくしの最初の伊豆の旅であつた。海沿ひの蜜柑畑に一寸ばかりの淡雪が積つてゐるのが、黃昏の旅を一層わびしくさせた。
「伊豆としては珍しく早い雪だ。」石橋山あたりの掛茶屋にやすんでゐた二三人の旅人らしい男たちは焚き火をかこみながらこんなことを話してゐた。
山駕籠にゆられた花嫁が日暮の雪の中を眞鶴の方へ下つて行くのを見たのもその時であつた。雪風にゆらぐ蠟燭の火がたえ〴〵に花嫁の眞つ白な橫顏を照らしてゐた。何となく印象深い姿であつた。
門川に着いたのは九時ごろであつたらう。湯ケ原行きの最後の馬車の鈴の音が雪の中に寒げに響いてゐた。
湯ケ原までゆくつもりであつたが熱が出てとても步けなくなつたので、たゞ一軒しかないといふ門川の宿屋にともかく泊ることにした。熱にほてつた體を煤けた二階の部屋に投げ出して、更けてゆく除夜の雪に心を澄まさうと思ふ間もなく、隣の部屋にがや〴〵とはいつて來た旅役者の群にわたくしの豫想はすつかり裏切られてしまつた。
東京ならば除夜の鐘を聽くころであつた。隣の部屋の旅役者たちもすつかり眠つてしまつたか、急にひつそりして波の音ばかりが高まつて行つた。わたくしは起きて窓の戶をあけて見た。月が雪に埋められた山を照らしてゐた。あ

たりには寺もないのか除夜の鐘を聽くことができないのがわびしかつた。波の音にゆられながら除夜はふけて行つた。

夜つぴて浪の音を夢うつゝの間に聞きながら、眼をさました時は炎のやうな初日の影が伊豆の海の上に烱々と燃えてゐるのであつた。

昨夜泊り合はせた旅役者たちは町廻りをするのであらう。狩り集めたらしい十二三臺の俥に乘つて濱沿ひの道を潮風に吹かれながら峠の方へかゝつてゐた。太鼓の音がいかにも春らしくのびやかに聞えて來た。

淡い雪を着せられた天城や十國の芝山を背にして、幾十里の白い波頭を抱くやうにして伊豆の海濱の村々が一抹の狹霧の下にまだ眠つてゐるのであつた。松飾りした砂丘の船と船との間にしやがんで、昨日たそがれの雪の中を越えて來た峠の道を見上げてゐると、夕暮の蠟燭の火で見た山駕籠の中の花嫁のいたいけな姿が、はつきりと頭に泛かんで來るのであつた。

天城を越えて北へ湯ケ島を經て大仁へ出る狩野川沿ひの白い道はいつ通つても何となく情味のこもつた山道である。

天城の青い懷に抱かれ、鶯を聞き、河鹿の鳴く音を惜しみつゝ夏の伊豆を旅するもいゝが、蕭條たる天城の冬枯れにつゝまれて遠い芝山の雪を懷かしみ、白い道の傍の椿の花をたよりに急ぐともなき旅をするのはいかにもあはれな、陰情深き旅である。

見るものといつては遠い芝山の雪、幾重にも重なつた芝山のみである。しかもさまで嶮しくもなく、暗くもなく、どこへゆくにも羊腸たる小徑を枯れ草の中に見出すことができる。まだ冬の色をこめた伊豆の山には春といふも名ばかりであるが、裏白やゆづり葉を飾つた山駕籠を道ばたの宿家らしい家の軒のあたりに見出す。さすがに伊豆の山路

の春らしい氣がする。
周圍一尺五六寸もありさうな大きな靑竹を田の畦などに立てゝ、枝といふ枝には靑だの赤だのいろ〳〵な色紙や大きな達磨などをくゝりつけ遠目には七夕祭のやうに見られるものが、ひとかたまりの家のあるところには必ず見出される。山の人たちはおんべと呼んでゐる。冬枯れた芝山の麓のおんべを見れば靑い紙、赤い紙の色彩が一層伊豆の山のわびしさをつのらせる。西洋の緑の中の花やかなメイ・ポールといふのを見たことはないが、それにくらべて、これは冬枯れの山の中のわびしい飾り物であるだけに一層なつかしく思はれる。

日が暮れかゝつたころ、山を縫ふ道だけがほの白く漂ふころ、天城から歸つて來る獵人の群に出會ふことがある。かならず三四匹の獵犬が先になり、後になりして走つて來る。四本の足をくゝられ、擔がれて行く猪や鹿などを見ることがある。擊たれた小犬ほどの猪などを見ると、親猪と一緒に生きて山を走つてゐたであらう可憐な日を聯想せずにはをれぬ。
山の人々の畑を荒すいたづら者も、鐵砲で擊たれてゐるのを見ると可哀想である、いつたい人間が畑を切り拓いてゐる芝山は、もと〳〵人間のために賦へられたものか、それとも小ひさな猪らのために神によつて與へられたものか。擊たれてゆく小犬ほどの可憐な猪を見れば、人間の支配する世界、人間の唱ふる正義といふことに對していろ〳〵な疑ひがわいて來る。

天城の谷を縫ひ、天城を越ゆる山路くらゐ旅人の影をわびしくして見せる道はすくないであらう。信濃から越後へ越ゆる冬の山路はともかく、木曾の山路よりもさらにわびしいやうな感じがする。恐らく人里がすくなく、家が稀な

せめてもあらうか。

東京では十年も二十年も前に影を失つてしまつたやうな旅廻りの藝人たちを見出すのも伊豆の旅である。猿まはし、萬歳などは東京にも珍しくはないが、時たま天城の懐を縫ふ街道でそのやうな旅の藝人たちを見ると、しみじみと子供のころに立ちかへつたやうな心持ちを見出す。

思ひも寄らぬ人里はなれた芝山の麓などで、鼓の音を聞くのも春らしい。家もない伊豆の街道をたどる男が旅のつれ〲に打つのである。

萬歳のいたづらに打つ鼓かな

こんな句を書きつけて見たこともあつた。

猿まはしも萬歳も一様に、幾重にも重なる芝山を越えては伊豆の旅をつゞけてゆく。

伊豆の旅では振りかへつて富士を見るのも一つの樂しみである。雪が深く三島あたりまで裾野を埋めてゐる姿は殊に春の富士らしくていゝ。伊豆の芝山から、小高い雑木林から、富士を見るのもいゝ。やゝ高い天城のそこゝから駿河の海をへだてゝ富士を見るのもいゝ。

靜かな夜、乙女、十國あたりの芝山に、野火を見れば旅人の胸はいひやうもない郷愁に疼く。暗い空に夜な〲芝山の野火を見るころになれば天城の雪も解け初める。

しかしいよ〲芝山の野火を見るまでには、まだ幾度か冬らしい冬の寒さが冴えかへらなければならぬ。

伊豆に生まれ、伊豆に育つた若い娘たちは蕭條たる桑畑の中に立ち止まつて旅人を眺めてゐる。椿の花の多い、温泉の多い、柔かな芝山つゞきの伊豆に生まれて伊豆に生きてゆく若い娘たちは幸福である。

狩野川の釣橋の袂に橋番をしてゐる小屋のおかみさんは三島の遊女であつたといふ話を聞いたが、いつ來ても北向きの小屋の窓から十年一日のごとく旅人を眺めてゐる。

そこからは眞つ白に雪をいたゞいた富士が、城山の上に神々しい嶺をあらはしてゐる姿が眞正面に見える。いかにも美しい女性的な山肌である。

釣橋をわたつて三四町も行つた森の中の古刹の暗い須彌壇の前では、中年の女がしきりと何か念じながら、いかにも思ひ入つた態で七八枚の椿の葉を疊の上に投げては裏葉の數を算へてはうらなひをしてゐた。わたくしは幾度かこの寺で、このやうな女性を見た。

「人間が住むかぎりどこにも人の世の苦といふものが纒ひついてゐる

わたくしはさう思ひながらその女たちの横顔をながめた。

今日も午後からは雪が降り出した。

芝山をうづめ、桑畑をうづめ、雜木林をうづめ、旅廻りの藝人たちをうづめて日が暮れてゆく。溫泉に浸されて、靜かな伊豆の谷川の音を聽いてゐると、十幾年前の雪の夜道に見た山駕籠の中の花嫁の姿がわけもなしに、わたくしの頭に泛かんで來る。――

人と自然

わたくしは旅行をするたんびにかつて芭蕉といふ一人の俳人が日本に生まれてゐたことをありがたく思ふ。日本の自然はたしかにすぐれたる自然であるにちがひない。しかし一俳人芭蕉がかつて日本の自然を歩み自然をうたつたといふことだけで、日本の自然そのものがどれほど磨きをかけられたか知れない。

陸中平泉に行つて光堂のあたりに立つた旅人は芭蕉の「さみだれの降のこしてや光堂」の一句を思ひ出すことによりて、どれほど平泉そのものゝ印象を深くせられるか知れない。

さらに最上川に於ける

五月雨をあつめて早し最上川

月山に於ける

雲の峰いくつ崩れて月の山

象潟に於ける

きさがたや雨に西施がねぶの花

のごとき東北より北國にかけての「奥の細道」の句を案ずる時、わたくしはどれほど奥の自然が芭蕉の詩によりて豐かにせられたかといふことを感じないではをれない。

さらに「あら海や佐渡によこたふあまの河」の一句によりて北國の秋の夜のあはれさの言ひ盡されたるを知る。

自然は偉大である。けれどもたゞ一人の眞の詩人の力もまた偉大である。偉大なる自然をしてさらに偉大ならしむ

るものは眞の詩人の言葉である。
芭蕉は一度は薩摩潟の月を見たいと思つてゐたこともあつたやうである。しかしかれは終に日本の南を見ずして大阪の花屋に死んだ。かれの足跡を刻みつけた北國の山河はめぐまれてあつた。かれを迎ふる機會を持たなかつた南方の山川は不仕合せであつた。

東海道線沼津驛をやゝ西に駿河の原の宿がある。富士の偉い姿が麥畑を越えて雲の上にそびえてゐる。かつてそこに聖僧白隱が棲んでゐた。農家の流しもとに捨てられた殘飯や、腐つた醬油を乞うてわづかに貧しい一生を送つた白隱を思ひ出しつゝ旅人は富士を眺むるであらう。白隱が村の娘を孕ませたといふ忌まはしい噂をもかれは決して否定はしなかつた。かれは怒りもしなかつた。その眞相が明かにされた時もかれは別に喜びもしなかつた。聖僧と呼ばれることも、破戒僧と罵らるゝこともかれにとつては齊しく草原を吹く風に過ぎなかつた。かれは靜かに生き、靜かに死んだ。しかしかつてそこに一人の乞食僧白隱和尙が生きてゐたといふことを思ふだけでも駿河の麥畑はかゞやく。

蘆の湖の水は美しい。しかしかつてそこに働いた一人の人間の魂はさらに美しい。蘆の湖の畔に立つ時わたくしたちは山を穿ちて蘆の湖の水を駿河の方へ引いたといふ一人の男の業蹟について考へざるを得ない。
日本の到るところにわたくしたちは名もなき小英雄たちが山を劃き、海を埋め、土堤を築いて人々のために盡した偉い物語を聽くことができる。それ等の物語によつて日本の自然はどれほど美しく偉くせられてゐるか知れない。
湖に映る白雲は美しい。しかしかつてそこに映された人間の魂の偉い動めきはさらに美しい。
藝術は滅びるであらう。日本の到る處に散在する英雄たちの塚も滅びるであらう。たゞしかしかつてそこに動いた

詩人や小英雄たちの魂の物語だけは永劫に人生の尊さについて、人生のわびしさについて、人生のありがたさについて人類を勇氣づけてくれるであらう。

わたくしは旅をつゞけてゐる間に幾度か不圖草のなかに埋もれつゝあるよしありげな輪塔や碑を見出すことがある。恐らくそれらの塚についてはかつて傳へられてゐた物語りさへもわすれられてしまつたことであらう。

しかしわたくしたちはかつてそこに人類が住み、人類が惱み、人類が生きつゝあつたといふことを思ふだけでも勇氣づけられる。そこには幾多のあさましい人間の心も動いてゐたであらう。しかしながら、それと同時に幾多の小英雄たちがその周圍の人々のために山を穿ち、水を引き、詩をうたつたであらう。

風が吹く。草がかゞやく

わたくしは自然の美しさに醉ふ。

さらにかつてそこに生き、惱み、苦しんだであらう小英雄たちを思ふ時、わたくしは神の前に跪く。

六月の旅から

おかはりもありませんか。
先月末東京を立ちまして關西から九州へと旅をつゞけてゐます。
箱根では鶯を聽きましたが、到るところ麥秋の倦怠さを覺えます。久能山の病友からは杜鵑を聽いたといふたよりがありましたが、あすこではもう瑠璃鳥も鳴いてゐるころです。
夕暮れ、琵琶湖を通りましたが、青嵐につゝまれた湖畔の水色はまことに旅のこゝろを湧き立たせます。楊柳やポプラの間から寺の屋根が薄暮の空をくつきりと劃つてそびえてゐるのも、水郷の眺めの一つとして印象深いものであります。本願寺の關係からか、あの附近は殊にお寺が多いやうです。お寺の屋根の曲線の面白さが感じられるのはどうしても大和、山城、近江附近だと思はれます。
去年の夏地震少し前に訪れた粟津の義仲寺へ通ふ道が、夕暗のなかに白く泛かんでゐるのを見ました。その日、木槿の下でわめいてゐた狂人のことや、丈草庵のことなどを思ひ出しましたが、膳所のあたりは一樣に紡績の煙にとざされてゐました。
京都を過ぎるころはすつかり日が暮れてしまひました。鴨川の瀨をなつかしむ暇もなく、汽車は重苦しい六月の夜を走りました。
わたくしは二十幾年振りに大阪へ下りました。まだあのころは天王寺は麥畑の中に立つてゐましたが、今ではどこもこゝもまるで記憶がないほどに變つてしまひました。

文樂を聽くのが大阪での第一の望みでしたが、文樂はまだ數日かゝりさうもないとのことで失望しました。

皇太子さまのお祝ひで、大阪の町中が氣ちがひのやうに踊りまはつてゐます。折からの雨風の中を夜半まであさましいほどに狂ひ、踊つてゐます。

一日は道頓堀まで出かけましたが、あまり人出が多く、騷がしさに耐へられないので途中から引きかへしてしまひました。

中の島の公園も並樹が稚く、木蔭がないのが物足りません。しかし月の夜、散歩でもして見たらと思はれます。

二疊三疊の格子戸につゝまれたやうな暗い町家の奥を覗いてゐると、近松の芝居のことを想ひ出します。御寮人さま風の品のいゝ女たちも見られるやうです。

水に臨んだ家の低い窓からは色の白い女たちが流れをながめてゐます。そこにはモーター・ボートが爆音を立てゝ走つてゐます。

わたくしは自分ひとりで、あてもなしに、旅の町を歩くのが好きです。蜆川はもう埋められてしまつたといふことを聞きましたが、大阪の町の間を流れてゐる川を見てゐると、どれもこれも、わたくしには近松の作品の中の傾城や[illegible]治のやうな男たちが、涙を流した流れのやうに思はれるのです。

今の大阪はどこまでも商ひの町です。近松ころの町も恐らくさうであつたらうと思はれます。西鶴は一番よく當時の人情を描いてくれたのであらうと思ひます。金といふものゝ力を一番うまく書いたのが西鶴でありませうが、しかし一番うまく人情を描いてくれた近松も實は一番深刻に金の力の偉大さを、心憎さを教へてゐると思はれます。金さへあつたら人が人を殺すこともなく、若い男と女が無理に死出の旅路を急ぐ必要もなかつたでせう。大阪に來て殊に人情と金のいきさつについて考へさせられるやうです。

大阪の流れと、町から見た生駒山は好きです。暗い格子の家も好きです。わたくしは大阪の町を縦横に貫いてゐる靜かな流れに來るたんびに、じつと立ちどまつて流れを見つめました。流れは東京のそれより澄んでゐます。

九州に入れば土の色も、日の色もすつかり變つて來るやうに思はれます。土は赤く、空はずつと明るくなります。櫨の林がつゞき、柿の若葉がつゞきます。葦の中には行々子が鳴いてゐます。かつて、ドストイエフスキイを熱心に讀んでゐた安本冬澄といふ一人の紅顏の靑年を思ひ出します。兄の胸の病が感染してその靑年も間もなく亡くなつてしまつたといふことを聞きました。

汽車が靑年の町を通りすぎる毎に、わたくしは靑年の墓を探すやうにあの山この山を見まはします。かつて櫨の林、柿の林の間を牛津から博多まで汽車でわたくしを送つて來てくれたことがありましたが、靑年の美しい眼がなほわたくしの記憶に刻みつけられてゐます。

若くして死んでゆく人々の魂ほど美しくいたましいものはありません。

故郷に歸つて來れば梅の實、雀の鳴く音までが、東京で見たり、聽いたりしたのとはちがつてゐるやうです。いろいろな聯想が結びついてゐるせゐでせうか。

誰でも久し振りで故郷に歸つて來て感ずることでせうが、年々に知る人のすくなくなるのは寂しいことです。今では、小學時代の友達といつては三人か四人しかありません。

道で、たまたま逢ふ女たちも、顏だけはかすかに覺えてゐますが、誰であつたか思ひ出せません。先方でも不審げにわたくしを見て行き過ぎます。

昔は美しいせゝらぎを作つて流れてゐた川も、今では淺く、濁つた流れとなつてしまひました。

かつて野茨の花が雪のやうに咲いてゐた川沿ひの道も、なくなつてしまひました。

今ではかつて故郷に描かれてゐた詩といふものも、すつかり滅びてしまひました。
眞晝間を懶げに連枷の音のみが昔と同じやうに、初夏の山から響いて來ます。

故郷は麥打つ山もあはれなり

水戀鳴く

梅雨に閉ぢこめられた伊豆の温泉場はいかにも閑靜である。こゝに來て六日になるがまだ一度も太陽を見ない。二階の籐椅子に凭りかゝつて雨に煙つた青い山を眺めてゐるとどこからともなく水戀の啼く聲が聞えて來る。水戀といふ鳥はその名のあらはすごとくいかにも雨が好きであるらしい。極細かな雨が靜かに音もなく降つてゐるやうな日に一番多く鳴く。

天城の嶺に雨雲がかゝつて今にも一雨さあつとやつて來るなと思つてゐると、いかにも雨を待ちわびたやうな聲で水戀が鳴きはじめる。ほとんどそれと同時に嫩葉（わかば）をこめて靜かな雨が落ちて來る。

いつたいに水に緣を持つ鳥の聲は澄んでゐて、何となしにものあはれである。ほとんどすべてがさういつた共通のリズムを持つてゐるやうである。

魚狗、鷺鴫、水鷄、水戀、千鳥、鷗、みんな同じ一つのリズムにつれて鳴いてゐるやうな氣がする。

芭蕉が水鷄笛を貰つて樂しみに吹いた心持ちも想像ができる。芭蕉の俳諧、芭蕉の藝術のリズムは水に緣ある鳥の鳴く音に一番近い感じがする。寂びといひ虔ましさといひ、悠久といひ、悟りといひみな水に緣ある鳥の鳴く音である。

河鹿もよく鳴いてゐる。夕暮れになるとわたくしは流れに沿うてよく河鹿を聽きにゆく。いつも思ふことであるが河鹿を聽いてゐると戀を知り初めたころの靑年の口笛を思ひ出す。

平原の眞ん中に育つたせゐか、靑田のなかの蛙の聲もわたくしにはなつかしい。今もなほ黄昏ころに狩野川（かのかは）のほと

りの田圃道に佇んでゐて蛙の音を聽いてゐると二十年も前のことやそのころの人の俤などが胸に描かれて來る。

これもやはり平原のなかに育つた人でなければ想像もつかないことであらうと思ふが、昨日今日の新聞を讀むと九州地方が強雨のために諸所に河が溢れて人死がでたらしい。わたくしたちはいつも梅雨ころになれば堤防の破壞といふ恐ろしい災害の前にをのゝいたものであつた。三日も四日も強雨と強風におびえつゝ夜も寢なかつたものである。その恐怖は今日なほ腦裡に刻みつけられてゐる。雨の中の警鐘の亂打、竹槍、罵詈、怒號、悲鳴、さういつたものがまざ／＼と頭に描かれて來る。わたくしたちは生まれると直ぐから自然の前にをのゝくことばかり教へられて來たやうに思ふ。

シングの「ホツクロー及び西ケリイに於いて」といふ小ひさな本を讀んでゐるとシングが歐羅巴大陸の旅を打ち切つてアイルランドに歸つて行つたことはシングの藝術のためにもまことに幸福であつたと思ふ。

シングの作品が生まれたのはかれの天才もさることながらまつたく、かれが住んだ場所のお蔭といふものが實に多いといふことを今更のやうに感ずる。

九十歳を越した男が八十歳のお婆さんと結婚をして、結婚後間もなくお婆さんを擲りつけて一ケ月の監獄行きを宣告される。さういつたアイルランドの人と郷土のなかに住んでゐたシングは仕合せ者であつたと思ふ。

或る旅の唄うたひがのらくらして路傍に立つてゐた。巡査が「お前は少し働いたらどうだ」といふ。旅の唄うたひの男は急に大きな聲を張り上げて唄をうたひ出して、驚いてゐる巡査から金をせびる。

シングの紀行文に描かれたアイルランド人の生活そのものがシングの戲曲そつくりである。シングはいゝ場所に生活した。

海鳥山霧

七月の朝。駿河灣の波はまだ眠つてゐる。濱の靑年や娘たちは谷の水をくんではけはしい裏山の苺畑に水をやりに登つてゆく。

三尺ばかりに伸びた玉蜀黍の葉ずれにかすかな海の朝風がそよぐ。寂然として秋のごとき感じである。海にはまだ霧がおりてゐる。

海をへだてゝ伊豆の戸田、土肥あたりの急峻な山々の黑くそゝり立つてゐる姿が朝の太陽とゝもに一枚一枚とうすぎぬをはいでゆくやうに明るく浮きだしてくる。

濱には五六人の中老たちが地曳き網の繕ひをしてゐる。三保の松原から久能あたりの海岸ではあまり大きな魚はとれない。たいていは鰯のやうな小魚である。だから濱の人たちは地曳き網のことを猫網などといつてゐる。わたくしは一度增村の龍源寺といふお寺で濱の人たちに引つぱりだされて講演をしたことがあつたので、それからは久能から蛇塚、增、駒越の濱を歩いてゐるとたいていの漁夫たちとは顏なじみになつてしまつた。

わたくしは濱に出てはよく地曳き網の準備をしてゐる男たちと話をするやうになつた。朝の散步、夕方の散步、夜の散步、わたくしはよく濱を步いた。

「滿洲では太陽は西から出る。」と一人の漁夫が語りだした。かれは日露戰爭の勇士である。

「そんなことはあるまい。やつぱり太陽は東から出るぢやらう。」と老漁夫が駁する。

「カリフオルニヤではたしかに太陽は西から出た。」と一人の漁夫がいふ。二三年前加州の排日のころ日本へかへつて

來た男である。

「成るほどアメリカなら太陽も西から出るぢやらう。」衆議一決である。

かういつた他愛もない會話は夜が明けるから暮れるまで濱の砂丘に網を待つてゐる人々の間でとりかはされる。

波の音が眼ざめて來る。天城から箱根にかけて白い雲が岫を出でゝ岫に入る。

若い男が濱を走つては村の人々を呼びあつめる。

蕎畑からも、家のなかゝらも若い女、青年中年の男女、およそ働ける人といふ人は濱の砂を蹴つて集まつて來る。

地曳き網を載せた船は、人々の手によつて、肩によつて、砂丘を下されてゆく。ざんぶと船は怒濤のなかに突き込む。若者たちは荒波を切つて沖へ漕ぐ、網はすばやく波の間に投げられる。

濱ではふたゝび他愛もない會話が砂丘の上でとりかはされる。

海鳥の群が半圓形に張られた網のほとりをかけまはる。急轉直下まつしぐらに潮の面を衝いたと思ふ刹那に潑剌たる銀鱗は海鳥の可憐なる嘴に躍つてゐる。

波の憂鬱にも似たる海鳥の鳴く音が切々として人の胸を打つ。人々は海鳥の群を見ては「大漁だ！　大漁だ！」と叫んでは踊る。

飽食した海鳥が網の浮子にまどろむころになれば砂丘の會話はやむ。網は徐々に濱の方へたぐられはじめる。

刻一刻と海鳥の歌は近づき、翼は相搏つ。人々のよろこびさわぐ聲、子供等の喚く聲。燒くごとき太陽の渦卷。

濱には眞つ赤な大漁の旗が翩翻としてひるがへる。

裏の松山では瑠璃鳥が七月の青空をよろこびつゝ囀る、

海は永遠に憂鬱であり、永遠に輝き輝く。」

八月の始め。霧島の温泉場。

わたくしは三日前の眞夜中に梟の聲を聞きながら博多の宿を出たころから腸を痛めてゐた。牧園で汽車を降り、三里ほどの高原の赭土道を自動車で登るにつれて放牧の馬の可憐なるを見、薩摩潟の風光をながむるまゝに旅のうさも苦しさも忘れてしまつた。運轉手は車をとゞめて清冽な谷川の水を掬んでは機關を冷やしたりした。すれちがひに山を下つて來た自動車の運轉手は二本の胡瓜をポケツトから出して、わたくしたちの運轉手にわたした。運轉手はハンドルを動かしながら靑い胡瓜をかじつた。野趣むしろ掬すべき景である。

宿まで三四町の手前でわたくしは腹痛のためにたふれてしまつた。宿に着く。三里ばかり離れた麓からお醫者さまが來る。お醫者さまが持つて來た消毒綿は煤け、ピンセツトは赤く銹びてゐた。山のお醫者さまは大きな五郎八茶わんになみ〳〵と蓖麻子油を注いでくれた。あまり量が多過ぎると思つたがおとなしく飮んでしまつた。まさか蓖麻子油の分量が過ぎても命にかゝはることもあるまいと觀念して。

わたくしは旅に出てはよく腸と咽喉を痛めてお醫者にかゝるが、いつたいに山のお醫者さまは話好きである。悠長である。わたくしは人の善い霧島のお醫者さま、阿蘇のお醫者さま、修善寺のお醫者さまを今でも忘れることができない。

朝になつて眼がさめるとしきりに郭公が鳴いてゐる。霧島の郭公ははつきりとかつかうと鳴く。いかにも落ちついた鳴き方である。欄干によれば開聞岳と櫻島が遠く霧の海の上にそびえてゐる。

わたくしが霧島にのぼつたことを知つたI先生は大隅の南端からわざ〳〵山の上まで訪ねて來てくだされた。先生とは二十年振りの邂逅である。わたくしが文學を志すやうになつた一つの動機は先生に負ふところが多い。先生は隱

れたる詩人である。獨歩の熱と藤村先生の靜思とを一つにした風な詩人である。霧島の夏はめぐまれた日であつた。わたくしは先生と終日處女林をさ迷ひ溪谷を傳うて鶯と郭公の聲を聽いた。谷にはほとんど自然のまゝの岩間の湯ぶねがある。溪流に薪を拾ひ米を炊いては山奥の原始的な湯治生活を送つてゐる人たちを霧のなかに見出したこともあつた。

I先生は日暮れころ山を下つて大隅にかへられた。わたくしたちは霧の深い谷川のほとりで別れた。月が冴えてゐた。

わたくしは月下の谷川に佇立して水聲を聽いた。森林地帶をくぐつてやがて草原に出た。そこでは谷川の音も聞えず、風もなく、月光と死靜のみが夜を支配してゐた。

わたくしはさらに谷を下つて行つた。梟が鳴き、やがて月下に歌をうたつてゐる若い人々を見いだした。薩摩隼人の燒酎飲みである。

薩摩隼人の燒酎飲みは、いかにも男性らしいものである。若き人々の周圍には幾十本の銚子が並べ立てられてあつた。かれ等の顏は炎に燃えてゐた。月は暗い部屋のなかにかれ等の隆々たる筋骨を浮き彫りにしてゐた。剛健、素樸、闊達、豪勁等の言葉をもつて形容すべきものが山の人々の燒酎飲みの光景であらう。しかも木立を隔て、谷を隔てゝ薩摩隼人らの燒酎飲みの歌を聽く時、旅人はその嫋々たる哀韻のあまりに哀切なるに撃たるゝであらう。薩南の兒等はあまりに多感である。南洲先生はその最たるものであつた。

わたくしは霧島の月下に薩摩隼人の燒酎飲みの歌を聽いた時、多感なるかれ等の、もつとも愛すべき美しき魂の聲に觸れた。

旅三月

六月の伊豆の山は雨のみつゞいてゐた。七月になつても雨は止まなかつた。水戀といふ鳥の惻々たる鳴く音を聽くのがせめてもの旅の徒然を慰むるすべでもあつた。天城が雨雲につゝまれはじむるやうになれば、木立の奧から靜かな水戀の聲が聞えて來た。

八月になつてわたくしは信濃の落葉松のなかに再び雨の日を送らなければならなかつた。家のまはりにはほとゝぎすが鳴いてゐた。いつもは夜明けの空が白みかゝると同時に、戸を叩くばかりに水鷄の聲を聽いたものだが、今年は雨ばかりのせゐか水鷄も聽かなかつた。

信濃の山を下りてわたくしは箱根の仙石原を訪ねた。仙石原の草はまことに美しい。風が吹くたんびに仙石原の草はかゞやく。

わたくしの親しい友人がかつて仙石原の草なかに笛を失つて悲しんだ日から、仙石原はわたくしにとりて懷かしい高原となつてしまつた。その友人も十三年前に自殺をしてしまつたし、かれがひそかに戀してゐた女も鎌倉で死んでしまつた。わたくしは仙石原の草のなかに立つて足柄を越えてゆく白い雲をながめてゐた。

仙石原で知つた一人の旅人と一緒にわたくしは乙女峠を越えて御殿場へ下りて行つた。その旅人と一緒に驛の前の旅館の二階で晝食をとつてゐる間に、わたくしはその旅人が熱心なクリスチヤンであり、しかも日本に一つしかない珍しい地味な信仰の集團に屬してゐる人であることを知つた。旅人はどこまでもキリストの復活を信じてゐる。裁きの日を信じてゐる。かといつて窮屈なクリスチヤンではない。わたくしたちはビールを飲み、かれは煙草をも喫かし

た。窓からは全幅の富士が見えた。

御殿場で旅人と別れたわたくしは二日後の午後は京都の人となつてゐた。わたくしは旅人として洛北の寺々をたづね、或る時は椿寺の苔むした庭に立つてゐた。すでに白い萩が咲いてゐた。

椿寺は小ひさな寺である。庭に珍しい枝振りの椿がある。椿のころは賑ふさうだが、今は天野屋利平夫妻の墓のみが苔深く眠つてゐる。たゞ椿寺といふ名を愛するがゆゑにわたくしは椿寺を訪ねたのであつた。

椿寺を辭して龍安寺の石庭を觀るべく照りかへしのはげしい砂道に沿うて車を走らせた。二三年前の秋鷹ヶ峰の光悦寺を訪れた日のことなどを思ひ出しながら洛北の山を眺める。鷹ヶ峰、衣笠山をはじめ一帶の赤松山は繪よりも美しく繪よりもかゞやいてゐる。たゆたげに重なり合うてはしづやかな影をこめてゐる洛北の山を見るたんびにわたくしは時雨ごろの京を思ひ出す。鞍馬には雲がかゝつてゐた。わたくしは鞍馬口の廢寺にこもつてゐる一人の男を想ひ出した。妻に裏切られた果は狂人のやうになつて、ちやうど大吹雪の頃北海道まで妻をさがして歩いて、つひに一人で鞍馬の廢寺を住み家として經を讀んでゐる男の心をいろ〳〵に想像して見たりした。夾竹桃(けふちくたう)の花、百日紅の花がさかりである。修竹につゝまれた靜かな別莊風の家の間に映畫撮影所の建物が幾つとなく不調和な對照をなしてゐるのが見出される。ロケーションの戻りらしい男女優たちが扮裝のまゝ稻田の間を歩いて來るのに出會ふ。大小を帶した維新時代の志士らしい男優たちが柴を束ねたのを擔いでゐたり、御殿女中に扮した女が落松葉を風呂敷に包んでゐたりするのを見た。いかにも暢然たる情趣である。

龍安寺の池にはもうすでに秋が訪れてゐた。水面には水草の白い花が浮いてゐた。そこからは伏見、鳥羽、淀の流れも見えるのであらうか、今は京の郊外にも煙突が多くなつたので風のない日など黑い煙が京の町をつゝんで靜かな

遠い眺めも失はれてしまつた。惜いことである。武藏野の自然が容赦もなく壞たれてゆくやうに、京の自然も日一日と壞たれてゆく。旅人にとりてはこの上もなく寂しいことである。せめて日本の中に一つくらゐは二十年前の靜かな京の町が遺されてもいゝやうに思ふ。

池に沿ひ小暗い木立をくゞり、ゆるやかな石磴を傳うて龍安寺の玄關に立つ。蟬時雨に一山の閑虛をこめて、山寺の午後は秋の夜のごとく靜かである。

若い坊さまが二人午睡の夢を樂しんでゐるのを驚かすのも氣の毒である。じつとそこに立ちつくして先づ山寺の虛無そのもののやうな心につゝまれてしまふ。

甃を打つ落葉の聲が直ぐ背のうしろに聞える。

幾度か聲をかけて、やつと庫裡の方からお婆さんがにこ〳〵笑ひながら出て來た。

導かれて先づ本堂に詣して、ひどく雨風に叩かれたらしい廣縁に出る。御堂の廂が思ひ切つて高く深々と青い空に突き出てゐる。廂の直ぐ下から眞白な砂が枯れ盡した秋の湖を聯想させるほどに敷かれてある。

御堂に面して庭をやゝ長方形に劃つた土塀が廻らされてゐる。塀は心持ち低目に構へられてゐる。石庭の全體の調子を整へるものとしてその簡素なる土塀の形、色合、高さの一つ〳〵が御堂の扉、廂、或は階とともに甚だ大切な役目をなしてゐる。さらに塀の外の美しい赤松林、青い空を忘れてはならぬ。一面の砂の海、そこにたゞ大小十五の石が敷置されてある。一草一木の在るなく、石は在るべき所に在り、居るべき所に居る。趣に媚びず知に執せず、一石一塊秋の風のごとく自然に、秋の日のごとく靜かである。時としては萬里の山のごとく遠く、時としては古賢の咳を聽くほどに旅人の心を相凭らしめる。淡々乎たる白砂の上を雲は影を投げて走る。聖僧の諦悟を觀るべく一切を觀じ

盡したる智慧の跫音を聽くことができるであらう。

そこに横たはる一塊の石も天に向つてもの言ひ、一粒の白砂も秋風に向つて語る。

一切を捨てよ、木も捨てよ、草も捨てよ、花も捨てよ、流れも捨てよ、そこに永劫の土、永劫の石、永劫の諦悟のみが靜かに取りのこされる。人は死ぬであらう 一切の現象は滅びる。たゞ地を搏つ雨と大地のみが遺されるであらう。

わたくしはふたゝびこゝに來て洛北の時雨に濡れた日の庭を見たいと思つた。時雨るゝまゝに濡れてゆく庭の石、庭の砂、わたくしは靜かにそれを觀たいと思ふ。

龍安寺を出て御室の方へ歩いて行つた。木の下にはすでに萩が咲きはじめてゐた。

仁和寺の塔の前には近くの撮影所の人たちが集まつて來てロケーションをやつてゐた。子供たちも多勢見物に來てゐる。こゝでも維新のころのものらしく、白い袴を着けた朱鞘の志士たちが草の中にしやがんでゐた。劍を拔いて切り結んでゐるものもあつた。手が空いた男女優たちはこゝでも松の枯枝を拾ひ落葉をかき集めて丹念に薪を束ねてゐた。愛すべき俳優たちよ。

京の朝はさすがに秋らしく鈴懸の葉も露を浴びたまゝに落ち初めてゐる。三條の小橋から左へ折れて高瀬川に沿うて上へ／＼と道を拾ふ。まだ戸を締めて眠つてゐる家が多い。朝霧の間から眼さめたばかりの比叡が黒く佇んでゐる。鴨川沿ひの柳は露重げにうなだれてゐる。幹も黒く濡れてゐる。

不圖わたくしの胸に左團次の菊地半九郎が泛かんで來る。松蔦の美しい可憐な若松屋お染の姿が映つて來る。時としては若くして死ぬといふことも決して不幸ではない。富や名を貪ることの醜いと同じやうに、生きんことをのみ貪

るのもあさましいことである。十年二十年生きのびたところで過ぎ去つて見れば同じく槿花一朝の夢である。

死ぬといふことが非常に恐ろしい時代もあつた。たしかに死は今日でも恐ろしいにはちがひない。しかし死を恐るゝ氣持ちは年々に薄らいでゆくやうに思ふ。旅といふものがわたくしたちの心を引締めてくれるのはいつも死といふものが、死といふ觀念がこびりついてゐるからである。わたくしはこのころになつて西行の「いのちなりけり小夜の中山」の心持ちが幾分わかつて來たやうな氣がする。思ひがけなくもふたゝび小夜の中山を越えた日の西行の心を思ふと、生きてゐたことの悦びよりも、さらに常住死に面してゐたかれの無常觀の佗しさの方が強く胸を擊つ。「二度と訪ふこともあるまい。死が待つてゐる」旅人は山を見ても、川を渡つてもかく思ふ。陸中平泉に行けばわたくしたちはそこに遺された芭蕉の辭世の句を見出す。きさかたに行けばそこに再びかれの辭世の句を見出す。北陸に於ける荒海の句、市振の關に於ける一家の句、すべてがその山、その海に所緣する芭蕉の辭世の句であつた。「奥の細道」に遺された北の國々の山も川もこと〴〵く芭蕉の辭世の句を刻みつけてゐる。すべての旅人はその到るところの自然に所緣して辭世の句を遺し、辭世の言葉を感じるにちがひない。旅人はつねに見知らぬ山、見知らぬ町に對して最後のさよならを述べるために旅をつゞけてゐる。

山といふ山を見盡し、町といふ町を見盡し、見知らぬ旅の秋に靜かに死ぬることができるならば、旅人の望み足れりといふべきである。

わたくしはこんなことを考へながら南禪寺の門の前に立つてゐた。

わたくしは南禪寺の横から裏の山徑を登つて行つた。去年わたくしは同じ道をたどつて行つた日のことを思ひ出した。あのころは鶯が鳴いてゐた。けさはこゝにも秋は近づいてゐた。木の葉は絕えず暗い溪川に沿うて落ちてゐた。

小暗い木立の下に一人の男が墓碑を刻んでゐた。去年こゝの溪川に沿うて歩いた日もわたくしは同じやうに墓碑を刻む鑿の音を聽いた。碑を刻む鑿の音は森閑とした山にこだまして、たとへば木を叩く啄木鳥を聽くやうに、魂の底に響いて來るやうに感じられた。

わたくしは溪を越えて、さらに溪を越えて行つた。碑を刻む鑿の音がなほそこまでも響いて來た。

去年南禪寺の別院(?)の庭に案内してもらつたことがあつた。東京の地震からこつちそこの庭守をしてゐるといふ女に逢つた。その女は「えゝもう二度と東京へかへらうとは思ひません。京都の山の方がどれほど住みよいか知れません。」といつた。霧の深い朝など、ずつと以前はそこの庭まで山の鹿が下りて來たといふ話などを女はしてゐた。わたくしはその女の話を思ひ出しながら溪をわたつて行つた。わたくしは旅をしてゐる間に時々あの恐ろしい震災からのころ聽いたことがあつたが、その力士の心持ちは想像することができる。去年信州大町に泊つたをりにも、わたくしは夫を失ひ子を亡くした女が東京を捨てゝ雪深い信州に住み馴れてゐるのを見た。

東京を捨てゝしまつた人たちに邂逅ふことがある。妻子を失つた或る力士が高野山にはいつてしまつたといふ噂はそ

あの恐ろしい震災の日をかぎりにして東京を捨てた多くの人たちが到るところにわびしさを抱いて今もなほ靜かな山のなかに生きてゐることであらう。碑を刻む鑿の音は溪を越えてなほ響いて來た。

わたくしは加茂の流れに沿うて歩いてゐた。友禪を洗ふ男たちが岸の柔かな草のなかにしやがんでゐた。白い朝鮮服の若い女が二人岸の石の上にこゞみながら洗濯棒でしきりに洗濯物を叩いてゐた。寫眞などではよく見る圖であるが眼のあたり見るのはうれしかつた。京都の自然には白い朝鮮服の女たちの姿は甚だ映りがいゝ。

平八茶屋の前から爪先上りの道を登つて修學院の離宮を拜觀することにした。こゝの山の赤松の美しさはたとへやうもない。衣笠も、鷹ケ峰も、鞍馬も讃につゝまれてゐる。地に耳をつけてこほろぎの聲を聽きたいほどの靜けさで

ある。直ぐに京の町を離れて、山は美しき松山から美しき松山へとつゞく。
　せめて半日こゝの松山の中にゐて時雨の音を聽くを得ばと思ふ。

　京都から奈良へ行くたんびにわたくしは汽車の窓から煙につゝまれた東寺の塔を見、巨椋の池を眺める。東寺の塔は以前は菜隴麥圃の間に見出されたものであつたが、このころではすつかり煤煙のなかにつゝまれてしまつた。惜いことである。巨椋の池は餘程氣をつけてゐないと見落してしまふ。ほんのそれも池のたゞの一部分に過ぎないが、黄茅白蘆のかなたに漫々たる水と雲をたゝへて見る人もなく漂うてゐる單調な姿はかへつて旅人の心を惹きつける。いつたいに水のながめ、小山のながめは木津を渡り、奈良を過ぎてからの方がいゝ。恐らく日本の平原のうちで大和平原ほど靜かなのびやかな、明るい、光りをたゝへた平原はないであらう。畝傍、香具山を平原の涯にながめてゐるあの形のいゝ屋根、白い壁、白い塀、可憐な牛小屋、家のまはりの水、水のはたの並木、赤松の小山、大和川沿ひの竹藪、丘の上の塔、壞れかゝつた築地、すべてが繪以上の繪である。
　奈良に下りたころから空が曇りはじめて來た。博物館にはいつて佛さまを拜んでゐる間にすつかりひどい雨になつてしまつた。奈良の博物館へはいつて終日百濟觀音のまはりを徘徊してゐたと語つた友人があつた。まことに推古、天平時代の佛さまながら終日對座しても飽きはしない。興福寺の阿修羅王はまことにいゝ顏をしてゐる。當代の何々の后とでもいふやうな女性をモデルにでもしたものであらうか。法隆寺の銅板押出の三尊佛立像のお顏などもとても藤原期以後の冷たい抹香臭い佛さまには見られないいゝお顏である。何々の皇子とでもいふやうな生きた人間が動いてゐる。あのころの佛さまはどこまでも麗人である。勿體ない話ではあるが忘れられぬ美女である。佛くさくない佛さまである。藤原鎌倉と時代が下るにつれて佛さまが人間から遠ざかつてゐる。

わたくしは考へざるを得なくなつた。いつたい藝術などといふものは時代につれてますく卑しくなつて行くのではあるまいか。どこまで行つても藝術の方面では、今人は古人に及ばずといふ歎きをくりかへさなければならないのではあるまいか。

博物館を辭して外に出たが雨はなかく止みさうもない。小半時も松の下に雨の晴れるのを待つてゐる間にわたくしは、同じやうに雨宿りをもとめて來た鹿の群にとりかこまれてしまつた。

小雨のなかをわたくしは淺茅ヶ原を横切つて春日神社の方へ歩いて行つた。小猿が二疋萩の下葉をくゞつて飛んで行つた。小蓑を欲しがるほどの時雨頃でもないに。

春日神社のうしろから二月堂に出たわたくしはふたゝび雨に降りこめられて、雨に濡れた小鹿と一緒に二月堂の階の下にふたゝび雨の晴るゝのを待つた。

九州線にはいつてからはふたゝび夏が來た。朱のやうに赤い土を見るだけでも蒸されるやうに暑かつた。しかし山も川も雲も地平線も故郷だと思へば懷かしい。父や母があのころのまゝにまだ生きてわたくしを待つてゐるやうな氣がしてならない。わたくしはいつも門司から父へあてゝ電報を打つた。父は電報を掴んでは幾度となくステーションまで歩いて行つた。父が馬に乘つて歩いた櫨並木の道、母がわたくしを抱いて月の夜に歸つて行つた美しい流れ、何もかも昔のまゝであつた。山を眺むれど、雲を眺むれど、杳然としてつひに故人なし、地に伏して慟哭するといつた風な感じにもなる。昔と同じやうに子供たちは跣足のまゝ道を走つてゐた。稻の間には七夕祭の笹竹が樹てられてある。山の上の父と母の墓には非常に藪蚊が多かつた。姉の子供たちは素足を腫れ上るほどに螫された。父もなく母もない故郷は異郷よりも寂しかつた。わたくしはその晩すぐ故郷を立つた。長崎線の汽車に乘つて鳥栖驛に夜の十時に着い

た。わたくしはそこで午前零時幾分まで二時間餘を待たなければならなかつた。暗いステーションの前の廣場にしやがんで空を見た。銀河が地平線から地平線へと秋の風よりも白く流れてゐた。若い水兵が一人同じやうに空をながめてゐた。蛙がひつきりなしに鳴いた。

薩摩の南端の美しい揖宿海岸に沿うて池田湖や開聞岳を見て京都にかへつて來た翌日、わたくしは朝はやくふたゝび三條の大橋をわたつてゐた。東山あたりの僧堂の若い托鉢僧たちが橋をわたつて來るのをじつと欄干にもたれて眺めてゐた。朝まだ早かつたので大津行きの電車にはたゞ二三人の男たちが乘つてゐた。

智恩院の本堂の前から木立の蔭の坂をのぼつて圓山の方へ歩きながら、そこにあつたベンチを見出して腰を卸した。わたくしはやゝ旅に疲れてゐた。わたくしは六月から引きつゞいての旅から旅への生活を振りかへつて見た。つひに安住すべき世界を見出すことのできぬ自分の魂をあはれむやうな氣にもなつた。わたくしは信濃の山を懷うた。伊豆の山を描いて見た。勸修寺や、鷹ヶ峰のほとりを思ひ出した。故郷の父や母の墓を想像した。しかしわたくしは何處にも住むべき世界を見出すことはできなかつた。

何處を歩いても空虚であつた。山も町も人生も。

わたくしの直ぐ足もとには白い萩が咲いてゐた。疲れ果てた魂のやうに靜かに。

―了―

昭和六年八月廿五日印刷
昭和六年九月五日發行

第三感想集

一册・壹圓五拾錢

著作者　吉田紘二郎
發行者　佐藤義亮
印刷所　富士印刷株式會社
製本所　植木製本所

發行所
東京市牛込區矢來町七十一番地
新潮社
電話牛込（一八〇五番・八〇六番・八〇七番・八〇八番・八〇九番）

全十六巻内容

巻	種別	内容	
第一巻	短篇小説集(1)	鳥の秋、法妙寺の叔母、山上の小屋、静かなる死、麥見の前、小梅の母外十八篇	既刊
第二巻	短篇小説集(2)	大地の涯、熊のわな、彼は詣り、憎、疲れたる魂、少年、濱、紙、外十六篇	既刊
第三巻	短篇小説集(3)	雉子笛を吹く人、神の子、青い毒薬、叔父夫婦、手紙、草の上、犬吠崎外十五篇	
第四巻	短篇小説集(4)	山寒し、二人の無能者、母を思ふ日、花梨の下、流人の妻、二老人と彼外十二篇	
第五巻	短篇小説集(5)	芭蕉、壁、屋上白夜、笑ふ彼、秋、草枯れ、地に落つるもの外十七篇	
第六巻	短篇小説集(6)	父、金、家出、二人の老人、時計、秋の海、寒日、形見分け外廿二篇	既刊
第七巻	長篇小説集(1)	静夜曲、人間苦、光り地にありや	既刊
第八巻	長篇小説集(2)	無限、孤獨なる女、結構な空	近刊
第九巻	長篇小説集(3)	白路、高原の日記、石に撃たるゝ女	
第十巻	戯曲集	大谷刑部、燕、忠信の父、狂人となる迄、清作の妻、丈草庵の秋、静夜曲外十一篇	
第十一巻	感想集(1)	小鳥の來る日、生の悲劇、雑草の中、生命の微光	既刊
第十二巻	感想集(2)	草光る、生くる日の限り、旅人、山家日記	既刊
第十三巻	感想集(3)	木に凭りて、心より心へ、わが詩、わが旅	既刊
第十四巻	感想集(4)	靜かなる土、麥の丘、青鳩	
第十五巻	感想集(5)	白日の窓、霧島紀行、春の日	
第十六巻	童話集	騎兵と馬、或る歩哨の話、熊とピストル、木村軍曹と赤靴、外五十餘篇	